

ご挨拶

第 31 回日本歯科医学教育学会総会および学術大会

大会長 松尾龍二

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔生理学分野 教授)



第 31 回日本歯科医学教育学会は岡山で開催することになりました。岡山大学歯学部が本学会の総会ならびに学術大会を担当いたしますのは、初めてのことでありましたが、多数のお申込ありがとうございました。

歯科医学教育においては、画一性（国家試験や共用試験への対応）が求められると同時に、各歯科大学・歯学部の組織上の違いや地域性の特色が反映される側面もあります。学会を通して、岡山大学の特徴も感じて頂き、議論の参考になればと思います。

今回の学術会議では「社会に求められる歯科医学教育」をメインテーマに掲げています。この背景には最近の歯科医学教育における変化があります。例えば歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議の報告やモデル・コア・カリキュラムの改訂には、資質の高い歯科医師養成、大学附属病院の在り方、多様な社会ニーズへの対応、などのキーワードが見られます。これらはいずれも、国民の立場に立った歯科医学教育が求められていることを端的に示しています。

この観点から本学術会議の特別講演では、モデル・コア・カリキュラムを中心に、「社会に求められる歯科医学教育」を分析して頂き、シンポジウムでは「プロフェッショナリズム」、「医療人を育てる新たな学習法（TBL）」、「多職種連携医療教育」を取り上げています。これらのテーマは、相互に関連があるとともに、現在議論が積み上げられている状況にあります。このため本学術会議では、特別講演、シンポジウム、一般口演の時間的重複を避け、これらのテーマに集中してご聴講いただけるタイムスケジュールにしております。そして皆さんの活発なご議論を期待しております。

岡山には「晴れの国おかやま」のキャッチフレーズがありますが、とくに7月は晴天が続くでしょう。時間のある方は、日本三大名園の一つ「後楽園」、桃太郎が鬼退治をした伝説の「鬼ノ城」、刀剣作りの中心であったことを伝える「備前長船刀剣博物館」などを訪ねてはいかがでしょうか。会員の皆様には、実り多い学会でありますよう祈念しつつ、ご挨拶といたします。

日本歯科医学教育学会総会および学術大会担当校一覧

回	年 度	担当校	大会長
1	昭和 57	大阪大学歯学部	河 村 洋 二 郎
2	昭和 58	大阪歯科大学	藤 井 弁 次
3	昭和 59	東京歯科大学	関 根 弘
4	昭和 60	岩手歯科大学歯学部	石 川 富 士 郎
5	昭和 61	九州大学歯学部	青 野 正 男
6	昭和 62	神奈川歯科大学	長 田 保
7	昭和 63	東京医科歯科大学歯学部	小 椋 秀 亮
8	平成元	東京歯科大学	高 添 一 郎
9	平成 2	日本大学松戸歯学部	森 本 基
10	平成 3	日本歯科大学歯学部	古 屋 英 毅
11	平成 4	福岡歯科大学	石 木 哲 夫
12	平成 5	日本大学歯学部	斎 藤 毅
13	平成 6	愛知学院大学歯学部	平 沼 謙 二
14	平成 7	明海大学歯学部	池 田 克 己
15	平成 8	昭和大学歯学部	吉 木 周 作
16	平成 9	東京歯科大学	石 川 達 也
17	平成 10	日本歯科大学新潟歯学部	中 原 泉
18	平成 11	大阪歯科大学	佐 川 寛 典
19	平成 12	北海道医療大学歯学部	松 田 浩 一
20	平成 13	東京医科歯科大学大学院	江 藤 一 洋
21	平成 14	鶴見大学歯学部	柳 澤 慧 二
22	平成 15	長崎大学大学院	熱 田 充
23	平成 16	新潟大学大学院	山 田 好 秋
24	平成 17	徳島大学大学院	三 宅 洋 一 郎
25	平成 18	東北大学大学院	渡 辺 誠
26	平成 19	朝日大学歯学部	藤 下 昌 己
27	平成 20	日本大学松戸歯学部	牧 村 正 治
28	平成 21	広島大学大学院	高 田 隆
29	平成 22	岩手医科大学歯学部	三 浦 廣 行
30	平成 23	日本歯科大学生命歯学部	住 友 雅 人
31	平成 24	岡山大学大学院	松 尾 龍 二
32	平成 25	北海道大学大学院	鈴 木 邦 明

(敬称略)

第 31 回日本歯科医学教育学会総会および学術大会日程

常任理事会	7 月 19 日(木)	13:00～14:30	(岡山コンベンションセンター 4 階 401 室)
機関会員委員会	7 月 19 日(木)	14:40～15:10	(岡山コンベンションセンター 3 階 301 室)
理事会	7 月 19 日(木)	15:20～16:40	(岡山コンベンションセンター 3 階 301 室)
理事懇談会	7 月 19 日(木)	16:50～17:20	(岡山コンベンションセンター 3 階 301 室)
倫理・プロフェッショナリズム教育委員会	7 月 19 日(木)	17:30～19:00	(岡山コンベンションセンター 3 階 302 室)
教育国際化推進委員会	7 月 19 日(木)	17:30～18:00	(岡山コンベンションセンター 4 階 401 室)
卒前教育委員会	7 月 19 日(木)	18:00～18:30	(岡山コンベンションセンター 4 階 402 室)
教育能力開発委員会・ 富士研実行委員会合同委員会	7 月 19 日(木)	18:30～19:30	(岡山コンベンションセンター 4 階 403 室)
白書作成委員会	7 月 19 日(木)	17:30～18:30	(岡山コンベンションセンター 4 階 404 室)
教育システム開発賞最終選考委員会	7 月 20 日(金)	12:00～12:50	(岡山コンベンションセンター 3 階 312 室)

学術大会 7 月 20 日(金)・21 日(土)

A 会場(岡山コンベンションセンター 3 階 コンベンションホール西)

B 会場(岡山コンベンションセンター 3 階 301 室)

C 会場(岡山コンベンションセンター 3 階 302 室)

ポスター・企業展示会場(岡山コンベンションセンター 3 階 コンベンションホール東)

教育研究を議論する研究集会	7 月 19 日(木)	10:30～12:30	(岡山コンベンションセンター 4 階 405 室)
フシリテータ養成セミナー受講者並びに 医療コミュニケーション教育担当者 情報交換・交流会	7 月 19 日(木)	13:00～16:30	(岡山コンベンションセンター 3 階 302 室)

評議員会・総会	7 月 20 日(金)	13:00～14:00	A 会場(3 階 コンベンションホール西)
---------	-------------	-------------	-----------------------

懇親会	7 月 20 日(金)	18:30～	岡山全日空ホテル スカイバンケット「宙」
-----	-------------	--------	----------------------

企業展示 7 月 20 日(金)・21 日(土)

ポスター・企業展示会場(岡山コンベンションセンター 3 階 コンベンションホール東)

第 31 回日本歯科医学教育学会総会および学術大会 タイムスケジュール

大会前日(2012年7月19日)(木)		7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
B会場 (301室)															
C会場 (302室)															
(401室)															
(402室)															
(403室)															
(404室)															
(405室)															
教育問題を議論する研究集会															
教育問題検討委員会 主催：(社)日本補綴歯科学会／共催：日本歯科医学教育学会															
1日目(2012年7月20日)(金)															
受付 (3F ホール)															
A会場 (コパンホール 西)															
B会場 (301室)															
C会場 (302室)															
ポスター・企業展示会場 (コパンホール 東)															
Meeting Room C (312室)															
2日目(2012年7月21日)(土)															
受付 (3F ホール)															
A会場 (コパンホール 西)															
B会場 (301室)															
C会場 (302室)															
ポスター・企業展示会場 (コパンホール 東)															

参加者の皆様へ

1. 当日参加申込をされる方は、総合受付（3 階ホワイエ）内の「当日参加登録受付」でお申込を受け付けています。

参加区分	事前登録	当日登録
歯科医師・医師	8,000 円	10,000 円
コメディカル	4,000 円	5,000 円
学生	無料	無料
懇親会	一律 8,000 円	

2. 会場内では、学術大会参加章（ネームカード）に、氏名・所属をご記入の上、必ず身につけてご入場ください。
3. クローク（3 階ホワイエ）は設置しますが、貴重品・パソコン・傘はご自身でお持ちください。
クローク受付時間
7 月 20 日（金） 8:30～18:30
7 月 21 日（土） 8:30～16:30
4. 大会会場におけるビデオ・写真撮影等は、演者の著作権保護のため、禁止させていただきます。
5. 各講演で質問される方は、座長の指示に従い、所定のマイクを使用して、所属・氏名を述べてから簡潔明瞭にお願いします。円滑な進行にご協力ください。
6. 日本歯科医学教育学会への入会をご希望の方は、学会事務局受付（総合受付内）までお越しください。
7. 本学術大会は日本歯科医師会生涯研修事業に認定されております。
詳しくは、学会事務局までお尋ねください。
8. 本大会では、クールビズを推奨しております。ノーネクタイ、カジュアルな服装でお越しください。

懇親会のお誘い

下記の通り、本大会では 20 日（金）に懇親会を開催いたします。事前のお申込をお受けしておりましたが、若干の余裕がございます。当日、総合受付でお早めにお申し込みください。

◆懇親会◆

会 場：岡山全日空ホテル スカイバンケット「宙」

〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町 15-1 TEL:086-898-1111 FAX :086-898-1200

<http://www.anahotel-okayama.com/>

日 時：7 月 20 日（金）18:30 より

参加費：8,000 円

口演発表演者へのお願い

1. 口演会場

- 一般演題の口演会場は、A 会場（3 階コンベンションホール西）と B 会場（3 階 301 室）です。

2. 一般演題の演者の方へ

① 発表データの受付について

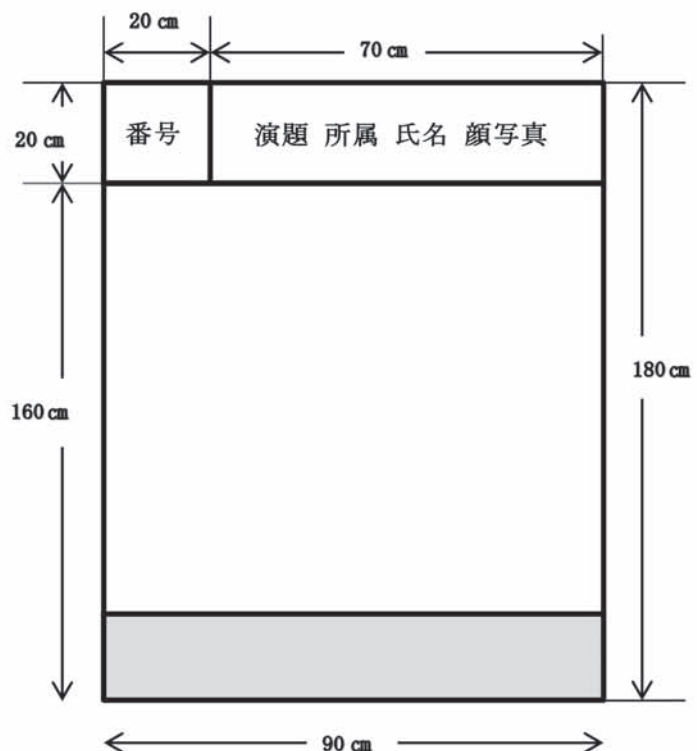
- 発表データ（メディア）は、口演開始 1 時間前（9:10～9:30 に口演開始の場合は、当日の 8:30）までに、PC 受付（3 階ホワイエ）に提出してください。
- ご発表のデータにつきましては、相互のウィルス感染の危険性が高いことにより、CD-R(CD-RW や DVD は不可です)での持ち込みに限らせて頂きます。USB メモリ等はバックアップとしてお持ちください。
- 画面サイズは、ページ設定→スライドの設定サイズ→35 mm スライドを設定してください。
- 動画／音声は不可とさせていただきます。
- 発表データの拡張子は ppt のみとさせていただきます。
- 文字フォントは PowerPoint に設定されている標準的なフォントをご使用ください。特殊なフォント、外字などは使用しないようお願いいたします。
- 発表データ（メディア）は、データ受付終了後、その場でお返しします。
- 事務局用意の PC にコピーした全発表データは、発表終了後、大会事務局にて、責任をもって削除します。
- メディアを介したウィルス感染の事例がありますので、最新のウィルス駆除ソフトで、事前にチェックをお願いします。
- PC 持込み・Macintosh は不可とさせていただきます。

② 発表について

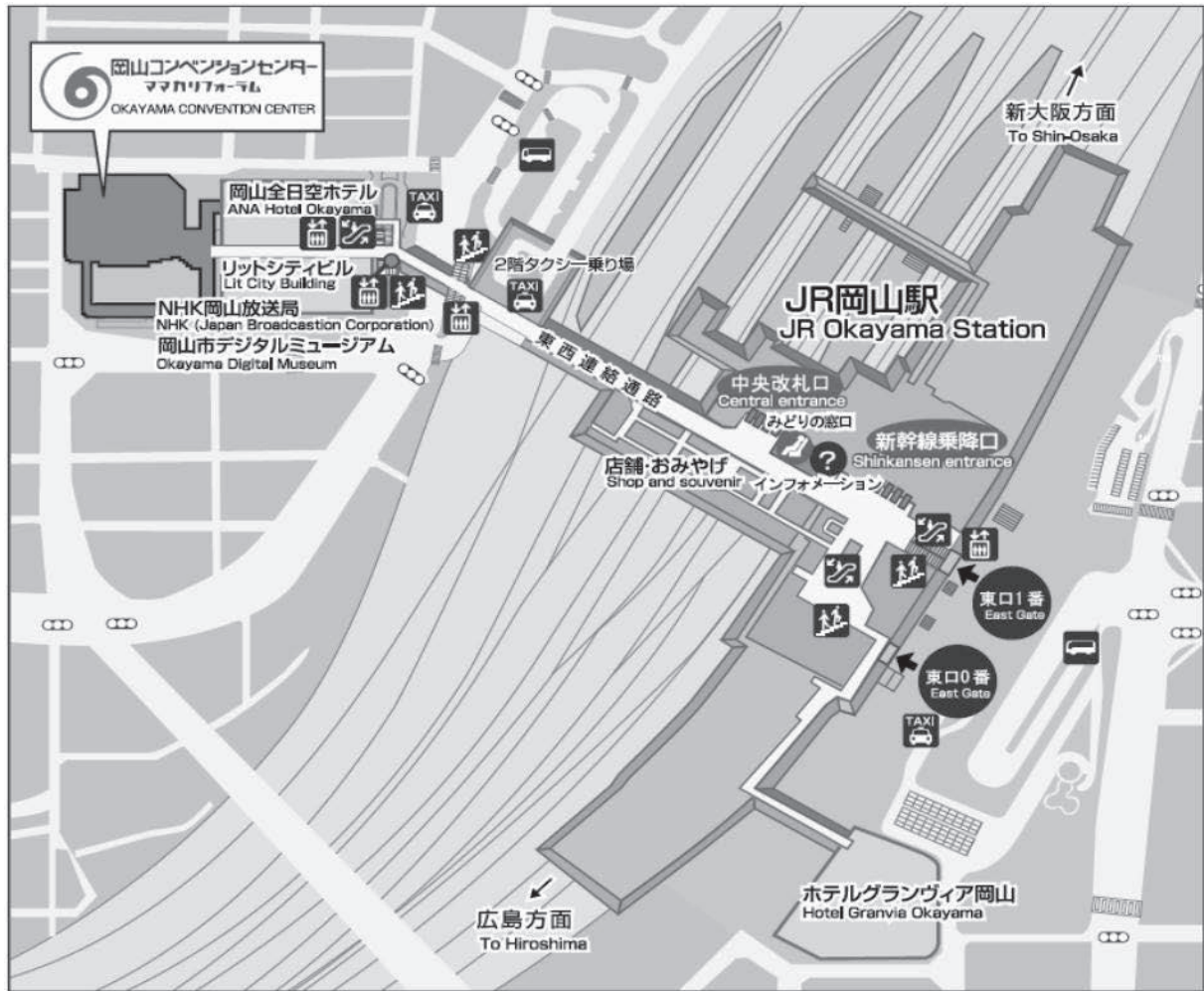
- 演者の方は口演開始 10 分前に、次演者席に着席してください。
- 一般演題の発表時間は 8 分、質疑応答は 2 分です。
- 発表時は、演者ご自身で演題上にあるマウスを用いてスライド操作をしていただきます。
- 発表には、事務局で用意した PC（Windows XP 以降、PowerPoint2003 以降）をご使用いただき、液晶プロジェクターを利用したプレゼンテーションを行っていただきます。

ポスター発表者へのお願い（学生セッションも含む）

1. ポスター発表会場は3階のコンベンションホール東となります。
ポスター発表会場入り口のポスター発表受付にお立ち寄りください。
2. ポスターパネルは縦180 cm×横90 cmのスペースを用意いたします。その内上部の20 cmは演題番号と演題名、所属名、所属、発表者名とします。
3. 演題番号は大会事務局が演題番号用スペース（20 cm×20 cm）に掲示します。
4. 演題用スペース（20 cm×70 cm 以内）に演題名、所属および発表者名を明記してください。
演題の文字は2 cm×2 cm以上、発表者名が複数の場合は演者名の前に○を付けてください。
5. ポスターパネルへの取り付けはプッシュピンを使用し、両面テープなどの粘着テープは使用しないでください。また、プッシュピンは各自でご用意ください。
6. ポスター発表の時間は、20日（金）9:30～17:00／21日（土）9:30～15:50です。
7. ポスター討論の時間は、20日（金）16:00～17:00／21日（土）13:00～14:00です。
討論の時間中は事務局で用意したリボンをつけてご自身のポスターの前を離れないでください。
8. ポスターの掲示と撤去は、
●20日（金）⇒ 8:30～9:30 の間で掲示／17:00～17:30 の間で撤去
●21日（土）⇒ 8:30～9:30 の間で掲示／15:50～16:20 の間で撤去
以上の時間帯で行ってください。なお撤去されなかったポスターは大会事務局で処分いたします。ご了承ください。
9. 学生セッションに関して
ポスター発表と同様に21日（土）9:30～15:50の間で行われます。
また、学生セッションポスターの討論時間も21日（土）13:00～14:00の間で行われます。
演題ごとに発表5分、質疑応答2分の時間を設けます。
座長の先生の指示に従って発表を行ってください。
S-1～S-4 ⇒座長：大住伴子先生
S-5～S-8 ⇒座長：影山幾男先生



会場のご案内



岡山コンベンションセンター3階



プログラム

7月20日（金）

A会場（3階 コンベンションホール西）

9:00～9:10 開会式

9:10～10:45 一般口演

『卒前専門基礎教育／教育研究手法』

9:10～9:40 座長：魚島勝美（新潟大学大学院）

A-1 CT画像を併用した歯科解剖学教育と社会貢献（第2報）

○高橋常男¹⁾、森山浩志²⁾、小林 繁³⁾、熊坂さつき⁴⁾

¹⁾ 神奈川歯科大学、²⁾ 昭和大学医学部、³⁾ 九州歯科大学、⁴⁾ 駒澤大学

A-2 HakePlot による教育効果および学習力評価の可能性

○田中忠芳¹⁾、王 宝禮²⁾、宮沢裕夫³⁾

¹⁾ 松本歯科大学歯学部、²⁾ 大阪歯科大学歯科医学教育開発室、³⁾ 日本大学松戸歯学部

A-3 TBL（チーム基盤学習）の実践に必要な5Pシステムの確立

○葛城啓彰

日本歯科大学新潟生命歯学部微生物学講座

『卒前専門基礎教育・臨床実習／医療面接・学習ツール・模擬患者』

9:40～10:10 座長：中島一郎（日本大学歯学部）

A-4 医療面接スキルに対するバーチャルペーシェントシステムの有効性

○菅沼岳史¹⁾、螺澤庸博¹⁾、小野康寛¹⁾、鈴木泰山²⁾、八木 豊²⁾、馬谷原光織³⁾

片岡竜太³⁾、宮崎 隆⁴⁾、中村陽介⁵⁾、三上浩司⁵⁾、馬場一美¹⁾

¹⁾ 昭和大学歯学部歯科補綴学講座、²⁾ 株式会社ピコラボ、³⁾ 昭和大学歯学部歯学教育推進室、⁴⁾ 昭和大学歯学部歯科理工学講座、⁵⁾ 東京工科大学クリエイティブラボ

A-5 共用試験歯学系 OSCE 参加後の模擬患者の気持ち

○内川喜盛¹⁾、大澤銀子¹⁾、北原和樹²⁾、池田利恵²⁾、石川結子¹⁾、井出吉昭²⁾

織田総一郎²⁾、菊池憲一郎²⁾、横山大一郎²⁾、安田麻子²⁾、北村和夫¹⁾

¹⁾ 日本歯科大学附属病院、²⁾ 日本歯科大学生命歯学部

A-6 歯科学生における医療面接のスキル評価

○音琴淳一¹⁾、安東信行¹⁾、岡藤範正²⁾、藤井健男²⁾、横井由紀子³⁾

¹⁾ 松本歯科大学教育学習支援センター、²⁾ 松本歯科大学病院総合診療室、³⁾ 松本歯科大学小児歯科学講座

『卒前臨床実習／シミュレーション教育・倫理・態度・意識調査』

10:10～10:40 座長：葛西一貴（日本大学松戸歯学部）

A-7 一口腔単位での問題発見・解決能力の涵養を目的とした治療方針立案演習

○秋葉陽介、加来 賢、秋葉奈美、長澤麻沙子、魚島勝美
新潟大学大学院医歯学総合研究科

A-8 臨床実習生が考える歯科医師の資質

○永松 浩、木尾哲朗、鬼塚千絵、喜多慎太郎、寺下正道
九州歯科大学

A-9 歯学部卒前臨床実習に対する国民の意識調査

○大山 篤¹⁾²⁾、新田 浩³⁾、大原里子⁴⁾、小田 茂⁴⁾、秀島雅之⁴⁾、塩沢育己²⁾、
荒木孝二⁵⁾、俣木志朗³⁾

¹⁾神戸製鋼所東京本社健康管理センター、²⁾東京医科歯科大学歯学部、³⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科、⁴⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院、⁵⁾東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

11:00～12:00 ◆特別講演◆

『モデル・コア・カリキュラムの改訂とそのポイント』

講師：村田善則（文部科学省高等教育局医学教育課 課長）

座長：松尾龍二（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔生理学分野 教授）

13:00～14:00 評議員会・総会

14:10～16:00 ◆シンポジウムⅠ◆

『プロフェッショナリズムをどう育むか』

座長：小川哲次（広島大学病院口腔総合診療科 教授）

鳥井康弘（岡山大学病院卒後臨床研修センター 教授）

「プロフェッショナリズムとその教育」

宮田靖志（北海道大学病院地域医療指導医支援センター・卒後臨床研修センター 准教授）

「倫理から見たプロフェッショナリズム教育」

樫 則章（大阪歯科大学人権教育室 専任教授）

「歯科から見たプロフェッショナリズム教育」

木尾哲朗（九州歯科大学総合診療学分野 准教授）

「社会から求められるプロフェッショナリズムとは」

山口育子（NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長）

B会場（3階 301室）

9:10～10:45 一般口演

『カリキュラムの開発・改善、組織の改善』

9:10～9:40 座長：住友雅人（日本歯科大学）

B-1 岩手医科大学歯学部教育改革における Society 制度と Senior Tutor 制度の導入について

○金村清孝¹⁾、小林琢也¹⁾、浅野明子²⁾、岡田伸男²⁾、織田展輔¹⁾、田邊憲昌¹⁾、
近藤貴之¹⁾、佐々木大輔³⁾、伊藤茂樹¹⁾、野村太郎¹⁾、水川卓磨⁴⁾、大川義人³⁾、
佐藤和朗⁴⁾、城 茂治⁵⁾、小豆嶋正典⁶⁾、永井成美⁷⁾、三浦廣行⁴⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座、²⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座
う蝕治療学分野、³⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野、⁴⁾岩手医科大学
歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野、⁵⁾岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
歯科麻酔学分野、⁶⁾岩手医科大学歯学部口腔顔面再建学講座歯科放射線学分野、⁷⁾ハーバ
ード大学歯学部補綴・バイオマテリアル学講座

B-2 臨床実習の充実に向けた Multi-disciplinary カリキュラムの導入について

○八重柏隆¹⁾、村井 治¹⁾、佐々木大輔¹⁾、小林琢也²⁾、金村清孝²⁾、田邊憲昌²⁾、
木村重信³⁾、佐藤和朗⁴⁾、永井成美⁵⁾、三浦廣行³⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野、²⁾岩手医科大学歯学部補綴・イン
プラント学講座、³⁾岩手医科大学微生物学講座分子微生物学分野、⁴⁾岩手医科大学歯学部
口腔保健育成学講座歯科矯正学分野、⁵⁾ハーバード大学歯学部補綴・バイオマテリアル学
講座

B-3 学部教育における新しい教育体制の試みについて

○佐藤和朗¹⁾、金村清孝²⁾、浅野明子³⁾、小林琢也²⁾、織田展輔²⁾、八重柏隆³⁾、
工藤義之³⁾、古屋純一²⁾、近藤尚知²⁾、石崎 明³⁾、野田 守³⁾、永井成美⁴⁾、
三浦廣行¹⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野、²⁾岩手医科大学歯学部補綴・
インプラント学講座、³⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座、⁴⁾ハーバード大学歯学部補
綴・バイオマテリアル学講座

『卒前臨床実習・臨床研修／学習ツール』

9:40～10:10 座長：小出 武（大阪歯科大学）

B-4 診療参加型臨床実習の充実に向けた取り組み－教育診療協力患者の確保－

○木下可子、長島 正、三浦治郎、西藤三紀子、久保美寿穂、大家香織、清水真人、
五十嵐有希子、竹重文雄
大阪大学歯学部附属病院

B-5 スキルス・ラボを活用した研修歯科医および医員の5年間の実績

○清野晃孝、齋藤高弘
奥羽大学歯学部

B-6 本院歯科医師臨床研修への Web Course Tool (WebCT)の活用について

○津賀一弘¹⁾、河村 誠²⁾³⁾、島末 洋²⁾、土井一矢¹⁾³⁾、呉本晃一¹⁾³⁾、太刀掛銘子²⁾³⁾
長崎信一¹⁾³⁾、小川郁子²⁾³⁾、中岡美由紀²⁾³⁾、岡田 貢²⁾³⁾、小川哲次²⁾

¹⁾ 広島大学大学院医歯薬保健学研究院、²⁾ 広島大学病院、³⁾ 広島大学病院歯科領域卒後
臨床研修専任指導医専門委員会

『臨床研修／教育研究手法・その他』

10:10～10:40 座長：樋口勝規（九州大学病院）

B-7 「総合診療室型」卒後歯科臨床研修における経験量に影響を及ぼす因子

○中島貴子、石崎裕子、田口裕哉、島田靖子、小林哲夫、藤井規孝
新潟大学医歯学総合病院

B-8 当院における研修歯科医の損益計算の試み ー第1報 損益計算方法に関してー

○権 暁成、田中晃伸
タナカ歯科

B-9 当院における研修歯科医の損益計算の試み ー第2報 損益結果に関してー

○田中晃伸、権 暁成
タナカ歯科

12:00～13:00 ランチョンセミナーⅠ

協賛：(株)タキザワ漢方廠

『歯科医学教育における東洋医学教育の重要

ー患者様の漢方薬への声を日本歯科医学教育学会にー』

王 宝禮（大阪歯科大学歯科医学教育開発室 教授）

C会場（3階 302室）

12:00～13:00 ランチョンセミナーⅡ

協賛：(株)モリタ

『Er:YAG レーザーによるう蝕除去実習とその評価』

半田慶介（北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系う蝕制御治療学分野 講師）

ポスター会場（3 階 コンベンションセンター東）

9:30～17:00 ポスター発表（P-1～P-72） & 企業展示

※ポスター討論は 16:00～17:00 となります。

『卒前臨床実習・臨床研修／学習支援：キャリア、ストレスマネジメント』

P-1 ストレス対処能力 SOC が研修歯科医のメンタルヘルスに及ぼす影響

○寶田 貫、角 義久、浅田徹之介、樋口勝規
九州大学病院口腔総合診療科

P-2 臨床研修歯科医のメンタルヘルスに影響を与える要因の検討

○浅田徹之介、寶田 貫、角 義久、樋口勝規
九州大学病院

P-3 文部科学省採択学生支援推進事業「臨地体験と就業情報通信システム構築による歯学生の就業支援強化」の取組

○埴岡 隆、池邊哲郎、尾崎正雄、小島 寛、佐藤博信、高橋 裕、廣藤卓雄
福岡歯科大学

P-4 臨床実習を支援する新しいスキルス・ラボ

○伊佐津克彦、長谷川篤司、馬谷原光織、山本松男、井上美津子、宮崎 隆
昭和大学歯学部

『卒前臨床実習・臨床研修／ポートフォリオ』

P-5 臨床研修歯科医に対する地域医療研修に関する達成度と満足度の評価について

○梅澤幸司¹⁾、後藤田宏也²⁾、葛西一貴³⁾、五関たけみ³⁾、黒木俊一⁴⁾、牧村英樹⁵⁾、
長濱文雄⁵⁾、伊藤孝訓⁶⁾、和田守康⁵⁾、牧村正治⁷⁾
¹⁾ 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座、²⁾ 日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学講座、
³⁾ 日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座、⁴⁾ 日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学講座、
⁵⁾ 日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、⁶⁾ 日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、
⁷⁾ 日本大学松戸歯学部社会歯科学（歯科医学教育学）講座

P-6 歯科医師臨床研修における Significant Event Analysis を用いた振り返り

○吉田礼子¹⁾、松本祐子¹⁾、諏訪素子¹⁾、志野久美子¹⁾、河野博史¹⁾、岩下洋一朗²⁾、
田口則宏²⁾
¹⁾ 鹿児島大学病院歯科総合診療部、²⁾ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

P-7 歯科矯正学臨床実習に対するルーブリックの導入試行

○佐藤嘉晃¹⁾、八若保孝²⁾、飯田順一郎¹⁾
¹⁾ 北海道大学大学院歯学研究科歯科矯正学教室、²⁾ 北海道大学大学院歯学研究科小児・
障害者歯科学教室

『臨床研修／教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究』

P-8 東日本大震災における東北大学病院総合歯科診療部の取り組み

○下西 充、岩松正明、遠藤直樹、菊池雅彦
東北大学病院総合歯科診療部

P-9 研修歯科医ワークショップからの島しょ地域歯科研修プログラムへの提言

○升谷滋行¹⁾、関 啓介²⁾、紙本 篤²⁾、齊藤邦子²⁾、黒川弘康¹⁾、高見澤俊樹¹⁾、
田村豊彦¹⁾、宮崎真至¹⁾、橋本光二³⁾、桑田文幸⁴⁾
¹⁾ 日本大学歯学部保存学教室修復学講座、²⁾ 日本大学歯学部附属歯科病院系卒直後研修
分野、³⁾ 日本大学歯学部歯科放射線学教室、⁴⁾ 日本大学歯学部

P-10 修復治療の意思決定における臨床研修の影響

○久保至誠¹⁾、山邊芳久^{1) 2)}、林 善彦²⁾
¹⁾ 長崎大学病院、²⁾ 長崎大学歯学部

P-11 平成 23 年度臨床研修歯科医の院内感染対策に関するアンケート調査

○水谷太尊、海老原隆、渥美陽二郎、永合徹也、宇野清博、関本恒夫
日本歯科大学新潟病院

P-12 POS を基盤とした臨床教育システムの効果に関する研究－第 4 報：研修歯科医による症
例報告の分析－

○勝部直人、池田亜紀子、長谷川篤司
昭和大学歯学部歯科保存学講座総合診療歯科学部門

『臨床研修／その他』

P-13 東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修プログラムへの歯科用 CAD/CAM システム研
修の導入

○新田 浩¹⁾、鈴木允文²⁾、礪波健一²⁾、梅森 幸²⁾、大山 篤³⁾、俣木志朗¹⁾
¹⁾ 東京医科歯科大学大学院歯学部附属歯学部附属病院臨床研修プログラム、²⁾ 東京医科歯科大学歯学部附属病院
歯科総合診療部、³⁾ (株) 神戸製鋼所 東京本社 健康管理センター

P-14 岡山大学病院の歯科医師臨床研修における環境評価

○白井 肇、鈴木康司、河野隆幸、大塚恵理、鳥井康弘
岡山大学病院総合歯科

P-15 臨床研修歯科医による研修習熟度の評価法の開発

○角 義久、伊吹禎一、王丸寛美、増田啓太郎、津田緩子、浅田徹之介、實田 貫、
樋口勝規
九州大学病院口腔総合診療科

P-16 本院歯科医師臨床研修におけるプロフェッショナルリズムの修得

○小川哲次¹⁾、岡田 貢^{1) 3)}、津賀一弘^{2) 3)}、河村 誠^{1) 3)}、島末 洋^{1) 3)}、土井一矢^{2) 3)}、
太刀掛銘子^{1) 3)}、長崎信一^{2) 3)}、小川郁子^{1) 3)}、中岡美由紀^{1) 3)}、田中良治^{1) 3)}
¹⁾ 広島大学病院、²⁾ 広島大学大学院医歯薬保健学研究院、³⁾ 広島大学病院歯科領域卒後
臨床研修専任指導医専門委員会

『臨床研修／歯科医療・口腔ケア・ヘルスプロモーション』

P-17 歯科医師臨床研修におけるチーム医療教育

○山中玲子¹⁾²⁾、曾我賢彦¹⁾²⁾、吉富愛子¹⁾²⁾、白井 肇³⁾、鈴木康司³⁾、河野隆幸³⁾、
鳥井康弘³⁾、森田 学¹⁾²⁾

¹⁾岡山大学病院医療支援歯科治療部、²⁾岡山大学病院周術期管理センター、³⁾岡山大学
病院総合歯科

P-18 広島大学病院歯科医師臨床研修における医療連携プログラムに対する評価

○西 裕美、田中良治、大林 泰、小原 勝、小川哲次
広島大学病院口腔総合診療科

『歯科衛生士教育／「教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究・早期体験学習・その他」』

P-19 臨床実習時における針刺し事故の実態調査と予防教育についてー予防教育前後の比較ー

○渡辺孝章、中澤千賀子、森田 操
鶴見大学短期大学部歯科衛生科

P-20 演題取下げ

P-21 歯科衛生士養成機関における医療安全教育の現状

○小原由紀¹⁾、近藤圭子¹⁾、遠藤圭子¹⁾、白田千代子¹⁾、大塚紘未¹⁾、品田佳世子¹⁾、
俣木志朗²⁾

¹⁾東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科、²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
歯科医療行動科学分野

P-22 歯科衛生士教育での臨床実習時における学生のストレス変化に関する検討

○鈴鹿祐子、麻生智子、麻賀多美代、酒巻裕之、日下和代
千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科

P-23 「いわゆる病院ボランティア」としての早期体験実習

○浅沼直樹、中村直樹、宮崎晶子、佐藤治美、土田智子、筒井紀子、原田志保、
菊地ひとみ、小菅直樹
日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科

P-24 日本歯科大学新潟短期大学における実践的な食生活指導教育への取り組み ー第2報ー

○中村直樹、佐藤治美、原田志保、菊地ひとみ
日本歯科大学新潟短期大学

P-25 歯科保健医療専門職協働に関する意識調査 ー第二報：歯科衛生学生、昨年との比較ー

○室賀 麗、鶴田 潤、松川千夏、森尾郁子
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野

- P-26 本学1年生に実施した「コミュニケーション概論」について第1報実施の概要
○鈴木 恵¹⁾、小倉千幸¹⁾、出田亜紀子¹⁾、山田京子¹⁾、須田真理¹⁾、関口洋子¹⁾、
市川順子¹⁾、野村正子¹⁾、合場千佳子¹⁾、池田利恵¹⁾、内川喜盛²⁾、岡田智雄²⁾、
大津光寛²⁾、大澤銀子²⁾、北原和樹³⁾、佐藤 勉¹⁾、小口春久⁴⁾
¹⁾日本歯科大学東京短期大学歯科衛生学科、²⁾日本歯科大学附属病院、³⁾日本歯科大学
学生命歯学部、⁴⁾日本歯科大学東京短期大学

- P-27 歯科衛生士専門学校生の学習意欲の検討ーアイデンティティ・職業アイデンティティの
観点からー
○前嶋亜優子、頭山高子、末瀬一彦
大阪歯科大学歯科衛生士専門学校

- P-28 茨城歯科専門学校 2011 年度新入生における入学までの経緯に関するアンケート調査
○田中晃伸¹⁾²⁾³⁾、権 暁成³⁾
¹⁾茨城県歯科医師会立茨城歯科専門学校、²⁾茨城県歯科医師会、³⁾タナカ歯科

- P-29 歯科衛生士学生の進路選択の現状に関する考察ーK 女子短期大学においてー
○中山真理、柴谷貴子、細見 環
関西女子短期大学

- P-30 大阪歯科大学歯科衛生士専門学校でのチーム基盤型学習法 (TBL) の実践
○池尾 隆¹⁾、鎌田愛子¹⁾、田村 功¹⁾、合田征司¹⁾、吉川美弘¹⁾、頭山高子²⁾、
前嶋亜優子²⁾、末瀬一彦²⁾
¹⁾大阪歯科大学学生化学講座、²⁾大阪歯科大学歯科衛生士専門学校

- P-31 学生相互実習におけるセルフケアおよび専門的歯面清掃の自己評価法の試み
○石川裕子、柴田佐都子、福島正義
新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学講座

『卒前専門基礎教育・実習／教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究』

- P-32 臨床実習前態度・技能教育に対する歯学部学生の意識調査
○割田幸恵¹⁾、荻部洋行¹⁾、河上智美¹⁾、鈴木淳子²⁾、梅津糸由子²⁾、内川喜盛²⁾
¹⁾日本歯科大学生命歯学部小児歯科学講座、²⁾日本歯科大学附属病院小児歯科

- P-33 ニッケルチタン製ロータリーファイルを用いる根管拡大形成の学生実習への導入に関する
考察
○北島佳代子、新井恭子、五十嵐 勝
日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第1講座

- P-34 社会系歯科医学教育への TBL 導入に向けた取り組みー社会歯科学事例演習に対する
アンケート調査結果ー
○瀧田慎也¹⁾、山本龍生¹⁾、槻木恵一²⁾、平田幸夫¹⁾
¹⁾神奈川歯科大学社会歯科学講座歯科医療社会学分野、²⁾神奈川歯科大学顎顔面診断科
学講座病理学分野

- P-35 広島大学歯学科4年生における基礎的食材知識について
○河原和子¹⁾、仁井谷善恵²⁾、二川浩樹³⁾、菅井基行⁴⁾
¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院口腔生物工学、²⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院口腔管理保健学、³⁾広島大学歯学部副学部長、⁴⁾広島大学歯学部学部長

- P-36 歯学部3年生の病理学教育におけるTBL導入実習についてのアンケート調査
○林 隆司、槻木恵一
神奈川県歯科大学歯学部病理学

- P-37 歯科理工学実習における測定値の解析と教育改善点 ―印象材の弾性的挙動と連合印象による模型の寸法精度について―
○青木春美、宮坂 平、安藤進夫、丸田久美子、青柳有祐、森山京介、大竹康成、須田勇己、清水昭博、高木邦明、大寄紀子
日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座

『卒前専門基礎教育・臨床実習・臨床研修／カリキュラム・授業評価』

- P-38 嚥下内視鏡実習の教育効果に関する主観的評価 ―操作実習とライブ指導について―
○中道由香、高橋浩二、横山 薫、山下夕香里、武井良子
昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔リハビリテーション医学部門

- P-39 複数の研究グループによる臨床研究プログラム評価
○山瀬 勝、大津光寛、光安廣記、児玉実穂、落合真美、大澤銀子、横澤 茂、代田あづさ、新田俊彦、久野彰子、岩田 洋
日本歯科大学附属病院

- P-40 全部欠損補綴模型実習の進度日程に関する一考察
○水野辰哉¹⁾、宇佐美博志¹⁾、高濱 豊¹⁾²⁾、田中清雄¹⁾、竹内一夫¹⁾²⁾、村上 弘¹⁾²⁾、服部正巳¹⁾
¹⁾愛知学院大学歯学部高齢者歯科学講座、²⁾愛知学院大学歯学部口腔インプラント科

- P-41 部分床義歯補綴学実習におけるチェックリスト方式による評価法への取り組み
○清水慈子、秋山仁志、石田鉄光、三代冬彦、平賀 泰、奥富一義、千綿一郎、石原裕之、吉岡昌樹、須田牧夫、岡山浩美、阿部英二、真部寛登、岡田威一郎、高橋賢晃、戸原 雄、久保田うつき、安藤実奈子、松田美和子、田上寿子、川名弘剛、初田将大、平林正裕、干川 摂、内山恵理、北 梢、工藤奈津子、岩本圭輔、坂詰奏子、横山知美
日本歯科大学附属病院総合診療科

- P-42 「口腔インプラント学」の受講の有無とインプラント治療に関する知識との関係について
○中本哲自、正木千尋、近藤祐介、向坊太郎、細川隆司
九州歯科大学

- P-43 東京医科歯科大学医学部・歯学部「医歯学融合教育」(2011年度導入)について
○鶴田 潤¹⁾、山口久美子¹⁾、高田和生¹⁾、俣木志朗²⁾、荒木孝二³⁾、田中雄二郎¹⁾
¹⁾東京医科歯科大学医歯学融合教育支援センター、²⁾東京医科歯科大学大学院歯科医療行動科学分野、³⁾東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

P-44 歯科における災害医学教育

○都築民幸、岩原香織

日本歯科大学生命歯学部歯科法医学センター

P-45 東京歯科大学における歯科麻酔学臨床実習・臨床研修の一貫教育の取り組み実習の一貫教育の取り組み

○松木由起子、塩崎恵子、松浦信幸、一戸達也

東京歯科大学歯科麻酔学講座

P-46 日本歯科大学新潟病院歯科訪問診療研修に関するアンケート調査

○坂井 登、廣澤利明、黒川裕臣、宇野清博、関本恒夫

日本歯科大学新潟病院総合診療科

『卒前臨床実習／試験』

P-47 支台歯形成に関する臨床実習修了時試験の客観評価について

○大河貴久、田中順子、佐藤正樹、藤井孝政、柏木宏介、田中昌博

大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座

P-48 5年次臨床能力到達試験(OSCAT)の実施について

○後藤田宏也¹⁾、河相安彦²⁾、葛西一貴³⁾、内田貴之⁴⁾、神野良一⁵⁾、和田守康⁶⁾、
牧村正治⁷⁾

¹⁾ 日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学講座、²⁾ 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座、

³⁾ 日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座、⁴⁾ 日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、

⁵⁾ 日本大学松戸歯学部顎顔面外科学講座、⁶⁾ 日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、

⁷⁾ 日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座

『FD：教育能力の向上、カリキュラムの開発・改善、組織の改善・その他』

P-49 技工士のための歯科材料短時間体験実習と通常実習との比較

○吉田隆一、伊東修一、吉田康一

東邦歯科医療専門学校

P-50 歯科衛生士養成大学・短期大学における教員の専門性並びに研究への認識について

○石川隆義¹⁾、吉田 隆²⁾、日下和代³⁾、田中宣子⁴⁾、鈴木幸江⁵⁾、土田智子⁶⁾、
本間和代⁷⁾、田中丸治宣⁸⁾、柴谷貴子⁹⁾、延原靖子¹⁰⁾、野村加代¹¹⁾、升井一朗¹²⁾、
市川順子¹³⁾、向井正視¹⁴⁾、足立了平¹⁵⁾、小口春久¹³⁾

¹⁾ 大垣女子短期大学歯科衛生科、²⁾ 埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科口腔保

健科学専攻、³⁾ 千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科、⁴⁾ 鶴見大学短期大学部

歯科衛生科、⁵⁾ 湘南短期大学歯科衛生学科、⁶⁾ 日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科、

⁷⁾ 明倫短期大学歯科衛生士学科、⁸⁾ 静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科、⁹⁾ 関西女子

短期大学歯科衛生学科、¹⁰⁾ 吉備国際大学短期大学部保健科デンタルビューティ専攻、

¹¹⁾ 高知学園短期大学医療衛生学科歯科衛生専攻、¹²⁾ 福岡医療短期大学歯科衛生学科、

¹³⁾ 日本歯科大学東京短期大学歯科衛生学科、¹⁴⁾ 愛知学院大学短期大学歯科衛生学科、

¹⁵⁾ 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科

P-51 教員の教育能力向上の取り組み ―CBT 作問を通じて―

○中山 歩、岩下洋一朗、田松裕一、有川裕之、梶原武弘、門川明彦、藺村貴弘、
塚田澄代、松本祐子、丸山浩美、田口則宏
鹿児島大学歯学部 CBT 作問委員会

P-52 視覚素材作製のための写真撮影と画像処理技術ワークショップの FD としての取り組み

○鹿野千賀¹⁾、新井一仁²⁾、南雲 保²⁾、宮坂 平²⁾、秋山仁志¹⁾、柵木寿男²⁾、
高橋幸裕²⁾、山瀬 勝¹⁾、高田清美²⁾、長谷川充¹⁾、伊藤菜穂¹⁾
¹⁾日本歯科大学附属病院、²⁾日本歯科大学生命歯学部

P-53 「地域社会で患者中心のチーム医療を実践する」学部連携地域医療実習の概要と学生による評価

○向井美恵¹⁾、弘中祥司¹⁾、中川量晴¹⁾、片岡竜太¹⁾、木内裕二²⁾、田中一正³⁾
¹⁾昭和大学歯学部、²⁾昭和大学薬学部、³⁾昭和大学富士吉田教育部

P-54 大阪大学歯学部附属歯科技工士学校におけるスモール・グループ・ディスカッション学習の試み

○瑞森崇弘、矢谷博文
大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座

『大学院教育・その他／グローバル化とハーモニゼイション、国際貢献』

P-55 EPA 比人看護師合格の軌跡と戦略

○瀧永 哲
足利赤十字病院

P-56 韓国の歯学教育白書について

○川口陽子¹⁾、森尾郁子²⁾、鶴田 潤²⁾、竹原祥子¹⁾
¹⁾東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野、²⁾東京医科歯科大学大学院歯学教育開発
学分野

『卒前教養的教育・その他』

P-57 歯科大学における東洋医学教育の展開

○方 一如、鎌田愛子、上村 守、戸田伊紀、竹村明道、益野一哉、諏訪文彦、田中昭男、
小正 裕、川添堯彬
大阪歯科大学

P-58 日本歯科大学生命歯学部第 5 学年ワークショップにおける過去 4 年間の学生の意識変化

○小林さくら子¹⁾、田巻友一²⁾、奈良陽一郎²⁾、南雲 保²⁾、小川智久¹⁾、宮坂 平²⁾、
呉 健一²⁾、住友雅人²⁾
¹⁾日本歯科大学附属病院、²⁾日本歯科大学生命歯学部

P-59 英国における歯科医師になるためのキャリアガイドブック

○竹原祥子¹⁾、森尾郁子²⁾、鶴田 潤²⁾、川口陽子¹⁾
¹⁾東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野、²⁾東京医科歯科大学大学院歯学教育開発
学分野

『卒前教養的教育・卒前臨床実習／汎用的能力（学士力）、倫理・態度、クリティカルシンキング、リテラシー、診療記録』

P-60 臨床実習に対応した電子カルテの構築と医療情報の安全管理措置

○丸山陽市¹⁾²⁾、久保至誠²⁾、山邊芳久³⁾、藤原 卓²⁾⁴⁾

¹⁾長崎大学病院総合歯科矯正歯科室、²⁾長崎大学病院医療情報部歯科分室、
³⁾長崎大学病院医療教育開発センター、⁴⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野

P-61 本学1年生に実施した「コミュニケーション概論」について第2報実施後の学生アンケート結果

○茂原宏美¹⁾、佐藤 勉¹⁾、尾崎順男¹⁾、市川 基¹⁾、小泉順一¹⁾、齋藤勝紀¹⁾、赤間亮一¹⁾、岩田健悟¹⁾、近藤健示¹⁾、内川喜盛²⁾、岡田智雄²⁾、大津光寛²⁾、大澤銀子²⁾、北原和樹³⁾、小口春久¹⁾

¹⁾日本歯科大学東京短期大学、²⁾日本歯科大学附属病院、³⁾日本歯科大学生命歯学部

P-62 鶴見大学歯学部医療人間科学特別合宿による学生の自己成長効果－4報－

○田中 倫¹⁾、小平裕恵²⁾、中村千賀子³⁾、前田伸子⁴⁾、朝田芳信²⁾、下田信治¹⁾

¹⁾鶴見大学歯学部口腔解剖学講座、²⁾鶴見大学歯学部小児歯科学講座、³⁾東京医科歯科大学教養部、⁴⁾鶴見大学歯学部口腔微生物学講座

P-63 日本大学松戸歯学部における医療行動科学系学問確立の試み

○伊藤孝訓¹⁾²⁾、青木伸一郎¹⁾²⁾、大沢聖子¹⁾²⁾、葛西一貴²⁾³⁾、牧村正治⁴⁾、小川哲次⁵⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、²⁾日本大学松戸歯学部口腔科学研究所、
³⁾日本歯科松戸歯学部歯科矯正学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学（歯科医学教育学）講座、⁵⁾広島大学病院口腔総合診療科

P-64 東京歯科大学における市民参加型教育団体 Patient Community とその授業参加について

○山本 仁¹⁾、村上 聡²⁾、平田創一郎³⁾、杉原直樹⁴⁾、高橋俊之⁵⁾、望月隆二⁶⁾、河田英司¹⁾、井出吉信⁷⁾

¹⁾東京歯科大学歯科医学教育開発センター、²⁾東京歯科大学臨床検査病理学講座、
³⁾東京歯科大学社会歯科学研究室、⁴⁾東京歯科大学衛生学講座、⁵⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科、⁶⁾東京歯科大学物理学研究室、⁷⁾東京歯科大学学長

『卒前臨床実習／OSCE』

P-65 鹿児島大学歯学部における臨床能力評価の取り組み－臨床実習終了時 OSCE の導入－

○田口則宏、中村典史、杉原一正、門川明彦、今村晴幸、西原一秀、岩崎智憲、糀谷 淳
鹿児島大学歯学部

P-66 アメリカにおける歯科医師実技試験の視察報告

○大久保力廣¹⁾、小林 馨²⁾

¹⁾鶴見大学歯学部有床義歯補綴学講座、²⁾鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座

『卒前専門基礎実習・卒前臨床実習／学習教材・学習ツール』

P-67 歯列の連続性を評価基準とした実習成果物の評価方法について

○早川 淳¹⁾、木暮ミカ²⁾、河野正司²⁾、飛田 滋²⁾、尾田雅文¹⁾、東村明宏³⁾
¹⁾新潟大学、²⁾明倫短期大学、³⁾株式会社ニッシン

P-68 歯型彫刻実習における従来型評価方法の検証

○木暮ミカ¹⁾、飛田 滋¹⁾、河野正司¹⁾、早川 淳²⁾、尾田雅文²⁾、東村明宏³⁾
¹⁾明倫短期大学、²⁾新潟大学、³⁾株式会社ニッシン

P-69 有床義歯補綴学実習への新視聴覚システム導入による実習説明方法についてのアンケート調査

○加地彰人¹⁾、西 恭宏¹⁾、丸山浩美¹⁾、鎌下祐次²⁾、長岡英一³⁾
¹⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面補綴学分野、²⁾鹿児島大学医学部・歯学部
附属病院義歯補綴科、³⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面外科学分野

P-70 歯の外傷に対する研修歯科医の認識

○楊 秀慶、内川喜盛、秋山仁志
日本歯科大学附属病院

P-71 小児歯科臨床教育への 3D 映像技術の導入について

○成瀬正啓、福本 敏
東北大学大学院歯学研究科口腔保健発育学講座小児発達歯科学分野

『国際学会研究発表奨励賞 受賞演題』

P-72 Innovation of educational program for undergraduate dental students at Hiroshima University

○Oka Hiroko^{1) 2)}、Mine Yuichi³⁾、Udijanto Tedjosasongko¹⁾、Uchida Takashi⁴⁾
Tanne Kazuo⁵⁾、Kurihara Hidemi⁶⁾、Takata Takashi⁷⁾

¹⁾Department of International Collaboration Development for Dentistry, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、

²⁾Promoting Office of Graduate Program for BioDental Education, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、³⁾BioDental curriculum center, Faculty of Dentistry, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、

⁴⁾Department of Oral Biology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、⁵⁾Department of Orthodontics and Craniofacial Developmental Biology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、⁶⁾Department of Periodontal Medicine, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan、

⁷⁾Department of Oral and Maxillofacial Pathobiology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

7月21日(土)

A会場(3階 コンベンションホール西)

9:00~10:20 一般口演

『グローバル化とハーモニゼーション』

9:00~9:40 座長：河野文昭(徳島大学大学院)

A-10 留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)プログラムによる歯学部学生の海外派遣

○魚島勝美、宮崎秀夫、小野和宏、興地隆史、大内章嗣、前田健康
新潟大学大学院医歯学総合研究科

A-11 歯学科四年次保存修復学基礎実習における留学生サプインストラクターの評価と意義

○關奈央子¹⁾、二階堂徹²⁾、森尾郁子¹⁾³⁾、田上順次²⁾⁴⁾
¹⁾東京医科歯科大学国際交流センター、²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科う蝕制御学分野、³⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野、
⁴⁾東京医科歯科大学 GCOE プログラム歯と骨の分子疾患科学の国際教育研究拠点

A-12 The Hiroshima Univ. International Dental Course

○テジョサソニコ ウディヤント¹⁾²⁾、岡 広子¹⁾、内田 隆¹⁾、高田 隆¹⁾
¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院、²⁾アイルランガ大学歯学部

A-13 広島大学歯学部国際交流プログラムへの研修歯科医の参加とその評価

○岡 広子¹⁾、テジョサソニコ ウディヤント¹⁾、小川哲次²⁾、高田 隆¹⁾
¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院、²⁾広島大学病院口腔総合診療科

『卒前専門基礎教育／コミュニケーション・PBL チュートリアル教育』

9:40~10:20 座長：田口則宏(鹿児島大学大学院)

A-14 続ワールド・カフェをやってみた！

○大澤銀子、内川喜盛、北原和樹、岩田 洋、岡田智雄、大津光寛、小川智久、小倉陽子、
鈴木淳子、横澤 茂、仲谷 寛
日本歯科大学

A-15 協同学習の要素を取り入れた初年次 PBL テュートリアル

○長田敬五¹⁾、影山幾男¹⁾、五十嵐勝¹⁾、葛城啓彰¹⁾、佐藤 聡¹⁾、佐藤利英¹⁾、
二宮一智¹⁾、藤井一維¹⁾、水谷太尊¹⁾、宮川行男¹⁾、渡邊文彦¹⁾、中原 泉²⁾
¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学

A-16 PBL に標本を取り入れる試み

○影山幾男¹⁾、長田敬五¹⁾、五十嵐勝¹⁾、葛城啓彰¹⁾、佐藤 聡¹⁾、佐藤利英¹⁾、
二宮一智¹⁾、藤井一維¹⁾、水谷太尊¹⁾、宮川行男¹⁾、渡邊文彦¹⁾、中原 泉²⁾
¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学

- A-17 学部連携 PBL チュートリアルによるチーム医療教育の効果 その3 ポートフォリオ解析結果
○片岡竜太¹⁾、馬谷原光織¹⁾、鈴木久義²⁾、今福輪太郎³⁾、向井美恵¹⁾、弘中祥司¹⁾、
井上美津子¹⁾、木内祐二⁴⁾
¹⁾昭和大学歯学部、²⁾昭和大学保健医療学部、³⁾香港大学、⁴⁾昭和大学薬学部

10:30～12:00 ◆シンポジウムII◆

『多職種連携医療をいかに教育するか』

座長：恒石美登里（日本歯科医師会・日本歯科総合研究機構）

座長：高柴正悟（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野 教授）

「医療から見た多職種連携の重要性について」

谷本光音（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科血液・腫瘍・呼吸器内科学講座 教授）

「歯学部における多職種連携教育の実践例」

片岡竜太（昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座歯学教育学分野 教授）

「臨床研修における多職種連携教育の実践例」

曾我賢彦（岡山大学病院医療支援歯科治療部 助教）

14:10～15:40 ◆シンポジウムIII◆

『医療人を育てる新たな学習法～チーム基盤型学習（TBL）』

座長：伊藤孝訓（日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座 教授）

吉田登志子（岡山大学医療教育統合開発センター 助教）

「チーム基盤型学習（TBL とは）」

瀬尾宏美（高知大学医学部附属病院総合診療部 教授）

「歯学部における TBL の実践例」

槻木恵一（神奈川歯科大学歯学部顎顔面診断科学講座病理学分野 主任教授）

「薬学一年次学生を対象とした薬学実務体験実習と組み合わせた TBL の実践」

野呂瀬崇彦（北海道薬科大学薬事管理学分野 准教授）

15:40～16:00 閉会式

B会場（3階 301室）

9:00～10:20 一般口演

『卒前専門基礎教育／シミュレーション教育・その他』

9:00～9:40

座長：一戸達也（東京歯科大学）

B-10 鹿児島大学歯学部における歯科東洋医学教育の現状と今後の展開

○山口孝二郎、島田和幸、佐藤友昭、田口則宏

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

B-11 歯学部学生の東洋医学に対する意識調査：長崎大学歯学部と東京歯科大学での比較

○亀山敦史¹⁾、砂川正隆²⁾、山口孝二郎³⁾、王 宝禮⁴⁾

¹⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科、²⁾昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門、

³⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面機能再建学講座顎顔面疾患制御学分野、

⁴⁾大阪歯科大学歯科医学教育開発室

B-12 口腔保健学科臨床実習生における歯科麻酔関連用語の認知度

○神野成治、深山治久

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科麻酔・生体管理学分野

B-13 下顎孔伝達麻酔注射実習への新複合型トレーナー導入に対する有用性と教育効果

○工藤 勝、大桶華子、三浦美英

北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野

『歯科医師・教職員／リカレント・その他』

9:40～10:20 座長：羽村 章(日本歯科大学附属病院)

B-14 歯科研修医に対する嚥下内視鏡検査手技相互実習のためのシステム構築と被験者の心拍数の変動について

○長崎信一¹⁾、小川哲次²⁾、谷本啓二¹⁾

¹⁾広島大学大学院歯科放射線学、²⁾広島大学病院口腔総合診療科

B-15 大学における総合歯科の現状－第1報：組織構成と担当業務－

○藤井規孝、田口則宏、長谷川篤司、木尾哲朗、多田充裕、小川哲次、樋口勝規、伊藤孝訓

日本総合歯科協議会

B-16 大学における総合歯科の現状－第2報：臨床・教育・研究のテーマ（合意形成に向けて）－

○木尾哲朗、長谷川篤司、藤井規孝、田口則宏、多田充裕、小川哲次、樋口勝規、伊藤孝訓

日本総合歯科協議会

B-17 大学における総合歯科の現状－第3報：一般歯科医に関する諸外国での認識－

○多田充裕、藤井規孝、田口則宏、長谷川篤司、木尾哲朗、小川哲次、樋口勝規、伊藤孝訓

日本総合歯科協議会

12:00～13:00 ランチョンセミナーⅢ

協賛：(株)ジェイ・エム・エス

『新しい口腔機能検査「舌圧」を歯科医学教育に活かす』

津賀一弘（広島大学大学院医歯薬保健学研究院応用生命科学部門先端歯科補綴学 准教授）

C会場（3階 302室）

12:00～13:00 ランチョンセミナーⅣ 協賛：ノーベル・バイオケア・ジャパン(株)

『インプラントの歴史的変遷とこれからのインプラント教育への取り組み』

関根 浄治（島根大学医学部歯科口腔外科学講座・島根大学医学部附属病院顎顔面インプラントセンター 教授）

ポスター会場（3階 コンベンションセンター東）

9:30～15:50 ポスター発表（P-73～P-132）& 企業展示

※ポスター討論は 13:00～14:00 となります。

『卒前専門基礎教育／学習教材・学習ツール』

P-73 保存修復学基礎実習における問題志向型教材の開発—朝日大学と大阪歯科大学のコンボジットレジン修復トライアル—

○小竹宏朋¹⁾、堀田正人¹⁾、谷本啓彰²⁾、山本一世²⁾、泉川昌宣³⁾、斎藤隆史³⁾、高瀬保晶⁴⁾、米田雅裕⁵⁾、泉 利雄⁶⁾、廣藤卓雄⁷⁾、谷岡正行⁸⁾、新谷英章⁹⁾

¹⁾朝日大学歯学部歯科保存学分野歯冠修復学、²⁾大阪歯科大学歯科保存学講座、³⁾北海道医療大学歯学部う蝕制御治療学分野、⁴⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科、⁵⁾福岡歯科大学口腔医療センター、⁶⁾福岡歯科大学歯科保存学分野、⁷⁾福岡歯科大学総合歯科学分野、⁸⁾株式会社ニッシン、⁹⁾広島歯科技術専門学校

P-74 全部床義歯補綴学基礎実習における試作4倍大歯冠石膏模型を用いた削合実習の有効性について

○額 諭史、會田英紀、豊下祥史、河野 舞、川西克弥、会田康史、越野 寿
北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系咬合再建補綴学分野

P-75 歯冠彫刻実習における効果的な教材開発（その2）—鏡像模倣を応用した歯彫刻教材—

○谷内秀寿¹⁾、倉澤郁文²⁾、三溝恒幸³⁾、横井由紀子⁴⁾、大須賀直人⁴⁾、岡藤範正⁵⁾、金銅英二⁶⁾

¹⁾松本歯科大学歯学部入門歯科医学、²⁾松本歯科大学歯学部歯科補綴学講座、³⁾松本歯科大学病院歯科技工士室、⁴⁾松本歯科大学歯学部小児歯科学講座、⁵⁾松本歯科大学大学院硬組織疾患制御再建学講座、⁶⁾松本歯科大学歯学部口腔解剖学第一講座

P-76 マインドマップのハンドアウトへの応用

○仲谷 寛、大澤銀子
日本歯科大学附属病院

P-77 次世代型実習用統合模型「iDSim」の開発

○北村知昭¹⁾、西原達次¹⁾、細川隆司¹⁾、中島啓介¹⁾、富永和宏¹⁾、永松 浩¹⁾、中原孝洋¹⁾、兒玉正明¹⁾、正木千尋¹⁾、鷲尾絢子¹⁾、岩城重次²⁾、谷岡正行²⁾

¹⁾九州歯科大学、²⁾株式会社ニッシン

『卒前臨床実習／教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究』

P-78 平成 23 年度日本大学歯学部第 5 学年臨床実習における学生自験の調査結果について

○ 棧 淑行¹⁾²⁾、菅野直之¹⁾²⁾、本吉 満¹⁾²⁾、小池一喜¹⁾²⁾、見崎 徹¹⁾、黒川弘康¹⁾²⁾、
中島一郎¹⁾²⁾、大木秀郎¹⁾²⁾、前野正夫¹⁾²⁾

¹⁾ 日本大学歯学部、²⁾ 日本大学歯学部臨床実習運営協議会

P-79 医療面接スキルの使用頻度によるコミュニケーションスタイルの違いについて

○ 青木伸一郎¹⁾²⁾、梶本真澄¹⁾、大沢聖子¹⁾²⁾、多田充裕¹⁾²⁾、伊藤孝訓¹⁾²⁾

¹⁾ 日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、²⁾ 日本大学松戸歯学部口腔科学研究所

P-80 高齢社会を担う地域育成型歯学教育：専門教育終了時の授業アンケートから考察される教育効果

○ 藪内さつき、中江弘美、日野出大輔、竹内祐子、伊賀弘起、尾崎和美、羽田 勝、
白山靖彦、松山美和、吉岡昌美、中道敦子、星野由美、藤原奈津美、中野雅徳、
河野文昭、吉本勝彦

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

P-81 朝日大学歯学部臨床実習に関するアンケート調査 -2009 年度生から 2011 年度生までの比較-

○ 飯沼光生¹⁾、石神元¹⁾、吉田隆一¹⁾、倉知正和²⁾、横山貴紀¹⁾、関根源太¹⁾、
後藤昌彦¹⁾、安田順一¹⁾、羽田詩子¹⁾、田中四郎¹⁾、川崎馨嗣¹⁾、松岡正登¹⁾、
長谷川信乃¹⁾、石津恵津子¹⁾、大橋静江¹⁾、岩島広明¹⁾、大森俊和¹⁾、岡 俊男¹⁾、
都尾元宣¹⁾

¹⁾ 朝日大学歯学部臨床実習専門委員会、²⁾ 朝日大学歯科医学教育推進センター

P-82 歯科学士のジェンダーの違いによるコミュニケーションスタイルの違いについて

○ 梶本真澄、青木伸一郎、大沢聖子、岡本康裕、伊藤孝訓

日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座

『卒前教養的教育・卒前専門基礎教育・卒前臨床実習／PBL チュートリアル教育』

P-83 クラウンブリッジ補綴学での臨床実習における TBL の導入

○ 澤田智史、小田切 憲、星 憲幸、木本克彦

神奈川歯科大学顎口腔機能修復科学講座クラウンブリッジ補綴学分野

P-84 日本歯科大学生命歯学部第 5 年における PBL テュートリアルに対する学生の評価

○ 滑川初枝、横澤 茂、仲谷 寛、石田鉄光、大津光寛、鈴木淳子、足立雅利、伊藤菜穂、
千葉忠成、青木春美、沼部幸博

日本歯科大学生命歯学部教育開発委員会 PBL テュートリアル部会

P-85 学部連携 PBL チュートリアルによるチーム医療教育の効果 -その 1 質問紙の因子分析結果-

○ 鈴木久義¹⁾、片岡竜太²⁾、馬谷原光織²⁾、今福輪太郎³⁾、向井美恵²⁾、弘中祥司²⁾、
井上美津子²⁾、木内祐二⁴⁾

¹⁾ 昭和大学保健医療学部、²⁾ 昭和大学歯学部、³⁾ 香港大学教育学部、⁴⁾ 昭和大学薬学部

P-86 学部連携 PBL チュートリアルによるチーム医療教育の効果 その2 自由記述アンケート結果

○馬谷原光織¹⁾、片岡竜太¹⁾、鈴木久義²⁾、今福輪太郎³⁾、向井美恵⁴⁾、弘中祥司⁴⁾、井上美津子⁴⁾、木内祐二⁵⁾

¹⁾昭和大学歯学部歯学教育学、²⁾昭和大学保健医療学部、³⁾香港大学教育学部、

⁴⁾昭和大学歯学部、⁵⁾昭和大学薬学部

P-87 テキストマイニングを用いた共起ネットワーク分析による長崎大学成育歯学 PBL 授業の評価

○飯島静子¹⁾、丸山陽市²⁾、藤原 卓³⁾、吉田教明¹⁾

¹⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科歯科矯正学分野、²⁾長崎大学病院総合歯科矯正歯科室・医療情報室歯科分室、³⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野

P-88 歯学部初年次教育における PBL チュートリアルの3年間の実践とその評価

○田地 豪¹⁾、田口則宏²⁾、竹本俊伸¹⁾、玉本光弘¹⁾、宮内美和¹⁾、渡邊峰朗¹⁾、水田邦子¹⁾、上田 宏¹⁾、島津 篤¹⁾、小川哲次¹⁾、内田 隆¹⁾

¹⁾広島大学歯学部教務・入試ワーキンググループ教養ゼミサブワーキンググループ、

²⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻社会・行動医学講座歯科医学教育実践学分野

P-89 歯学部1年生における PBL テュートリアルの学習システム変更に対する学生の評価

○千葉忠成、青木春美、沼部幸博、田中とも子、松野智宣、富永徳子、柴田千晶、横澤 茂、大津光寛、仲谷 寛、石田鉄光

日本歯科大学生命歯学部教育開発委員会 PBL テュートリアル部会

『卒前教養的教育・その他／教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究』

P-90 日本歯科大学の初年次教育－新潟生命歯学部の取り組み「プロフェッション」が与えた学生の意識変化

○秋山麻美¹⁾、藤井一維¹⁾、阿部祐三²⁾、高田正典³⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院歯科麻酔・全身管理科、²⁾日本歯科大学新潟病院総合診療科、

³⁾日本歯科大学新潟病院口腔外科

P-91 日本歯科大学の初年次教育－生命歯学部の取り組み「情報リテラシー」における学生の意識変化

○高田清美¹⁾、新井一仁¹⁾、南雲 保¹⁾、宮坂平¹⁾、秋山仁志²⁾、高橋幸裕¹⁾、山瀬勝²⁾、河合泰輔¹⁾、宮下 渉²⁾、鹿野千賀²⁾、長谷川充²⁾

¹⁾日本歯科大学生命歯学部、²⁾日本歯科大学附属病院

P-92 第1学年ファンダメンタルスキル実習（コーチング）における情動指数（EQ）の推移

○二宮一智¹⁾、小野幸絵¹⁾、秋山麻美¹⁾、水橋 亮¹⁾、田中聖至²⁾、両角祐子²⁾、長谷川優²⁾、長田敬吾²⁾、藤井一維¹⁾、佐藤 聡²⁾、関本恒夫¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院、²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部

P-93 歯学部生の情報処理能力に関する調査

○小川和久、湯浅賢治

福岡歯科大学画像診断学分野

P-94 長崎大学歯学部生の進路に関する意識調査

○山辺芳久¹⁾²⁾、久保至誠²⁾

¹⁾長崎大学歯学部卒前・卒後歯学臨床教育担当、²⁾長崎大学病院医療教育開発センター

『臨床研修／シミュレーション教育』

P-95 歯科医師卒後臨床研修での AHA 公認 BLS コース受講に対する意識調査

○鈴木将之、笹尾真美、矢作保澄、湯浅茂平、高瀬英世、山口博康、河原 博、高水正明
鶴見大学

P-96 ヒト型患者ロボットシミュレーションシステム (SIMROID) を用いた補綴歯科研修, 第 4 報

○秋山仁志¹⁾、宇塚 聡²⁾、宮下 渉²⁾、原 節宏¹⁾、羽村 章¹⁾

¹⁾日本歯科大学附属病院総合診療科、²⁾日本歯科大学附属病院矯正歯科

『卒前教養的教育・専門基礎教育・臨床実習／少人数教育、シミュレーション教育』

P-97 日本歯科大学新潟病院第 5 学年臨床実習生における歯科技工科研修に関するアンケート調査

○小野幸絵¹⁾、海老原隆¹⁾、小澤 誠²⁾、阿部祐三¹⁾、關 秀明¹⁾、新井恭子³⁾、
永田和裕¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院総合診療科、²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第 2 講座、³⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第 1 講座

P-98 岡山大学におけるチーム基盤型学習(TBL)による歯科補綴学講義の試行

○原 哲也¹⁾、皆木省吾¹⁾、兒玉直紀¹⁾、吉田登志子²⁾、白嶋 章³⁾

¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野、²⁾岡山大学医療教育統合開発センター、³⁾株式会社 TERADA LENON.

P-99 人体解剖学実習におけるグループダイナミクス評価の検討 その 1

○野中直子¹⁾、中島 功¹⁾、片岡竜太²⁾、中村雅典¹⁾

¹⁾昭和大学歯学部口腔解剖学講座、²⁾昭和大学歯学部歯学医学教育推進室

P-100 トレーナーを導入した下顎孔伝達麻酔注射実習に対する学生の評価は学生相互実習の履修時期により変わるのか

○大桶華子、工藤 勝、三浦美英

北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野

P-101 学校歯科健康診断の記録および事後処置に関するシミュレーション自己学習支援ソフトの開発

○杉原直樹¹⁾、石塚洋一¹⁾、松久保 隆¹⁾、中野田紳一²⁾、山本 仁³⁾、河田英司³⁾

¹⁾東京歯科大学衛生学講座、²⁾(株)インサイドフィールド、³⁾東京歯科大学歯科医学教育開発センター

P-102 留学生をチューターとしたグループ学習による英語教育

○森尾郁子¹⁾、鶴田 潤¹⁾、川口陽子²⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野、²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科健康推進歯学分野

P-103 日本大学歯学部1・2年生の少人数教育における成績評価の課題

○酒井秀嗣、三枝 禎、佐藤紀子、田嶋倫雄、中野善夫、宮崎洋一、佐藤 恵、鈴木直人、
桑田文幸
日本大学歯学部

『卒前臨床実習・臨床研修／e-Learning & Distance Learning・FD：教育能力の向上、カリキュラムの開発・改善、組織の改善』

P-104 鹿児島大学病院歯科医師臨床研修における e-learning システム導入の試み

○岩下洋一朗¹⁾、河野博史²⁾、志野久美子²⁾、諏訪素子²⁾、松本祐子²⁾、吉田礼子²⁾、
田口則宏¹⁾²⁾

¹⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯科医学教育実践学分野、²⁾鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科総合診療部

P-105 当科における下顎孔伝達麻酔の相互実習時に発症した偶発症について

○山田 希¹⁾、秋山麻美²⁾、永合徹也¹⁾、藤井一維²⁾、佐野公人¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科麻酔学講座、²⁾日本歯科大学新潟病院歯科麻酔・全身管理科

P-106 歯科医学教育における禁煙指導・禁煙支援：系統的文献レビューとカリキュラム開発

○埴岡 隆¹⁾、花田信弘²⁾、稲葉大輔³⁾、小川祐司⁴⁾、尾崎哲則⁵⁾、小島美樹⁶⁾、
川口陽子⁷⁾、平田幸夫⁸⁾、柴原孝彦⁹⁾、森田 学¹⁰⁾、伊東隆利¹¹⁾

¹⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会福岡歯科大学、²⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会鶴見大学、³⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会岩手医科大学、⁴⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会新潟大学、⁵⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会日本大学、⁶⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会大阪大学、⁷⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会東京医科歯科大学、⁸⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会神奈川歯科大学、⁹⁾一般社団法人日本口腔外科学会脱タバコ社会実現委員会東京歯科大学、¹⁰⁾特定非営利活動法人日本歯周病学会健康サポート委員会岡山大学、¹¹⁾公益社団法人日本口腔インプラント学会医療・社会保険委員会伊東歯科口腔病院

P-107 臨床実習生に対する有床義歯補綴学のウェブ配信型学習の効果

○大久保昌和、宗 邦雄、井上正安、石井智浩、飯島守雄、河相安彦
日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学

『卒前専門基礎教育・その他／試験・e-Learning & Distance Learning・双方向授業』

P-108 歯科薬理学に関連した国家試験問題への対策に関する研究

○天野 均、龍 家圭、山田庄司
昭和大学歯学部

P-109 放射線学における画像診断試験と講義試験の比較検討

○関谷恵子、森進太郎、金田 隆
日本大学松戸歯学部放射線学講座

P-110 歯の3D映像とその教育応用について

○山崎洋介¹⁾、網干博文²⁾、磯川桂太郎¹⁾
¹⁾日本大学歯学部解剖学教室第2講座、²⁾日本大学歯学部法医学教室

P-111 歯科医師国家試験の在り方の研究 ―海外における歯科医師国家試験の現状―

○海老原新¹⁾、石村 瞳¹⁾、森田一三²⁾、武部 純³⁾、金村清孝³⁾、石橋寛二³⁾、
福田仁一⁴⁾、中垣晴男²⁾、末瀬一彦⁵⁾、須田英明¹⁾
¹⁾東京医科歯科大学、²⁾愛知学院大学、³⁾岩手医科大学、⁴⁾九州歯科大学、⁵⁾大阪歯
科大学

P-112 Moodleを用いた口腔外科のブレンデッド・ラーニングに対するアンケート調査

○住友伸一郎、倉知正和
朝日大学歯科医学教育推進センター

『卒前教養的教育・卒前専門基礎教育／汎用性能力（学士力）：コミュニケーション、倫理・態
度、クリティカルシンキング、リテラシー』

P-113 事例学習によるプロフェッショナリズム教育について考える

○小川哲次¹⁾、大林泰二²⁾、西 裕美¹⁾、小原 勝¹⁾、田中良治¹⁾、木尾哲朗³⁾、
大西弘高⁴⁾
¹⁾広島大学病院口腔総合診療科、²⁾広島大学大学院医歯薬学総合研究科、³⁾九州歯科大
学口腔機能科学専攻医療人間形成学講座総合診療学分野、⁴⁾東京大学医学教育国際協力
研究センター

P-114 大学学習法へのパフォーマンス評価の導入

○小野和宏¹⁾、井上 誠¹⁾、山村健介¹⁾、西山秀昌¹⁾、八木 稔¹⁾、
ステガロユ ロクサーナ¹⁾、重谷佳見¹⁾、前田健康¹⁾、高橋雄介²⁾、松下佳代²⁾
¹⁾新潟大学歯学部、²⁾京都大学高等教育研究開発推進センター

P-115 「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼ
す影響

○佐藤紀子
日本大学歯学部

P-116 日本大学松戸歯学部1年次生に対するプロフェッショナリズム醸成教育の試み

○大沢聖子¹⁾²⁾、青木伸一郎¹⁾²⁾、福本雅彦²⁾³⁾、伊藤孝訓¹⁾²⁾、牧村正治⁴⁾
¹⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、²⁾日本大学松戸歯学部口腔科学研究所、
³⁾日本大学松戸歯学部歯科臨床検査医学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学（歯
科医学教育学）講座

P-117 学生の人間関係に関する意識の変化 ―行動科学基礎演習における7年間の比較―

○礪波健一¹⁾、中村千賀子²⁾、梅森 幸¹⁾、新田 浩²⁾、俣木志朗²⁾
¹⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科総合診療部、²⁾東京医科歯科大学医歯学総合
研究科歯科医療行動科学分野

『卒前教養的教育・その他／歯科医療・口腔ケア・ヘルスプロモーション・早期体験実習』

- P-118 地域と商店街に最寄の歯科医院を中心としてデータ収集すると共に免疫力アップの教育を行っていく仕組み作り

○出井伸也

地域・商店街支援協会

- P-119 第1学年に行うファンダメンタルハンドスキル実習に関するアンケート調査

○五十嵐勝¹⁾、新海航一¹⁾、猪子芳美¹⁾、佐藤利英¹⁾、田中聖至¹⁾、春藤 勲²⁾、
圓山浩晃²⁾、藤井一維²⁾、関本恒夫²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学新潟病院

- P-120 医療機関で職場体験学習を行った中学生の意識調査

○長谷川優¹⁾、秋山麻美¹⁾、織田隆昭¹⁾、菅原佳広²⁾、小野幸絵²⁾、野田つかさ²⁾、
圓山浩晃²⁾、寺田員人¹⁾、関本恒夫²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学新潟病院

『臨床研修・大学院教育／その他』

- P-121 岡山大学病院の歯科医師卒後臨床研修前後における補綴臨床経験に関するアンケート調査

○兒玉直紀¹⁾、洲脇道弘²⁾、西川悟郎³⁾、原 哲也¹⁾、皆木省吾¹⁾

¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野、²⁾さながわ歯科クリニック、³⁾岡山大学病院咬合・義歯補綴科

- P-122 2012年度研修予定者への協力型施設情報の開示・歯科医師臨床研修医の聞き取り調査から-

○瀧田史子¹⁾、吉田隆一¹⁾、倉知正和²⁾、岡 俊男¹⁾、横山貴紀¹⁾、大橋静江¹⁾、
田邊俊一郎¹⁾、山田尚子¹⁾、長谷川信乃¹⁾、近藤亜子¹⁾、瀧谷佳晃¹⁾、北後光信¹⁾、
松岡正登¹⁾、安田順一¹⁾、松原 誠¹⁾

¹⁾朝日大学歯学部附属病院臨床研修委員会、²⁾朝日大学歯科医学教育推進センター

- P-123 臨床研修歯科医師に対する多面観察評価(360度評価)の検討

○後藤田宏也¹⁾、葛西一貴²⁾、五関たけみ²⁾、黒木俊一³⁾、牧村英樹⁴⁾、長濱文雄⁴⁾、
伊藤孝訓⁵⁾、和田守康⁴⁾、牧村正治⁶⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学講座、²⁾日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座、
³⁾日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、
⁵⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、⁶⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座

- P-124 東北大学大学院歯学研究科における歯学研究者育成プログラムの概要

○佐々木啓一、福本 敏

東北大学大学院歯学研究科

- P-125 **鶴見大学東日本大震災学生ボランティア活動における歯科関連プログラム**
 ○大蔵眞太郎¹⁾、太田杏奈²⁾、今泉直也³⁾、丸尾亮太³⁾、山根 明⁴⁾、前田伸子⁵⁾
¹⁾ 鶴見大学歯学部総合歯科 2、²⁾ 鶴見大学歯学部短期大学部歯科衛生科第 1 学年、
³⁾ 鶴見大学歯学部第 5 学年、⁴⁾ 鶴見大学歯学部物理学教室、⁵⁾ 鶴見大学歯学部口腔微生物学講座
- P-126 **東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修歯科医の実践ケース数と稼働額について**
 ○新田 浩¹⁾、鈴木允文²⁾、梅森 幸²⁾、礪波健一²⁾、湊田慎也³⁾、大山 篤⁴⁾、
 俣木志朗¹⁾
¹⁾ 東京医科歯科大学大学院歯科医療行動科学分野、²⁾ 東京医科歯科大学歯学部附属病院
 歯科総合診療部、³⁾ 神奈川歯科大学社会歯科学講座歯科医療社会学分野、⁴⁾ (株)神
 戸製鋼所東京本社健康管理センター
- 『臨床研修／教育研究手法：意識調査、ケース報告、量的研究、質的研究』
- P-127 **日本大学松戸歯学部付属病院の臨床研修歯科医のメンタルヘルスに関する検討**
 ○黒木俊一¹⁾、後藤田宏也²⁾、葛西一貴³⁾、五関たけみ³⁾、牧村英樹⁴⁾、長濱文雄⁴⁾、
 伊藤孝訓⁵⁾、和田守康⁴⁾、牧村正治⁶⁾
¹⁾ 日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学講座、²⁾ 日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学
 講座、³⁾ 日本大学松戸歯学部矯正学講座、⁴⁾ 日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、
⁵⁾ 日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、⁶⁾ 日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医
 学教育学)講座
- P-128 **日本大学歯学部付属歯科病院における女性研修歯科医の意識調査**
 ○齊藤邦子¹⁾、橋口亜希子²⁾、片山一郎¹⁾、紙本 篤¹⁾、関 啓介¹⁾、古地美佳¹⁾、
 升谷滋行³⁾
¹⁾ 日本大学歯学部付属歯科病院系卒直後研修分野、²⁾ 日本大学歯学部歯科補綴学教室
 III 講座、³⁾ 日本大学歯学部保存学教室修復学講座
- P-129 **女性研修歯科医の考える「理想の歯科医師像」**
 ○大塚恵理、河野隆幸、鈴木康司、白井 肇、鳥井康弘
 岡山大学病院総合歯科
- P-130 **POS を基盤とした臨床教育システムの効果に関する研究－第 5 報：研修歯科医による
症例報告**
 ○池田亜紀子、勝部直人、長谷川篤司
 昭和大学歯学部
- P-131 **研修歯科医自身が掲げた目標に対する自己評価**
 ○鬼塚千絵、木尾哲朗、喜多直子、永松 浩、喜多慎太郎、寺下正道
 九州歯科大学総合診療学分野
- P-132 **歯科医師臨床研修終了時における歯のシェードテイキングに関するアンケート**
 ○伊吹禎一、寶田 貫、角 義久、王丸寛美、増田啓太郎、津田緩子、浅田徹之介、
 樋口勝規
 九州大学病院口腔総合診療科

9:30～15:50 学生セッション（S-1～S-8）

※ポスター討論は 13:00～14:00 となります。

ポスター討論 座長：大住伴子（九州歯科大学）

S-1 東京医科歯科大学歯学部歯学科生の質変化に対する検討

○永野大樹

東京医科歯科大学歯学部歯学科

S-2 CT 画像を利用した歯の解剖学実習を受講して

○西原宏軌¹⁾、網干博文²⁾、山崎洋介³⁾、磯川桂太郎³⁾、新井嘉則⁴⁾、前野正夫⁵⁾、越川憲明⁶⁾

¹⁾ 日本大学歯学部第 3 学年、²⁾ 日本大学歯学部法医学教室、³⁾ 日本大学歯学部解剖学教室第 2 講座、⁴⁾ 日本大学歯学部、⁵⁾ 日本大学歯学部衛生学教室、⁶⁾ 日本大学歯学部薬理学教室

S-3 学習支援ボランティアにおけるリスクマネジメントの応用について

○丸尾亮太¹⁾、今泉直也¹⁾、西宮桃子¹⁾、石川達哉²⁾、伊藤崇弘¹⁾、太田杏奈³⁾、大蔵眞太郎⁴⁾、山根 明⁵⁾

¹⁾ 鶴見大学歯学部歯学科 5 年生、²⁾ 鶴見大学歯学部歯学科 2 年生、³⁾ 鶴見大学短期大学部歯科衛生科 2 年生、⁴⁾ 鶴見大学歯学部附属病院研修医、⁵⁾ 鶴見大学歯学部物理学教室

S-4 施設に入所している要介護高齢者の問題点を抽出するテュートリアル演習

○内田瑤子¹⁾、縄稚久美子²⁾、松香芳三²⁾、中島 隆²⁾、三木春奈²⁾、木村 彩²⁾、水口 一²⁾、新川重彦²⁾、瀧内博也²⁾、前川賢治²⁾、園山 亘²⁾、菊谷 武³⁾、窪木拓男²⁾

¹⁾ 岡山大学歯学部歯学科、²⁾ 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野、³⁾ 日本歯科附属病院口腔リハビリテーション科

ポスター討論 座長：影山幾男（日本歯科大学新潟生命歯学部）

S-5 診療室で行う総合模型実習の試み

○河上真緒¹⁾、杉本明日奈¹⁾、中川沙紀¹⁾、堀川絵理子¹⁾、河野文昭^{1) 2)}、吉本勝彦^{1) 3)}

¹⁾ 徳島大学歯学部歯学科、²⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部総合診療歯科学分野、³⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子薬理学分野

S-6 歯科医療界の国際化を目指して ―教育の場に求められること―

○小澤英里佳¹⁾、森尾郁子²⁾、鶴田 潤²⁾

¹⁾ 東京医科歯科大学歯学部歯学科、²⁾ 東京医科歯科大学教育開発学分野

S-7 私達が留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）プログラムに参加して得たもの

○坂本志保¹⁾、魚島勝美²⁾、宮崎秀夫²⁾、小野和宏²⁾、興地隆史²⁾、大内章嗣²⁾、前田健康²⁾

¹⁾ 新潟大学歯学部、²⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科

S-8 岡山大学歯学部における歯学国際交流演習（ODAPUS プログラム）参加報告

○杉浦嘉雄、松本 卓、西浦有沙、堀井宣秀、土佐郁恵、徳本佳奈、松岡絵理、高馬裕賀子
岡山大学歯学部歯学科

特別講演

7月20日(金) 11:00~12:00 A会場(コンベンションホール西)

モデル・コア・カリキュラムの改訂とそのポイント

講師：村田善則

文部科学省高等教育局医学教育課 課長

座長：松尾龍二

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
口腔生理学分野 教授

モデル・コア・カリキュラムの改訂とそのポイント



村田 善則

文部科学省高等教育局医学教育課 課長

歯学教育モデル・コア・カリキュラム(平成22年度改訂版)は平成23年3月31日に公表された。今回の改訂は、「歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」において提言された改訂の方向性に沿って行われた。具体的には、①歯科医師として必要な臨床能力の確保、②優れた歯科医師を養成する体系的な歯学教育の実施、③未来の歯科医療を拓く研究者の養成の3つの観点から検討し、さらに近年の歯学教育に対して社会から求められる事項及び全体の利便性向上に留意しつつ、改訂を行った。以下、具体的内容を概説する。

(1) 歯科医師として必要な臨床能力の確保

各大学における主体的で実効性のある教育が展開されるよう、冒頭に記載の「歯科医師として求められる基本的な資質」の記載内容を修正するとともに、臨床研修との一貫性にも留意し、臨床実習終了時(卒業時)までに、到達すべき総合的な診療能力の基礎としての知識・技能・態度に関する目標を明確にするための改訂を行った。

診療参加型臨床実習の充実のために、その前提となる診療技能の向上・確保について各大学の学生が卒業時に到達すべき目標を明確化した。従来前文に掲載されていた「臨床実習」に係る一般目標、到達目標を、モデル・コア・カリキュラム本体中に「**F 臨床実習**」の単独領域として新設し、診療参加型臨床実習における一般目標、到達目標を明確にした。

(2) 優れた歯科医師を養成する体系的な歯学教育の実施

冒頭に記載の「歯科医師として求められる基本的な資質」の記載内容を修正するとともに、安全で良質な歯科医療を提供できるように、口腔と全身の関わり、高齢者や全身疾患を有する患者等への対応、予防歯学、社会歯学など、医学・医療との連携を含めた幅広い歯学教育が行えるよう関連項目に係る記載内容の改善・充実を図った。

(3) 未来の歯科医療を拓く研究者の養成

前文において、学生の興味や将来の専門分野への志向に応じて、学生が自由に選択可能なプログラムを提供すること、研究室配属等をとおした科学的・論理的思考の修得や基礎研究や臨床研究を実施するため必要な基礎的訓練等、学部教育のあらゆる段階を通じて学生一人ひとりの研究志向の涵養に努めるべきことを記載し、「歯科医師として求められる基本的な資質」の記載内容を修正した。

この他、歯学教育に係る多様な社会的ニーズへの対応として、緊急性が高く歯科の関与により社会への貢献が大きいと考えられる内容について、モデル・コア・カリキュラム全体の量的抑制に留意しつつ改訂を行い、また利便性向上等の観点からも改訂した。

文部科学省としては引き続き、歯学教育を取り巻く問題に対して、各教育機関や関連省庁と連携しながら歯学教育の充実に努めていきたいと考えている。

略歴

1985年3月 早稲田大学法学部卒業

1985年4月 文部省入省

2000年7月 文部科学省高等局大学課
大学院振興企画官

2001年7月 (命) 同 大学改革官

2002年10月 同 〃 大学企画調整室長

2003年4月 文部科学省初中局企画官

2004年7月 文化庁記念物課長

2006年1月 文部科学省高等局学生支援課長

2008年7月 同 私学行政課長

2010年7月 厚生労働省医政局医事課長

2011年7月 文部科学省高等局医学教育課長

シンポジウム I

7月20日(金) 14:10~16:00 A会場(コンベンションホール西)

<テーマ>

「プロフェッショナリズムをどう育むか」

「プロフェッショナリズムとその教育」

宮田靖志

北海道大学病院地域医療指導医支援センター・
卒後臨床研修センター 准教授

「倫理から見たプロフェッショナリズム教育」

樫 則章

大阪歯科大学人権教育室 専任教授

「歯科から見たプロフェッショナリズム教育」

木尾哲朗

九州歯科大学医療人間形成学講座総合診療学分野 准教授

「社会から求められるプロフェッショナリズムとは」

山口育子

NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長

座長：小川哲次

広島大学病院口腔総合診療科 教授

鳥井康弘

岡山大学病院卒後臨床研修センター 教授

プロフェッショナルリズムとその教育

宮田 靖志

北海道大学病院地域医療指導医支援センター・
卒後臨床研修センター 特任准教授



生涯学習を含めた多くの医学教育カリキュラムにおいてプロフェッショナルリズムがアウトカムとして設定されており、近年、医療におけるプロフェッショナルリズムの重要性は益々強調されるようになってきている。これは、最近の医療技術の進歩、医療構造の変化、社会や患者の医療に対する意識の変化、医療者の職業意識の変化などにより、医療者と患者・社会との関係が以前と比べ大きく変化した結果と言える。

プロフェッショナルリズムの要素は、医療実践の場の文化やコンテキストによりある程度多様性があるが、その定義の基本は社会との契約という概念であり、よって公共の善のために尽くすことが真のプロフェッショナル、プロフェッションとされる。医療におけるプロフェッショナルリズムの定義に関する議論の一定の到達点として2002年に発表されたのが、“米欧合同医師憲章と医のプロフェッショナルリズム”であり、そこには3つの基本原則と10の責務が示されている。現在はこの定義を用いてプロフェッショナルリズム教育が行われることが多い。

プロフェッショナルリズム教育の議論は上記の定義が提案されて以降、方略や評価にその焦点が移ってきており、特にプロフェッショナルリズムを涵養するための様々な方略が多数報告されるようになってきている。これらの方略を考える上で重要なことは、プロフェッショナルリズムの認知的基礎を明示的に教えることと、知識を与えることだけではなく心に訴えかけるような体験から学ばせることであり、この両者を継続的に繰り返し行っていく必要がある。また、プロフェッショナルリズムの行動規範を教師が一方的に提示するような教育はその限界が指摘され、一部では物語に基づくプロフェッショナルリズム教育の試みが提案されている。ここでは、ロールモデルからの学び、自己の気づき、物語能力、コミュニティへの奉仕がその要素として取り上げられている。

これらのさまざまな方略において重要な鍵となるのは省察（振り返り）であり、プロフェッショナルリズムを育んでいくためには、個々の患者、社会と向き合う最前線の混沌とした実践の中で患者、社会への責任を体験しつつ、省察を繰り返して自己変容学習につなげることが重要であるとされる。このような実践を積んでいくことでプロフェッショナルリズムが涵養されると同時に、現在の複雑で混沌とした医療の最前線で求められる真のプロフェッショナル（専門家）像が創り上げられることになる。プロフェッショナルリズムを涵養し、プロフェッショナルを育成するため、教師には、相互批判のない安全な学習環境を用意し、ダイアログ（というコミュニケーション形式）を用いて協同学習をすることをファシリテートすることが求められる。

略歴

1988年 自治医科大学医学部卒業

1988年～1999年 愛媛県にて地域医療に従事

2000年 札幌医科大学助手

2004年 Harvard Medical School, Primary care& general Medicine 客員研究員

2006年 札幌医大助教授

2010年 北海道大学病院特任准教授

倫理から見たプロフェッショナリズム教育



梶 則章

大阪歯科大学人権教育室 専任教授

わが国の歯科医師職が、西洋の伝統的な意味でのプロフェッションであるかどうか、またそうであるべきかどうかは措くとして、歯科医師職がプロフェッションであるなら、歯科医師職には他の職に見られない義務がある。すなわち、その職を通じて人々（患者と社会一般）の福利を促進するという積極的な義務である。そもそもプロフェッションとはそのような義務を自ら引き受けるところに成立する職である。プロフェッションは単なる専門職ではない。人々が専門家に求める知識や技術が人々の切実で重大な利益に関わるものであり、しかもそうした知識や技術が習得に時間を要するきわめて高度なものであるために、人々はそうした知識や技術が専門家と称する人々によって本当に習得されているか否かの判断を当の専門家集団にゆだねざるをえず、しかしだからこそ、その専門家集団が自らを律し、自分たちの持つ知識や技術を間違っても乱用せず、人々のために使いますと誓ったところに一定の自律と権威とを認められたプロフェッションが成立するからである。

けれども歯科医師職の義務は人々の福利の促進だけではない。歯科医師職の義務は社会との契約だと言われることもあるが、社会は時代とともに変化するのであり、したがって歯科医師職の義務は静的に捉えられるべきものではなく、社会との継続的対話の産物として動的に捉えられるべきものである。その意味では、歯科医師職の義務は完全なものとはなりえないが、今日では、いわゆる生命倫理や医療倫理の4原則と呼ばれるものが歯科医師職においてもその義務を構成する主要な規範であると言ってよいだろう。

倫理（学）から見た今後のプロフェッショナリズム教育とは、プロフェッションとしての歯科医師職に内在する義務を明示して学生に自覚させるとともに、実際の診療の場で必要な倫理的判断をくだすことができるようにすることである。しかし、プロフェッションの一員としてのよき歯科医師の養成には、もちろん全学的な取り組みが必要であり、またそうした取り組みが「裏のカリキュラム」によって台無しにされることがないようにすることもたいへん重要なことだと考える。

略歴

1980年 大阪大学文学部卒業
1982年 大阪大学大学院文学研究科修士課程修了
1987年 大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
1987年 大阪歯科大学歯学部倫理学教室講師
1991年 大阪歯科大学歯学部倫理学教室助教授
2007年 大阪歯科大学歯学部倫理学教室准教授
2011年 大阪歯科大学歯学部人権教育室専任教授

歯科から見たプロフェッショナルリズム教育



木尾 哲朗

九州歯科大学医療人間形成学講座総合診療学分野 准教授

平成21年の第28回本学会学術大会(広島)のシンポジウムにおいて、「学士課程の professionalism, コミュニケーションの教育」と題して発表を行った¹⁾。そのシンポジウムでは欧州や米国の医学および歯科医学教育学会でのプロフェッショナルリズム教育の位置づけ、プロフェッショナルリズムの歴史的変遷、そしてプロフェッショナルリズムが注目されるようになった理由としての内的危機と外的危機について紹介した。そのシンポジウムがトリガーとなったのであろうが、この3年間で多くの医療系教員とプロフェッショナルリズム教育について議論する機会に恵まれた。意見の多くは、プロフェッショナルリズム教育は歯科医学の教育に必要なと思う、というものであった。しかし同様に多い意見としては、プロフェッショナルリズムと言う言葉が包含する意味や教育方法がよくわからない、というものであった。この点について佐藤 学氏はMIT名誉教授 Donald A. Schön の著した“The Reflective Practitioner”の和訳本「専門家の智慧」²⁾の訳者序文に次のように明確に述べている。

日本語の「専門家 (professional)」という用語は、同じ訳語があてられる「専門家 (specialist)」と混同されがちである。…(中略)…「専門家 (professional)」の意味を「スペシャリスト」と区別して理解するためには、欧米社会におけるこの言葉の語義と語感に即して認識する必要がある。

「専門家 (professional)」という言葉は、その語源において「神の宣託 (profess)」を受けた者を意味している。

今回のシンポジウムでは、演者の考える医療機関における日本版プロフェッショナルリズム教育の三層構造について触れ、さらに歯科医学教育機関で行われているプロフェッショナルリズム教育の実例とその問題点や注意点を提示し、我が国の歯科医学教育におけるプロフェッショナルリズム教育が今後どうあるべきか、どうするべきかについて検討を加えたい。本シンポジウムがプロフェッショナルリズム教育推進の一助になれば幸いである。

1) 森尾郁子 田口則宏 片岡竜太 木尾哲朗 池尾隆：高等教育のグローバル化への潮流と我が国の歯学士課程教育とのハーモニゼーション(調和)に向けて。

木尾哲朗「学士課程教育における Professionalism, コミュニケーションの教育」, 日教歯誌 26, 8-12, 2010.

2) Donald A. Schön. The Reflective Practitioner. How professionals think in action. (1983)

(佐藤学ほか訳 『専門家の智慧 反省的実践家は行為しながら考える』、ゆみる出版、2001年.)

略歴

1984年 福岡県立九州歯科大学卒業

1988年 福岡県立九州歯科大学大学院歯学研究科修了(歯科矯正学)

1988年 福岡県立九州歯科大学助手(歯科矯正学講座)

1989年 福岡県立九州歯科大学学長辞令講師

1998年 米国ワシントン大学

1998年 Visiting Professor (～99年)

2006年 公立大学法人九州歯科大学講師(総合診療学分野)

2009年 公立大学法人九州歯科大学准教授(総合診療学分野)

社会から求められるプロフェッショナルリズムとは



山口 育子

NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長

私たち NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML（以下、COML）は患者の自立と主体的な医療参加を目指し、医療現場におけるより良いコミュニケーションを求めて 1990 年から活動してきました。日常の活動の柱は電話相談で、これまでに 5 万件を超える患者・家族のなまの声が全国から届いています。

なかでも、歯科に関する相談は全体の 5%に及び、割合としては決して少ない数字ではないと受け止めています。とくに歯科にまつわる相談は長時間を要することが多く、誰にもわかってもらえない深い悩みや訴えなど、相談者の気持ちを受け止めながら耳を傾けています。“相談”ですから、歯科治療から受けた恩恵やプラス評価が届くことはほとんどありません。しかし、苦情や不満の中身を知り、なぜそのような結果になったのかを分析するなかから、患者が歯科治療に何を求め、どのような歯科医学教育が必要なのかのヒントがたくさん見つけれられるのではないかと考えています。

歯科関連の相談内容を大きく分類すると、①トラブルになっている問題、②歯科医療機関選び（探し）、③治療途中の転院問題、④本人の辛さと周りとのギャップです。とくに①はさらに「説明不足に関するもの」と「治療費に関するもの」に分類できます。

そのような相談に数多く対応するなかで、歯科医療に対して患者が悩みや不安、不満を抱く背景には、歯科独特の特殊性があるように感じています。口腔内を治療するため、口頭でのコミュニケーションが取りにくく、緊張を強いられがちです。上から見下ろされる威圧感から生じる精神的苦痛も生じやすいのだと思います。すなわち、日常のコミュニケーション手段が通用しにくいからこそ、患者満足が得にくく、不満も残りがちで、医療者の些細な言動に敏感になり、不安に陥りやすいという問題を抱えています。それだけに、いかに情報を共有し、コミュニケーションを豊かにしていくことが問われる現場なのだと思います。

患者——つまり社会が歯科医療に求めるプロフェッショナルリズムとは、やはり一番には確かな技術です。そして、検査や治療が始まる前の説明、ホスピタリティ（おもてなしの心）のある対応、きちんとした契約と治療費の説明、衛生面での配慮、プライバシー保護、役割の確率したチーム医療、などが患者の歯科医療に望む内容です。当日は具体的な相談内容をご紹介しますが、いま社会は歯科医療に何を求めているかをお伝えしたいと思います。

略歴

大阪市生まれ。

自らの患者体験から、患者の自立と主体的医療への必要性を痛感していた 1991 年 11 月 COML と出会う。活動趣旨に共感し、1992 年 2 月に COML のスタッフとなり、相談、編集、渉外などを担当。2002 年 4 月に法人化した NPO 法人ささえあい医療人権センター COML の専務理事兼事務局長となる。2011 年 8 月より現職。

<テーマ>

「多職種連携医療をいかに教育するか」

「医療から見た多職種連携の重要性について」

谷本光音

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科血液・腫瘍・呼吸器内科学講座 教授

「歯学部における多職種連携教育の実践例」

片岡竜太

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座歯学教育学分野 教授

「臨床研修における多職種連携教育の実践例」

曾我賢彦

岡山大学病院医療支援歯科治療部 助教

座長：恒石美登里

日本歯科医師会・日本歯科総合研究機構

高柴正悟

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野 教授

医療から見た多職種連携の重要性について



谷本 光音

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
血液・腫瘍・呼吸器内科学講座 教授

医療の高度化と普遍化に鑑みて多職種連携の推進は、これまで以上に望まれる時代にあり、そのためのチーム医療共育の重要性が唱えられている。

医学・医療の進展はより細分化した知識を医療者に求めるとともに、専門化した技術を持った医師の養成を必要としている。こうした知識・技能の修得には益々膨大な時間とコストがかかることが予想され、またこれらの目的に合致した適切な教育プログラムを個々の医療人育成のために用意することに限界があるのも事実である。その一方医療現場においては、医師と一緒に医療行為を支える診療サポーターの導入が近年積極的に図られてきている。こうした方向性に添って今後の医療人材育成を共通した基盤カリキュラムで行うことはこれからの時代の要請に合致していると考えられる。

また医療の普遍化の推進では、様々な医療の標準化と数多くの診療マニュアルやガイドライン等の普及とにより、医療レベルの向上と医療の均霑化とが図られている。IT環境の普及などもこうしたエビデンスに基づく医療の実践への追い風となっている。

さらに現在のチーム医療においては、医師とともに、歯科医師・看護師・薬剤師・栄養士・理学療法士・放射線技師・検査技師に加えて、歯科衛生士・精神福祉士・社会福祉士・臨床心理士さらには病院クランクなどの事務職員やボランティアまで様々な役割を担う人々が参加して協同で活動し、また将来の人材育成の場としても機能しようとしている。

私が専門としているがん診療の現場では、近年がん診療の均霑化の活動の一環として、多職種参加のカンファレンスでの情報共有、スタッフ一体となった診断・治療方針の決定、さらには治療効果のアセスメントと患者さんへのフィードバックなど、一連の多職種連携のプロセスを積極的に導入したことによって確実に診療とケアの質の向上に繋がってきている。

実際の経験と事例に基づいて、医療の側から見た多職種連携の重要性につき提示し、共育の実際について紹介させていただきたい。

略歴

1977年 名古屋大学医学部卒業

1981年 名古屋大学大学院修了（医学博士）

1990年 名古屋大学第一内科助手

1997年 名古屋大学第一内科講師

2001年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科血液・腫瘍・呼吸器内科教授

2007年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科血液・腫瘍・呼吸器内科教授

2011年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科研究科長

歯学部における多職種連携教育の実践例



片岡 竜太

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座歯学教育学分野 教授

医・歯・薬・保健医療学部(看護学科、理学療法学科、作業療法学科)からなる医系総合大学の昭和大学では、大学の教育理念に「学部の枠を越えてともに学び、互いに理解し合え、協力できる人材を育成する」ことを明記し、チーム医療に積極的に貢献できる医療人の養成を目的に、全学部、全学年(1学年約600人)にわたる体系的、段階的な学部連携教育を導入している。

1年次は山梨県にある富士吉田キャンパスで4学部学生を一緒にした全寮制教育を行ない、2年次以降は東京のキャンパスで4学部と8つの大学附属病院が併置された環境で各学部の学生と教員の学部間交流を日常的に行っている。

多職種連携教育としての学部連携教育は低学年ではチーム医療の基盤作りとして、大学内外での体験実習(早期体験実習など)や問題解決型学習(PBLチュートリアル)。医歯薬3年次と4年次には、学部連携PBLチュートリアル、5年次には4学部6学科の学生グループ(4~6人)がのべ120病棟で1人の患者を1週間受け持つ学部連携病棟実習を必修として実施する。6年次には学部連携アドバンスド病院実習と地域医療実習を選択実習として実施している。

本歯学部では、チーム医療に積極的に従事して国民の健康に貢献できるオーラルフィジシャン(口腔科医)の資質を有する歯科医師を養成するために、6年一環の「口腔医学」教育に力を入れている。そのなかで、多職種連携教育の効果を高めるに、A.医療コミュニケーション、B.歯学生の情報リテラシー、C.ヒトの病気、D.全身疾患と口腔内科などの授業を行っている。

A.医療コミュニケーション：初年次に医療コミュニケーション入門を4学部合同で学ぶ。2年次には歯科医療コミュニケーション入門を学び、高齢者施設実習で実践する。3年次に医療面接の基礎を学び、4年次に全身疾患を有する模擬患者と1対1で医療面接を行い、全身疾患に対する理解を深めるとともに、コミュニケーション能力を高める。

B.歯学生の情報リテラシー：本学では初年次からPBLなどの能動学習を推進して、生涯学習ができる医療人を養成している。そのために信頼できる情報を入手して活用する「情報リテラシー」能力が必須であるので、初年次の基礎から、演習を通じて、学年ごとに段階的に基礎から上級まで情報リテラシー能力を高める。

C.ヒトの病気：医療人としての基礎的医学知識と安全に歯科医療を実践するための医学的知識を身につけるために、3年次に「ヒトの病気A」を、4年次に「ヒトの病気B」を学ぶ。「ヒトの病気A、B」の実習として、「大学附属病院病棟体験実習」と基礎疾患を有する模擬患者に対して「全身の医療面接」を行う。

D.全身疾患と口腔内科：基礎疾患がある患者に対して、歯科医療を行う際のリスク診断を行えるようにするために、歯科診療上重要な全身疾患の病因・病態と診断・治療を学ぶ。また、口腔内科的な疾患(顎関節症、舌痛症、口腔乾燥症、口腔顔面痛など)へ対応できるようにするために、その診断と治療について理解する。

本講演では昭和大学歯学部におけるこれらの教育の実践とその成果を紹介する。

略歴

1985年 昭和大学歯学部卒業

1989年 昭和大学大学院歯学研究科顎顔面外科学専攻卒業

1989年 昭和大学歯学部第1口腔外科学教室助手

1994年 米国ノースカロライナ大学顎顔面センター客員研究員

1996年 米国ノースカロライナ大学顎顔面センター Research Associate

2000年 昭和大学歯学部口腔外科学教室講師

2008年 昭和大学歯科医学教育推進室長准教授

2011年 昭和大学歯学部歯学教育学教授

現在に至る

臨床研修における多職種連携教育の実践例



曾我 賢彦

岡山大学病院医療支援歯科治療部 助教・副部長

チーム医療が我が国の医療の在り方を変え得るキーワードとして注目を集めている。岡山大学病院は2011年に病院医療支援を目的とした口腔の専門診療部、すなわち「医療支援歯科治療部」を開設した。医科で展開される医療に必要な口腔内の管理・治療を幅広く機動的に行い、かつ歯学が培ってきた専門性を発揮させるべく歯科系各専門診療科の専門医等とのコーディネートを行うことが目的である。医療支援歯科治療部を拠点として、多くの歯科医師が移植医療（造血幹細胞移植、肝移植、腎移植、肺移植等）やがん手術・放射線・化学療法治療などにおける口腔内の管理を積極的に行っている。

この治療部で医科歯科連携の実務の多くを統括する私は、多職種連携の専門的な教育を受けた経験がない。しかし、歯科医師として駆け出しのころに始まり今も続く、血液内科医と看護師等の病棟スタッフとの連携の経験、そして略歴に示すハンセン病療養所の小さな医局で自然派生的に生まれ、経験した、医科と歯科の壁のない多職種連携の経験などが未熟な私を教育してくれた。歯科医師には、エビデンスを伴った歯科医学知識はもちろんのこと、全身的な医学的知識、チーム医療を問題なく行なうための他職種との人間関係の構築能力、そして心理面でのサポート能力や、場合によっては死に直面している患者に向き合うにあたり、患者の死生観に至る哲学的な理解までもが要求されると感じた。知識とともに、全人的で豊かな人間性をもった、医療に一石を投じることができる歯科医師が世に求められる。時代に即した教育カリキュラムの変化が必要であると感じさせられた。

医療支援歯科治療部は、歯科医師臨床研修において多職種連携教育を実践する絶好の場となり得る。そこで、2012年度から卒後臨床研修センター歯科研修部門とともに、歯科研修医がチーム医療の中における歯科医師の役割について学び、実践するための教育プログラムを開始した。本院で展開される様々なチーム医療に研修歯科医師をその一員として可能な範囲で参画させている。私が経験したように、多職種連携医療で医療人としての自覚をもたせる機会を提供するとともに、歯科医療の幅を広げる若手歯科医師の育成のきっかけになればと考えている。

まだ試行錯誤の段階であるが、臨床研修における多職種連携教育の実践例をお示ししたい。多職種連携医療教育の在り方について、議論のきっかけとなれば幸いである。

略歴

1998年 岡山大学歯学部卒業

2002年 岡山大学大学院歯学研究科修了博士(歯学)

2002年 岡山大学歯学部附属病院医員(第二保存科)

2003年 国立療養所邑久光明園厚生労働技官歯科医師

2007年 国立療養所邑久光明園厚生労働技官歯科医長

2008年 岡山大学医学部・歯学部附属病院(現 岡山大学病院)歯周科助教

2008年 岡山大学医学部・歯学部附属病院(現 岡山大学病院)周術期管理センター歯科部門部門長兼任

2010年 日本学術振興会特定国派遣研究者(オランダ)

(ライデン大学メディカルセンター, Academic Centre for Dentistry in Amsterdam)

2011年 岡山大学病院中央診療施設 医療支援歯科治療部副部長・助教

現在に至る

<テーマ>

「医療人を育てる新たな学習法～チーム基盤型学習（TBL）」

「チーム基盤型学習（TBL とは）」

瀬尾宏美

高知大学医学部附属病院総合診療部 教授

「歯学部における TBL の実践例」

槻木恵一

神奈川歯科大学歯学部顎顔面診断科学講座病理学分野 主任教授

「薬学一年次学生を対象とした、 薬学実務体験実習と組み合わせたTBLの実践」

野呂瀬崇彦

北海道薬科大学薬事管理学分野 准教授

座長：伊藤孝訓

日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座 教授

吉田登志子

岡山大学医療教育統合開発センター 助教

チーム基盤型学習（TBL）とは



瀬尾 宏美

高知大学医学部附属病院総合診療部 教授

“From Sage on the Stage to Guide on the Side（教壇の聖人から傍らのガイドへ）” —以前は教壇に立つ教員が学生に向かってシャワーのように知識を浴びせる授業が一般的でした。しかし増え続ける医療分野の知識を習得させるには従来型の授業では限界があり、問題解決型の小グループ学習法（Problem-based learning, PBL）が導入されてきました。学生は小グループで学習と討論を繰り返しながら問題解決をはかり、知識だけでなく「学び方」を学びます。教員は学生の傍らで議論のガイド役に徹します。

ところがPBLでは一度に多数の教員（ファシリテーター）が必要となり、またファシリテーターとしての教員のモチベーションを維持することも容易ではありません。このようにPBLの運営は大変なため、多くの大学で規模を縮小する傾向にあります。そこで「少ない教員で多数の学生に効果的な学習を促す方法」として1980年ごろ米国で開発されたチーム基盤型学習（Team-based Learning, TBL）が注目されるようになりました。全米でも多くの医学部や医療系学部が導入し、日本でも医学部や看護学部などで導入が始まっています。

TBLでは学生が5～7人程度の小グループによるチームを編成します。100人のクラスなら大教室に15程度の「島」ができます。TBLの授業は3つの段階（フェーズ）に沿って進められます。(1)フェーズ1は予習で、学生は予め与えられた学習資料で予習し、基礎知識を備えてから授業に臨みます。(2)フェーズ2では予習が十分であるかを試験で確認します。まず学生一人ひとりが試験問題に取り組み、答案提出後に同じ試験問題をチームで討論しながら解答します。チームの解答はその場で正答が示され採点されます。その場で正答を示すことで適切なフィードバックを与え、誤りを速やかに修正できます。(3)フェーズ3ではチームで応用問題に取り組みます。そして全チームが一斉に成果物を発表します。一斉発表により他チームの成果と比較することができます。

このようなステップを踏んで実施されるTBLのクラスは活気に溢れ、チームは結束力を強め、その結果、高い学習効果が期待できます。担当教員も自分の専門性を発揮し、やりがいのある授業を展開することが可能です。今後、日本でも導入がすすみ、その成果が検証されることを期待しています。

略歴

1984年 高知医科大学医学部医学科卒業
1984年 高知医科大学老年病科循環器科入局
1987年 国立循環器病センターレジデント
1990年 高知医科大学老年病科循環器科助手
1992年 ロンドン大学セントジョージ病院リサーチフェロー
1994年（復職）
1999年 高知医科大学総合診療部助教授
2004年 高知大学医学部総合診療部教授

【その他の役職】

医学教育部門長・卒後臨床研修センター長

【専門領域】

医学教育・総合診療・内科学

歯学部におけるTBLの実践例



梶木 恵一

神奈川歯科大学歯学部顎顔面診断科学講座病理学分野 主任教授

近年、受験者数減少や歯科医師国家試験合格率の低下、さらに熟練教員の不足など、私立歯科大学を取り巻く環境は極めて厳しくなっている。特にこれらの要因を充分検討し、よりよい新しい教育プログラムを構築することが必要不可欠となっている。演者は、Team-based learning TBL（チーム基盤型学習）の教育方略に興味を持ち、その原法の essence を生かしながら、本学の状況を考慮し modified した TBL を実践してきた。本講演では、病理学分野における modified TBL の実践例を報告するとともに、歯学部における TBL の有効性についても考察したい。

本分野では、病理学実習に平成 21 年度より TBL を導入し、平成 23 年度より本格実施を図った。具体的には TBL 原法の 6 つの step を模倣し、以下のように行った：1. 予習→2. 準備小テスト（国家試験形式の 5 択問題）→3. 各班（6 名）に別れ小テストの解答をチームで作成→グループとしての解答提出→4. アピール（問題の解答理由をチームより発表）→5. 解説と講義→6. 病理診断を検討する症例問題（顕微鏡使用）。TBL 実習教員は 1 名（梶木）で担当した。この過程で最も問題となった点は、予習不足が顕著なことから相互評価を学生が積極的に行わないということである。また、チームにおける各自の責任感も充分でないように思われた。以上の点を考慮し、原法の利点を生かしながら TBL を一部改変し導入している。主な改変点は、十分な予習効果を期待できないので、事前に配布する資料や教科書などの教材を実習に持ち込み可とした。さらに、1-5 の step に対して実習時間（1 回 225 分）の半分程度を配分した。アンケート調査では、TBL は好意的に受け止められ、教育的波及効果のある方法論であると認識されていた。また、平成 22 年度では従来型の顕微鏡実習班と TBL 班の 2 班（各 60 名）に分け、実習共通試験について成績分析を行い実習の効果を検討した。尚、顕微鏡班は 3 名の常勤教員と 2 名の大学院生が担当した。成績分析では、TBL 班と顕微鏡班の 2 班の平均値に有意差は無く、教員数だけみれば効率的な教育方略であることが示唆された。この理由として、TBL はチームを基盤とすることで、個人作業が主の顕微鏡観察実習より、能動的な相互学習がはかれたためと思われる。また、能動的に考えた後に講義があることから講義内容の理解がスムーズであり、知識が定着しやすいなどの効果が成績に反映したと考えられ、本分野で行った modified TBL の有効性が示唆された。

チーム基盤型学習は極めて有効な教育方略であり、この考え方を様々な教育現場で状況に応じて取り入れることにより、教育効果を向上させることができる可能性を秘めていると考えられる。

略歴

1993 年 神奈川歯科大学歯学部卒業

1997 年 神奈川歯科大学大学院歯学研究科修了歯学博士

2007 年 神奈川歯科大学歯学部顎顔面診断科学講座病理学分野および同大学院
歯学研究科口腔病理学講座主任教授

2011 年 神奈川歯科大学大学院歯学研究科歯科基礎系専攻長

2012 年 神奈川歯科大学大学院歯学研究科環境病理学講座（講座名変更）主任教授

薬学一年次学生を対象とした、 薬学実務体験実習と組み合わせたTBLの実践



野呂瀬 崇彦

北海道薬科大学薬事管理学分野 准教授

平成18年度より薬学教育は、臨床に携わる薬剤師を養成する6年制課程と、創薬開発研究者を養成する4年制課程が並立する新課程に移行した。6年制課程は、日本薬剤師会により作成された薬学教育モデルコアカリキュラム、実務実習モデルコアカリキュラムに沿って構築され、薬物療法はもとより、ヒューマニズムやコミュニケーション等臨床現場で求められるより高度な臨床能力を身につけるためのプログラムが各大学で展開されている。一方で、少子化による全入時代に加え近年の薬学部新設ラッシュにより、多くの薬科系大学は、基礎学力はもとより薬剤師となることへのモチベーションに関しても多様な背景をもつ新入生を迎えている。

北海道薬科大学ではこうした状況に対応するために、平成21年度より1年次後期に「薬剤師実務体験実習」（必修30時間/10日間）を開講している。本実習は薬剤師の実務において必要とされる計算能力、コミュニケーション能力を身につけるとともに、これらの能力が実務上どのように意味づけされるのかを体験を通じて学ぶことを目的としている。学習項目として「散剤調剤」「液剤調剤」「輸液調製」「栄養計算」「コミュニケーション」の5つを掲げ、このうちコミュニケーションを除く4項目は計算演習と実務体験実習を組み合わせ実施している。本実習において扱う薬学計算は、処方箋に基づく秤量計算や濃度計算、浸透圧計算等、高校レベルの化学を習得していれば十分に対応可能なものではあるが、学生により理解度に大きな隔たりがあり、大教室スタイルの講義では対応は困難である。そこで計算演習においてTBLを導入することにより、予習および演習時間内の相互学習による計算能力の底上げを図っている。さらに計算演習に続いて実施される薬剤師実務体験（散剤調剤、液剤調剤、無菌室における輸液の調製等）により、自分たちが習得した薬学計算技術やその背景となる化学、生物学、物理学の知識が、薬剤師実務とどのように結びつくのかを理解できるように構成している。

本実習終了後の授業アンケートより、学生は相互学習の有用性を体感していること、薬剤師実務と基礎科目や計算能力がとの結びつきを理解していることが伺える。さらに、本実習を通じて薬剤師の業務がより明確にイメージできるようになり、モチベーションが向上した学生も見られる。一方で学生間の相互評価についてはその有用性に疑問を持つ声もあり、方法について検討を重ねる必要がある。これらの実績を踏まえ、今後は他学年の科目についても統合型協働学習を志向した授業を展開していきたい。

略歴

1991年3月 北海道大学薬学部 製薬化学科卒業

1992年8月 Economics Institute (Boulder, Colorado) 修了

1994年5月 University of Colorado at Denver Graduate school of Business Administration 修了
Master of Business Administration（経営管理学修士）取得

1994年7月～2002年10月

株式会社ツルハ 管理薬剤師、エイリアマネジャー

2002年11月～2003年12月

株式会社吉岡経営センター 医業経営コンサルタント

2004年1月～現在

マネジメント・パートナーズ主宰 研修講師、経営コンサルタント

2006年4月～2008年3月

北海道薬科大学 社会薬学分野 講師

2008年4月～現在

現職（FD小委員会委員長、学生部主任、国際交流委員会委員）

ランチョンセミナー

ランチョンセミナーⅠ

7月20日(金) 12:00~13:00 B会場 (3階 301室)

「歯科医学教育における東洋医学教育の重要 —患者様の漢方薬への声を日本歯科医学教育学会に—」

王 宝禮

大阪歯科大学歯科医学教育開発室 教授

共催：(株)タキザワ漢方廠

ランチョンセミナーⅡ

7月20日(金) 12:00~13:00 C会場 (3階 302室)

「Er:YAG レーザーによるう蝕除去実習とその評価」

半田慶介

北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系

う蝕制御治療学分野 講師

共催：(株)モリタ

ランチョンセミナーⅢ

7月21日(土) 12:00~13:00 B会場 (3階 301室)

「新しい口腔機能検査「舌圧」を歯科医学教育に活かす」

津賀一弘

広島大学大学院医歯薬保健学研究院

応用生命科学部門先端歯科補綴学 准教授

共催：(株)ジェイ・エム・エス

ランチョンセミナーⅣ

7月21日(土) 12:00~13:00 C会場 (3階 302室)

「インプラントの歴史的変遷とこれからのインプラント教育への取り組み」

関根浄治

島根大学医学部歯科口腔外科学講座

島根大学医学部附属病院顎顔面インプラントセンター 教授

共催：ノーベル・バイオケア・ジャパン(株)

歯科医学教育における東洋医学教育の重要 —患者様の漢方薬への声を日本歯科医学教育学会に—



王 宝禮

大阪歯科大学歯科医学教育開発室 教授

歯科医療の現場では従来からの外科的な補綴、保存、矯正の治療以外に、喉の渇き、舌や口内の痛み、味覚の異常、口臭を訴える患者様が増加傾向であり、これらの疾患には西洋医学だけでは対応できないことは周知の事実です。また、これらの症状は、医科と歯科の狭間で、時として患者様が行き場のない疾患とも考えられます。これまで、私達の臨床研究チームは西洋医学と漢方医学が融合した口腔内科的な医療で、これらの疾患に対応してきました¹⁾。

一方、医科の臨床現場では、現在90%以上の医師が漢方を処方することから、医学部における東洋医学教育の充実が急務で、日本医学会や日本医師会は積極的に教育に関与し、近年、医学部や薬学部教育には「東洋医学教育」の教育コアカリキュラムが導入され、大学教育の現場で東洋医学が指導されています。

最近のトピックスとして、平成24年度4月1日発行の日本歯科医師会発行の「薬価基準による歯科薬剤点数表」にわが国で初めて漢方薬の項目が導入され、口内炎、口渇、抜歯後疼痛、歯周病に対して7種の漢方薬が列挙されました。この背景には、歯科医療における漢方薬のニーズの現れと考えられます。現在、全国の歯科医師から、私のところに、漢方薬の投薬法に関する、数多くの問い合わせが届きました。特に、漢方薬は、西洋医学と違い「証」という概念で処方されていきます。このようなことから、歯科大学における歯科医療に必要な漢方医学教育を充実するためにも、本学会の役割は大きいはずです。さらに、東洋医学は歯科医療の領域拡大や、医科大生同様に歯科大生にも夢を与える学問でもあります。

今回は、歯科医学教育における東洋医学教育の重要性に関して、調査研究による、わが国の歯科大学の漢方医学教育の現状報告²⁻³⁾、ならびに歯学部附属大学病院および医学部附属病院口腔外科で口腔疾患に処方されている漢方薬の紹介⁴⁻⁵⁾と、口腔漢方医学における基礎、臨床研究⁶⁻⁷⁾をご紹介します。

参考文献

- 1) 王 宝禮: 医科歯科連携による東洋医学診療の現状と未来: 口腔領域における漢方の適応を考える. 日本東洋医学雑誌, 62:285-290, 2010.
- 2) 亀山敦史、王 宝禮: わが国の医・歯・薬学部における東洋医学教育—第1報実施状況とカリキュラム中での位置づけ—. 日本歯科東洋医学会誌, 27:15-22, 2008.
- 3) 亀山敦史、王 宝禮: わが国の医・歯・薬学部における東洋医学教育—第2報教育と臨床応用の現状から見た今後の展望—. 日本歯科東洋医学会誌, 28:14-18, 2009.
- 4) 砂川正隆、王 宝禮: 歯科口腔外科における漢方薬の使用状況—大学病院における使用実態調査—. 日本歯科東洋医学会誌, 29:15-23, 2010.
- 5) 砂川正隆、王 宝禮: 一般歯科における漢方薬の使用実態調査. 日本歯科東洋医学会誌, 30:8-17, 2011.
- 6) 瀧沢 努、王 宝禮: 高速液体クロマトグラフィーによる漢方エキス製剤と煎薬の成分比較研究. 日本歯科東洋医学会誌, 29:24-27, 2010.
- 7) 王 宝禮: 口腔疾患に有効な漢方薬を科学する—西洋医学と東洋医学を融合する口腔医療を目指して—日本歯科医師会雑誌, 64: 19-29, 2012.

略歴

1986年 北海道医療大学歯学部卒業
 1990年 北海道大学歯学部予防歯科学講座助手
 1992-94年 米国フロリダ大学歯学部口腔生物学講座研究員
 1995-2002年 大阪歯科大学薬理学講座講師
 2002-2010年 松本歯科大学歯科薬理学講座教授・附属病院口腔内科担当
 2010年— 大阪歯科大学歯科医学教育開発室教授

日本東洋医学会監事、日本歯科東洋医学会指導医、日本歯科薬物療法学会漢方 EBM 委員会委員長、日本口腔内科学研究会会長、オゾン医療研究会副会長、日本口腔サプリメント研究会顧問

Er:YAG レーザーによるう蝕除去実習とその評価

半田慶介

北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系
う蝕制御治療学分野 講師

北海道医療大学では、1987年に全国に先駆け pre-clinical training (PCT) system (モリタ製作所) を構築し、シミュレーション教育を開始しました。その後2006年には、マルチメディア臨床基礎実習室およびマルチメディア臨床シミュレーション実習室 (モリタ製作所) を整備して、現在、臨床基礎実習はもちろんのこと、臨床実習、さらに臨床研修歯科医の自己学習と幅広くシミュレーション教育を展開しています。本実習設備を利用して効果的なシミュレーション教育を実施するために、これまで私たちはさまざまな模型開発および教育法の導入を行ってきました。そのなかで今回は歯科用レーザーによるう蝕除去実習について紹介したいと思います。

歯科用レーザーによる「う蝕歯無痛の窩洞形成法」が保険導入されて以来、レーザーが日常臨床で利用される機会がますます増加しています。歯科医師にレーザーに関する正確な知識・技術が求められているにもかかわらず、学生実習にレーザーを導入している歯学部・歯科大学は少なく、レーザーに関する教育が十分に行われているとは言えないのが現状です。そこで、Er:YAG レーザー (アーウィン アドベール Evo ; モリタ製作所) を用いたう蝕除去実習を第6学年臨床実習に導入することにより、歯科用レーザーに関する知識、操作法およびう蝕除去技能を効果的に学生に習得させることが可能となりました。

本教育システムは、私たちが6年前から実習に導入しているミニマルインターベンション (MI) の概念に立脚したう蝕治療実習用人工歯「う蝕検知液可染性う蝕付人工歯 (ニッシン)」を用いるのが特徴です。さらに、三次元窩洞評価システム (モリタ製作所) によるレーザー切削窩洞形態の評価法を確立することにより、効率的な学生の技能習熟度評価が可能となったことがもう一つの特徴です。

本ランチョンセミナーでは、Er:YAG レーザーによるう蝕除去実習教育内容の詳細および実習導入による教育効果等について紹介したいと思います。

略歴

1999年 神奈川歯科大学卒業
2003年 神奈川歯科大学大学院修了 博士 (歯学)
2003年 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント (国立がんセンター研究所ウイルス部)
2006年 北海道医療大学歯学部助手
2006年 北海道医療大学歯学部講師
(現在に至る)

インプラントの歴史的変遷とこれからのインプラント教育への取り組み



関根 浄治

島根大学医学部歯科口腔外科学講座

島根大学医学部附属病院顎顔面インプラントセンター 教授

1960年初頭にBrånemarkによって提唱されたosseointegrationの概念とその口腔領域への応用は、いまや欠損補綴のオプションとして世界中で受け入れられている。

私がインプラント治療を始めたのは1990年である。当時は、メーカー主催の4日間のコースを受講しないと手術機器も購入できない時代であった。しかし、one dayコースが主流となり、手術器具もメーカー貸し出しで、販売実績を追求するメーカーもあったと記憶している。

インプラント治療の成功には3つの鍵がある。まず第1は、患者さんの全身状態の把握である。全身状態を適切に診断し、それがインプラントの成功にいかに関与を及ぼすかを診査しなくてはならない。現病歴、既往歴にはじまり、患者さんの精神状態、性格・人格、生活習慣、さらには経済状態を把握することも必須である。

第2の鍵は、外科・補綴の基本手技を守ることである。埋入に用いるインプラントの特性を熟知し、なおかつ埋入部位の骨質と骨量を正確に診断し、適切なドリリングテクニックを駆使して、十分な初期固定を得ることが大切である。

第3の鍵は、術後管理である。術直後の管理、適切な荷重負荷、さらに長期的な経過観察を通して、患者さんと永くお付き合いしなければならない。

以上の3点の不履行は、インプラント治療のリスクファクターとなる。しかし、私はインプラント治療の最も重篤なリスクファクターは<術者>だと考える。すなわち、術者の知識・技術・人格である。したがって、インプラント治療に携わる歯科医師には、われわれが適切な教育を施す必要がある。

かつての機械研磨されたフィクスチャーでは、Osseointegrationには数ヶ月を要した。しかし、フィクスチャーの改良により、現在では埋入後即時荷重が主流となってきた。Osseointegrationの意味を熟知せず、さらに清潔下の外科操作・咬合理論に基づいた上部構造の設計なしに、ただ雑誌等の情報等を鵜呑みにすると取り返しのつかないことになる。

本ランチョンセミナーでは、まず骨結合型インプラントの表面素材と形状の歴史的変遷を理解いただいたうえで、本題である<これからのインプラント教育に必要なこと>を概説する。また、全国の歯科大学でのインプラント教育の現況についても、渉猟し得た範囲で紹介したい。

略歴

1989年3月 福岡歯科大学卒

1989年4月 福岡歯科大学大学院（口腔解剖学専攻）

1990年8月 同大学院中退

1990年9月 長崎大学歯学部附属病院第2口腔外科研修医

1991年4月 長崎大学歯学部口腔外科学第2講座助手

1996年6月 長崎大学より歯学博士号授与（乙30号）

1999年9月 長崎大学歯学部附属病院第2口腔外科講師

2002年4月 長崎大学大学院講師

（医歯薬学総合研究科発生分化機能再建学講座・顎口腔機能再建学分野）

2005年7月 長崎大学医学部・歯学部附属病院経営企画部副部長

2006年9月～2007年5月 スウェーデンUmeå大学顎顔面口腔外科客員教授

2007年6月 島根大学医学部歯科口腔外科学講座教授

新しい口腔機能検査「舌圧」を歯科医学教育に活かす



津賀一弘

広島大学大学院医歯薬保健学研究院

応用生命科学部門先端歯科補綴学 准教授

超高齢社会を迎えた現代日本では、「生きがいを支える国民歯科会議」からの提言（平成22年11月3日、日本歯科医師会HP掲載）にもあるように、歯科医療は「暮らしの中で、食生活を維持し、患者の生きがいを支える医療へと発展していくこと」が望まれており、「地域における全人的医療の一翼を担い、様々な職種と協働し、新しい医療提供体制を創る先導的役割を担うこと」が期待されています。

さらに近年、折角歯科治療が奏功しながらも、加齢や脳血管障害などの全身疾患が口腔の運動機能不全や廃用性機能低下をもたらす場合が増えているように思います。その際、適切な食事指導が行われず過度に柔らかい食品が提供されれば、口腔機能の廃用をさらに助長するのみならず、咀嚼による歯肉や歯根膜への刺激の低下、唾液分泌の低下によりう蝕や歯周疾患などの感染症を再発・再燃させる可能性もあるでしょう。医科による経口以外の栄養補給（胃瘻など）が全身状態の回復に役立っている一方、再び食べる機能・喜びを取り戻すためのリハビリテーションへの歯科の関わり、あるいはそれが難しい場合の医科歯科連携の勘所は、まだ十分確立されていませんし、この方面の教育は緒に就いたばかりと言えるのではないのでしょうか。

発展が遅れた原因の一つとして、従来の歯科が口腔機能に関わる解剖学的・神経生理学的要因の複雑性・総合性を重視するあまり、逆に単純な動作の定量検査開発が遅れ、臨床や教育の現場で使える簡便な機能検査があまり無かったことが挙げられるのではないかと思います。そこで私たちは、舌が単純な動作で発揮する力として「舌圧」を定義し、口腔機能の一つの要因としてこの舌圧を簡便に検査・評価する方法の開発を目指し、小型風船形状でディスプレイの口腔内プローブを用いる測定装置を試作しました。以来、積極的に装置と情報を提供して他大学・施設の先生方の協力をいただいて改良とデータ収集に努めた結果、各年代の標準値を確立し、食事形態・ADLや全身状態と関係についても複数の研究機関から報告されるようになりました。

この試作測定装置の性能を継承し、医療機器としての安全性を確保して製造承認を受けた「JMS 舌圧測定器」が漸く昨年3月より上市され、その真価を皆様に問うとともに、さらに多くの方々によって医科と歯科の連携に役立てていただくことを期待しております。

本セミナーでは、舌圧測定の特長と限界、歯科医学教育や連携医療での役割、将来への展望を述べさせていただきます、皆様のご批判を仰ぎたいと考えております。

略歴

-
- 1985年 広島大学歯学部卒業
 - 1989年 広島大学大学院歯学研究科修了、歯学博士
 - 1989年 広島大学歯学部助手（歯科補綴学第一講座）
 - 1991年 国家公務員等共済組合連合会広島記念病院広島合同庁舎診療所歯科医師
 - 1993年 広島大学歯学部助手（歯科補綴学第一講座）
 - 1994年 広島大学歯学部附属病院講師（第一補綴科）
 - 1995年 文部省在外研究員（スウェーデン王国・イエテボリ大学）出張
 - 2000年 日本顎関節学会指導医
 - 2002年 広島大学大学院医歯薬学総合研究科助教授（顎口腔頸部医科学講座）
 - 2003年 日本補綴歯科学会指導医

7 月 20 日（金） 9:10～10:45 A 会場（コンベンションホール西）

A-1 ～ A-3 9:10～10:40
A-4 ～ A-6 10:40～11:10
A-7 ～ A-9 11:10～11:40

7 月 20 日（金） 9:10～10:45 B 会場（301 室）

B-1 ～ B-3 9:10～10:40
B-4 ～ B-6 10:40～11:10
B-7 ～ B-9 11:10～11:40

7 月 21 日（土） 9:00～10:20 A 会場（コンベンションホール西）

A-10 ～ A-13 9:00～9:40
A-14 ～ A-17 9:40～10:20

7 月 21 日（土） 9:00～10:20 B 会場（301 室）

B-10 ～ B-13 9:00～9:40
B-14 ～ B-17 9:40～10:20

CT画像を併用した歯科解剖学教育と社会貢献 (第2報)

○高橋常男¹⁾, 森山浩志²⁾, 小林 繁³⁾, 熊坂さつき⁴⁾

¹⁾神奈川歯科大学, ²⁾昭和大学医学部, ³⁾九州歯科大学, ⁴⁾駒澤大学

Dental anatomy education and contribution to society using a CT image together (Part 2)

○Takahashi Tsuneo¹⁾, Moriyama Hiroshi²⁾, Kobayashi Shigeru³⁾, Kumasaka Satsuki⁴⁾

¹⁾Kanagawa Dental College, ²⁾Showa University School of Medicine, ³⁾Kyushu Dental College, ⁴⁾Komazawa University

平成21年、神奈川歯科大学解剖実習棟内に遺体専用4列マルチスライスX線CT装置(Asteion S4)を設置した。現在、解剖前に撮影したCTスライス画像、3次元構築画像と実際の解剖を併用し、直視と3次元画像の複合情報によって人体構造をより深く理解させるための理想的教育法を模索している。平成24年9月から初めて解剖実習で運用する予定で、実用化に向けたシミュレーションを検討した。解剖体の撮影は、基本的には固定前、スライス厚は1～5mmで全身CT撮影を行ったが、適正スライス厚の確定、固定前後のCT画像の相違、死後変化との関係も含めて検討課題が多い。目下スライス厚は研究用として1mm、診断用として3mmスライスとした。画像診断は放射線科医と連携して行ない、歯科学的視点で、全身解剖学教育に関係する項目を解剖前画像情報として提供した。また固定前と固

定後における画像変化が読影に及ぼす影響については、還流固定の速度、固定液の事前脱気の程度も関係している可能性が大きい。注入後画像では、血管内ガス所見で、特に胸・腹部内臓の読影は困難であった。現在、頭頸部実習手技に従って、3次元再構築画像教材を開発しているところであるが実習前にデジタル画像で、顔輪郭を確認、脂肪層の厚さの確認、口腔周囲の顔面筋を確認・除去、咬筋の筋膜、浅・深層部、側頭筋筋膜・筋の除去、咬筋と頬骨弓の切除、筋突起の除去、内外翼突筋・側頭筋を栄養する顎動脈の枝など、下顎枝部・翼突筋部・翼口蓋窩部における各枝を確認し、十分立体的に深部構造を理解した後で(デジタルダイセクション)、実際のダイセクションを行うといった、解剖実習の予習・復習におけるデジタルダイセクションの可能性を提言したい。

HakePlotによる教育効果および学習力評価の可能性

○田中忠芳¹⁾, 王 宝禮²⁾, 宮沢裕夫³⁾

¹⁾松本歯科大学歯学部, ²⁾大阪歯科大学歯科医学教育開発室, ³⁾日本大学松戸歯学部

A Possibility of Evaluating Educational Effects and Learning Ability by Hake Plot

○Tanaka Tadayoshi¹⁾, Wang Pao-Li²⁾, Miyazawa Hiroo³⁾

¹⁾Dept. of Mathematics & Physics, Matsumoto Dental University, ²⁾Dept. of Innovation in Dental Education, Osaka Dental University,

³⁾Nihon University School of Dentistry at Matsudo

HakePlotを用いることにより教育力の評価が可能である。本報では、信頼性が担保された設問群の正答率推移を用いること

により、履修項目ごとの教育効果、学生個々の学習力評価において、HakePlotが有効であることを報告する。

TBL (チーム基盤学習) の実践に必要な 5P システムの確立

○葛城啓彰

日本歯科大学新潟生命歯学部微生物学講座

Erection of five P system for practice of team-based learning

○Katsuragi Hiroaki

Department of Microbiology, School of Life Dentistry at Niigata, Nippon Dental University

【目 的】

現行カリキュラムの中で講義から TBL に移行するための準備と計画立案およびその実践の概要を報告する。

【対象と方法】

日本歯科大学新潟生命歯学部第2 学年79 名を対象とし、感染微生物学(前学期 12 回、後学期 12 回)の講義を対象とし、前学期は一斉講義(プレテスト・ポストテスト併用)、後学期に TBL を実施し比較検討した。また、TBL 終了後に学生アンケートを実施した。

後学期 TBL の導入に際しては、学生に Preparation (予習ノート作成)、Pretest (IRAT, GRAT)、Product (ツリーマップ作成)、Peer Review (学習後の同僚評価)、Portfolio (予習ノートのポートフォリオ) の 5P システムの実施と、後学期の評価は TBL の形成的評価 (50%) と後学期本試験 (MCQ) の総括評価 (50%) で行うことを説明し、同意を得た。TBL を実施するに当たり学生を感染微生物の前学期成績順に均等に 6-7 名ずつ 12 グループに

分割し、実施場所も教室から実習室に変更した。シラバスの到達目標、授業予定については一切の変更はない。後学期 TBL 終了後、出欠状況、講義支援システムアクセス状況、評価について前学期と比較検討した。

【結果および考察】

出欠状況は平均 96% で有意差は認められなかったが、TBL では寝ている学生は認められなかった。講義支援システムへのアクセス状況は、前期 6.3 ± 13.2 人、後期 24.5 ± 33.9 人と有意に増加した。前期・後期本試験では、再試験者該当者は、前期の 18 名から後学期に 2 名に減少した。学生アンケートの結果では、TBL は楽しいと感じているものの講義より負担が多い、予習により知識の共有ができるが、グループにより差があるとの意見が寄せられた。今回の 5P システムでは、対象が低学年であったため、Product にツリーマップをグループで作成させたが、学年が進展すれば、より高度な問題解決 (Problem-solving) も可能になると考えられる。

医療面接スキルに対するバーチャルペーシエントシステムの有効性

○菅沼岳史¹⁾、螺澤庸博¹⁾、小野康寛¹⁾、鈴木泰山²⁾、八木 豊²⁾、馬谷原光織³⁾、片岡竜太³⁾、宮崎 隆⁴⁾、中村陽介⁵⁾、三上浩司⁵⁾、馬場一美¹⁾

¹⁾昭和大学歯学部歯科補綴学講座、²⁾株式会社ピコラボ、³⁾昭和大学歯学部歯学教育推進室、⁴⁾昭和大学歯学部歯科理工学講座、⁵⁾東京工科大学クリエイティブラボ

Effect of virtual patient system on medical interview skill

○Suganuma Takeshi¹⁾、Kaizawa Nobuhiro¹⁾、Ono Yasuhiro¹⁾、Suzuki Taizan²⁾、Yagi Yutaka²⁾、Mayahara Mituori³⁾、

Kataoka Ryuuta³⁾、Miyazaki Takashi⁴⁾、Nakamura Yosuke⁵⁾、Mikami Kouji⁵⁾、Baba Kazuyoshi¹⁾

¹⁾Showa University School of Dentistry Department of Prosthodontics、²⁾Picolab Co., Ltd.、³⁾Showa University School of Dentistry Dental Medicine Education unit、⁴⁾Showa University School of Dentistry Oral Biomaterial and Technology、⁵⁾Tokyo University of Technology Creative Lab

【目 的】

我々は南カリフォルニア大学歯学部と共同で最新のバーチャルリアリティーテクノロジーを用いた仮想患者 (VP: Virtual Patient) システムを構築し、本学の歯学教育へ導入し、第 29、30 回学術大会においてその概要について報告した。本システムは Web 上の仮想空間に設定されるため、学習者が時間的・空間的制約を受けず、自律応答性の VP を対象として医療面接から診断までの一連の臨床判断の過程を学習する機会を提供するものである。今回は、グラフィックユーザーインターフェイスの改良を行った最新版の VP システムの概要を紹介しその教育効果について報告する。

【方 法】

本学におけるこれまでの運用実績から、VP システムの教育効果を以下の方法で検討した。対象は、本学歯学部学生 191 名で、VP システムを経験していない VP 未経験群 100 名 (平成 19 年入学) と VP システムを 3 年後期と 4 年前期の補綴基礎

実習期間内に 2 症例を経験した VP 学習経験群 91 名 (平成 20 年入学) とした。いずれの群も 4 年後期に標準模擬患者 (SP: Standardized Patient) を用いて医療面接実習を行い、面接の過程とコンテンツについての評価結果を両群で比較した。

【結果と考察】

SP に対する医療面接の教員評価の総得点は、VP 未経験群が 66.3 ± 15.5 点 (100 点換算)、VP 経験群が 75.9 ± 13.6 点であり、VP 経験群が有意に高い得点となった ($p < 0.01$)。面接のコンテンツを比較すると、主訴に関連した項目について両者に差は認められなかったが、歯科的既往歴や全身的既往歴に関連する項目では VP 未経験群で情報聴取内容が不十分であった。以上より医療面接に必要なコンテンツを確実に聴取するスキルを向上する上での VP の有効性が示された。今後、さらに学習態度・意欲への影響、臨床判断能力を培う上での教育効果の検証を進めて行く予定である。

共用試験歯学系 OSCE 参加後の模擬患者の気持ち

○内川喜盛¹⁾, 大澤銀子¹⁾, 北原和樹²⁾, 池田利恵²⁾, 石川結子¹⁾, 井出吉昭²⁾, 織田総一郎²⁾, 菊池憲一郎²⁾, 横山大一郎²⁾, 安田麻子²⁾, 北村和夫¹⁾
¹⁾日本歯科大学附属病院, ²⁾日本歯科大学生命歯学部

Feelings of standardized patients after participating in the OSCE common achievement test for dental education

○Uchikawa Yoshimori¹⁾, Ohsawa Ginko¹⁾, Kitahara Kazuki²⁾, Ikeda Rie²⁾, Ishikawa Yuiko¹⁾, Ide Yoshiaki²⁾, Oda Souichirou²⁾, Kikuchi Kenichirou²⁾, Yokoyama Daiichirou²⁾, Yasuda Asako²⁾, Kitamura Kazuo¹⁾
¹⁾Nippon Dental University Hospital, ²⁾Nippon Dental University School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

模擬患者(以下SP)は医療コミュニケーション教育およびOSCEにおける有効な人的資源として活用され、益々その必要性が増している。しかし、教育に参加している大半のSPは満足感を持って活動している一方で負担を感じている、との報告もなされている。さらに、OSCEに参加するSPは演技、評価に高い標準化を求められその負担感も大きいと考えられる。

そこで、日本歯科大学生命歯学部におけるSP活動において、より良い環境を提供できるよう、本学の共用試験歯学系 OSCE への参加直後のSPの意識調査を行ったので報告する。

【対象と方法】

本学の平成 21 年から 24 年の共用試験歯学系 OSCE 初診時医療面接課題に参加したSP、延べ 51 名を対象として、OSCE 終了直後に質問紙調査を行った。調査内容は、練習会の「回数」「内容・方法」について、当日の「演技」「評価」についての自己採点、「疲労度」、「ストレス度」、「満足度」、その他「試験環境」等とした。練習会、試験環境についてはレーティングスケールを

用い、その他の項目はVASスケールにて0～100に数値化した後、統計処理を行った。

【結 果】

参加直後のSPの満足度は平均 76.3 (± 17.6) で、多くのSPが高い満足度を示し、演技、評価の自己評価との関連性が認められた。疲労度、ストレス度の平均値はそれぞれ 42.3 と 37.5 で比較的低い値を示し、満足度との関連性は認められなかった。一方、低い満足度を示したグループは、自己評価が低く、その理由として練習とシナリオ内容との関連性が認められた。

【考 察】

共用試験歯学系 OSCE 参加後の多くのSPは高い満足感を持っていたが、一方で自分の演技、評価の不安から自責しているSPがいることが推察され、終了後にSPへのケアが必要であることが考えられた。SPがOSCEにおいて安定した演技、評価をすることは終了後の高い満足感につながり、そのために適切なシナリオの作成と効果的な練習会の実施が重要であることが示唆された。

歯科学生における医療面接のスキル評価

○音琴淳一¹⁾, 安東信行¹⁾, 岡藤範正²⁾, 藤井健男²⁾, 横井由紀子³⁾
¹⁾松本歯科大学教育学習支援センター, ²⁾松本歯科大学病院総合診療室, ³⁾松本歯科大学小児歯科学講座

Evaluation of Medical Communication's Skill of Dental Student during Medical Interview Course in the Undergraduate Program

○Otogoto Jun-ichi¹⁾, Andoh Nobuyuki¹⁾, Okafuji Norimasa²⁾, Fujii Tateo²⁾, Yokoi Yukiko³⁾
¹⁾Department of Educational Excellence in Dentistry, Matsumoto Denbel University, ²⁾School of Dentistry, Department of Interdisciplinary Dentistry, Matsumoto Dental University Hospital, ³⁾Department of Pediatric Dentistry, Matsumoto Denbel University, School of Dentistry

【目 的】

本学カリキュラムにおいては第五学年に開始される臨床実習前に第三学年における講義・実習ならびに第四学年における講義・実習が行われている。今回は、第三学年・第四学年における医療コミュニケーション・医療面接スキルの変化を確認するために、講義における知識の習得とそれに伴うならびに実習におけるスキル変化を客観的に評価した。

【対象者および方法】

1) 対象者：平成 20-23 年度に第三学年と第四学年のカリキュラムを履修した学生計 186 名とした。その中に 2 回目の学習者が居る場合には対象を除外した。2) 知識レベルの確認方法：毎週の講義後に行われる weekly test ならびに定期試験においてコミュニケーションならびに医療面接に必要なと思われる用語を選択し、正答率を用語ならびに個人毎に算出し、第三学年と第四学年における比較を行った。3) 態度や技能評価：医療コミュニケーションならびに医療面接実習を行うに際し、スキル評価を

行う際のシートに臨床経験 5 年以上の指導歯科医ならびに学生がそれぞれ評価を行った。プロセス評価の変化を評価項目ならびに個人毎に算出し、第三学年および第四学年における比較を行った。さらにコンテンツ評価については、前記 2) 知識レベルの確認方法としてデータを算出し、統計学的分析を行った。4) 評価スキル：全項目で示した実習における学生の相互評価を指導歯科医との評価が分かれた部分について、その傾向を調査した。

【結 果】

1) 知識レベルは第三学年から第四学年において有意に上昇しているが、語彙の意味合いが広い「解釈モデル」についての理解度の大きな変化を認めなかった。2) 態度および技能レベルは有意に上昇している項目が多かったが、「共感」については上昇している対象者と変化がない対象者に大きく分かれ、それが全体のスキルと相関を認めた。3) 評価スキルについては、学年毎に大きな変化を認めなかった。

一口腔単位での問題発見・解決能力の涵養を目的とした治療方針立案演習

○秋葉陽介、加来 賢、秋葉奈美、長澤麻沙子、魚島勝美
新潟大学大学院医歯学総合研究科

New educational program for full mouth treatment planning aimed to develop the ability of case-based problem solving

○Akiba Yosuke, Kaku Masaru, Akiba Nami, Nagasawa Masako, Uoshima Katsumi
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

【緒 言】

良質な歯科医療の提供には優れた治療技術のみならず豊富な知識と経験に基づく正確な診断と患者に合った適切な治療方針・計画の立案が不可欠である。本学では特色ある大学教育支援プログラム「学生主体の三位一体新歯学教育課程」をはじめとした教育システムの改善を進めてきた。臨床教育においては1・2年次の早期臨床実習に始まり、5年次には統合型PBL(課題探求型学習法)によって問題解決能力の養成、診断能力の育成向上を図ると共に、総合模型実習では臨床現場や学生の思考過程に基づいた統合的な実習を実施している。また6年次には参加実践型の臨床実習を行っている。しかし、学生がこれらの実習の中で接することのできる症例数には限りがあり、治療技術は習得できても、実際の患者の口腔内状態を正確に分析、診断し、一口腔単位での治療方針・計画を立案する機会は十分とはいえない。

【目 的】

今回設定した演習(臨床歯学演習)は、臨床実習の補完演習とし

て6年時に行い、治療計画の立案能力養成を目的として実施した。

【方 法】

実際の患者より抽出したモデルケースを対象に、歯科的データを学生に提供し、資料を基に学生が問題点の抽出および治療方針・計画立案を行い、各分野の専門家が治療方針と計画の妥当性を評価、助言した後、学生が再度立案を行うこととした。演習効果について演習終了後に学生とアドバイザーに各項目5段階評価と自由記載によるアンケート形式による調査を行った。

【結果と考察】

アンケート結果から、本演習の学習効果に関して学生、アドバイザー双方から良好な評価が得られた。しかし、演習の難易度、評価方法、実習時間、資源については改善の余地があることが示された。現在これらを改良した演習を企画、準備中である。本演習を通して治療計画立案の基礎を習得し、治療方針と計画の多様性に触れること、および臨床研修における包括的診療実践能力の獲得を期待した。

臨床実習生が考える歯科医師の資質

○永松 浩、木尾哲朗、鬼塚千絵、喜多慎太郎、寺下正道
九州歯科大学

Competence of dentist that a clinical trainee thinks about

○Nagamatsu Hiroshi, Konoo Tetsuro, Onizuka Chie, Kita Shintaro, Terashita Masamichi
Kyushu Dental College

【目 的】

近年、日本においても歯科医学におけるプロフェッショナルリズム教育の必要性が認識されてきている。昨年シンポジウム「歯学士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築」を企画し、多くの反響を得た。今回、臨床実習生が歯科医師の資質に関して討論した内容を分析し、若干の知見を得たので報告する。

【方 法】

対象は登院実習開始直後の九州歯科大学平成23年度臨床実習生80名である。5名ずつに分かれSGDを行った。討論テーマは平成22年度改訂のモデルコアカリキュラムにある「歯科医師として求められる基本的な資質」の8項目、すなわち①歯科医師としての職責②患者中心の視点③コミュニケーション能力④チーム医療⑤総合的診療能力⑥地域医療⑦研究志向⑧自己研鑽についてである。各項目の具体的なイメージを列挙させ、分析した。

【結 果】

臨床実習生が考える歯科医師の資質として以下のことが挙げら

れた。①謙虚であり、常に学び続け、傲慢ではなく、怠けてはいけない。②患者の意思を尊重し、インフォームドコンセントを徹底し、医師の都合にあわせず、患者の個人情報を出ささない。③共感的な態度をとり、わかりやく説明し、批判的態度を取らず、専門用語を用いない。④チームの一員であることを自覚し、スタッフとコミュニケーションをとり、過信せず、自己中心的な行動をとらない。⑤歯科分野にとらわれない総合的知識を持ち、コミュニケーション能力を高め、全身疾患と結び付けて考える。⑥他の医療機関と連携を取り、地域と交流を図り、利己主義に走らない。⑦常に向上心を持ち、疑問点を持ち、自分の知識に満足せず、臨床にだけ偏らない。⑧継続的に学習し、意欲をなくさず、自己満足に陥らない。

【考 察】

登院実習開始直後の実習生の意識は多岐にわたることが分かった。らせん型教育の観点から、今後継続的に時期を変え分析を行い、プロフェッショナルリズム教育の一助としたい。

歯学部卒前臨床実習に対する国民の意識調査

○大山 篤¹⁾²⁾、新田 浩³⁾、大原里子⁴⁾、小田 茂⁴⁾、秀島雅之⁴⁾、塩沢育己²⁾、荒木孝二⁵⁾、俣本志朗³⁾

¹⁾神戸製鋼所東京本社健康管理センター、²⁾東京医科歯科大学歯学部、³⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科、⁴⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院、⁵⁾東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

The survey on people's attitudes toward undergraduate clinical training for dental students

○Ohyama Atsushi¹⁾²⁾、Nitta Hiroshi³⁾、Ohara Satoko⁴⁾、Oda Shigeru⁴⁾、Hideshima Masayuki⁴⁾、Shiozawa Ikumi²⁾、Araki Kouji⁵⁾、Mataki Shiro³⁾

¹⁾Healthcare Center, Tokyo Head Office, Kobe Steel, Ltd., ²⁾Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University, ³⁾Graduate School, Tokyo Medical and Dental University, ⁴⁾University Hospital, Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University, ⁵⁾Center for Education Research in Medicine and Dentistry, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

東京医科歯科大学歯学部歯学科では、患者の協力を得て診療参加型臨床実習を行っている。近年、東京医科歯科大学歯学部附属病院に来院される患者は、必要な診療内容などが学生の診療レベルを超えることも多く、協力をお願いすることが難しい場合もある。今後、診療参加型臨床実習を継続するうえで、卒前臨床実習に対する国民の意識調査を行うことは意義があると考えられる。

本研究では、東京 23 区内に居住するインターネット・リサーチの登録モニターに対して、歯学部学生の臨床実習に関する意識調査を実施することを目的とした。

【方 法】

歯学部学生の臨床実習に関するインターネット・リサーチを 2012 年 1 月 19-20 日に実施した。インターネット・リサーチでは、対象となるモニターにメールで調査への回答を依頼し、依頼されたモニターはメールに記載されたリンクから調査票にア

クセスして回答を行った。回答者は東京 23 区内に居住するインターネット・リサーチの登録モニター 620 名であった。調査では、国民が歯科治療に通院可能な時間帯、大学病院で学生の臨床実習を行っていることを知っているか、臨床実習に協力してくれる意志があるかどうか、臨床実習終了時の臨床能力試験は必要と考えるかどうか、などの質問について回答を得た。

【結 果】

回答者が歯科治療に通院可能と回答した時間帯は、土曜日の 9-12 時が 60.8% で最も多く、ついで日曜日の 9-12 時が 54.2% であり、平日は 9-12 時が 40.6% で最も多かった。また、大学病院で臨床実習を行っていることを知っているのは 66.3% であり、臨床実習に協力してくれる意志については、5 段階の回答で「協力したい」「どちらかといえば協力したい」がそれぞれ 7.1%、21.5% であった。さらに、臨床実習終了時の臨床能力試験は 93.2% が必要だと考えていた。

留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)プログラムによる歯学部学生の海外派遣

○魚島勝美、宮崎秀夫、小野和宏、興地隆史、大内章嗣、前田健康
新潟大学大学院医歯学総合研究科

The Outcome of Short Stay/Short Visit Program under which We Sent Out Our Dental Students Abroad

○UOSHIMA KATSUMI, MIYAZAKI HIDEO, ONO KAZUHIRO, OKIJI TAKASHI, OHUCHI AKITSUGU, MAEDA TAKAYASU
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

本学歯学部は、平成 23 年度から日本学生支援機構が事業として開始した留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)プログラムの 1 次・2 次募集に応募して採択された。本学が申請したプログラム名は 1 次募集時が「国際相互理解による口腔保健医療人材育成プログラム」で、2 次募集時が「海外交流による口腔保健医療教育プログラム」である。本事業による支援を受けて、平成 23 年度に合計 24 名の歯学部学生を海外に派遣し、20 名の学生を海外から招聘した。今回は本学のプログラム実施概要を報告し、一連の歯学教育の流れの中での意義について考察したい。

本学学生の訪問先はインドネシア、タイ、スリランカ、メキシコ、台湾の 8 大学と広範囲に亘り、訪問期間は 10 日間前後とした。帰国後に求めたアンケートでは、多くの学生が本プログラムによる海外歯学部への訪問は、本邦との歯科医療事情や歯科保健事情の違いを身をもって体験・認識できたこと、旅行と異

なり現地の生活を実際に体験し、主に英語を中心とした日本語以外によるコミュニケーションの重要性を認識したこと、海外の歯学部学生の高いモチベーションに触れることができたことなどの点で、大変大きな意義があったと回答している。一方、招聘した学生の所属国と大学は、スリランカを除いて訪問先と同じで、期間はいずれも 2 週間とした。本学に滞在した学生達の本プログラムに対する評価も提出されたレポートによれば大変高かった。帰国後には、本邦や本学への大学院学生としての留学希望を表明している学生も複数名おり、本事業の当初の目標もある程度達成されていると思われる。

本学では本年度も同様の支援を受けて、更に多くの国に学生を派遣し、また招聘する計画を立てている。歯学教育の国際化や研究の国際化を鑑みるに、本プログラムの有用性は今後も益々大きくなると考えられる。

歯学科四年次保存修復学基礎実習における留学生サブインストラクターの評価と意義

○關 奈央子¹⁾, 二階堂 徹²⁾, 森尾郁子¹⁾³⁾, 田上順次²⁾⁴⁾

¹⁾東京医科歯科大学国際交流センター, ²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯制御学分野, ³⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野, ⁴⁾東京医科歯科大学GCOEプログラム歯と骨の分子疾患科学の国際教育研究拠点

Overseas Graduate Students as Sub-instructors in Operative Dentistry Preclinical Training Course

○Seki Naoko¹⁾, Nikaido Toru²⁾, Morio Ikuko¹⁾³⁾, Tagami Junji²⁾⁴⁾

¹⁾International Exchange Center, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Cariology and Operative Dentistry, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University, ³⁾Dental Education Development, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University, ⁴⁾Global Center of Excellence Program : International Research Center for Molecular Science in Tooth and Bone Diseases

【目 的】

歯学分野の研究機関に垣根はなく、世界的に、歯学部教員が他国出身者であることは珍しくない。本学歯制御学分野においてはアジアを中心に20名以上の留学生を受け入れている。将来的に、東京医科歯科大学の教育システムが広くアジアのスタンダードになることを目指し、本学歯制御学分野では、保存修復学基礎実習における留学生サブインストラクター参加の評価、意義について検討した。

【方 法】

本学歯学部歯学科歯制御学分野保存修復学基礎実習において、サブインストラクターとして教育に携わることを希望する留学生が実習に参加、インストラクターとともに担当グループの指導にあたった。実習書は事前に英訳したものを配布、実習前には学生と共にデモのビデオをみた後指導についてもらった。実習後にはインストラクターとミーティングをし、また、

今回の概要を説明した。実習全過程終了後にはサーティフィケートを授与した。

実習終了後に学生・留学生にアンケートを配布し、留学生がサブインストラクターとして参加する実習についての調査を行った。

【結 果】

授業後のアンケート回収率は留学生100%、学部学生100%であった。留学生の指導内容の適切性については、5段階評価で93%が3以上(3:21.1%, 4:35.1%, 5:36.8%)と評価した。実習にサブインストラクターとして参加する意義については、100%(4:20%, 5:80%)の留学生が有意義だと4以上を評価した。留学生がサブインストラクターとして参加する実習の総合評価では、留学生の100%(4:60%, 5:40%)、学生側も98.2%(3:22.8%, 4:33.3%, 5:42.1%)が3以上の肯定的な評価を示した。

The Hiroshima Univ. International Dental Course

○テジョサソング ウディヤント¹⁾²⁾, 岡 広子¹⁾, 内田 隆¹⁾, 高田 隆¹⁾

¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院, ²⁾アイルラング大学歯学部

The Hiroshima Univ. International Dental Course

○Tedjosongko Udijanto¹⁾²⁾, Oka Hiroko¹⁾, Uchida Takashi¹⁾, Takata Takashi¹⁾

¹⁾Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences, ²⁾Faculty of Dentistry, Airlangga University

One of the Global Social Responsibility of Faculty of Dentistry Hiroshima University is leading the standardization and mutual recognition of dental medicine and oral health sciences in Asia. Therefore Hiroshima University launched The International Dental Course Program in 2011. The establishment of International Dental Course aims to found the basis to educate prospective personnel capable of taking leadership in Asia, as well as to foster persons with international way of thinking and global understanding through international exchange at the undergraduate level. Through this program the students from Airlangga University Surabaya Indonesia (2 students) and University of Medicine and Pharmacy at Hochiminh Vietnam (1 student) have been studying at Hiroshima University since October

2011. At the first 6 months the students learned Japanese language training and basic educations, and started April 2012 they are taking core subjects for dental program : frontier dental science program or clinical dental science program ; and preliminary clinical training as three and a half - year program. After completing the program, they will conduct necessary clinical training and take the National Examination for Dental Practitioners in their home countries. Lectures are basically carried out in English by using English-Japanese dual linguistic education system for lectures, seminars, and practices with Japanese students. The purpose of this paper is to report the program and share our experience on conducting the International Dental Course Program in Hiroshima University.

広島大学歯学部国際交流プログラムへの研修歯科医の参加とその評価

○岡 広子¹⁾, テジヨサソコ ウディヤント¹⁾, 小川哲次²⁾, 高田 隆¹⁾

¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院, ²⁾広島大学病院口腔総合診療科

Assessment on a pilot collaborating seminar between dental clinical training course and undergraduate international exchange programs

○Oka Hiroko¹⁾, Tedjosasongko Udiyanto¹⁾, Ogawa Tetsuji²⁾, Takata Takashi¹⁾

¹⁾Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences, ²⁾Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

広島大学歯学部では毎年海外協定校と連携して、国際交流プログラムを実施している。歯学部学部生のみならず、歯学部を構成する人員の国際化対応能力の向上をめざし、平成23年度は広島大学歯学部で実施する国際交流プログラムに研修歯科医の担当する新たな演習を組み込んだ。今回は平成23年度短期国際交流プログラム内の研修歯科医担当演習とその評価について報告する。

平成23年度広島大学歯学部では計4回の短期国際交流プログラムを実施し、インドネシア、タイ、台湾、アメリカ、カナダより計45名の国際交流学生を迎えた。このうち、32名の交流学生に対して研修歯科医の担当する演習を実施し、延38名の研修歯科医が参加した。演習内容は、カリエスリスク検査、口腔内写真撮影、院内ツアーおよび質疑応答等である。演習終了後、参加学生および研修歯科医による記述式の評価を実施した。

評価では、参加学生のほぼ全員から研修歯科医に対する感謝

や賞賛の言葉とともに「演習に満足した」との回答が得られた。参加研修歯科医は「外国人とコミュニケーションを図ることができた」、「外国の歯科事情等について学ぶことができた」等を理由に挙げて、「今回の演習を担当したことは、あなたにとって有意義でしたか」との質問に97%が有意義であったと回答した。また、研修歯科医の自由記述回答の中には、「外国の歯科に関する知識を得ることができた」、「外国人とのコミュニケーションの取り方に理解が深まった」、「世界に出て勉強してみた」という意欲がわいてきた」等肯定的な記述が多数みられた。今回の国際交流プログラムへの研修歯科医の参加は国際交流のみならず、研修歯科医自身が国際化に対応する能力について考えるきっかけとなったと示唆される。平成24年度は、研修歯科医がより主体的に演習の企画・運営の段階から携わる参加型から参画型のプログラム仕組みへと改善して演習を実施する予定である。

続ワールド・カフェをやってみた！

○大澤銀子, 内川喜盛, 北原和樹, 岩田 洋, 岡田智雄, 大津光寛, 小川智久, 小倉陽子, 鈴木淳子, 横澤 茂, 仲谷 寛
日本歯科大学

We have had the World Cafe at NDU. Part 2

○Osawa Ginko, Uchikawa Yoshimori, Kitahara Kazuki, Iwata Hiroshi, Okada Tomoo, Otsu Mitsuhiro, Ogawa Tomohisa,
Ogura Youko, Suzuki Atsuko, Yokozawa Shigeru, Nakaya Hiroshi
The Nippon Dental University

【目 的】

ワールド・カフェは、参加者のアイデアを繋ぎ、集合知を生み出す会話手法として、近年、多方面で行われている。我々は、平成22年度からコミュニケーション学習の一環として、ワールド・カフェを取り入れている。そこで、平成22年度、23年度に開催したワールド・カフェを比較し、企画における考慮について考察した。

【方 法】

日本歯科大学生命歯学部第3学年医療コミュニケーション概論実習の最終回に平成22年度、23年度ともワールド・カフェを実施した。ワールド・カフェは、両年度とも、3ラウンドとし、最後に各ラウンドを通して、グループのキーワードを考え、全体発表を行った。22年度の問いは、「歯科医師を取り巻く状況はどんな感じ?」、「5年後の自分はどのようになっているでしょうか?」、「20年後のHappyなあなたはどのようになっているでしょうか?」とした。23年度は、「かっこいい歯科医師

とは?」、「かっこ悪い歯科医師とは?」、「歯科医師のプロフェッションとは?」とした。ワールド・カフェ終了後にワールド・カフェに関するアンケート、および本実習全体に関するアンケートを行った。

【結果および考察】

アンケートの結果、23年度の方が簡潔に話す事ができたと回答した学生が多かった。一方、ワールド・カフェを行ったの気付きについては、22年度の方が高い気付きが得られたとの回答が多かった。また、観察していた指導教官の印象においても、23年度は、表面的な会話となっていることを感じられた。このことは、「問い」の設定が、学生の深い内省を促すことに大きく影響するものと思われる。ワールド・カフェは比較的単純な仕組みのため簡単に開催できる利点があるものの、会話が盛り上がったというだけでなく、深い洞察、気付きを得るためには、「問い」の立案をはじめ、十分な準備の上に開催することが重要であることが考えられた。

協同学習の要素を取り入れた初年次PBLチュートリアル

○長田敬五¹⁾、影山幾男¹⁾、五十嵐 勝¹⁾、葛城啓彰¹⁾、佐藤 聡¹⁾、佐藤利英¹⁾、二宮一智¹⁾、藤井一維¹⁾、水谷太尊¹⁾、宮川行男¹⁾、渡邊文彦¹⁾、中原 泉²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学

PBL Tutorial adopted Essentials of Cooperative Learning in First-Year Experience

○Osada Keigo¹⁾、Kageyama Ikuo¹⁾、Igarashi Masaru¹⁾、Katsuragi Hiroaki¹⁾、Sato Soh¹⁾、Sato Toshihide¹⁾、Ninomiya Kazutomo¹⁾、Fujii Kazuyuki¹⁾、Mizutani Masataka¹⁾、Miyagawa Yukio¹⁾、Watanabe Fumihiko¹⁾、Nakahara Sen²⁾

¹⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Niigata, ²⁾The Nippon Dental University

【目 的】

日本歯科大学新潟生命歯学部では、平成17年度から第1学年にPBLチュートリアルを導入している。第1学年のPBLチュートリアル(初年次PBLチュートリアル)は学び方を学ぶことを主要な目的として授業「歯科医学入門演習」の学習方略として実施してきたが、学生の参加意識の欠如、学生の学習能力の低下および自己学習で得た知識の浮遊化等の問題点が示唆されてきた。これらに対応するため、初年次PBLチュートリアルへの協同学習の要素の導入を試みた。その実践内容および学生アンケート調査の分析結果について報告する。

【方 法】

初年次PBLチュートリアルは前期に毎週1回、すべての1年生が5～8名の少人数グループに分かれて同時に実施した。グループメンバーは男女比の均等化を考慮した無作為抽出法で決定した。課題は毎回全グループで同じものを使用した。初年次PBLチュートリアル終了後にグループ討論、学習成果の発表

および自己学習等に関するアンケート調査(5件法)を行い、その結果について分析した。

【結果および考察】

初年次PBLチュートリアルや他の授業のガイダンスにおいて、予め協同学習の学習観に関する十分な説明を行った。グループ討論ではメンバーの人数以上の数の学習項目を抽出し、これらをメンバーで分担するように指示した。1つの学習項目あたり必ず2名以上の学生が担当するものとした。チュータは分担の詳細を学習項目分担票に記録し、これに基づいて学習成果の発表順と発表者を決定した。改善したPBLチュートリアルに関するアンケート調査では、グループ内の自分の役割に対する責任感、他者に教えることによる学習および他者の発表の傾聴等、いずれも協同学習の要素を含む項目で好結果を示した。今回の僅かな手直しによって、初年次PBLチュートリアルは互恵的な学習が構造的に確保され、参加の動機づけ、知識の定着化および仲間意識なども多少改善されたように思われる。

PBLに標本を取り入れる試み

○影山幾男¹⁾、長田敬五¹⁾、五十嵐 勝¹⁾、葛城啓彰¹⁾、佐藤 聡¹⁾、佐藤利英¹⁾、二宮一智¹⁾、藤井一維¹⁾、水谷太尊¹⁾、宮川行男¹⁾、渡邊文彦¹⁾、中原 泉²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学

A trial to incorporate anatomical specimens into PBL

○Kageyama Ikuo¹⁾、Osada Keigo¹⁾、Igarashi Masaru¹⁾、Katsuragi Hiroaki¹⁾、Sato Soh¹⁾、Sato Toshihide¹⁾、Ninomiya Kazutomo¹⁾、Fujii Kazuyuki¹⁾、Mizutani Masataka¹⁾、Miyagawa Yukio¹⁾、Watanabe Fumihiko¹⁾、Nakahara Sen²⁾

¹⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Niigata, ²⁾The Nippon Dental University

【目 的】

日本では現在、29校中23校の歯学部がPBLチュートリアルを導入しているが、実施する際の諸問題も浮き上がっている。PBLチュートリアルに解剖標本を取りこむことで、歯学部学生に対して更に有効なPBL教育を実施することができるかどうかを調査する。

【方 法】

日本歯科大学新潟生命歯学部では、4月～9月の前学期に本学1年生に対してPBLを取り入れた演習講義を行っている。平成24年度の1年生にシナリオと実際の乾燥頭蓋を用い、学生の感

想を元に、解剖標本がPBLチュートリアルのシナリオに有効かどうか調査した。さらに、プレゼンテーションを行い、乾燥頭蓋を用いたシナリオの有効性を確認した。

【結果および考察】

シナリオに乾燥頭蓋を用いた試みは学生の興味を引き、今後シナリオに実際の標本を用いることで効果的なPBLチュートリアルを期待できることが判明した。しかし、班ごとに実物の乾燥頭蓋を用意することは大学によっては容易ではなく、検討を要する。

学部連携PBLチュートリアルによるチーム医療教育の効果 その3 ポートフォリオ解析結果

○片岡竜太¹⁾, 馬谷原光織¹⁾, 鈴木久義²⁾, 今福輪太郎³⁾, 向井美恵¹⁾, 弘中祥司¹⁾, 井上美津子¹⁾, 木内祐二⁴⁾
¹⁾昭和大学歯学部, ²⁾昭和大学保健医療学部, ³⁾香港大学, ⁴⁾昭和大学薬学部

The educational effects of interdisciplinary PBL Part 3 The results of analysis of portfolios

○Kataoka Ryuta¹⁾, Mayahara Mitsuo¹⁾, Suzuki Hisayoshi²⁾, Imafuku Rintaro³⁾, Mukai Yoshiharu¹⁾, Hironaka Shouji¹⁾,
 Inoue Mitsuko¹⁾, Kiuchi Yuji⁴⁾

¹⁾Showa University, School of Dentistry, ²⁾Showa University, School of Nursing Rehabilitation, ³⁾University of Hong Kong, School of Education, ⁴⁾Showa University, School of Pharmaceutical Science

【目 的】

学部連携PBLチュートリアルにおいて、学生は臨床シナリオからグループで決定した学習項目について、専門分野と、非専門分野を学習する。説明用パワーポイントを用い、自己主導型学習で得た成果を共有して、患者の包括的な治療やケア計画立案を行う。チーム医療教育の効果を明らかにするため、質的研究手法を用い、ポートフォリオの記述内容を検討した。

【方 法】

医学、歯学、薬学部3年生と保健医療学部2年生の混成グループから無作為抽出した26名(3グループ)のPBLチュートリアル授業を録画した。今回は、自己主導型学習成果を共有し質疑応答する場面の発言を文書化することにより、討議内容の検討を試みた。分析項目は「メンバー間の発言数の内訳」「1つの質問に対する平均発言数と平均参加人数」「質問-応答に関する発

言」「傾聴態度と情報共有に関する発言」で、PBL学習の学生の内省面を理解するために、ポートフォリオ資料(ふりかえりシート・成長報告書)も検討した。

【結果・考察】

全てのグループで専門知識の共有が確認されたが、メンバーの討議への関与の程度には差が認められ、質疑に対する平均発言数や平均参加人数は、最多グループは最少グループの約1.5倍であった。最多グループでは学部を超えた学生間の討議が活発にされ非専門分野の学生が積極的に質問・追加情報を共有し、専門分野の学生がグループ内での相互理解を促すために応答・総括を行う傾向が認められた。また傾聴態度に関して、相互共有・理解が十分にできたという意思表示の発言が多く認められ、学部連携PBLを通して患者中心の医療を実践するためのチーム医療の重要性をより強く認識できたことが示唆された。

岩手医科大学歯学部教育改革におけるSociety制度とSenior Tutor制度の導入について

○金村清孝¹⁾, 小林琢也¹⁾, 浅野明子²⁾, 岡田伸男²⁾, 織田展輔¹⁾, 田邊憲昌¹⁾, 近藤貴之¹⁾, 佐々木大輔³⁾, 伊藤茂樹¹⁾, 野村太郎¹⁾, 水川卓磨⁴⁾, 大川義人³⁾, 佐藤和朗⁴⁾, 城 茂治⁵⁾, 小豆嶋正典⁵⁾, 永井成美⁷⁾, 三浦廣行⁴⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座, ²⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座う蝕治療学分野, ³⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野, ⁴⁾岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野, ⁵⁾岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科麻酔学分野, ⁶⁾岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野, ⁷⁾ハーバード大学歯学部補綴・バイオマテリアル講座

Integration of Society System in Dental Education at Iwate Medical University

○Kanemura Kiyotaka¹⁾, Kobayashi Takuya¹⁾, Asano Akiko²⁾, Okada Nobuo²⁾, Oda Nobusuke, ¹⁾Tanabe Norimasa¹⁾, Kondou Takayuki¹⁾, Sasaki Daisuke³⁾, Itou Shigeki¹⁾, Nomura Tarou¹⁾, Mizukawa Takuma⁴⁾, Okawa Yoshito³⁾, Sato Kazuro⁴⁾, Joh Shigeharu⁵⁾, Shozusima Masanori⁵⁾, Nagai Shigemi⁷⁾, Miura Hiroyuki⁴⁾

¹⁾Department of Prosthodontics and Oral Implantology, School of Dentistry, Iwate Medical University, ²⁾Division of Operative Dentistry and Endodontics, Department of Conservative Dentistry, School of Dentistry, Iwate Medical University, ³⁾Division of Periodontology, Department of Conservative Dentistry, School of Dentistry, Iwate Medical University, ⁴⁾Division of Orthodontics, Department of Developmental Oral Health Science, School of Dentistry, Iwate Medical University, ⁵⁾Division of Dental Anesthesiology, Department of Reconstructive Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University, ⁶⁾Division of Dental Radiology, Reconstructive Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University, ⁷⁾Harvard School of Dental Medicine Department of Restorative Dentistry & Biomaterials Sciences

岩手医科大学歯学部では、平成23年5月より教育改革プロジェクトが進行している。このプロジェクトは、ハーバード大学の協力のもと岩手医科大学歯学部独自の新しい教育システムを構築することによって、教育、臨床、研究における将来のリーダーを育成することを目指している。

その教育改革のひとつとして、Society制度とSenior Tutor制度を導入した。このSociety制度とは、これまでのクラス単位での交流に加えて各学年10名程度の小グループを形成し、1年生～6年生の縦割りの連携を構築したものである。また総合的な学生教育、学生分析・指導・評価をリアルタイムに行うために、各Societyに2名の担当教員を配置したのがSenior Tutor制度である。一方Senior Tutorは、4、5年生で行われる症例検討実習や診療参加型臨床実習においてMultidisciplinaryな視点に基づく指導を行うために補綴・歯周・保存系の教員を中心

に構成した。

この制度を実現するために学内に学生一人に1つの机を準備した5年生と6年生のスタディールーム、1～4年生のスタディールームを兼ねたミーティングルーム、学生が相談しやすいようにSenior Tutorの個室を設置した。Senior Tutorの個室はスタディールームに併設され、学生がSenior Tutorに勉強面、生活面で様々な相談をできるように配慮した。

この制度の採用により、学生間では屋根瓦方式の教育システムが実践でき、また教員と学生間の意思疎通も円滑にし、学習への取り組みや卒後の進路など、学生生活の様々な問題をタイムリーに解決していく「啐啄同時」を実践しやすくなった。

岩手医科大学歯学部の教職員と学生が一丸となって取り組んでいる本教育改革プロジェクトの一部であるSociety制度とSenior Tutor制度について活動内容を交えて報告する。

臨床実習の充実に向けた Multi-disciplinary カリキュラムの導入について

○八重柏 隆¹⁾, 村井 治¹⁾, 佐々木大輔¹⁾, 小林琢也²⁾, 金村清孝²⁾, 田邊憲昌²⁾, 木村重信³⁾, 佐藤和朗⁴⁾, 永井成美⁵⁾, 三浦廣行⁴⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野, ²⁾岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座, ³⁾岩手医科大学微生物学講座分子微生物学分野, ⁴⁾岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野, ⁵⁾ハーバード大学歯学部補綴・バイオマテリアル学講座

Innovation of multi-disciplinary curriculum for clinical exercise

○Yaegashi Takashi¹⁾, Murai Osamu¹⁾, Sasaki Dasisuke¹⁾, Kobayashi Takuya²⁾, Kanemura Kiyotaka²⁾, Tanabe Norimasa²⁾, Kimura Shigenobu³⁾, Sato Kazuro⁴⁾, Nagai Shigemi⁵⁾, Miura Hiroyuki⁴⁾

¹⁾Iwate Medical University School of Dentistry Conservative Dentistry Periodontology, ²⁾Iwate Medical University School of Dentistry Prosthodontics and Oral Implantology, ³⁾Iwate Medical University Microbiology Molecular Microbiology, ⁴⁾Iwate Medical University School of Dentistry Developmental Oral Health Science Orthodontics, ⁵⁾Harvard School of Dental Medicine Department of Restorative Dentistry & Biomaterials Sciences

岩手医科大学歯学部は、平成24年度から診療参加型実習の充実に向け歯学部3年生、4年生の臨床科目について新カリキュラムを導入した。従来のカリキュラムでは、各臨床科目が講義・実習共に週に1-2回程度に分散された形で配置され、半年から約1年程度かけて各科目を履修完了していた。旧カリキュラムに対する学生アンケートには、分断された教科配置では各教科内容が把握しにくいとの否定的意見が複数あった。そこで、これまでに教育実績のあるハーバード大学歯学部のコースカリキュラムを参考に、歯科診療の流れに沿ったコースカリキュラム、すなわち歯科患者の受診から、診査・診断・治療計画・各歯科治療(保存、補綴・インプラント、口腔外科、小児歯科、矯正歯科、歯科麻酔、口腔内科、障害者歯科、歯科放射線)に至るまでの一連の流れを可能な限りシームレスに反映させたカリキュラムの作成を試みたので報告する。

各コースカリキュラムとしては「歯科患者を診るためのイントロダクション」、「口腔疾患の診断・治療計画および予防」、「口腔治療学(硬組織、歯髄、歯周組織疾患)」を3年次コースとして、「補綴歯科治療」、「全身管理と口腔外科の治療」、「先進歯科医学」、「成長発達歯科医学と障害者の歯科治療」を4年次コースとして設定した。また、講義と関連する実習の各配置を、午前は講義で、当日午後はその関連実習となるように、可能な限り近接配置するように努めた。平成23年度の移行カリキュラムを体験した3年次歯科学学生アンケートからは、「とても判りやすく、歯科医師となるモチベーションが向上した」との複数回答が得られた。一方そのカリキュラム実行には、適切な教場数確保や教員の十分なマンパワーが従来よりも多く求められ、解決すべき課題もあることが判明した。

学部教育における新しい教育体制の試みについて

○佐藤和朗¹⁾, 金村清孝²⁾, 浅野明子³⁾, 小林琢也²⁾, 織田展輔²⁾, 八重柏 隆³⁾, 工藤義之³⁾, 古屋純一²⁾, 近藤尚知²⁾, 石崎 明³⁾, 野田 守³⁾, 永井成美⁴⁾, 三浦廣行¹⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野, ²⁾岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座, ³⁾岩手医科大学歯学部歯科保存学講座, ⁴⁾ハーバード大学歯学部補綴・バイオマテリアル学講座

New education system in undergraduate dental instruction

○Sato Kazuro¹⁾, Kanemura Kiyotaka²⁾, Asano Akiko³⁾, Kobayashi Takuya²⁾, Oda Nobusuke²⁾, Yaegashi Takashi³⁾, Kudou Yoshiyuki³⁾, Furuya Junichi²⁾, Kondo Hisatomo²⁾, Ishisaki Akira³⁾, Noda Mamoru³⁾, Nagai Shigemi⁴⁾, Miura Hiroyuki¹⁾

¹⁾Division of Orthodontics, Department of Developmental Oral Health Science, School of dentistry, Iwate Medical University, ²⁾Department of Prosthodontics and Oral Implantology, School of dentistry, Iwate Medical University, ³⁾Department of Conservative dentistry, School of dentistry, Iwate Medical University, ⁴⁾Harvard School of Dental Medicine Department of Restorative Dentistry & Biomaterials Sciences

歯科医師過剰問題から、近年の歯科大学の入学定員割れ、国家試験合格率の低下など歯学教育を取り巻く状況は困難な局面を迎えている。また学部教育においては、歯学教育モデル・コア・カリキュラムに示されるように、積極的な診療参加型臨床実習が推奨される現状に対応したカリキュラム再編が必要である。岩手医科大学歯学部では昨年度から、この状況に対応するために学部教育改革を行ってきた。その具体的内容としては、1) 学部教育のカリキュラム編成などに特化した教育部門の設立、2) 各学年を縦割りグループとしたSociety制度の導入、3) 各Societyを統括するTutor制度の導入、4) 歯科基礎・臨床科目のカリキュラム再編成と科目責任者を設置するDirector制度

の導入、5) 本格的な診療参加型臨床実習を推進するための講座および外来再編を進めている。

本学は医学部、歯学部、薬学部を持つ医系総合大学であり、大学の基本方針としての医歯薬連携を推進している中で、歯学部各学年のカリキュラム再編や臨床実習の形態などを同時に改変するためには、個々の委員会などで構成される従来の教育体制では対応しきれない部分もあった。そのために新しい教育体制を構築し、前述の改革項目に取り組んできている。

本発表では、我々が取り組んでいる学部教育改革の概要と新しい教育体制について、またその教育効果に就いて報告する。

診療参加型臨床実習の充実に向けた取り組み—教育診療協力患者の確保—

○木下可子, 長島 正, 三浦治郎, 西藤三紀子, 久保美寿穂, 大家香織, 清水真人, 五十嵐有希子, 竹重文雄
大阪大学歯学部附属病院

An approach for improving the clinical practice —Securing the patients for clinical training—

○Kinoshita Yoshiko, Nagashima Tadashi, Miura Jiro, Nishifuji Mikiko, Kubo Mizuho, Oya Kaori, Shimizu Masato, Igarashi Yukiko, Takeshige Fumio
Division for Interdisciplinary Dentistry Osaka University Dental Hospital

【目 的】

平成 22 年 3 月に歯学教育モデルカリキュラムが改定され、新たに臨床実習に関する目標が設定された。これによって臨床実習に関する到達目標が明らかとなり、それを充実させるための施策が求められている。この取り組みの中で困難と思われる課題の 1 つが「教育診療協力患者の確保」であり、大阪大学では平成 21 年より新生入生に対する歯科検診を実施し、それが患者の確保に効果を得ているので、その概要を報告する。

【方 法】

対象は大阪大学の新生入生（約 3, 200 名）とし、入学時健康診断の一環として歯科検診を実施した。受検項目は、歯の状態、歯垢の付着状況、歯石の付着状況、歯周組織の状況、歯列の状況の 5 項目である。検診の結果、受診が必要と判断された学生に対しては、歯学部附属病院の受診案内を含む健診結果のお知らせを郵送した。

【結果ならびに考察】

歯科検診を受検した約 3,000 名のうち、約 30% の学生に歯科

受診が必要と判断された。そのうち、歯学部附属病院を受診した学生は、平成 23 年度実績で 33 名と多くはないが、その治療内容は、TBI、歯石除去、う蝕処置、レジン充填など、モデルコアカリキュラムの臨床実習内容水準 1 に相当するものが中心であり、患者の同意が得られた場合には臨床実習生が中心となって治療にあたっている。一方、水準 1 を越える処置内容の場合、研修歯科医がその処置を担当し、臨床実習と臨床研修の両立を図っている。

受診した学生からは、「関西圏以外の出身で近くにかかりつけ歯科がない状況で、自分の通う大学の附属病院は便利であり安心感もあった」という声が聞かれており、今後は専門課程の学舎が歯学部附属病院に近接している学部 3 年次以降の学生に対する広報活動に力を入れながら本制度を定着させるとともに、受診した学生に対しては卒業まで責任を持って口腔の管理を実施することで患者側、医療者側の双方に大きな満足感が得られるよう努めたい。

スキルス・ラボを活用した研修歯科医および医員の 5 年間の実績

○清野晃孝, 齋藤高弘
奥羽大学歯学部

The results of five years of a resident and an instructor who utilized skills laboratory

○Seino Akinori, Saito Takahiro
Ohu University School of Dentistry

【目 的】

本学中央棟 4 階にあるスキルス・ラボは、第 4 学年の模型実習および臨床実習のシミュレーション実習で活用されているが、さらに臨床研修歯科医あるいは若手医員の臨床能力のスキルアップのために個人の自由な時間帯に特に規制することなく、自発的活用を 2006 年度から開始している。今回、2006 年度から 2010 年度までの 5 年間分のスキルス・ラボ使用チェックリストを資料として、その実績から若干の知見を得たので報告する。

【方 法】

調査資料は、中央棟 4 階指導員室に常備してあるスキルス・ラボ使用チェックリストであり、5 年間で 2102 枚になり、保存されていた。統計解析として、各年度間の使用総時間数の総当たり比較を Mann-Whitney U-test を行った。分散の比較として F-test も実施した。また臨床研修医 1 人あたりの使用総回数を調査し、さらに各年度において本院の臨床研修プログラム間の使用総時間数を Kruskal wallis H-test を用いて比較した。

【結 果】

2006 年度から 2010 年度までのスキルスラボ使用者数として研修医は毎年ほぼ 90% 以上の使用率で、医員は毎年 1 桁の使用率がいた。臨床研修医 1 人あたりの使用総時間数は平均値で、2006 年度が 11.62 時間で最小であり、2010 年度の 22.14 時間が最大であった。研修医は年間 5 から 7 回程度スキルスラボを使用していた。H-test では有意差は認められなかった。

【結 論】

1. 毎年、90% 以上の臨床研修医は、自発的にスキルス・ラボを使用しており、また、年間 1 桁の医員が自発的にスキルス・ラボを使用し、研鑽していたことが分かった。
2. 臨床研修医のスキルス・ラボを使用時間は年間 14 ～ 22 時間で、年度毎に、差があった。
なお使用回数は年間 5 ～ 7 回程度であった。
3. 各年度において臨床研修プログラムの相違では、スキルス・ラボを使用総時間数に有意差は認められなかったが、B プログラム前半派遣組が多い傾向が伺えた。

本院歯科医師臨床研修へのWeb Course Tool (WebCT) の活用について

○津賀一弘¹⁾, 河村 誠²⁾³⁾, 島末 洋²⁾, 土井一矢¹⁾³⁾, 呉本晃一¹⁾³⁾, 太刀掛銘子²⁾³⁾, 長崎信一¹⁾³⁾, 小川郁子²⁾³⁾, 中岡美由紀²⁾³⁾, 岡田 貢²⁾³⁾, 小川哲次²⁾

¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院, ²⁾広島大学病院, ³⁾広島大学病院歯科領域卒後臨床研修専任指導医専門委員会

Web Course Tool for Dental Clinical Training Course in Hiroshima University Hospital

○Tsuga Kazuhiro¹⁾, Kawamura Makoto²⁾³⁾, Shimasue Hiroshi²⁾, Doi Kazuya¹⁾³⁾, Kuremoto Koh-ichi¹⁾³⁾, Tachikake Meiko²⁾³⁾, Nagasaki Toshikazu¹⁾³⁾, Ogawa Ikuko²⁾³⁾, Nakaoka Miyuki²⁾³⁾, Okada Mistugi²⁾³⁾, Ogawa Tetsuji²⁾

¹⁾Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences, ²⁾Hiroshima University Hospital, ³⁾Dental Advisor Committee in Dental Clinical Training Course, Hiroshima University Hospital

【目 的】

本院の管理型3並びに単独型1の臨床研修プログラムは、総合歯科医療とともに医科歯科連携医療についての基本的能力の修得を特徴としており、研修歯科医が個々のニーズやレディネスにあわせて、総合歯科と専門診療科のスーパーローテーション研修を基本に、同時に複数の専門診療科にまたがって研修できるようになっている。それに伴い研修歯科医個々のオーダーメイド化した複雑な研修スケジュールに対応するためのface to faceの指導や支援体制並びにWeb Course Tool (WebCT: 第26回本学会総会・学術大会)などを活用した指導・支援・管理システムの強化と改善を図っているところであり、それまで紙媒体で運用していた研修歯科医の到達度評価(平成21年)や臨床研修ポートフォリオをそれぞれWebCT電子版へと移行した。本発表では、このようなWebCTの利用状況や運用にあたっての問題点や改善すべき事項などを中心に報告する。

【方 法】

対象は平成23年度広島大学病院研修歯科医55名とし、歯科医師臨床研修WebCTへのアクセス状況(回数、時間、セッション時間・回数など)、電子版ポートフォリオの活用状況などについて調査した。あわせて研修歯科医の研修修了時の評価についても検討を行った。

【結果と考察】

研修歯科医のWebCT利用(1名あたり)は、年間総アクセス回数が120回程度(1人あたり)、アクセス時間が5時間～118時間、1回のセッション時間が約14分(1人あたり)であり、平日21セッション、週末8セッション(いずれも1日あたり)の利用があった。この中で最も利用頻度の高かったのは情報連絡とポートフォリオのサイトであった。また、研修歯科医の研修修了時の評価結果から、指導歯科医からのコメントやフィードバックが得られやすいなどの研修指導や支援への活用状況とともに、利用率に個人差があるなどの改善点も明らかになった。

「総合診療室型」卒後歯科臨床研修における経験量に影響を及ぼす因子

○中島貴子, 石崎裕子, 田口裕哉, 島田靖子, 小林哲夫, 藤井規孝
新潟大学医歯学総合病院

Factors influencing dental residents' clinical experience in university general dentistry clinic

○Nakajima Takako, Ishizaki Hiroko, Taguchi Yuya, Shimada Yasuko, Kobayashi Tetsuo, Fujii Noritaka
Niigata University Medical and Dental Hospital

【目 的】

現在、多くの大学において単独型・複合型プログラムの一部または全部として10名以上の研修歯科医が指導歯科医の監督指導下で高頻度一般歯科診療を行う「総合診療室型」研修プログラムが提供されており、これによって比較的高い効果を得ることができると考えられている。今回、本院の総合診療室型歯科医師臨床研修プログラムにおいて研修経験量に影響を及ぼす因子を明らかにし、さらなる改善を図るために調査を行った。

【方 法】

平成20～23年度に新潟大学医歯学総合病院歯科臨床研修Aプログラムに在籍した研修医合計115名を対象とし、卒後臨床研修ならびに卒前臨床実習における経験量についてアンケートを行った。

【結 果】

実習経験が多い研修歯科医ほど研修経験は多く、研修経験は担当症例の数と正の、同期の研修歯科医数とは負の相関を示した。病院の診療システムや必要とされる知識量、技術力については、実習時と研修時の差異の自覚が小さい研修医ほど研修経験

が多くなる傾向があった。研修終了時の研修医の意見では、研修経験量の多寡に関わらず配当症例数の増加、症例の種類の均等化、病棟研修などによる一般診療の中断への対策に関する要望が多くみられた。

【考 察】

臨床実習経験を多く積んでいる研修医にとって総合診療室型研修は症例を多く、広く経験し、固定の患者の予後を確認して考察することができるため、高い研修効果を得ることができる。一方、実習経験が少ない研修医にとっては指導が行き届く範囲を考慮した症例配当となる結果、研修効果は低くなりやすいと考えられる。研修歯科医の数が多い場合、個々の研修歯科医に症例不足が生じやすいだけでなく、研修の指導にも影響を与えることがあり、全体の研修経験量と満足度が低くなる傾向がある。

【結 論】

「総合診療室型」臨床研修においては習熟度に応じた臨床研修の導入と数、質の面で十分な症例の提供が課題であることが示唆された。

B-8

当院における研修歯科医の損益計算の試み—第 1 報 損益計算方法に関して—

○権 暁成, 田中晃伸
タナカ歯科

Estimation of Incomes and Expenses of Dental Resident in This Dental Clinic —Part 1 Method of Calculation on Incomes and Expenses—

○Kwon Hyoson, Tanaka Akinobu
TANAKA Dental Clinic

歯科医師臨床研修施設はあくまでも研修歯科医の教育の場であり、その労働力は 2 次的産物である。しかし一開業医としての立場から臨床研修を行うことによる損益に関しては気になる点である。そこで、今回我々は臨床研修歯科医が当院で研修を行うことによって、可視化可能な経理学的な損益と、無形的な損益に関して抽出を試みたのでここで報告する。ただし本報告にあたって、当院の存在する地域特性及び経済性、また、当院独自の教育方法が強く影響を与えており、さらには無形的な部分において、強引な解釈をしなければならない点もあり、学術的な妥当性の有無に関しては本学会において判断していただくことを前提としたい。第 1 報においては、当院の研修方法及び研修スケジュールを紹介し、その上で損益計算方法を報告する。対象となった研修歯科医は平成 23 年度 D 型研修 (8 カ月の臨床研修) により当院で研修を行った 25 歳男性である。研修期間内に

おける損益を、数値化可能な収入・数値化可能な経費・数値化不可能な経費として分類した。研修初期の段階ではそのほとんどが模型・抜去歯を使用した基礎練習及び見学を中心とした研修であるが、実際の患者診療にあたり収入が発生する。これらは研修歯科医が歯科医院内における職種のどのような立場であるかで変化する。つまり指導歯科医の介助を行いながらの見学は、歯科助手又は歯科衛生士としての労働力が発生し、数値化が可能な歯科医院側の収入となる。さらに臨床研修が進み、一歯科医としての診療行為は施設側にとって大きな収入となり得る。また経費に関しては、研修歯科医に支給する交通費や研修に関わる学会・講習会等への参加などを数値化可能な経費としてあげ、その他数値化不可能な経費 (α) などを分離することとした。第 1 報においては、これらの計算方式の妥当性に関して、検討を試みたのでここに報告する。

B-9

当院における研修歯科医の損益計算の試み—第 2 報 損益結果に関して—

○田中晃伸, 権 暁成
タナカ歯科

Estimation of Incomes and Expenses of Dental Resident in This Dental Clinic —Part 2 Result of Calculation on Incomes and Expenses—

○Tanaka Akinobu, Kwon Hyoson
TANAKA Dental Clinic

演者達は第 1 報で述べた算出方法によって、平成 23 年度協力型研修方式の研修歯科医に対して実際の損益計算を行ったので第 2 報としてここに報告する。第 1 報でも述べたように、6 月 27 日の研修開始以来のスケジュールを日計的に記録しエクセル保存を行った。7 月からは午前は基礎練習・座学、午後は見学及び介助という状態であったが、8 月以降臨床見学を目的としながら指導歯科医の介助を中心とした人的労働力収入が増加した。また 9 月以降は一歯科医としての純然たる収入も増加した。臨床研修に関わる 8 カ月間におけるその損益結果は 1,960,000 円の収入と 790,000 円の経費となり、最終的には 1,170,000 円の黒字となった。この中には研修歯科医の介助と

して指導歯科医があたった時間的な α (数値化不能な経費) つまり研修歯科医と指導歯科医との能力差による時間的ロスや、外注技工費・材料費などのランニングコスト等の一般経費は含まれていない。ただし、これらの数値化不可能な経費は全体的な経費からみるとわずかであると思われる。また、患者からの研修歯科医による治療の拒否等の不信感などが発生したことは、一開業医である施設側にとって数値化できない α のひとつである。これらの点に関しては一応除外した上で、臨床研修を行った当院での損益に関して、月別毎の詳細な結果を報告したい。

鹿児島大学歯学部における歯科東洋医学教育の現状と今後の展開

○山口孝二郎, 島田和幸, 佐藤友昭, 田口則宏
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

Current Educational Status and Future Development of Dental Oriental Medicine in Kagoshima University School of Dentistry

○Yamaguchi Kojiro, Shimada Kazuyuki, Sato Tomoaki, Taguchi Norihiro
Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences

現在, 医学教育コアカリキュラムでは, 基本的診療知識の薬物治療の基本原則の中で『和漢薬(漢方薬)の特徴や使用の現状について概説できる。』という項目があり, 全国80大学で漢方医学教育が実施されている。一方, 歯学教育コアカリキュラムにはこの項目は入っていない。しかし, 臨床では漢方薬の使用機会も多く, 社会的需要も高く, 今後歯学教育の中でも和漢薬を概説できることが要求されるようになると思われる。鹿児島大学歯学部では2005年より総合系科目として歯科東洋医学の講義を開講し, 現在8コマの講義を6年生に行っている。

今回は2011年の6年生の8コマの講義前後と, 2012年の5年生の臨床実習終了後の1コマの臨床講義前後での学生に対するアンケートを基に歯科東洋医学教育のあり方を検討した。講義内容は, 6年生は, 東洋医学概論, 和漢薬の薬理学, 疾患別漢方診療について, 5年生は, 東洋医学概論と疾患別漢方診療のサマリーを講義した。

東洋医学に関する興味は, 講義前5年生84%, 6年生81%が

興味を示し, 講義後は5年生94%, 6年生93%が興味をもっていった。また, 歯科医師の仕事に役立つと思うかとの質問には講義前, 5年生28%, 6年生54%が役立つと考え, 講義後は5年生82%, 6年生72%が役立つと考えていた。また, 5年生に対して歯学部教育に歯科東洋医学が必要だと思うかの質問について, 講義前は28%, 講義後は72%の学生が講義が必要だと回答していた。

鹿児島大学では臨床実習時に口腔外科で漢方診療の実際を見学実習させ, その後, 講義で基本的考え方, 漢方薬の効果など詳細に学習できるようにしている。今回のアンケート結果からも学生は, 歯科東洋医学に興味をもっており, 講義を受けることで, 歯科東洋医学の必要性を認識でき, 教育効果は上がっていると思われる。今後は, 歯科研修医のシステムにも歯科東洋医学を取り入れるなどして, 卒後歯科臨床研修システムも充実させていく予定である。

歯学部学生の東洋医学に対する意識調査: 長崎大学歯学部と東京歯科大学での比較

○亀山敦史¹⁾, 砂川正隆²⁾, 山口孝二郎³⁾, 王 宝禮⁴⁾

¹⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科, ²⁾昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門, ³⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面機能再建学講座顎顔面疾患制御学分野, ⁴⁾大阪歯科大学歯科医学教育開発室

Awareness survey about oriental medicine among dental students: Comparison between Nagasaki University School of Dentistry and Tokyo Dental College

○Kameyama Atsushi¹⁾, Sunagawa Masataka²⁾, Yamaguchi Kojiro³⁾, Pao-Li Wang⁴⁾

¹⁾Division of General Dentistry, Tokyo Dental College Chiba Hospital, ²⁾Department of Physiology, Showa University School of Medicine, ³⁾Maxillofacial Diagnostic and Surgical Sciences, Department of Oral and Maxillofacial Rehabilitation, Course of Advanced Therapeutics, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences, ⁴⁾Department of Innovation in Dental Education, Osaka Dental University

【目 的】

平成13年に改訂された医学教育コア・カリキュラムにおいて「和漢薬を説明できる」という目標が制定されたことを機に, 現在医学部では80大学の全てで東洋医学教育が実施されている。一方, 歯学部では30時間以上の東洋医学教育を実施している大学もあるが, 過半数の大学では東洋医学の教育を全く行っていない。そこで, 学部教育で40時間以上の東洋医学教育を実施している長崎大学歯学部(以下 長大歯)と, 6年間の教育カリキュラムに東洋医学を導入していない東京歯科大学(以下 東歯大)の学生を対象にアンケート調査を行い, 東洋医学に対する認識の相違を比較したので報告する。

【対象と方法】

平成24年度の長大歯と東歯大の第3学年または第5学年に在籍する学生を対象とした。アンケートは両校とも平成24年4月に実施し, 東洋医学に関する知識や興味の有無, 歯学部における東洋医学教育の必要性などについて, 無記名方式で回答を依

頼, 回収後に集計を行った。

【結果と考察】

東洋医学に対する興味について, 「非常にある」あるいは「少しある」と回答した者は, 長大歯の3年生, 5年生でそれぞれ58%, 69%であったのに対し, 東歯大では49%, 45%と少なかった。また「全く興味がない」と回答した学生は長大歯5年生では皆無であったが, 東歯大では3年生, 5年生でそれぞれ10%, 9%存在した。

「今後の医療において東洋医学は重要視されていくと思うか」という質問に対しては, 両大学ともに半数以上が「非常に思う」あるいは「少し思う」と回答した。一方で, 「将来, 東洋医学を診療に活用したいと思うか」という質問に対しては, 長大歯5年生の73%が「非常に思う」あるいは「少し思う」と回答したのに対し, 東歯大5年生では36%にすぎなかった。

以上の結果から, 東洋医学教育を歯学部で導入することは, 歯科臨床応用への関心を高めるのに有効であると思われる。

口腔保健学科臨床実習生における歯科麻酔関連用語の認知度

○神野成治, 深山治久

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科麻酔・生体管理学分野

The recognition degree of terminology regarding dental anesthesia in student of oral health care sciences during clinical teaching —Evaluating the self-report questionnaires—

○Jinno Shigeharu, Fukayama Haruhisa

Section of Anesthesiology and Clinical Physiology, Graduate School of Medical and Dental Science, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

口腔保健学科学生における歯科麻酔学の臨床実習の充実を図る為の基礎資料とすることを目的に、歯科麻酔関連用語の認知度に関して実態調査を行った。

【対 象】

前年の3年次に歯科麻酔学の講義を10時間受講した、口腔保健学科4年次の歯科麻酔科臨床実習生32名。

【方 法】

歯科麻酔関連用語63語(全身疾患36語, 心身・精神疾患11語, 管理法7語, 偶発症5語, モニター4語)を, 「説明できる」「聞いたことがある」「知らない」の中から1つを選択させた。「説明できる」と回答した者の百分率を求め, 認知度とした。

【結 果】

全身疾患の項目では, 糖尿病・高血圧(81%), 貧血(78%), 金属アレルギー(69%), ペースメーカー(66%), 脳梗塞(63%), 睡眠時無呼吸症候群(59%), 脳出血(56%)の順に認知度が高かった。心身・精神疾患の項目では, 歯科治療恐怖症(81%), 自閉症(69%), うつ病(63%), 精神遅滞(59%), アルツハイ

マー(58%)の順であった。管理法では, 全身麻酔(81%), 笑気吸入鎮静法(75%), 静脈内鎮静法(59%)の順であった。偶発症では, アナフィラキシーショック(59%), ショック(44%), 血管迷走神経反射(31%), 疼痛性ショック(22%)であった。モニターでは, 血圧計(100%), 心電図(63%), パルスオキシメーター(56%), BIS(3%)であった。

【考 察】

臨床実習生の全身疾患, 心身・精神疾患の認知度は, 30歳以上の成人あるいは大学生を対象とした他の報告結果とほぼ同様の結果であった。金属アレルギー, 歯科治療恐怖症, 笑気吸入鎮静法の認知度の高さは, 歯学部学生の特徴と思われる。また, 認知度の低かった, 血管迷走神経反射, 異常絞扼反射などは, 歯科治療に必要な知識であるため, 臨床実習で補う必要がある。

【考察・結語】

口腔保健学科4年次の歯科麻酔関連用語の認知度は, 歯学部学生の特徴も一部みられたが, 一般成人の認知度に近かった。

下顎孔伝達麻酔注射実習への新複合型トレーナー導入に対する有用性と教育効果

○工藤 勝, 大桶華子, 三浦美英

北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野

Educational effectiveness for the introduction of new complex type trainer to practice inferior alveolar nerve block

○Kudo Masaru, Ohke Hanako, Miura Yoshihide

Division of Dental Anesthesiology, School of Dentistry, Health Sciences University of Hokkaido

【目 的】

局所麻酔注射は歯科診療における除痛に最も重要で実施頻度の高い手技であり, その手技習得は重要な教育課題である。我々は浸潤麻酔注射および伝達麻酔注射の手技教育用トレーナーを独自に開発し, それぞれ改良しながら歯学部教育に導入してきた。歯学部5年生の実習に最新型の下顎孔伝達麻酔注射トレーナーを導入し, 前年度の学生と手技試験の結果を比較検討することでその有用性と教育効果を検証した。

【方 法】

対象:平成22および23年度の歯科麻酔学臨床実習を履修する歯学部5年生。下顎孔伝達麻酔注射の教育内容は数日前の資料配布, 当日実施前のpre-test:10分, 臨床講義および教員によるデモンストレーション:約30分, トレーナーによる注射訓練(1体を学生2~4人で使用):約120分, 手技試験:一人につき約10分, pre-testと同じ内容のpost-test:10分の順で実施した。平成22年度までのトレーナーは針先が適正位置に到達するとブザーとランプで知らせる機能が付与されていたが, 薬液の注入は出来なかった。一方, 平成23年度に導入した新複合

型では, 右側では針穿刺と刺入が適・不適の判別をブザーとランプで評価し[針刺入型], 左側は適正位置に針先を刺入すると薬液注入が実施可能であり[液注入型], 大臼歯頬側歯肉に浸潤麻酔注射が実施できるように改良された複合型である。使用したトレーナーの異なる平成22年と23年度における実習終了時の手技試験の結果を比較検討した。

【結 果】

1. 平成22年度:学生数86名, 実技試験平均点68.7, 最高89点, 最低38点, 60点未満11名
2. 平成23年度:学生数72名, 実技試験平均点72.4, 最高86点, 最低50点, 60点未満3名

【考 察】

新たに開発・導入した複合型下顎孔伝達麻酔注射トレーナーの教育効果を検証した結果, 実習終了時の手技試験における平均点は同程度であったが, 低得点者数を減少させたことから, 全学生のスキル水準を底上げする教育効果が認められたと考える。

歯科研修医に対する嚥下内視鏡検査手技相互実習のためのシステム構築と被験者の心拍数の変動について

○長崎信一¹⁾、小川哲次²⁾、谷本啓二¹⁾

¹⁾広島大学大学院歯科放射線学、²⁾広島大学病院口腔総合診療科

Building a system for mutual training of the endoscopy swallowing in dental residency training, and heart rate variability of subjects during the training

○Nagasaki Toshikazu¹⁾, Ogawa Tetsuji²⁾, Tanimoto Keiji¹⁾

¹⁾Department of Oral and Maxillofacial Radiology, Hiroshima University, ²⁾Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

【背景および目的】

第29回大会で嚥下内視鏡検査(VE)実習カリキュラムを作成するために、手技を取得することに伴う危険性について報告をした。H22年度の歯科医療保険より、VEが認められた。そこで、歯科研修医全員を対象とするVEの手技相互実習のためのシステム構築し、実習時の被験者の自律神経系の変動を検討した。

【対象と方法】

対象はH23年度に広島大学病院で研修した歯科研修医を56人(全員)である。用いたVE装置は鼻咽腔内視鏡(FNL-10RP3 PENTAX社)である。VE実習は、相互実習を行う前に基礎実習として、摂食嚥下とVEに関しての講義と乾燥頭蓋骨を用いたVE挿入の訓練(練習)を行った。相互実習は、術者以外に被験者の正面にもVE画像のモニターを設置し、VE画像とともに、相互実習の様子(iVIS CANON社)、呼吸と平均500ms毎の心拍数(Ploymate II TEAC社)を同期させ記録した。これらの動画を編集して、術者と被験者に配布した。この動画を元に、自律神経系の変動を心拍数の変動が6回以上/分とし、ど

ういう行為が原因か、摂食嚥下リハ学会の認定士を持つ歯科医師1人が解析を行った。

【結 果】

2人が実習拒否、1人が歯科研修医以外と相互実習、12人が術者の行為のみ行った。データ解析には、上記に加えて、データを収集できなかった1人と鼻腔挿入を失敗した1人を除いた39ケースを分析した。心拍数の変動が1番大きい行為は、ビスケット(2.5g)咀嚼嚥下で約12回以上/分上昇した。2番目は、鼻腔挿入行為で、挿入直前がピークで、挿入するにつれて低下した。

【まとめ】

相互実習で被験者に歯科研修医の約1/4が参加しなかった事と内視鏡のプロブ挿入直前に心拍数のピークを持つことより、歯科研修医が相互実習に不安をもっているのではないかと考えられた。また、健康成人において、少量の食品でも咀嚼嚥下で心拍数が上昇することは、実際の検査や訓練で咀嚼させる場合は注意が必要だと思われた。

大学における総合歯科の現状—第1報：組織構成と担当業務—

○藤井規孝、田口則宏、長谷川篤司、木尾哲朗、多田充裕、小川哲次、樋口勝規、伊藤孝訓
日本総合歯科協議会

Current situation of general dentistry in the university —report 1: the organization and the task—

○Fujii Noritaka, Taguchi Norihiro, Hasegawa Tokuji, Konoo Tetsuro, Ohta Mitsuhiro, Ogawa Tetsuji, Higuchi Yoshinori,
Ito Takanori

Japanese Association of the General Dentistry

総合歯科協議会は平成18年度に歯科医師の臨床研修が必修化されたことを受け、全国各大学の総合歯科を担当する部署が後進の育成や診療、研究活動などを議論あるいは協議することを目的として平成19年に発足した。平成20年以降、この協議会では継続的に総会並びに学術大会を開催しており、現在では国内のすべての大学歯学部、歯科大学が参加して総合歯科に関する議論を重ねている。昨年、協議会の今後の活動方針や方向性を検討するためにWGが結成され、まずは各大学における総合歯科担当部署の実情調査を行った。今回の第1報ではアンケートに回答のあった24大学について調査結果を報告する。構成組織については学部所属と病院所属の部署が同数であり、専任スタッフは10数名のところが多かった。総合歯科担当部署スタッフが加入している学会は日本歯科医学教育学会が最も多く、保存、補綴系の学会がそれに続いていた。この中には学会認定の指導医あるいは専門医の資格を有するスタッフが

含まれており、保存、補綴、診断、歯周病学会の専門医は平均すると各大学に1名以上存在することがわかった。大学での担当業務については卒前教育についてはプロフェッショナルリズム、コミュニケーション教育に関係する部署が多く、OSCE以降の臨床実習ではほとんどすべての大学で教育に関与していることが明らかになった。さらに、臨床研修に関しては過半数が運営の主体を担当しており、まったく関係しない部署はみられなかった。研究活動については教育手法の開発に関係している部署がほとんどであった。この結果より、診療参加型臨床実習の推進や歯科医師臨床研修の充実のために大学において総合歯科を担当する部署の果たす役割は大きく、臨床実習や臨床研修が今後さらなる展開を図るためだけでなく、将来の総合歯科を担う後進育成のためにも「総合歯科」に対する合意形成が必要不可欠であることが示された。

大学における総合歯科の現状 —第2報：臨床・教育・研究のテーマ（合意形成に向けて）—

○木尾哲朗, 長谷川篤司, 藤井規孝, 田口則宏, 多田充裕, 小川哲次, 樋口勝規, 伊藤孝訓
日本総合歯科協議会

Current situation of general dentistry in the university —report 2: the theme of general dentistry—

○Konoo Tetsuro, Hasegawa Tokuji, Fujii Noritaka, Taguchi Norihiro, Ohta Mitsuhiko, Ogawa Tetsuji, Higuchi Yoshinori, Ito Takanori
Japanese Association of the General Dentistry

日本総合歯科協議会は平成19年度に発足し、翌年以降、総会並びに学術大会を継続して開催してきた。「総合歯科」という領域は漠然としており、それぞれに異なるイメージを思い浮かべることが多い。そこで昨年、今後の活動方針や方向性を検討するためにWGが結成され、各大学における総合歯科担当部署の実情についてアンケート調査を行った。第2報では今回行ったアンケート調査の主たる目的ともいえる「総合歯科」が取り扱うべきテーマについての各大学の考えに焦点を絞り、大学における総合歯科の臨床・教育・研究のテーマに関する合意形成に向けて検討を始めたことを報告する。アンケートの実施に先立ち、「総合歯科」のテーマに関係すると思われる内容を予めWGで検討し、プロフェッショナリズム、医療面接、診察・診断、治療、ヘルスプロモーションの5項目に大別した。さらに、プロフェッショナリズムについては歯科医師の責任と倫理、コミュ

ニケーション、チーム医療、生涯学習と社会性、歯学教育の5項目に分類し、これらに関して合計53個の各論的な項目を選出した。アンケートは53個の項目について、①すでにコアとして考えている(2点)、②今後検討する(1点)、③わからない(0点)、④難しいと考える(-1点)を選択する形式とし、現在の状況と「総合歯科」の合意形成を念頭においた(学会とした場合に扱うべきテーマを考えた)場合の2つを対象に回答してもらうこととした。その結果、「患者中心の歯科医療」「医療面接」「総合歯科治療計画」は過半数以上の大学で現在テーマとされていることが明らかとなり、各項目の得点の比較から「医療倫理」「チーム医療」「生涯学習」の大項目に含まれるものは「総合歯科」の合意形成に関するキーワードとなり得ることが示唆された。しかしながら、その一方で新たな疑問も生じた。今後さらなる議論、検討が必要であることがわかった。

大学における総合歯科の現状—第3報：一般歯科医に関する諸外国での認識—

○多田充裕, 藤井規孝, 田口則宏, 長谷川篤司, 木尾哲朗, 小川哲次, 樋口勝規, 伊藤孝訓
日本総合歯科協議会

Current situation of general dentistry in the university —report 3: Recognition in foreign countries about general dental practitioner—

○Ohta Mitsuhiko, Fujii Noritaka, Taguchi Norihiro, Hasegawa Tokuji, Konoo Tetsuro, Ogawa Tetsuji, Higuchi Yoshinori, Ito Takanori
Japanese Association of the General Dentistry

現在、日本の歯科医師の大半は、専門に特化しない一般歯科に携わっているが、卒前・卒後教育において一般歯科医に必要とされる基本的な臨床スキルの習得レベルの設定は、各機関によってまちまちであるのが現状と思われる。そこで、グローバルスタンダードの検索が必要と考え、諸外国の一般歯科医に関する認識について検討してみることにした。

アメリカでは、歯科医師免許取得時点ですべてが一般歯科医となり、その後歯科大学で専門医養成プログラムを修了した者が専門医となる。一般歯科という専門分野はないが、一般歯科医のためにAcademy of General Dentistryという学会が設立されており、公認のコースで研修し検定試験に合格すると一般歯科の認定医を取得することができる。一方、ヨーロッパでは、ある一定レベルの歯科医療をEU圏内のどの国でも提供できるように、国の事情も考慮したほぼ共通の研修プログラムを各国で用いているという特徴がある。イギリスを例にあげる

と、一般的に卒後2年間、大学で一般歯科医としてのプログラム(General Professional Training)を修了し、その認定試験に合格しないと専門医のコースに進めないことになっている。また、韓国では歯科大学の偏差値が医科大学より高く、ソーシャルステータスも高いため、近年、欧米の教育システムを踏襲するようになっている。

以上のように、諸外国では専門医だけでなく一般歯科医も軽視せず、その研修プログラムを練り上げ、厳しい検定試験を課すようになっている。ネットワークを用いて世界中の情報を容易に共有することができるようになった今、我が国でも、グローバルな研修プログラムをもとに、幅広い臨床能力を持った一般歯科医の養成に取り組む必要がある。それを遂行するには、一般歯科に深く関わる総合歯科という分野が適していることが示唆された。

ポスター発表

7 月 20 日 (金) 9:30～17:00 ポスター会場 (コンベンションホール東)

P-1 ～ P-72

ポスター討論 16:00～17:00

7 月 21 日 (土) 9:30～15:50 ポスター会場 (コンベンションホール東)

P-73 ～ P-132

ポスター討論 13:00～14:00

ストレス対処能力SOCが研修歯科医のメンタルヘルスに及ぼす影響

○寶田 貫、角 義久、浅田徹之介、樋口勝規
九州大学病院口腔総合診療科

Influence of stress coping ability (SOC) on the mental health status of dental trainee

○Takarada Tohru, Sumi Yoshihisa, Asada Tetsunosuke, Higuchi Yoshinori
Division of General Oral Care, Kyushu University Hospital

【目 的】

ストレス対処能力を示すSOC(Sense of Coherence)が研修歯科医のメンタルヘルスに及ぼす影響を調べた。

【方 法】

本院研修歯科医 60 名にアンケート調査(SOC-13, GHQ-28)を実施した。SOC-13 の回答は 7 件法(1～7 点)で求め、高得点ほどストレス対処能力が高いことを示す。GHQ-28 は 4 件法(0～3 点)で、低得点ほどメンタルヘルスが良好なことを示す(cut-off point: 23/24, 24 以上はメンタルヘルス不良)。調査は研修開始月、開始後 3 ヶ月、6 ヶ月、9 ヶ月、修了月の計 5 回行った。被験者を研修開始月の SOC-13 得点で四分位階級分けし、それぞれの GHQ-28 得点を分散分析法ならびに χ^2 検定で分析した。

【結 果】

有効回答数は 49 (82%) で、四分位階級別 SOC-13 得点は、第 I 四分位(低 SOC 群): 39-56 点、第 II 四分位(中低 SOC 群): 57-63 点、第 III 四分位(中高 SOC 群): 64-68 点、第 IV 四分位(高 SOC 群): 69-76 点であった。GHQ-28 得点は低 SOC 群で 24.3,

28.7, 30.3, 25.8, 23.3/中低 SOC 群で 22.1, 25.7, 26.2, 21.8, 19.5/中高 SOC 群で 16.6, 18.8, 17.3, 19.3, 14.8/高 SOC 群で 14.7, 14.9, 15.7, 12.8, 12.8 と変動し、分散分析の結果、四分位階級間および研修時期で有意差を認めた。次に、各時期におけるメンタルヘルス不良者の割合を χ^2 検定した結果、研修開始月では SOC 四分位階級間で差がなかったが、研修開始後 3 ヶ月と 6 ヶ月では低 SOC 群と中低 SOC 群で不良者の割合が増加、9 ヶ月では低 SOC 群で不良者の割合が増加していた。

【考 察】

SOC は得点が高いほどストレスへの対応能力が高く、健康維持能力が高いと評価される。本研究では、高 SOC 得点者ほど、メンタルヘルスは良好でその変動も少なかった。一方、低 SOC 得点者では、研修途中でメンタルヘルス不良者が有意に増加した。SOC が研修歯科医のメンタルヘルスの変動予測に利用できる可能性が示唆された。

臨床研修歯科医のメンタルヘルスに影響を与える要因の検討

○浅田徹之介、寶田 貫、角 義久、樋口勝規
九州大学病院口腔総合診療科

The Examination of the factors affecting the mental health of trainee dentists

○Asada Tetsunosuke, Takarada Tohru, Sumi Yoshihisa, Higuchi Yoshinori
Division of General Oral Care, Kyushu University Hospital

【目 的】

平成 18 年より歯科医師臨床研修が必修化され、研修歯科医の身分・処遇が労働者として大幅に改善され臨床研修に専念できる環境が整備された。しかし研修必修化後も、研修歯科医のメンタルヘルスに起因する研修の中断事例や未修了事例が報告されている。臨床研修施設側は、研修歯科医のメンタルヘルスを把握し、適切なメンタルヘルス・サポートを行う必要がある。本研究は研修歯科医のメンタルヘルス・サポート体制の構築に資することを目的に行った。

【方 法】

平成 23 年度本院研修歯科医 63 名を対象にアンケート調査を行った。調査票は GHQ28 (メンタルヘルスの評価)、SOC (ストレス対処能力の評価)、JCQ (職業性ストレスの評価) を使用し、調査時期は、「研修開始月」、「3 か月後」、「6 か月後」、「9 か月後」、「12 か月後」の 5 回とした。GHQ28 得点を cut-off point: 23/24 で 2 群に分け、メンタルヘ

ルス良好群・不良群とし、これを従属変数とした。「出身大学」、「研修プログラム」、「性別」、「SOC 得点」、JCQ 調査票の「仕事の要求度」「仕事のコントロール」「上司の支援」「同僚の支援」の計 8 項目を独立変数として、ロジスティック回帰分析を行った。

【結 果】

1 年間を通して「出身大学」、「研修プログラム」、「性別」、JCQ 調査票の「仕事の要求度」「仕事のコントロール」「上司の支援」「同僚の支援」に影響は認められず、「SOC 得点」のみが影響を示した。

【考 察】

本研究により、研修歯科医のメンタルヘルスには、全期間を通じて「SOC」が影響していることが明らかになった。この結果より研修歯科医のメンタルサポートのためには SOC を考慮した体制整備を行う必要があることが示唆された。

文部科学省採択学生支援推進事業「臨地体験と就業情報通信システム構築による歯学生の就業支援強化」の取組

○埴岡 隆，池邊哲郎，尾崎正雄，小島 寛，佐藤博信，高橋 裕，廣藤卓雄
福岡歯科大学

Career Support Education for Dental Students in the Program for Promoting University Education and Student Support, Theme B

○Hanioka Takashi, Ikebe Tetsuro, Ozaki Masao, Kojima Hiroshi, Sato Hironobu, Takahashi Yutaka, Hirofuji Takao
Fukuoka Dental College

福岡歯科大学の取組が、我が国の高等教育の質保証の強化に資することを目的とした平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラムに採択された。学士力の確保や教育力向上のための400校の取組がプログラムに選定されており、本取組は、学生の歯科医師の能力向上への意欲を高めるとともに就業への意識・態度、職業倫理観の向上、就業先と学生のニーズの適合を図り遠隔地等就業の適正化を行うことを目標とした。

5年生を対象に、都市部や離島・僻地などの遠隔地における多様化した歯科診療や口腔ケアの地域医療の臨地見学（3年間42施設）と見学体験の報告会を開催し、特徴のある優れた診療施設における臨地体験を共有するとともに、離島診療、口腔医学の実践、障害者の診療、地域医療、国際経験、歯科医師会役員、医科大学口腔外科教授等、特徴のある優れた歯科医師キャリアを持つ男女の歯科医師を招聘し、キャリアパス講演会を

開催した（3年間25名）。また、口腔医学の実践および訪問診療等の一般医学の知識を活かした特色ある優れた診療施設の視察・取材による就業先のきめ細かな情報等施設情報（16都府県、離島・僻地を含む60施設）、在学生の関心が高い近い将来像に関わる勤務歯科医師キャリアに関わる情報（52件）、求人情報、学生の臨地体験レポート等をデータベース化し、勤務から開業に至るシームレスな就業支援の情報の検索閲覧、個々の学生の検索履歴等のポートフォリオ情報の活用、モバイル、外部公開等様々なICT機能を搭載した就業情報通信システムを構築した。さらに、臨地体験報告会に口腔医学の実践、病院歯科勤務、国際人としての歯科医師キャリアの形成を課題としたシンポジウムを併設したフォーラムを開催し、キャリア形成の観点からの討論を通じてキャリア形成教育学習に関わる取組の発展性を検討した。質問紙による事後調査では学生から高い評価が得られた。

臨床実習を支援する新しいスキルス・ラボ

○伊佐津克彦，長谷川篤司，馬谷原光織，山本松男，井上美津子，宮崎 隆
昭和大学歯学部

Development of a new concept skill's laboratory which supports clinical training

○Isatsu Katsuhiko, Hasegawa Tokuji, Mayahara Mitsuori, Yamamoto Matsuo, Inoue Mitsuko, Miyazaki Takashi
Showa University School of Dentistry

本学では学生の臨床技能教育の成果としては、多くの単純な行動目標の網羅ではなく、複数の行動目標を統合して自発的に臨床に対応できる能力の習得が重要であると考えている。そこでまず、コンピテンシーを制定して卒業時の目標を具体的な人間像として臨床能力を明文化し、コンピテンシーへの到達度を評価するために統合された客観的臨床技能評価（iOSCA）を実施している。

この評価課題として、歯科的疾患だけでなく全身的健康状態をも含めた高度な医療面接、患者ロボットを用いた診療中の緊急時対応、VP（バーチャルパーシェント）による確実な診察、診断、診療録の理解と診療内容の自発的選択を含む歯科的臨床技能などを採用している。

教育手法としては当然、診療科を横断する診療参加型臨床実習の充実が最重要課題であるが、理解の得られる患者が十分に準備できるわけではなく、これを補償・支援するためには、診療

参加の実施件数などだけでなく、診察診断の深い知識や診療実施に伴うリスクおよびその対応、統合された臨床技能を習得することのできる装置を設備したスキルズラボの整備も重要であると考えている。

一方、学生のモチベーション向上や生涯学習の修得をも視野に入れ、臨床技能の成果習熟状況を画像メディアや動画メディアとして電子ポートフォリオに収載し、指導者からのフィードバックとともに臨床実習期間を通して十分な振り返りができるシステムの構築を図ることが重要と考えた。

そこで、本学では、高度な臨床技能教育を実現する装置を装備するシミュレーター14台、歯科用ユニット4台、患者ロボット2台、医療面接室4室を施設したスキルス・ラボを整備するとともに、臨床技能の習熟状況確認のための電子ポートフォリオシステムを充実させたので、その施設の概要と使用状況を報告し紹介する。

臨床研修歯科医に対する地域医療研修に関する達成度と満足度の評価について

○梅澤幸司¹⁾、後藤田宏也²⁾、葛西一貴³⁾、五関たけみ³⁾、黒木俊一⁴⁾、牧村英樹⁵⁾、長濱文雄⁶⁾、伊藤孝訓⁶⁾、和田守康⁵⁾、牧村正治⁷⁾

日本大学松戸歯学部、¹⁾障害者歯科学講座、²⁾公衆予防歯科学講座、³⁾歯科矯正学講座、⁴⁾顎口腔機能治療学講座、⁵⁾再生歯科治療学講座、⁶⁾歯科総合診療学講座、⁷⁾社会歯科学(歯科医学教育学)講座

Evaluation about level of attainment and satisfaction on community medical training for dental trainee dentists

○Umezawa Koji¹⁾, Gotouda Hiroya²⁾, Kasai Kazutaka³⁾, Goseki Takemi³⁾, Kuroki Toshikazu⁴⁾, Makimura Hideki⁵⁾, Nagahama Fumio⁵⁾, Ito Takanori⁶⁾, Wada Moriyasu⁵⁾, Makimura Masaharu⁷⁾

Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ¹⁾Department of Special Needs Dentistry, ²⁾Department of Preventive and Public Oral Health, ³⁾Department of Orthodontics, ⁴⁾Department of Oral Function and Rehabilitation, ⁵⁾Department of Renascent Dentistry, ⁶⁾Department of Oral Diagnostics, ⁷⁾Department of Social Dentistry (Dental Education)

【目 的】

地域医療研修は、研修目標の1つとしてとして設定されている基本習熟コースの医療管理・地域医療と基本習得コースの地域医療における知識・態度・技能を身につけるとい一般目標への到達に大きな役割をはたしていると考えられる。日本大学松戸歯学部付属病院の歯科医師臨床研修では、同時に複数の研修協力施設での地域医療研修の充実に努めている。本報告では歯科医師臨床研修のより充実した内容プログラムの改善と向上のために、地域医療研修に対する達成度と満足度の自己評価についての調査を行った。

【対象および方法】

平成23年度本付属病院の臨床研修歯科医を対象に地域医療研修に関するアンケート調査を行った。調査内容は、特別養護老人ホーム、福祉作業施設、障害者口腔保健センターおよびグループホームに関して100%を上限とした達成度と満足度の自己評価と自由記載式である。

【結果および考察】

地域医療研修における達成度および満足度はそれぞれ平均で、75%、80%で、相関は $r=0.60[p<0.001]$ であった。施設別では特別養護老人ホーム(73%、79%)、福祉作業施設(73%、77%)、障害者口腔保健センター(76%、79%)およびグループホーム(77%、85%)であった。研修歯科医の感想や要望においては、他の職種とのチームワークの重要性、障害に対する接応と対応の必要性や情報の共有の必要性、またコミュニケーションの取り方や治療の仕方を学んだなどの内容が多かった。一方、研修時間の不足の指摘、医療関係者や職員の説明・指導について研修時間の増加の要望もあり、今後の検討課題と考えられた。特に新歯科医師研修制度では、社会福祉施設、介護老人保健施設等の活用により地域保健や福祉の分野についての見識を深めることを重視している。本付属病院においても地域医療研修としての本研修のさらなる充実に努めたい。

歯科医師臨床研修における Significant Event Analysis を用いた振り返り

○吉田礼子¹⁾、松本祐子¹⁾、諏訪素子¹⁾、志野久美子¹⁾、河野博史¹⁾、岩下洋一朗²⁾、田口則宏²⁾
¹⁾鹿児島大学病院歯科総合診療部、²⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯科医学教育実践学分野

Reflection by Significant Event Analysis in postgraduate dental clinical training

○Yoshida Reiko¹⁾, Matsumoto Yuko¹⁾, Suwa Motoko¹⁾, Shino Kumiko¹⁾, Kono Hiroshi¹⁾, Iwashita Yoichiro²⁾, Taguchi Norihiro²⁾

¹⁾General Dental Practices, Medical and Dental Hospital, Kagoshima University, ²⁾Department of Dental Education, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences.

【目 的】

Significant Event Analysis (以下SEA) は、研修生活やそれに関連する活動を通して発生する“意味のある”出来事に基づき、様々な角度から観察、分析、評価を行うもので、プロフェッショナルリズム教育として重要な振り返りツールの一つである。本院では、平成23年度臨床研修から、SEAを取り入れ、それを発表・検討するSEAセッションを実施した。その概要と、研修歯科医を対象とした事後アンケートから検証を行う。

【方 法】

研修歯科医を対象として、SEAを用いた振り返りを実施した。SEAで取り上げる事例は、研修上起こりうるすべての出来事のなかでも自己の臨床能力開発に関するものとした。研修歯科医は、①SEAシートに記載し、②その中から選んだ事例をSEAセッションで発表し、同僚の研修歯科医や指導歯科医と一緒に検討を行った。SEAセッション終了後、発表者に対し

て、1. 記載について、2. 発表・検討について、3. その他からなるアンケートを実施した。

【結 果】

SEA記載に関しては、テーマの選択や分析が難しく、自分の内面を表現するのに抵抗を感じる者もあったが、自分の行動を振り返ることの意義を理解できたとの意見が多かった。発表・検討に関しては、自らの体験を正確に伝え、共有することで、新たな気づきが得られたとの回答が多く、SEAセッションを肯定的に捉える意見が多かった。

【考 察】

今回、歯科医師臨床研修で実施したSEAセッションでは、当事者が自らを構造的に振り返り、それを言語化して他者と共有することで、より深い気づきを得ることが可能であった。また、このSEAを効果的な学びの場として活用していくためには、よりよい環境作りが重要であると考えられた。

歯科矯正学臨床実習に対するルーブリックの導入試行

○佐藤嘉晃¹⁾、八若保孝²⁾、飯田順一郎¹⁾

¹⁾北海道大学大学院歯学研究科歯科矯正学教室、²⁾北海道大学大学院歯学研究科小児・障害者歯科学教室

Trial introduction of rubric for the dental practice in orthodontics

○Sato Yoshiaki¹⁾, Yawaka Yasutaka²⁾, Iida Junichiro¹⁾

¹⁾Department of Orthodontics, Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University, ²⁾Department of Dentistry for Children and Disabled Person, Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University

【緒言】

北海道大学歯学部の総合教育期に行われる歯科矯正学臨床実習では、「1. 実際の新患(もしくは学生自身)についての診査、資料調整、分析実習、および診断と治療方針についてのディスカッション、2. 相互実習による舌側弧線装置の作製、装着、撤去、3. 相互実習とタイポドントによるマルチブラケット装置の実習、4. 外来見学(教授診断見学を含む)」が実施されている。これら実習全体を通じての評価は、従来の方法では困難な面もあり、パフォーマンス課題への対応が可能なポートフォリオなどが望まれる部分である。今回われわれは将来的なポートフォリオ評価の導入を視野に入れ、特にアウトカムに着目したルーブリックを臨床実習において試行したので報告する。

【資料と方法】

対象は平成23年度の5年次学生60名とした。これらの学生に対して、2011年10月から12月にかけて行われた歯科矯正学臨床実習においてルーブリックを用いた。アウトカムに、1. コミュニケーション能力・人間関係能力、2. 自己学習能力、3. Common diseaseへ対応する能力、4. プロフェッショナルリ

ム、5. EBMや情報収集能力、6. 医療倫理的な思考能力、7. 患者中心の医療の方法、を設定し、これら各アウトカムに対する10点満点の自己評価をさせ、平均点を算出した。

【結果】

(1)プロフェッショナルリズムがもっとも平均点が高く、7.03であった。

(2)次いでコミュニケーション能力、自己学習能力の順でともに6点を超えていた。

(3)一方、EBMや情報収集能力や医療倫理的な思考能力はいずれも6点を下回る結果となった。

【考察】

EBMや情報収集能力、医療倫理的な思考能力については、このような観点から実習に臨む機会も少なく、これまで振り返って考える事が少なかったことも点数が低い一因であると考えられる。臨床実習では、こうしたアウトカムを様々な設定したルーブリックを積極的に取り入れて評価を行うことが有用であると考えられる。

東日本大震災における東北大学病院総合歯科診療部の取り組み

○下西 充、岩松正明、遠藤直樹、菊池雅彦

東北大学病院総合歯科診療部

Impact of the Great East Japan Earthquake on Clinical Training Program and Activities of Dental Residents at Tohoku University Hospital

○Shimonishi Mitsuru, Iwamatsu Masaaki, Endou Naoki, Kikuchi Masahiko

Division of Comprehensive Dentistry, Tohoku University Hospital

1. 東日本大震災発生直後

平成23年3月11日金曜日午後2時46分に発生した東日本大震災は、三陸沖を震源とするマグニチュード(M)9.0、最大震度7.0の大地震、さらに大津波によって東日本沿岸部を中心に壊滅的な被害をもたらした。震災発生時、研修歯科医(以下研修医)は臨床講義の聴講中であつたため、研修医の担当患者には影響はなかった。震災直後、研修医の安否、出欠を確認し、帰宅させた。

2. 震災後から平成22年度歯科医師臨床研修修了後まで

3月14日月曜日、混乱の中、直ちに研修は再開されたが、交通機関の不通、実家への避難等により研修医47名中約20名弱しか出勤することができなかった。病院に出勤できた研修医は班編成を行い、シフト表を作成して変則的な研修を行うこととなった。主な業務として東北大学病院の震災ボランティアに登録し、病院内の患者の誘導・案内、器材運搬等、病院ボランティアの主力を担った。さらに、希望者は、被災地での遺体の

検視活動にも加わった。歯科外来は天井からの漏水事故により急患対応のみとなった。3月27日金曜日、47名中35名の研修医が参加して研修修了認定式が執り行われた。

3. 平成23年度歯科医師臨床研修開始から震災2カ月後まで
平成23年度歯科医師臨床研修オリエンテーションが4月1日より始まった。オリエンテーションに参加できたのは採用者52名中48名であつた。震災の影響で研修要項等の配布物は間に合わず、他科の指導歯科医も震災後の検視活動等により協力が得られない中のスタートであつた。4月7日M7.4、最大震度6強の大きな余震が再び襲った。再度、ユニットの使用制限がかかり、通常診療はさらに2週間後となった。臨床研修が通常の体制を整えるようになるのに、震災後約2カ月を要することになった。

最後に、震災後、みなさまから多大な人的・物的支援、励まし、応援等賜りましたことを心から感謝申し上げます。

研修歯科医ワークショップからの島しょ地域歯科研修プログラムへの提言

○升谷滋行¹⁾、関 啓介²⁾、紙本 篤²⁾、齊藤邦子²⁾、黒川弘康¹⁾、高見澤俊樹¹⁾、田村豊彦¹⁾、宮崎真至¹⁾、橋本光二³⁾、桑田文幸⁴⁾
¹⁾日本大学歯学部保存学教室修復学講座、²⁾日本大学歯学部付属歯科病院系卒直後研修分野、³⁾日本大学歯学部歯科放射線教室、⁴⁾日本大学歯学部

Proposals from the participating dental residents in workshop for dental training program in islands

○Masutani Shigeyuki¹⁾, Seki Keisuke²⁾, Kamimoto Atsushi²⁾, Saito Kuniko²⁾, Kurokawa Hiroyasu¹⁾, Takamizawa Toshiki¹⁾, Tamura Toyohiko¹⁾, Miyazaki Masashi¹⁾, Hashimoto Koji³⁾, Kuwata Fumiyuki⁴⁾

¹⁾Department of Operative Dentistry, Nihon University School of Dentistry, ²⁾General Practice Residency, Nihon University School of Dentistry, Dental Hospital, ³⁾Department of Oral Maxillofacial Radiology, Nihon University School of Dentistry, ⁴⁾Nihon University School of Dentistry

【目 的】

日本大学歯学部保存学教室修復学講座では、新島、式根島及び利島の国民保健診療所へ歯科医師を派遣し歯科医療・保健活動を継続している。本学付属歯科病院・研修診療部では、3島について研修プログラムの一環として、研修歯科医と指導歯科医をチームとして派遣し、島しょ地域医療・保健研修を実施している。平成23年度島しょ地域歯科研修に参加した研修歯科医と希望者を対象に島しょ研修を振り返るワークショップ(WS)を開催した。本WSでは、島しょ研修に参加した研修歯科医と島しょ医療現場での診療経験を持つ歯科医師が集い、将来、『島しょ地域で活躍する歯科医師を育てるために』何ができるかを討論の主旨として、これからの地域歯科医療研修・教育への提言としてまとめることとした。

【方 法】

本WS参加者を無作為に8～9人ずつ5グループに分け、それぞれのグループには、島しょ診療経験者もしくは、島しょ研修プログラムを熟知したファシリテーター2名を配置し、円滑な

グループ作業に配慮した。島しょ診療・研修の問題点をKJ法にて、抽出を行い、問題の解決についてグループ内討議を実施した。更に、全体発表の場をもうけ、各々のグループ討議結果の発表を行った。その後、グループ内では討論内容を自由記載データとして作成し回収後に分析を行った。また、島しょ診療および研修に対するプレ・ポストアンケートも実施し、WS前後における研修歯科医の回答の変化についても合わせて注目し分析を行った。

【結 果】

WS全体を通して、研修歯科医、島しょ派遣歯科医および指導歯科医さらに、島しょ診療関係者のそれぞれの視点から、今後の島しょ地域医療・保健事業のありかた、臨床研修および指導方法の改善、学生教育について有用な意見がもたらされた。島しょ地域医療研修に参加して研修歯科医と島しょ派遣歯科医が一同に会したWSは、島しょ地域医療・保健に有効な提言の出来る方法であることが確認された。

修復治療の意思決定における臨床研修の影響

○久保至誠¹⁾、山邊芳久¹⁾²⁾、林 善彦²⁾

¹⁾長崎大学病院、²⁾長崎大学歯学部

Effect of Clinical Resident Training System on Decision-making in Restorative Treatment

○Kubo Shisei¹⁾, Yamabe Yoshihisa¹⁾²⁾, Hayashi Yoshihiko²⁾

¹⁾Medical Education Development Center, Nagasaki University Hospital, ²⁾Department of Cariology, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

【目 的】

われわれは修復および再修復の意思決定にかかわる要因の探索的研究に取り組んでいる。これまで、長崎大学歯学部同窓会の協力を得て、う蝕への修復介入時期、種々のう蝕および問題点への対処法に関するアンケート調査を実施してきた。その結果、修復介入時期および対処法には、術者、う蝕、患者の要因が複雑に影響を及ぼしていることが判明した。今回は、修復治療における意思決定に対する臨床研修の影響を明らかにすることを目的とした。

【方 法】

長崎大学病院研修歯科医35名を対象として、研修開始直後の2011年4月初旬と終了間近の2月下旬に、全く同じ内容の記名アンケート調査を実施した。統計学的解析には、研修前後の意思決定の変化についてはマクネマー検定を、う蝕への修復介入時期と問題点への対処法には順序ロジスティック回帰分析を、個々のう蝕および問題点への対処法にはロジスティック回帰分析を用いた。さらに、同窓会会員の既得情報から、本研究

と同条件の調査で臨床経験5年以上のデータを抽出し(77名)、比較した。

【結果と考察】

アンケートに2回とも回答した33名(回答率94%)を解析対象とした。う蝕への修復介入時期に関しては、前後の回答で45.7%が異なり、その中の66.7%は遅くなる(より進行した状態で修復介入を決定)方へ変化していた。しかし、OBに比較すると研修終了時でも早期に修復介入していた。う蝕への対象法については、う蝕の種類(慢性、急性、欠損の有無など)によって臨床研修の影響が異なった。OBとの比較から診断能力不足も一因と考えられた。コンポジットレジンの辺縁着色に対する意思決定に関しては、エナメル質窩縁で影響は見られなかったが、象牙質では認められた。

【結 論】

ある程度経験を積むことによりMI的アプローチを選択することから、臨床経験、生涯学習の重要性が示唆された。

本研究は科研費(C 23592802)の助成を受けたものである。

平成 23 年度臨床研修歯科医の院内感染対策に関するアンケート調査

○水谷太尊、海老原 隆、渥美陽二郎、永合徹也、宇野清博、関本恒夫
日本歯科大学新潟病院

Questionnaire of Infection Control Procedures for Trainee Dentists 2011

○Mizutani Masutaka, Ebihara Takashi, Atsumi Youjiro, Nagou Tetsuya, Uno Kiyohiro, Sekimoto Tsuneko
The Nippon Dental University, Niigata Hospital

【目 的】

歯科医師臨床研修の到達目標として院内感染対策の実践が挙げられている。臨床研修歯科医師の管理型研修施設と協力型研修施設における院内感染対策の実施状況を把握することを目的にアンケート調査を実施したので報告する。

【対象と方法】

平成 23 年度日本歯科大学新潟病院臨床研修歯科医 39 名のうち短期複合型の 26 名に対して院内感染対策に関するアンケート調査を実施した。アンケートは院内感染対策の標準予防策に関する内容で、管理型での実施状況と協力型での実施状況を質問した。実施できたか否かを問う項目については「はい」「どちらかという、はい」の肯定的回答と、「どちらかという、いいえ」「いいえ」の否定的回答の 4 段階の回答形式とした。

【結果と考察】

グローブの着用の肯定的回答は管理型 100%協力型 96%、患者

毎の交換は管理型 100%協力型 65%であった。手袋着用前手洗いの肯定的回答は管理型 89%協力型 77%、取り外し後の手洗いの肯定的回答は管理型 100%協力型 89%であった。手袋着用のままでのカルテ記載の肯定的回答は管理型 88%協力型 85%、筆記用具の使用は管理型 81%69%、PCの使用は管理型 73%協力型 81%であった。エアゾル対策としてのゴーグル着用の肯定的回答は管理型 81%(メガネ着用を含むと 100%)管理型は 69%(メガネ着用含むと 92%)であった。研修期間中の院内感染対策実践についての肯定的回答は管理型 100%協力型 77%であった。協力型研修施設の多くは一般歯科医院であるため、院内感染対策に関する厳格性が大学附属病院の管理型研修施設とは差がある。研修医は院内感染対策の重要性を理解しながらも、その実践には研修環境が大きく関わっていることが示唆された。

POSを基盤とした臨床教育システムの効果に関する研究

—第 4 報：研修歯科医による症例報告の分析—

○勝部直人、池田亜紀子、長谷川篤司
昭和大学歯学部歯科保存学講座総合診療歯科学部門

Research of effect of clinical education system based on POS —No.4 Analyses of clinical report of training dentist—

○Katsube Naoto, Ikeda Akiko, Hasegawa Tokuji
Department of Comprehensive Dentistry, Showa University School of Dentistry

【緒 言】

第 1～3 報で報告しているように、臨床研修必修化された 2006 年度から、総合診療歯科では研修歯科医に担当させるほぼ全ての患者に対して、問題志向型診療システム（以下 POS とする）を基盤とする診療を行わせ、その成果を症例報告にて発表させている。

今日の超高齢化社会において、保存・補綴・口腔外科等の領域を超えて、全身疾患も含めた全人的な包括的診療が必要とされる場合が多く見られ、POS の活用は多様な問題点が整理でき有効と考えられる。また POS により、患者自身が患っていると感じている事や疾患の要因まで問題点としてリストアップされるため、歯科的疾患の対処だけでなく患者中心に治療を進め、疾患の原因除去まで診療が及びやすくなる。

そこで今回、総合診療歯科における研修歯科医による症例報告を分析し、当科の臨床教育システムにより、臨床研修の目標でもある多領域にわたり全人的に臨床研修を行っているか検証したので報告する。

【症例および方法】

2009～11 年度における研修歯科医による症例報告を、臨床研

修の到達目標のうち『基本習熟コース』(1) 医療面接 (2) 総合診療計画 (3) 予防・治療基本技術 (4) 応急処置 (5) 高頻度治療①う蝕②歯髄疾患③歯周疾患④抜歯⑤咬合・咀嚼障害：①～⑤の基本的な治療 (6) 医療管理・地域医療と、『基本習得コース』(1) 救急処置 (2) 医療安全・感染予防 (3) 経過評価管理 (4) 予防・治療技術 (5) 医療管理 (6) 地域医療のうち、該当している項目を集計した。また①患者自身が患っていると感じている事②疾患の要因に言及、対応しているかについても調査した。

【結果および考察】

年度が進む毎に該当する項目が広がり、患者自身が患っていると感じている事や要因にまで治療計画が言及し、対応しているという結果を得た。これは当科の POS 基盤型臨床教育システムによって次の研修歯科医への引き継ぎを繰り返すことによって、システムを研修歯科医自身がより理解したためと考察した。

例報告の作成を通して、より POS への理解が深まり全人的な包括的診療に対応できる歯科医師の育成に役立つものと考察した。

東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修プログラムへの 歯科用CAD/CAMシステム研修の導入

○新田 浩¹⁾, 鈴木允文²⁾, 礪波健一²⁾, 梅森 幸²⁾, 大山 篤³⁾, 保木志朗¹⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院歯科医療行動科学分野, ²⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科総合診療部, ³⁾(株)神戸製鋼所東京本社健康管理センター

Introduction of dental CAD/CAM system to postgraduate clinical training program in Tokyo Medical and Dental University Hospital of Dentistry

○Nitta Hiroshi¹⁾, Suzuki Takafumi²⁾, Tonami Kenichi²⁾, Umemori Sachi²⁾, Ohya Atsushi³⁾, Mataka Shiro¹⁾

¹⁾Behavioral Dentistry, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Oral Diagnosis and General Dentistry, University Hospital of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University, ³⁾Healthcare Center, Tokyo Head Office, Kobe Steel, Ltd.

【目 的】

近年、歯科用CAD/CAMの技術が発展し、歯科臨床の様々な場面で広く臨床応用されている。東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科医師臨床研修プログラムではこの趨勢に対応すべく、平成23年度の臨床研修プログラムに歯科用CAD/CAMシステムの研修を取り入れた。今回、CAD/CAM研修の内容と本研修に参加した臨床研修歯科医を対象としたアンケート調査について報告する。

【方 法】

本研修は本院歯科医師臨床研修プログラム1A(10月～翌3月の6ヶ月本院での総合診療研修)20人、プログラム2(12ヶ月本院での総合診療研修)15人の研修歯科医を対象に行った。平成23年11月に2時間の講義を行い、聴講した研修歯科医の希望者に対し、歯科用CAD/CAMシステム(セレックAC:シロナデンタルシステムズ株式会社)の実習を3時間行った。実習を終了した研修歯科医には、患者が希望し、適応症である場合にCAD/CAMシステムによる修復処置の適用を可とした。また、CAD/CAMに関する講義・実習・臨床応用に関する21項目に

ついでアンケート調査、プログラム1A、2の研修歯科医全員を対象に行った。

【結 果】

実習に参加した臨床研修医は31人で、実際に臨床に適用した研修歯科医は7人で8ケース(In:3ケース, Cr:5ケース)であった。アンケートの結果では講義を聴いてCAD/CAMの興味が増した者69%、実際の治療を見学したいと思った者86%、CAD/CAMについてさらに勉強したいと思った者100%であった。実習参加者で実習後、CAD/CAMのイメージが実習前と変わった者81%、変わらない者19%であった。CAD/CAMは修復治療の選択肢の一つと思った者79%、どちらともいえない21%、思わない0%であった。CAD/CAMの実習を卒前で組み込むべきであると思った者42%、どちらともいえない42%、思わない16%であった。

【考 察】

CAD/CAMによる修復処置の研修を組み込むことにより、CAD/CAMによる修復処置の認識が高まり、関心度の向上に貢献できたものと考えられる。

岡山大学病院の歯科医師臨床研修における環境評価

○白井 肇, 鈴木康司, 河野隆幸, 大塚恵理, 鳥井康弘
岡山大学病院総合歯科

Environment Measure under Postgraduate Clinical Training Programs at Okayama University Hospital

○Shirai Hajime, Suzuki Koji, Kono Takayuki, Ohtsuka Eri, Torii Yasuhiro
Comprehensive Dental Clinic, Okayama University Hospital

岡山大学病院が研修機関としてより高い質を確保し、より優秀な人材から選ばれる研修機関として成長していくためには、研修状況の改善のみならず、研修環境についても、継続的な改善を目指す必要があると我々は考えている。その様な観点から、質問紙調査法に基づく教育環境評価法であるPHEEM(Postgraduate Hospital Educational Environment Measure)を、歯科医師卒後臨床研修必修化以降6年間にわたり実施し、環境評価の参考資料としているので、その結果を報告する。対象は歯科医師卒後臨床研修必修化以降6年間において、岡山大学病院に歯科医師卒後臨床研修医として単独型研修を選択した、合計215名とした。これらの研修歯科医に対して各々の研修終了直前に英国ダンディー大学医学教育センターにより開発された質問紙調査法であるPHEEMを実施した。

その結果、単独型研修において、研修プログラムに大きな変更を加えていない必修化以降の6年度間に数値として差がなかったことから、本評価法は、簡便な質問紙調査法であるにもかかわらず、ある程度の信頼性をもって、岡山大学病院の教育環境評価を示しているのではないかと推察された。40項目のうち、当初の2年間の調査において、評価数値2以下の要検討と評価された「明快な臨床プロトコルが存在する」ならびに「情報に富む新人歯科医師用ハンドブックが存在する」の2項目においては年々数値的な改善がみられているが、「研修上、不適切と思われる業務でも実施する必要がある」という点において、評価数値が2以下となっていることから、今後、この点に関して検討および改善することが必要であると考えられた。

臨床研修歯科医による研修習熟度の評価法の開発

○角 義久、伊吹慎一、王丸寛美、増田啓太郎、津田緩子、浅田徹之介、寶田 貫、樋口勝規
九州大学大学院口腔総合診療科

Development of the evaluation method concerning the degree of training achievement by the dental trainee residents

○Sumi Yoshihisa, Ibuki Teiichi, Ohmaru Tomomi, Masuda Keitaro, Tuda Hiroko, Asada Tetunosuke, Takarada Tohru, Higuchi Yoshinori
Division of General Oral Care, Kyushu University Hospital

【目 的】

当科の診療および臨床研修における指導内容は、プライマリケアを中心とした一般歯科治療と予診業務、さらにインプラントなどの高度な技術、歯周外科や小外科手術、技工も指導するなど広範囲にわたる。その中で必須の内容を効率的・効果的に研修するには、研修歯科医と指導歯科医による研修目標の設定を行い、よりリアルで適切な形成的評価システムを構築すること等が必要と考える。本研究では、研修歯科医と指導歯科医が共同で作成した臨床研修目標への到達度について、研修歯科医による自己評価と指導歯科医による評価を調査し、その当科研修における形成的評価への有効性を検討することを目的とする。

【方 法】

H18、19年度に各30回、当科研修歯科医を4人程度のグループに編成し、研修歯科医によるセミナー発表を実施した。H20年度セミナー発表の実施前に当科指導歯科医でデモ討論し、セミナーの回数や内容のブラッシュアップを行い、当科研修に必須

のテーマを抽出した。H20年度は抽出したテーマで同様にセミナー発表を行い、毎回、各テーマにおける研修期間内での到達目標を担当グループが考案し、全研修歯科医と全指導歯科医でブラッシュアップを行い、到達目標を設定した。さらに、H21、22年度に同じテーマで同様のセミナー発表を行い、前年度分をブラッシュアップし、到達目標を再設定した。今回、設定された目標より50項目をピックアップし、本年度研修前半終了時期と研修終了時期における目標到達度について、当科研修歯科医による自己評価と当科指導歯科医による研修評価のアンケート調査を行った。

【結 論】

当科での臨床研修における自己評価において、前半終了時期と研修終了時期を比較すると総合、予防、歯内、歯周、修復、義歯、口外の7領域全てで「ほぼ自分一人で行える。指導歯科医は確認程度。」との回答数が増加し、4領域(歯内、歯周、修復、口外)で到達度の有意な向上を認めた。

本院歯科医師臨床研修におけるプロフェッショナリズムの修得

○小川哲次¹⁾、岡田 貢¹⁾³⁾、津賀一弘²⁾³⁾、河村 誠¹⁾³⁾、島末 洋¹⁾³⁾、土井一矢²⁾³⁾、太刀掛銘子¹⁾³⁾、長崎信一²⁾³⁾、小川郁子¹⁾³⁾、中岡美由紀¹⁾³⁾、田中良治¹⁾³⁾
¹⁾広島大学病院、²⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院、³⁾広島大学病院歯科領域卒後臨床研修専任指導医専門委員会

Learning of Professionalism through Dental Clinical Training Course in Hiroshima University Hospital

○Ogawa Tetsuji¹⁾³⁾、Okada Mitsugi¹⁾³⁾、Tsuga Kazuhiro²⁾³⁾、Kawamura Makoto¹⁾³⁾、Shimasue Hiroshi¹⁾³⁾、Doi Kazuya²⁾³⁾、Tachikake Meiko¹⁾³⁾、Nagasaki Toshikazu²⁾³⁾、Ogawa Ikuko¹⁾³⁾、Nakaoka Miyuki¹⁾³⁾、Tanaka Yoshiharu¹⁾³⁾

¹⁾Hiroshima University Hospital、²⁾Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences、³⁾Dental Advisor Committee in Dental Clinical Training Course, Hiroshima University Hospital

【目 的】

本院では、平成22年度から研修歯科医が省察的実践家の第一歩を踏み出すにあたっての「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」をたてている(第29回日本歯科医学教育学会総会・学術大会、2010)。その後、研修歯科医は個々のニーズやレディネスのあわせて、臨床現場での多様な研修体験と事後の省察により、コンピテンスとしてのプロフェッショナリズムを修得することになる。言い換えれば、歯科医師臨床研修は研修歯科医が経験や体験に基づきながらのプロフェッショナルへと成長するプロセスである。

そこで、1年間の臨床研修におけるプロフェッショナリズムの修得状況を明らかにするために、研修期間終了時に作成した新たな「歯科医師の誓い(憲章)」と臨床研修開始時の「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」の内容を比較検討した。

【方 法】

平成23年度研修歯科医55名を対象とした。「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」は、臨床研修ワークショップ(平成23年4月3日

～4月6日)の冒頭に作成し、「歯科医師の誓い(憲章)」は、臨床研修修了式後に、前述の「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」を参照しながら箇条書きで作成した。分析では、それぞれの誓い文の記述情報を、医のプロフェッショナリズム3原則(新千年紀憲章)、臨床倫理4原則などの構成概念を用いてカテゴリー化した。

【結果と考察】

研修開始前の「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」では、社会人としてのあり方やこれからの臨床研修への期待などの表現、また技能の修得に関するものが主体であったが、研修修了時の「歯科医師の誓い(憲章)」では、患者の福利優先、無害の原則、患者の自律、社会正義責務などの構成概念が多く記述されており、新たな「歯科医師の誓い(憲章)」の作製時に、「臨床研修歯科医の誓い(憲章)」と1年間の研修体験に基づきながらプロフェッショナリズムについての深い省察が行われたのではないかと考えられる。

歯科医師臨床研修におけるチーム医療教育 歯科医師臨床研修におけるチーム医療教育

○山中玲子¹⁾²⁾, 曾我賢彦¹⁾²⁾, 吉富愛子¹⁾²⁾, 白井 肇³⁾, 鈴木康司³⁾, 河野隆幸³⁾, 鳥井康弘³⁾, 森田 学¹⁾²⁾

¹⁾岡山大学病院医療支援歯科治療部, ²⁾岡山大学病院周術期管理センター, ³⁾岡山大学病院総合歯科

Education of team medicine among trainee dentists

○Yamanaka Reiko¹⁾²⁾, Soga Yoshihiko¹⁾²⁾, Yoshitomi Aiko¹⁾²⁾, Shirai Hajime³⁾, Suzuki Koji³⁾, Kono Takayuki³⁾, Torii Yasuhiro³⁾, Morita Manabu¹⁾²⁾

¹⁾Hospital Dentistry, Okayama University Hospital, ²⁾Dental Section of Perioperative Management Center, Okayama University Hospital, ³⁾Comprehensive Dental Clinic, Okayama University Hospital

平成 24 年度診療報酬改定で「周術期口腔機能管理料」が新設された。今後さらに歯科医師の「周術期管理チーム医療」への参画が求められる。周術期管理チーム医療を担う歯科医師の育成は急務の課題である。岡山大学病院歯科医師臨床研修では、平成 23 年度から周術期管理センターを研修の場とする「チーム医療研修プログラム」を開始した。本報告では、研修歯科医のプログラムに対する関心とチーム医療に関する理解に与えた効果、プログラムの今後の課題についてアンケート調査によって検討することを目的とした。

対象は平成 23 年度岡山大学病院研修歯科医 44 名とし、周術期管理チーム医療を実際に体験させた。受講前にはプログラムに対する期待度を、受講後には満足度、有意義度について質問し、研修歯科医のプログラムに対する関心度を評価した。また、プログラム受講前後に周術期チーム医療に関する用語や職種について質問し、チーム医療に関する理解度を評価した。また、今後の改善に資するため、プログラム受講後に率直な感想

を求めた。

ほとんどの研修歯科医がプログラムに対して期待し、受講後は満足だった、有意義だったと回答した。さらに、周術期管理に関する用語について主観的理解度が向上し、チーム医療に関わる職種についての理解が深まった。プログラムに対する感想として、大学病院でしかできない医科との連携を体験できたという肯定的な意見があった一方で、事務処理や雑用が多かったという意見や受け入れ態勢を整えてほしい、もっと歯科治療をしたかったとの意見があった。

歯科医師臨床研修におけるチーム医療教育の方法として、周術期管理チーム医療の現場に実際に関与させるプログラムは、研修歯科医の関心が高く、周術期管理チーム医療に対する理解を深めることが示唆された。今後は、さらに受け入れ態勢を整え、研修医自身がチーム医療における歯科治療を行えるような工夫が必要であることが示された。

広島大学病院歯科医師臨床研修における医療連携プログラムに対する評価

○西 裕美, 田中良治, 大林泰二, 小原 勝, 小川哲次
広島大学病院口腔総合診療科

Survey of new dental clinical training course in Hiroshima university hospital

○Nishi Hiromi, Tanaka Yoshiharu, Obayashi Taiji, Ohara Masaru, Ogawa Tetsuji
Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

【目 的】

近年、医療技術の発達や社会環境の整備により平均寿命が延び、QOLを重視した医療の質が問われ、日本の医療は転機を迎えている。平成 24 年度診療報酬改定の基本方針では、がん医療をはじめとした様々な疾患において、チーム医療の促進が論点の一つとされ、「医療機能の分化と連携等を通じて、質が高く効率的な医療を実現する視点」が、改定の視点とあげられている。これに伴い、有病者治療に伴う口腔内環境の改善に対する関心が高まっており、今後は、研修歯科医に対する新しい育成カリキュラムが必要とされる。今回我々は、病診連携への期待に呼応する歯科医の育成を目的とした新しい取組みを行い、研修歯科医を対象に意識調査を行ったので、その概要を報告する。

【方 法】

対象は平成 22～23 年度の研修歯科医 98 名で、調査時期はいずれも研修初期および研修が終了した時点とした。分析には質問紙調査を用い、全身疾患を有する患者を対象とした研修に対し

て、症例調査および意識調査を行った。

【結果と考察】

医科領域からの紹介症例は月ごとに増加、多様化をみせている。医療連携の場では、単なる歯科処置だけではなく、医科領域の治療効果の向上を目的とした、より複雑な、かつ医科治療に合わせたスピードを有する全顎的管理を要求されていることがわかった。しかし、日々変動する全身状態や、複雑な患者背景の把握は、研修歯科医にとっては非常に困難であり、技術や知識、経験不足により、患者、家族、医師など医療スタッフとの行き違いが生じやすい。しかし指導医との診療を通して、リスク回避の考え方や、膨大な医療情報を絞込む術を研修時から実践的に経験を行うことができた。また、有病者に対する口腔管理の重要性を、研修医自身が経験を通して認識できた。この経験を通して、今後の歯科医師に求められる歯科医療のありかたを自覚でき、研修終了時には、有病者患者に対して躊躇する意識は大きく変化した。

臨床実習時における針刺し事故の実態調査と予防教育について —予防教育前後の比較—

○渡辺孝章, 中澤千賀子, 森田 操
鶴見大学短期大学部歯科衛生科

Investigation into the actual conditions and the preventive education of needlestick accident in clinical training —Comparison before and after preventive education—

○Watanabe Takaaki, Nakazawa Chikako, Morita Misao
The Department of Dental Hygiene, Tsurumi Junior College

【目 的】

歯科臨床は血液、体液に接する機会が多く感染に対して日頃から十分な知識と対処処法を考慮すべき分野である。当科は平成15年より3年制へと改組し、病院実習内容の充実が図られ、鶴見大学歯学部附属病院において診療参加型の実習を開始した。臨床に不慣れな学生の「針刺し事故」を未然に防ぐため、平成16年度9月の実習開始時からの事例の実態調査を行い、平成20年度8月の臨床実習オリエンテーション時に提示するかたちで「予防教育」を行なった。結果、平成21年度の事故件数は1件と激減した。今回、予防教育を行なってからの3年間(平成21～23年度)の「針刺し事故」の件数の調査を行い、その教育効果について評価する目的で教育前(過去3年間)と比較した。

【方 法】

平成16年9月から平成21年2月までに歯学部附属病院臨床実習に参加した延べ人数1403人を対象に「針刺し事故」についての実態調査を行った。発生の時間帯、曜日、状況などを項目別に図表にし、さらに具体的な事例を箇条書きにまとめた。調査

資料を平成21年度4月から平成23年度(平成24年2月まで)の3年間に臨床実習に参加した延べ人数763人の学生を対象に登院前のオリエンテーション時にプロジェクターを使用し実態を提示するかたちの予防教育を行なった。教育効果の評価は、教育前後3年間の件数について推計学的に比較した。

【結 果】

教育後の発生件数は3年間で4件であった。教育の効果を評価するために、教育前の過去3年間に臨床実習参加した延べ人数919人の発生件数14件と比較した。結果、両者間に推計学的に有意差が認められ、臨床実習前の「予防教育」が有効であったことが示唆された。

【考 察】

予防教育後、事故の件数が減少した理由として、発生しやすい要件と事例の提示により、注意しようとする自覚が生まれたと考えられる。今後、ポスターなどの掲示、少人数制で実際の臨床の場を想定した事故予防教育の方法を検討中である。

歯科衛生士養成機関における医療安全教育の現状

○小原由紀¹⁾、近藤圭子¹⁾、遠藤圭子¹⁾、白田千代子¹⁾、大塚絃未¹⁾、品田佳世子¹⁾、俣木志朗²⁾

¹⁾東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科、²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯科医療行動科学分野

Survey and Analysis of Medical Safety Education at Dental Hygienist Schools

○Ohara Yuki¹⁾, Kondo Keiko¹⁾, Endo Keiko¹⁾, Hakuta Chiyoko¹⁾, Otsuka Hiromi¹⁾, Shinada Kayoko¹⁾, Mataka Shiro²⁾

¹⁾School of Oral Health Care Sciences, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Section of Behavioral Dentistry, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

近年、歯科臨床における医療安全への認識は高まっており、歯科衛生士や歯科衛生士学生のヒヤリ・ハットの実態や針刺し事故に関する報告はなされているが、歯科衛生士卒前教育における医療安全教育の実態に関する報告はほとんどないのが現状である。そこで、本研究では、歯科衛生士養成機関を対象に、歯科衛生士養成カリキュラムにおける医療安全教育の実態を明らかにすることを目的として調査を行った。

【方 法】

平成 23 年 10 月、歯科衛生士養成校 152 校に、医療安全教育に関する質問調査票を郵送にて配布した。質問項目は、医療安全教育の実施内容、カリキュラムの位置付け等についてである。

【結果と考察】

調査票の返送のあった 73 校分のデータを分析対象とした(回答率 40.1%)。医療安全教育を実施している科目で最も多かったのは、歯科診療補助論(84.9%)であった。50%以上の養成機

関で、医療安全に関するマニュアルや、インシデントレポートを作成していると回答していたが、一方で医療安全教育が「不十分」、「どちらかというところ」であると回答している養成機関は 67.1%に上った。一貫性をもって医療安全教育を実施していると回答したのは、23 校(31.5%)であり、医療安全に関する独立した科目を設定していたのは 6 校(8.2%)であった。医療安全教育の具体的内容に関しては、用語の整理、安全の意味や捉え方など、知識の獲得にとどまるものが多くを占め、エラーを起こすメカニズムや医療事故の分析方法、リスクマネジメント等の項目については、半数以上が未実施であると回答した。歯科衛生士には、卒後臨床研修制度がなく、卒前における医療安全教育へのニーズは極めて高いと考えられる。歯科衛生士養成課程における医療安全教育の充実には、実習・演習場面での適用など、より歯科衛生士の臨床の場に即した教育方法の開発が必要であると考えられた。

歯科衛生士教育での臨床実習時における学生のストレス変化に関する検討

○鈴鹿祐子、麻生智子、麻賀多美代、酒巻裕之、日下和代

千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科

A Study of Students' Stress in Clinical Practice in Dental Hygienist Training

○Suzuka Yuko, Aso Tomoko, Asaga Tamiyo, Sakamaki Hiroyuki, Kusaka Kazuyo

Department of Dental Hygiene, Faculty of Health Care Sciences, Chiba Prefectural University of Health Sciences

【目 的】

歯科衛生士教育において、学生の多くは初めての臨床実習や実習試験で、不安や緊張感を持つ。一定の緊張感を持つことは必要であるが、不安や焦りなどからの過度な緊張は、十分に実力を発揮できない問題を生じる可能性がある。本研究では歯科衛生士学生にとり、初めて患者と直接関わる歯科診療室における臨床実習時のストレスを把握する目的で調査を行った。

【対象および方法】

対象は A 歯科衛生士養成学校の 3 年生 22 名で、2011 年 6 月 5 日から 30 日の間に調査した。内容は、初日の実習開始前と最終日の実習終了時に、CgA(蛋白補正時)、sAMY、STAI の測定、自由回答式によるアンケートを実施した。

【結果および考察】

分析は、調査対象者のうち測定や回答全てが適切であった 21 名の結果について行った。①実習前の平均 CgA(蛋白補正時)は 7.7 ± 4.2 pmol/mg、実習終了時は 4.1 ± 1.9 pmol/mg であ

り、有意差を認めた($p < 0.01$)。②実習前の平均 sAMY は 54.0 ± 38.3 KU/L、実習終了時は 77.1 ± 53.4 KU/L であった。③実習前の平均 STAI(状態不安)は、 56.7 ± 9.1 、実習終了時は 41.2 ± 8.9 であり、有意差を認めた($p < 0.01$)。④自由回答では、実習前に「緊張する」12 名、「不安である」6 名、「リラックスしている」2 名などの回答が得られた。

学生は実習が終了すると不安が低くなるのに対し、ストレスについては、CgA(蛋白補正時)は低下するが、sAMY は、スコアが上がっていく傾向があり、精神的ストレスは低下しても、実習の疲れや、レポートや課題の負担から肉体的なストレスは、強くなることが示唆された。

実習時におけるストレスについては学生によって要因が複雑であったため、教員は客観的評価によるサポート方法を検討するだけでなく、学生とコミュニケーションを積極的にとり、学生個々の心身状態を理解することが必要であると思われた。

「いわゆる病院ボランティア」としての早期体験実習

○浅沼直樹, 中村直樹, 宮崎晶子, 佐藤治美, 土田智子, 筒井紀子, 原田志保, 菊地ひとみ, 小菅直樹
日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科

Early exposure as “so-called hospital volunteer”

○Asanuma Naoki, Nakamura Naoki, Miyazaki Akiko, Sato Harumi, Tsuchida Satoko, Tsutsui Noriko, Harada Shiho, Kikuchi Hitomi, Kosuge Naoki
The Nippon Dental University College at Niigata, Department of Dental Hygiene

医療現場への参画は、いわゆる専門職でなくとも行えるものである。本学では平成21年から「病院ボランティア」としての立場で早期体験実習を行っている。今回は、その概要を報告する。

「病院ボランティア」とは病院内で医療専門職やその他の職員と協力して、患者が少しでも良い状態のもとで治療を受けることができるように、自発的に無報酬で奉仕する人のことである。本実習は、歯科衛生士の本格的な専門的教育が開始される第1学年後学期に、学生が専門職の実習生という立場ではなく、「いわゆる病院ボランティア」として病院におけるチーム医療の現場を体感し、医療に対する興味を高め、患者や病院スタッフと良好なコミュニケーションを行えるようになることを目的としている。対象学生は前学期に「面接・接遇技法」演習において一般的な接遇技法をすでに学習済みの第1学年である。実習内

容は、日本歯科大学新潟病院（院務部、病棟、外来手術室、各診療科）および医科病院（病棟、外来）における病院案内、患者誘導、清掃、衛生用品の作成、カルテ整理、看護助手としての作業など様々である。評価は実習場所の担当者が到達目標である意欲と態度について行い、実習終了後には担当者と学生にアンケート調査を実施した。

本実習は、教育カリキュラムに基づくものであり、学生自身の自発的な作業ではないため、厳密には病院ボランティアとはいえない。しかし、実習終了後のアンケートでは、学習意欲の向上や医療への興味の増大など、実習目的を達成している意見が多かった。また上級生の歯科衛生士学生の臨床実習に取り組む姿を見ることによって、自らの進む道について再認識できるなどの効果もあった。今後は実習時期・実習内容の検討や実習場所の拡大などを図り、一層充実した実習としたい。

日本歯科大学新潟短期大学における実践的な食生活指導教育への取り組み —第2報—

○中村直樹, 佐藤治美, 原田志保, 菊地ひとみ
日本歯科大学新潟短期大学

The education for survey of diet in The Nippon dental university college at Niigata —Part 2—

○Nakamura Naoki, Sato Harumi, Harada Shiho, Kikuchi Hitomi
The Nippon Dental University College at Niigata

食生活は健康を保障する重要な因子であり、歯科は食生活に最も介入しやすい診療科と考える。われわれは歯科臨床において食生活の改善指導を行うための簡便で有用な指導方法を模索してきた。第23回日本歯科教育学会において、歯科衛生士学生への教育実践を「伝統的な和食を中心とした栄養素を考えない簡便な食事指導法」として発表した。

歯科衛生士法施行規則第11条の改正に伴い、従来の「栄養指導」という科目がなくなった。国家試験の出題基準では「四歯・口腔の健康と予防に関わる人間と社会の仕組み、X 栄養・食生活の基礎」と変更された。食事指導については「八 歯科保健指導論」へと改編された。学校独自のカリキュラムとして食に関する授業を、今後どの様に構築・実施するかが課題となっている。

本学では「生化学」と「栄養・食生活概論」の授業で栄養・食生活の基礎を学習し、「栄養指導」についても「栄養・食生活概論」で学ぶカリキュラムを実施している。その中で栄養素を話題に

せず、より実践的で簡便な食事指導法の演習を導入した。具体的には学生自身の食生活記録をつけ、学生本人で自らの食生活の見直しを試みている。また、同時に食事バランスガイドを利用し自分の食生活の確認も行っている。食生活を見直すレポートを作成する前に、①ヒトの食性にもとづく食事、②伝統食の重要性、③未精製の『でんぷん』が健康維持の要であることを中心に講義を行なった。その結果、多くのレポートで自分の食に対する知識が曖昧で間違っていたかが理解出来たと考察していた。学生の食生活調査結果の傾向をまとめると、主食が少なく未精製の穀類を日常的に食べておらず、また副菜の摂取量が少なかった。生活習慣として運動習慣がないものが多かったことも問題であった。

今後も食生活指導の重要性を知り、食生活に介入する事ができる歯科衛生士の育成のためのカリキュラムや方法論を検討していきたい。

歯科保健医療専門職協働に関する意識調査 —第二報：歯科衛生学生、昨年との比較—

○室賀 麗, 鶴田 潤, 松川千夏, 森尾郁子
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野

A survey on attitudes toward collaboration of dental professionals among dental hygiene students —Comparison of Y2011 and Y2012—

○Muroga Rei, Tsuruta Jun, Matsukawa Chinatsu, Morio Ikuko
Dental Education Development, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

近年の歯科界の状況として歯科医師過剰問題や歯科衛生士不足が指摘される一方、チーム歯科医療や認定制度等が推進され、より良い協働関係構築が重要となっている。我々が昨年行った調査から、歯科衛生学生と現場の歯科医師の協働意識に不一致があることが明らかとなり、より現場に即した内容での卒前教育が必要であると考えられた。さらに歯科衛生学生の教育課程における意識変化を把握するため、昨年に引き続き調査を実施した。

【方 法】

対象は東京都歯科医師会附属歯科衛生士専門学校の全学生(H23:89名, H24:86名)で、平成23年3月と平成24年3月、集団配票法により質問票調査を実施し、結果を比較した。

【結 果】

円滑な歯科診療に必要な職種について昨年の結果と比較したところ、「歯科助手」と回答した者は2年:61.5%→80.

8%, 3年:76.9%→80.8%で、意識差は認められなかったが、昨年の3年:43.2%は今年の3年と比較して歯科助手に対する必要度が低かった($p=0.003$)。協働の具体的実践方法であるfour-handed dentistryの認知度は2年生で、「座位診療」19.2%→53.8%($p=0.01$)、「器材配置の工夫」38.5%→76.9%($p=0.005$)、「能率向上効果」53.8%→88.5%($p=0.013$)であり、昨年と比較して増加したが、「補助者の要件:有資格常勤」や「筋緊張軽減効果」を知っている者は各学年ともに少数で昨年からの変化もみられなかった。

【考 察】

昨年との比較により、歯科衛生学生の協働に関する意識の変化は特に認められず、各学年の個性が反映されたと推察される。four-handed dentistryの知識は1~2年で向上したが、補助者の要件や人間工学的な側面を深く理解することはより良い協働関係構築に重要であり、卒前教育における内容の充実が必要と思われる。

本学1年生に実施した「コミュニケーション概論」について 第1報 実施の概要

○鈴木 恵¹⁾, 小倉千幸¹⁾, 出田亜紀子¹⁾, 山田京子¹⁾, 須田真理¹⁾, 関口洋子¹⁾, 市川順子¹⁾, 野村正子¹⁾, 合場千佳子¹⁾, 池田利恵¹⁾, 内川喜盛²⁾, 岡田智雄²⁾, 大津光寛²⁾, 大澤銀子²⁾, 北原和樹³⁾, 佐藤 勉¹⁾, 小口 春久⁴⁾

¹⁾日本歯科大学東京短期大学歯科衛生学科, ²⁾日本歯科大学附属病院, ³⁾日本歯科大学生命歯学部, ⁴⁾日本歯科大学短期大学

Report of communication practice for first-year students 1 Summary of practice

○Suzuki Megumi¹⁾, Ogura Chisachi¹⁾, Ideta Akiko¹⁾, Yamada Kyoko¹⁾, Suda Mari¹⁾, Sekiguchi Yoko¹⁾, Ichikawa Junko¹⁾, Nomura Masako¹⁾, Aiba Chikako¹⁾, Ikeda Rie¹⁾, Uchikawa Yoshimori²⁾, Okada Tomoo²⁾, Otsu Mitsuhiro²⁾, Osawa Ginko²⁾, Kitahara Kazuki³⁾, Sato Tsutomu¹⁾, Oguchi Haruhisa⁴⁾

¹⁾The Nippon Dental University College at Tokyo Department of Dental Hygiene, ²⁾The Nippon Dental University Hospital, ³⁾The Nippon Dental University School of Life Dentistry at Tokyo, ⁴⁾The Nippon Dental University College at Tokyo

【目 的】

良質な医療を行うのに、患者の満足度は極めて重要になる。患者の満足度を向上させる要因は様々あるが、なかでも、医療従事者の患者に対する態度や配慮は大切である。そのため、医療従事者と患者との円滑なコミュニケーションは、欠かせない。本学では、医療人に必要なコミュニケーション能力を修得することを目的に、歯科衛生学科と歯科技工学科学生に「コミュニケーション概論」の授業を実施したので、その概要について報告する。

【方 法】

「コミュニケーション概論」は、初回のユニット以外は実習形式をとり、実施時期は1年後学期で、歯科技工学科と歯科衛生学科の両1年生が合同で行った。実施回数は1コマが80分で、計8コマとした。内容は以下の通りである。ユニット1:コミュニケーションについての講義 ユニット2:ヒューマンズリレーションズ1(第一印象) ユニット3:接遇・マナー ユニット

4:ヒューマンズリレーションズ2(一方通行・双方向) ユニット5:ヒューマンズリレーションズ3(セントオブバリュー) ユニット6:コミュニケーションスキル1(環境設定) ユニット7:コミュニケーションスキル2(傾聴・承認・質問) ユニット8:グループディスカッション(しっかり聴くための留意点)と発表、またユニット8終了後にアンケート調査を行った。

【結果と考察】

学生は学科の区別なく、「コミュニケーション」の言葉自体は認識していたが、実習形式でそれを学ぶことに、最初多少の戸惑いがあった。そのため、初回の講義から数回目までは、上手に発言出来ない学生もいた。しかし、講義が進むにつれて自ら積極的に会話に参加する学生も多くなり、コミュニケーションの技法を学ぶことの必要性が理解されてきた。学生によってコミュニケーションの得手、不得手はあるが、医療従事者として持つスキル等を確実に習得出来るよう、さらに実習内容の改善と充実を図っていく予定である。

歯科衛生士専門学校生の学習意欲の検討 —アイデンティティ・職業アイデンティティの観点から—

○前嶋亜優子, 頭山高子, 末瀬一彦
大阪歯科大学歯科衛生士専門学校

Examination of motivation of learning in dental hygienist college students —Viewpoints on identity and occupational identity—

○Maesoma Ayuko, Tohyama Takako, Suese Kazuhiko
Osaka Dental University School of Dental Hygiene

【問題と目的】

歯科衛生士教育は専門知識と技術に加え、医療人としての態度教育も重視されているが、資格取得や専門知識・技能の習得を目的とし、職業人としての意識・態度教育の必要性を認識していない者が見受けられる。

歯科衛生士学生の多くは青年期後期にあり、個人としてのアイデンティティの形成と同時に、専門職に対するアイデンティティの形成も求められる時期である。その重要なものの一つが職業アイデンティティである。

歯科衛生士学生を職業人として育成するためには、歯科衛生士という専門職業への認識と学習意欲がどのように関係しあうのかを検討する必要がある。そこで本研究では、青年期後期という時期にいる彼らの青年期のアイデンティティ変化と、専門学校生としての職業アイデンティティ萌芽・発達、どの様に関係し学習意欲を変化させていくのかを検討し、職業人として成長していくメカニズムを明らかにすることを目的とした。

【結 果】

分析の結果、学習意欲はアイデンティティの成熟度、アイデンティティ確立の成熟度、職業アイデンティティの成熟度と関連があり、それぞれが高いほど学習意欲も高い可能性が示唆された。またアイデンティティの基礎が形成された後アイデンティティ確立が形成されるということが確認されたパス解析の結果は、Eriksonのアイデンティティ発達段階論において、アイデンティティ基礎が発達初期に見られアイデンティティ確立は青年期とされていることから、妥当性のある流れであると考えられる。また、パス解析の総合効果・直接効果・間接効果の検討の結果、青年期のアイデンティティ確立が学習意欲に与える影響よりも、青年期のアイデンティティ確立が職業アイデンティティを媒介して与える影響の方が高いことが確認された。このことから、学習意欲を増加させるには、職業アイデンティティの増加を前提としたカリキュラムが有効である可能性が示唆された。

茨城歯科専門学校 2011 年度新入生における入学までの経緯に関するアンケート調査

○田中晃伸¹⁾²⁾³⁾, 権 暁成³⁾

¹⁾茨城県歯科医師会立茨城歯科専門学校, ²⁾茨城県歯科医師会, ³⁾タナカ歯科

Questionnaire to New Student about Circumstances to Entrance in Ibaraki College for Dental Hygienists in 2011

○Tanaka Akinobu¹⁾²⁾³⁾, Kwon Hyoson³⁾

¹⁾Ibaraki College for Dental Hygienists, ²⁾Ibaraki Dental Association, ³⁾Tanaka Dental Clinic

【緒 言】

茨城歯科専門学校は歯科医療のパートナーにはかせない歯科衛生士及び歯科技工士の県内における養成機関であり、茨城県歯科医師会立として歯科医師会の補助及び支援により運営されている。しかし、近年の少子化傾向及び首都圏への修学希望傾向、さらには社会的な歯科衛生士・歯科技工士の認知度の低さ、養成期間の3年制への移行などの原因により受験者数が減少傾向にある。そこで、今回、演者達は当校歯科衛生士科に入学した学生を対象に入学までの経緯に関するアンケート調査を行ったのでここに報告する。

【対象及び方法】

対象となったのは2011年度歯科衛生士科入学生53名である。無記名方式により以下の項目に関してアンケートを行った。1. 現役・非現役, 2. 入試方法(推薦・一般), 3. 当校を知った経緯, 4. 当校入学意思の決定, 5. 当校ホームページの認知度, 6. オープンキャンパスへの参加, 7. 歯科衛生士進学決定時期, 8. 歯科衛生士業務の認知度, 9. 歯科衛生士職業選択理由等で

あった。

【結果及び考察】

1. 現役48名, 非現役5名であった。2. 推薦入試入学者は86.8%であり、早期の学生獲得を優先した結果である。3. 当校を知った経緯としては高校等での進路相談は13.2%と少なく、今後は学校への認知度を高めたい。また4. 当校入学意思の決定は自分の意思79.2%が最も多かった。5. ホームページの認知度、及び、6. オープンキャンパスへの参加もそれぞれ96.2%と84.9%であり一層の工夫と充実の必要があり、7. 歯科衛生士の進学決定した時期においても、すでに高校2年生頃より決定している者が33.3%と早期からのアプローチが必要と思われる。8. 業務の認知度においてあまり知らないと答えた者が39.6%であり社会へのアピールを今後もすすめたい。9. 職業選択理由(複数回答)で最も多かったのは就職率が37名であり、社会経済的背景の影響と思われる。以上を含め、若干ではあるが調査結果を報告する。

歯科衛生士学生の進路選択の現状に関する考察—K女子短期大学において—

○中山真理, 柴谷貴子, 細見 環
関西女子短期大学

A study on Dental Hygienist students' career decision

○Nakayama Mari, Shibatani Takako, Hosomi Tamaki
Kansai Womens's College

【目 的】

歯科衛生士養成機関への入学生は歯科衛生士への道を主体的に選択したと考えられるが、K女子短期大学における学生との日常接触において、選択した進路にとり組む意欲が高くない学生の存在が感じられる。今回、入学前の進路選択へのとり組み方と入学後の選択した進路へのとり組み方を把握するとともに、進路を選ぶ力との関連が指摘されている自己効力感の観点から現状を考察した。

【対 象】

K女子短期大学歯科衛生学科3年生94名を対象に自記式質問紙調査を実施した。質問は進路選択にかかわる一般的な内容と、進路選択に関する自己効力尺度項目を歯科衛生士学生用に一部改変したものである。調査時期は平成23年5月である。

【結 果】

歯科衛生学科への入学は78%の学生が自己選択によると認識し、残りの者は教師・親の選択だとみなしていた。選択理由は、

国家資格の取得による生涯にわたる就業機会への期待が最多であり、なりたかった者は8.5%であった。自己選択によって入学した者と教師・親が選択した者では、入学後に経験した進路変更の危機の有無において有意な差がみられた。教師・親が選り入学した者は、自己効力項目において複数の職業から自分がやりたいと思い選んだことへの自信を示す評定、自分の適性と不一致を感じる場合は再考することへの自信を示す評定は低い。一方、将来どのような生活がしたいかを描くことへの自信は持ちあわせていた。

【結 論】

主体的に進路を選択していない者は、何をしたいか、何が自分に向いているかについて表明し、選択するプロセスを十分に辿ることなく本学に入学している現状にあった。入学後の学生を歯科衛生士の進路をすでに決定した者とみなすだけでなく、進路を成熟させていく過程にある者として援助的な視座からの支援が必要である。

大阪歯科大学歯科衛生士専門学校でのチーム基盤型学習法(TBL)の実践

○池尾 隆¹⁾, 鎌田愛子¹⁾, 田村 功¹⁾, 合田征司¹⁾, 吉川美弘¹⁾, 頭山高子²⁾, 前嶋亜優子²⁾, 末瀬一彦²⁾
¹⁾大阪歯科大学化学講座, ²⁾大阪歯科大学歯科衛生士専門学校

Practice of team-based learning (TBL) in Osaka Dental University School of Dental Hygienist

○Ikeo Takashi¹⁾, Kamada Aiko¹⁾, Tamura Isao¹⁾, Goda Seiji¹⁾, Yoshikawa Yoshihiro¹⁾, Toyama Takako²⁾, Maesoma Ayuko²⁾, Suese Kazuhiko²⁾

¹⁾Dept. Biochemistry, Osaka Dental Univ., ²⁾Osaka Dental Univ. School of Dental Hygienist

【目 的】

歯科医療従事者には、臨床現場で機能的に応用できる十分な専門知識や技能とともに、患者中心の視点やチーム医療の観点からのコミュニケーション能力、職責を十分に理解し絶えず自己研鑽する姿勢が要求される。一方、このようなコンピテンスを掲げる教育機関では、学生が学習に能動的に取り組む姿勢をいかに創り出すかという点に苦心している。今回私たちは、複数のコンピテンスを学習できるチーム基盤型学習法(TBL)を学習方略として実践し、終了後に行った学習者へのアンケート調査結果を分析、検討した。

【実践事例】

TBLは1年生(54名)後期の口腔生化学で、移動可能な机を備えた小教室にて行った。通常の手順に従い、1週前に①TBLのプロセスと最終個人評価方法の説明、②グループ編成(1グループ6名)、③学習テーマの提示を行い、当日、④準備確認

(個人準備確認テスト(IRAT)10分、グループ準備確認テスト(GRAT)25分、アピール&フィードバック20分)、⑤応用演習50分、⑥全体討論30分、⑦ピア評価10分を実施した。以後はテーマを変更し③～⑦を3回繰り返した。

【結果および考察】

アンケート調査では、TBLの有用性は高く(高い28%、やや高い37%)、今回の内容についても一定の満足度(高い15%、やや高い44%)を得た。自由記載では「教科書をじっくり読んだ」「皆で協力することの大切さがわかった」などと共に、「フィードバックが不十分である」などの、また、TBLの有用性を評価しない学生は「一部学生の非協力的姿勢」を改善点に挙げた。今回の結果から、TBLによる認知領域(知識)と情意領域(態度・習慣)を駆使して課題に取り組む姿勢と熱心さは講義では実現できないことや、グループダイナミクスが生まれより高水準のチームになることの重要性を改めて認識した。

学生相互実習におけるセルフケアおよび専門的歯面清掃の自己評価法の試み

○石川裕子, 柴田佐都子, 福島正義
新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学講座

Trial of a Self-Assessment Method of Self-Care and Professional Tooth Cleaning in Student's Mutual Clinical Training

○Ishikawa Yuko, Shibata Satoko, Fukushima Masayoshi
Department of Oral Health and Welfare, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

【目 的】

学生が自分自身のセルフケアと専門的歯面清掃(以下PTC)の技術的問題点を発見することを目的に自己評価法を導入して相互実習を行ったのでその効果を報告する。

【対象および方法】

当学科3年生(6期生:21人)を対象に、2011年9月の臨床実習I(90分×2コマ)において、1グループ3名(術者役、患者役、介助役)の相互実習を行った。実習は1回につき50分間とし、①歯垢染色、②PCR(Plaque Control Record)測定、③PTC、④歯垢再染色、⑤専門的歯面清掃率(Professional Tooth Cleaning Record, 以下PTCR)測定の順に行った。記録用紙には、PCR値、患者役の日常的歯磨き状況(使用歯ブラシ名、歯磨き回数、フロスの使用有無など)、PTCR値、術者役が使用した清掃器具、患者役および術者役の反省文を記載し、実習後に回収・集計した。また、反省文はKH Coderで頻出単語を抽

出し、SCAT(Steps for Coding and Theorization)で質的分析を行った。

【結果と考察】

学生のPCR値は $23.4 \pm 9.1\%$ 、歯磨き平均回数は2回/1日であった。フロスは90%の学生が使用していたが、毎日使用している者は14%であった。反省文では「フロス」「白歯部」「隣接面」などの言葉が多く抽出され、日常の反省と改善策および自己課題が挙げられていた。一方、術者役が使用した歯面清掃器具は超音波スケーラーおよびフラット型ブラシが多く、PTCR値は $68.8 \pm 14.9\%$ であった。反省文では「隣接面」「遠心」「白歯部」「染色」「確認」「見落とす」「注意」の言葉が多く抽出され、特定部位の清掃の難しさや未修得部分などの自己課題が明確になっていた。今後、臨床実習終了時期(2012年11月)に同様の実習を行い、技術の修得状況を評価する予定である。

臨床実習前態度・技能教育に対する歯学部学生の意識調査

○割田幸恵¹⁾, 荻部洋行¹⁾, 河上智美¹⁾, 鈴木淳子²⁾, 梅津糸由子²⁾, 内川喜盛²⁾

¹⁾日本歯科大学生命歯学部小児歯科学講座, ²⁾日本歯科大学附属病院小児歯科

A Comparative Study of Dental Students' Perception of Pre-clinical Advanced Practice for Undergraduate Clinical Training

○Warita Sachie¹⁾, Karibe Hiroyuki¹⁾, Kawakami Tomomi¹⁾, Suzuki Atsuko²⁾, Umezu Yuko²⁾, Uchikawa Yoshimori²⁾

¹⁾Department of Pediatric Dentistry, The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Tokyo, ²⁾Department of Pediatric Dentistry, The Nippon Dental University Hospital at Tokyo

近年の歯科医学教育改革に伴い、各歯学部における臨床実習前の臨床基礎実習の内容は、学習効果が高いと思われる実習方法を新規に取り入れ、その都度、学生からの評価も交えて検討されている。本研究では、卒前臨床教育前の歯学部第4学年の学生に対して行った統合臨床基礎学実習小児歯科学分野での態度・技能教育を検討し、平成15年度の実習実施時から平成23年度までの各年度における実習終了直後に学生を対象に行ったアンケート結果について、これまでの実習内容の変化に対応させて考察した。平成22年度日本歯科大学生命歯学部第4学年学生(以下H22群とする)を対象とし、「実習課題数の増加」や「事前課題の導入」、「実習形式の変化」等による影響について、関

連する各質問項目を平成15年度と平成23年度の第4学年学生(以下H15群、H23群とする)とクロス集計表を用いた2群間の χ^2 検定により比較した。その結果、各群の学生を取り巻く状況の違いにより結果に統計学的有意差が出たと考えられる項目(「時間配分の適切さ」等)も存在したものの、実習時間の延長をせず内容が増加した実習形式の変更に対して、各年度における学習者の実習に対する満足度は維持されていることが確認された。このことから、実習終了後の学習者による実習評価を教員が考察・検討することで、学習者のニーズに対応したより効率的な実習構築が可能であることが示唆された。

ニッケルチタン製ロータリーファイルを用いる根管拡大形成の学生実習への導入に関する考察

○北島佳代子, 新井恭子, 五十嵐 勝
日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第1講座

Consideration for introduction of NiTi rotary files to root canal enlargement on pre-clinical practice

○KITAJIMA Kayoko, ARAI Kyoko, IGARASHI Masaru
Department of Endodontics, School of Life Dentistry at Niigata, The Nippon Dental University

【緒言】

湾曲根管の根管治療では、ステンレススチール製手用ファイル(SS)を使用する場合、プレカーブを付与し上下運動を主体に根管の拡大形成を行う。一方、ニッケルチタン製ロータリーファイル(NiTi)は、超弾性のため湾曲根管にも追従しやすい。学生実習に関する調査によると、NiTiを実習に導入している大学はまだ少なく、今後どのように教育に組み入れるかの検討も必要である。そこでNiTiでの実習後にアンケートを行い、教育への反映に関して考察した。

【方法】

(1)アンケートⅠ:第4学年の臨床基礎実習で、人工歯3歯、抜去歯1歯をSSで拡大形成済みの学生91名を対象に、最終日に30度の湾曲根管透明模型を用いてNiTiでの実習を行い、実習前後のアンケート調査を行った。(2)アンケートⅡ:臨床経験5～30年の歯科医師14名(A群)とNiTi実習を希望した臨床実習10か月の第5学年14名(B群)に同様の実習を行い事後アンケートの比較を行った。

【結果】

(1)アンケートⅠでは、湾曲度が術後には弱いと感じた回答と、拡大時間が早いという回答が多かった。NiTiの方が使いやすく、総合的に良いとの回答が90%以上を占めた。(2)アンケートⅡでは、煩雑さ、切削力、使いやすさ、臨床前のトレーニングの必要性において、AB群に差があった。A群はNiTiに慎重であったがB群は簡便で技術差が少ないと回答した。

【考察】

NiTiは拡大作業が短縮するが、臨床経験の少ない学生の方がNiTiへの順応が早く、術者間の差も少なかった。一方、SSに熟練した歯科医師では、NiTiの使用に慎重で、臨床での様々な経験により根管治療上の注意点を感知している結果と考えられた。

【結論】

NiTiの学生実習では、NiTiとSSとの拡大方法の違い、偶発事故の発現等を十分に事前に教育し、ファイルの使い分けを含め認識させることが重要である。

社会系歯科医学教育へのTBL導入に向けた取り組み—社会歯科学事例演習に対するアンケート調査結果—

○瀨田慎也¹⁾, 山本龍生¹⁾, 槻木恵一²⁾, 平田幸夫¹⁾

¹⁾神奈川歯科大学社会歯科学講座歯科医療社会学分野, ²⁾神奈川歯科大学顎顔面診断科学講座病理学分野

Introduction of modified TBL to education of social dentistry

○Fuchida Shinya¹⁾, Yamamoto Tatsuo¹⁾, Tsukinoki Keiichi²⁾, Hirata Yukio¹⁾

¹⁾Division of Sociological Approach in Dentistry, Department of Dental Sociology, Kanagawa Dental College, ²⁾Division of Pathology, Department of Diagnostic Science, Kanagawa Dental College

【目的】

モデル・コア・カリキュラムや歯科医師国家試験出題基準において、社会系歯科医学が位置付けられて久しい。「平成19(2007)年改訂歯科医学教授要綱」の中にも、基礎系・臨床系・総合医学系と並列して社会系歯科医学領域が示されている。他領域において様々な教育方略が検討・実践されている中、社会系歯科医学教育においてもより良い教育方略が求められている。そこで、神奈川歯科大学歯学部における社会歯科学分野の教育において、チーム基盤型学習(TBL:team-based learning)導入に向けた事例演習を行った。学生アンケートの結果からその効果と可能性を報告する。

【方法】

神奈川歯科大学歯学部歯学科3学年に在籍する全ての学生(93人)に対して、社会歯科学(医療保険管理学)の授業時間を用いてTBLを参考にした事例演習を行った。事前学習の後、新聞

記事を応用した学習課題を提示し、個々に検討させた上で7～8名ずつ12チームに分かれ、学習課題の解答を作成・提出させた。そして、グループ毎の発表(アピール)、教員によるフィードバックの流れで行った。全行程終了後に調査票を記入してもらった結果、89人から回答を得た(回答率95.7%)。

【結果・考察】

学習効果に満足している学生が75.3%、従来の講義型学習より学習効果があったとする学生が49.4%と、社会系歯科医学教育における事例演習の有用性が示唆された。TBLの必須4原則に対する評価は、責任性のみ66.3%だったものの、他の項目は8割以上の学生が適当と回答していた。学習課題や評価方法の作成基準に課題が残るが、TBLは社会系歯科医学教育においても問題解決能力の育成に期待できる有望な教育方略と考えられる。

広島大学歯学科 4 年生における基礎的食材知識について

○河原和子¹⁾、仁井谷善恵²⁾、二川浩樹³⁾、菅井基行⁴⁾

¹⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院口腔生物工学、²⁾広島大学大学院医歯薬保健学研究院口腔管理保健学、³⁾広島大学歯学部副学部長、⁴⁾広島大学歯学部学部長

Survey of basic knowledge on foods among fourth-year students of the Hiroshima University School of Dentistry

○Kawahara Kazuko¹⁾, Niitani Yoshie²⁾, Nikawa Hiroki³⁾, Sugai Motoyuki⁴⁾

¹⁾Department of Oral Biology & Engineering Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences, ²⁾Department of Oral Health Management, Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences, ³⁾Associate Dean, Hiroshima University Faculty of Dentistry, ⁴⁾Dean, Hiroshima University Faculty of Dentistry

広島大学の歯学科(歯科医師養成)では現在、衛生学・公衆衛生学・口腔衛生系教科のなかで、3年生で生活習慣病と健康対策に関する講義を行い、4年生で栄養・食品・食生活関連の実習を行っている。実習の1回では、食事バランスガイドを利用して、各自が当日の朝食と昼食の食事内容をもとに夕食の食事メニューを立案し、一日の栄養摂取状況を健康日本21の摂取目標及び食事摂取基準の基準量に照らし合わせて検討している。本実習をH20年に開始して以来、毎年男女を問わず学生から受ける質問は「何が緑黄色野菜ですか?」というものである。緑黄色野菜は、学習指導要領に依って、小・中・高教育で繰り返し扱われ、健康日本21では2つの達成目標に取り上げられている。今後の本学歯学部食生活教育の進め方を検討する一資料を得る目的で、健康日本21の後継健康対策指針でも重要視されると考えられる食材について、H23年度4年生において、実習に先立ち基礎的な知識について無記名の調査を行った。調

査は他の実習項目時間に実施するため、質問紙配布から回収まで10分ほどで終了できる量とした。本調査から得たい情報は、学生の生活力としての食材知識なので、一部は食材の画像を見て答える設問とした。

回答者は男子30名、女子27名で、食関係科目の受講状況は小学のみ、小中、小中高の順に、男子：10%、30%、53%、女子：0%、15%、74%であった。なじみ深い野菜19種類の画像を示して名称を書かせたところ、全問正解者は男子・女子ともに7名(23%、26%)であった。それらについて緑黄色野菜と淡色野菜の判断をさせたところ、8割以上正解した者は30%であった。緑黄色野菜の定義を訊ねると16名が回答し、定義中の用語「カロテン」を記載したものが6名、9名は色を書いたが、緑黄色のみの記述が6名あった。緑黄色野菜のほかに、大豆と青魚に関して設問した。

歯学部 3 年生の病理学教育における TBL 導入実習についてのアンケート調査

○林 隆司、槻木恵一

神奈川歯科大学歯学部病理学

The questionnaire survey on introduction of TBL training in the pathology education for 3rd-year dental students

○Hayashi Takashi, Tsukinoki Keiichi

Department of Pathology, Kanagawa Dental University

【目的】

本学の口腔病理学実習では、平成23年度よりTeam-based learning(チーム基盤型学習:TBL)を本格的に導入した。TBLは近年における学生の多様化に対応し、熟練教員の不足を補い、能動的な学習誘導が可能であることから、効率的な学習方法であると考えられる。そこで、歯学部3年生93名を対象にTBL実習アンケートを2回実施し、グループ学習効果との関連性を分析したので報告する。

【方法】

平成23年度は全8回(75分×3コマ)実施し、学生を24班に分けた。班分けは、成績上位1名、下位1名、その中間2名の計4名を基本構成とした。そしてTBL実習アンケートを実習5回目および8回目の計2回実施し、各班の成績との関連性を分析した。アンケート内容として、TBL実習は楽しいか、問題の量および難易度、チーム力の向上性、チーム力と成績との相関性、実習中教員に質問するか、本実習システムは適切か、を選

択肢形式で解答させ、最後に自由記載欄を設けた。

【結果・考察】

実習8回目のアンケート結果は、「問題量は多く難しいがTBL実習は楽しい」と解答した学生が過半数であった。また、「チーム力は回を重ねるごとに上がった」は78.4%、「チーム力と成績に相関があると思う」は56.8%、「実習中教員に質問する」は95.4%、「実習システムはこのままで良い」は88.6%であった。いずれも実習5回目のアンケート結果よりも高かった。自由記載では、「今まで話したことのない学生と友達になった。」「スケッチ実習よりも頭に残りやすい。」など肯定的な意見が多かった。しかし、平成23年度の成績下位の学生の成績は、著しく向上しているわけではなく残された課題は多いが、近年における学生のコミュニケーション能力向上に対して貢献できる可能性は極めて高く、チーム医療の姿勢を身につける第一歩となる実習体制として大いに期待できる。

歯科理工学実習における測定値の解析と教育改善点 —印象材の弾性的挙動と連合印象による模型の寸法精度について—

○青木春美, 宮坂 平, 安藤進夫, 丸田久美子, 青柳有祐, 森山京介, 大竹康成, 須田勇己, 清水昭博, 高木邦明, 大寄紀子
日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座

Educational improvement and accumulated data analysis in the dental materials experiments —Elasticity of impression materials and dimension accuracy of pattern by combined impression—

○Aoki Harumi, Miyasaka Taira, Ando Nobuo, Maruta Kumiko, Aoyagi Yusuke, Moriyama Kyosuke, Ohtake Yasunari, Suda Yuuki, Shimizu Akihiro, Takagi Kuniaki, Ohori Noriko
Department of Dental Materials Science, School of Life Dentistry at Tokyo, The Nippon Dental University

【目 的】

日本歯科大学生命歯学部では、歯科理工学実習（歯科材料技術工学実習）を第3学年前期に10テーマ、12週にわたり行っている。各テーマの実習終了時にグループ（班）毎にデータシートを作成し、担当インストラクターにより班の内でのデータの比較や解説に用いられる。その後、データシートは提出されるが、それらを精査することはほとんどない。つまり、班内のデータの比較は行われるものの、班の間での比較は行われない。今回は、印象材に関するテーマを取り上げ、昨年度のデータを班の間で比較し、指導上の改善点を見出すことを目的とした。

【方 法】

平成23年度第3学年133人を12班（1班11～12人）に分け、各班につき一人のインストラクターが担当した。「印象材の弾性ひずみと永久ひずみ」では、寒天印象材、アルジネート印象材、シリコーンゴム印象材、ポリエーテルゴム印象材の弾性ひずみと永久ひずみを定荷重法により測定した。また、「連合印

象による模型の寸法精度」では、寒天・アルジネート連合印象とシリコーンゴム（レギュラータイプとパテタイプ）連合印象における印象から得られた模型材の寸法精度を測定比較した。各班のデータから、二元配置分散分析（因子A：印象材の種類、B：学生の班）とTukeyの対比較を行った。

【結果および考察】

二元配置分散分析を行った結果、全ての要因に高度な有意差を認め、班によりデータが異なっていたという結果を得た。これは、学生側の原因として、印象材の練和技術の未熟さによる試料の不出来、弾性比較試験機の操作の技術不足、ノギスによる計測の未熟さ、測定値の算出法の誤りなどが、インストラクター側の原因として、弾性比較試験機の整備不備、測定値の算出法の徹底不足、逸脱したデータへの対応の不良などが考えられる。これらをインストラクターにフィードバックし、精度の高い実習を行うよう徹底することが必要であると考えられる。

嚥下内視鏡実習の教育効果に関する主観的評価—操作実習とライブ指導について—

○中道由香, 高橋浩二, 横山 薫, 山下タ香里, 武井良子
昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔リハビリテーション医学部門

A subjective evaluation of the educational effect of swallowing endoscopy training —operation training and showing live performance—

○Nakamichi Yuka, Takahashi Koji, Yokoyama Kaoru, Yamashita Yukari, Takei Yoshiko
Division of Oral Rehabilitation Medicine, Department of Special Needs Oral Medicine, Showa University School of Dentistry

【目 的】

本学口腔リハビリテーション部門の臨床実習では口腔機能障害に対応できる歯科医師を育成するために、頭頸部模型（吸引モデルⅡ型 LM-097（高研））を用いた嚥下内視鏡操作訓練と指導教員が学生を被験者として嚥下内視鏡検査を行うライブ指導を実施している。今回この臨床実習の効果を検討するために実習後にアンケート調査を実施した。

【対象および調査方法】

対象は平成21年4月から平成23年3月までに昭和大学歯科病院口腔リハビリテーション科で臨床実習を行った歯学部5年生280名で、実習終了後にアンケートを配布し、回答を無記名で記入させ、回収した。初年度の調査内容は内視鏡操作訓練8項目（5段階評価）とライブ指導4項目（3段階評価1項目、5段階評価3項目）で2年度以降は内視鏡操作訓練9項目とライブ指導5項目とし、集計結果を各年度で比較した。

【結 果】

3年間の全回収率は85.4%であった。内視鏡実習全体を通して

の評価では、「大変良い」・「良い」という回答が98.6%～100%であった。また、本実習全体を通しての理解では、「十分理解できた」・「理解できた」という回答がいずれの年度も100%であった。また、頭頸部模型に対する内視鏡操作については「十分操作できた」が12.8%～34.2%で、「操作できた」が63.0%～83.3%であった。ライブ指導の理解では、「十分理解できた」・「理解できた」が97.2%～100%であり、ライブ検査の被験者となった学生による教員の内視鏡操作に対する評価は「大変良い」・「良い」が94.6%～100%であった。

【考 察】

本調査により嚥下内視鏡実習の必要性を学生は認識しており、ライブ指導は内視鏡検査の理解度を高めていることが明らかとなった。嚥下内視鏡検査は歯科医師においても普及しつつあり、歯学生による内視鏡実習は重要と考えられ、さらに有効な実習となるべく努力したい。

複数の研究グループによる臨床研究プログラム評価

○山瀬 勝, 大津光寛, 光安廣記, 児玉実穂, 落合真美, 大澤銀子, 横澤 茂, 代田あづさ, 新田俊彦, 久野彰子, 岩田 洋
日本歯科大学附属病院

Questionnaire for clinical research program conducted by different research groups

○Yamase Masaru, Ohtsu Mitsuhiro, Mitsuyasu Hiroki, Kodama Miho, Ochiai Mami, Osawa Ginko, Yokozawa Shigeru,
Shirota Azusa, Nitta Toshihiko, Hisano Akiko, Iwata Hiroshi
The Nippon Dental University Hospital

【目 的】

日本歯科大学生命歯学部では生涯学習の基礎を築くために、平成20年度より臨床実習の中に臨床研究プログラムを組み込んでいる。これまでに本学会学術大会において、プログラムの概要および臨床実習生に対するアンケート調査の結果について発表し、アンケート調査が今後のプログラム改善に有効であることを示唆した。本プログラムは臨床実習生を8グループに分け、それぞれに指導教員がついて研究指導を行っている。そのためグループ間で指導方法や教員の介入の度合いに多少の違いが認められる。今回の研究は、研究グループの違いがアンケート調査の結果に影響を及ぼすかどうかを検討することを目的として行った。

【方 法】

対象は平成23年度に臨床実習生として附属病院において臨床実習を行った生命歯学部第5学年の学生とし、その中で研究報告会に出席した学生115名に対して20項目のアンケート調査を

行った。調査票には自由記載欄を設け、このプログラムを経験して良かった点と悪かった点を併せて記入してもらった。

【結果および考察】

アンケートの結果、ほとんどの項目で半数以上の学生が本プログラムに対して肯定的な解答を行っており、否定的な解答が50%以上となったのは3項目であった。過去の調査において第20項目「成績評価の基準が明らかにされていた」において否定的な解答の割合が高かったため、本年度は評価方法の見直しを図ったが、57.4%の学生が否定的な解答をした。これは以前の結果より増加しており、評価基準を明確にすることがこれまで以上に必要であることが明らかとなった。グループ間で差が認められた項目は7項目であり、その中には第8項目「教員に疑問点などを積極的に質問するよう努めた」といった項目も含まれており、教員側からの対応が必要なものについては積極的に改善していく必要があると思われる。

全部欠損補綴模型実習の進度日程に関する一考察

○水野辰哉¹⁾, 宇佐美博志¹⁾, 高濱 豊¹⁾²⁾, 田中清雄¹⁾, 竹内一夫¹⁾²⁾, 村上 弘¹⁾²⁾, 服部正巳¹⁾
¹⁾愛知学院大学歯学部高齢者歯科学講座, ²⁾愛知学院大学歯学部口腔インプラント科

Consideration of the curriculum schedule in complete denture model training for dental students

○Mizuno Tatuya¹⁾, Usami Hiroshi¹⁾, Takahama Yutaka¹⁾²⁾, Tanaka Kiyoo¹⁾, Takeuchi Kazuo¹⁾²⁾, Murakami Hiroshi¹⁾²⁾,
Hattori Masami¹⁾

¹⁾Department of Gerodontology, School of Dentistry Aichi Gakuin Univ., ²⁾Division of Oral Implantology, School of Dentistry Aichi Gakuin Univ.

【目 的】

模型実習では、学生の技量によって実習の進度に差が生じる。進度日程どおりに実習が進んでいる者もいれば、それよりも早い者、遅い者がいるのが常である。しかし、この日程が平均的な技量の学生にとって適切なものであるか否かは判断しづらく、実習の進度が遅れれば、遅れている者に合わせて休み時間にも実習を行ったり、実習時間を延長したりして対応しているのが現状である。

そこで、模型実習の進度日程が学生にとって適切に組まれているかを確認することを目的として、平成22年度と23年度の全部欠損補綴実習の進度について調査、検討した。

【方 法】

調査対象は平成22年度と23年度の歯学部3年生のうち、実習進度表の日付の記載が適正な者119人で、この日付を利用して各ステップにかかった日数を算出し、比較検討した。

【結果と考察】

平成22年度の実習では、「咬合床の作製」は平均3.3日であった。「咬合器装着」は平均3.4日であった。「人工歯排列」は平均7.7日であった。「歯肉形成」は平均4.8日であった。「埋没・重合」は平均3.0日であった。「割合」は平均2.3日であった。「研磨」は平均2.5日であった。以上の結果より、「咬合床の作製」と「咬合器装着」では1日分以上の時間が不足しており、「人工歯排列」でもわずかに不足していることが分かった。また、「研磨」の平均が2.5日と低い値を示したのは、研磨が早く終わったのではなく、進行が遅れから時間がなくなり、わずかな時間しか研磨ができなかった者が多くいたためと考える。以上より、23年度実習では「咬合床の作製」、「咬合器装着」、「人工歯排列」の日程を1日多く増やし、また、カリキュラムの変更により実習時間全体を2日増やして行うことになった。その結果、23年度の実習では日程どおりに実習を行うことが可能であった。

部分床義歯補綴学実習におけるチェックリスト方式による評価法への取り組み

○清水慈子, 秋山仁志, 石田鉄光, 三代冬彦, 平賀 泰, 奥富一義, 千綿一郎, 石原裕之, 吉岡昌樹, 須田牧夫, 岡山浩美, 阿部英二, 真部寛登, 岡田威一郎, 高橋賢見, 戸原 雄, 久保田うつき, 安藤実奈子, 松田美和子, 田上寿子, 川名弘剛, 初田将大, 平林正裕, 干川 摂, 内山恵理, 北 梢, 工藤奈津子, 岩本圭輔, 坂詰奏子, 横山知美
日本歯科大学附属病院総合診療科

Approach to assessment by the method in practice checklist system in removable partial denture of prosthodontics clinical practice

○Shimizu Yasuko, Akiyama Hitoshi, Ishida Kanemitsu, Mishiro Fuyuhiko, Hiraga Yasushi, Okutomi Kazuyoshi, Chiwata Ichirou, Ishihara Hiroyuki, Yoshioka Masaki, Suda Makio, Okayama Hiromi, Abe Eiji, Mabe Hiroto, Okada Ichirou, Takahashi Noriaki, Tohara Isamu, Kubota Utsuki, Andou Minako, Matsuda Miwako, Tagami Toshiko, Kawana Hirotaka, Hatsuta Masahiro, Hirabayashi Masahiro, Hoshikawa Setsu, Uchiyama Eri, Kita Kozue, Kudou Natsuko, Iwamoto Keisuke, Sakazume Kanako, Yokoyama Tomomi
Division of General Dentistry, The Nippon Dental University Hospital at Tokyo

【目 的】

日本歯科大学生命歯学部では、新モデル・コア・カリキュラムに対応した部分床義歯補綴学実習を構築し、チェックリスト方式による評価システムで実習評価を行っている。今回、学生評価のもつ属性をさらに高めるために、平成23年度に実施した部分床義歯補綴学実習の新たな評価法の取り組みについて報告を行う。

【方 法】

平成23年度第4学年を対象に後学期に部分床義歯補綴学実習(計13回)を実施した。学生124名を4班6、7グループに分け、実習指導者1名につき4～6名の学生グループを実習指導マニュアルに従い、公平な観点から指導を行うようにし、原則的に実習指導者は毎回異なる学生グループを担当することとした。実習終了後、チェックリスト方式による評価に際して、実習指導者は担当した学生以外の評価を行うことを義務付けた。さらに評価結果は、即日集計し、教員評価と学生評価との相関

を確認後、評価結果が平均点以下の学生を抽出し、次回の実習打合せ会議にて全実習指導者にフィードバックし、学生指導を行うことを徹底した。

【結果と考察】

実習技能内容と実習過程のポイントを時系列に明示したチェックリスト方式による評価法を導入し、課題終了時に学生による自己評価と教員評価を行っている。実習開始前に行う実習打合せ会議において各指導教員にチェックリスト方式による評価結果のフィードバックを行い、チェック項目に関する評価の客観性、妥当性、信頼性、効率性、特異性が得られるように対応している。今回の取り組みから、全実習指導者が評価結果の低かった学生を認識し、その学生に適切に指導を行うことで学習者の技能レベルの向上を図ることができた。今後は、実習指導者の教育スキルをさらに充実させ、適切な指導が行えるようにしていくことが望まれる。

「口腔インプラント学」の受講の有無とインプラント治療に関する知識との関係について

○中本哲自, 正木千尋, 近藤祐介, 向坊太郎, 細川隆司
九州歯科大学

The educational effect of taking “Oral Implantology” on the knowledge of Implant treatment

○Nakamoto Tetsuji, Masaki Chihiro, Kondo Yusuke, Mukaibo Taro, Hosokawa Ryuji
Kyushu Dental College

インプラント治療は急速な勢いで普及しており、医療の安心安全という社会的ニーズとも相まって、従来は欠損補綴あるいは口腔外科などでそれぞれ1、2コマ程度の講義で付随的内容として取り扱われていたものが、近年多くの大学で独立した科目となってきた。しかしながら、従来型教育を受けた学生と体系的な口腔インプラント学を受講した学生との間に違いがあるのか明確でない。そこで、平成23年度より九州歯科大学において開講した口腔インプラント学(講義30時間、実習15時間)を受講した九州歯科大学歯学部第4学年96名に実施した定期試験の多肢選択式問題20問を口腔インプラント学未受講の第6学年75名に平成24年実施国家試験の約1か月前に同様に実施した。第6学年は試験後のアンケート調査で「難しかった」と

の回答が多かったにもかかわらず、平均得点率は第4学年75.2 ± 9.0%に対し、第6学年では71.3 ± 9.4%であり、最頻得点率は両者とも75%で、2群間の差はわずかであった。総論的設問の正答率に関しては、むしろ第6学年のほうが高く、各論の内容である2問は受講している第4学年が高かった。実技については今回評価していないため不明であるが、総論の知識は受講の有無に関わらず、6年間の多岐にわたる教育を通じて欠損補綴の一手法であるインプラント治療を概略的にとらえるだけの資質が備わることから、インプラントの知識を充実させるという観点では各論の内容を増したほうが効果的である可能性が示唆された。

東京医科歯科大学医学部・歯学部「医歯学融合教育」(2011年度導入)について

○鶴田 潤¹⁾、山口久美子¹⁾、高田和生¹⁾、俣木志朗²⁾、荒木孝二³⁾、田中雄二郎¹⁾

¹⁾東京医科歯科大学医歯学融合教育支援センター、²⁾東京医科歯科大学大学院歯学部臨床行動科学分野、³⁾東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

Introduction of Curriculum 2011 for Interprofessional Education, Faculty of Medicine and Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University

○Tsuruta Jun¹⁾, Yamaguchi Kumiko¹⁾, Takada Kazuki¹⁾, Mataka Shirou²⁾, Araki Kouji³⁾, Tanaka Yujirou¹⁾

¹⁾Tokyo Medical and Dental University, Center for Interprofessional Education, ²⁾Tokyo Medical and Dental University, Department of Behavioral Dentistry, ³⁾Tokyo Medical and Dental University, Center for Education Research in Medicine and Dentistry

【背景】

本邦では、出生率の低下、平均寿命の上昇を背景に、非常に速い速度で高齢化が進んでいる。高齢者では、生理的変化・全身性病態・薬物治療が原因で口腔衛生状態が悪化することが多く、口腔医療、全身医療の高度化・複雑化が更に進む今後、多職種間で連携・協調性のとれた包括的医療が必要とされる。

【目的および方法】

医療系総合大学である東京医科歯科大学医学部医学科・歯学部歯学科では、「超高齢化社会において指導的役割を果たす医療人の養成」を目標にかかげ、学科横断、講座横断、学年縦断的な「医歯学融合教育」カリキュラムを開発し、2011年4月に導入した。医歯学融合教育を有機的に運営するために、医歯系教員から構成される医歯学教育支援センターがカリキュラム管理を行っている。本発表では、医歯学融合教育の概要を報告する。

【結果】

医歯学融合教育では、1年間の教養教育の後、医/歯学科学生

が互いに教え、共に学ぶ機会として、2～6年専門教育期間に共通授業を設けた。2～4年次では英語、臨床統計、生命倫理を学ぶ「医歯学基盤教育」、2年次には頭頸部領域解剖、生理学等を学ぶ「頭頸部基礎ブロック」、3年次には頭頸部疾患・治療法を学ぶ「頭頸部臨床ブロック」、5年次には高齢者の生理・病態変化を学ぶ「老年ブロック」、6年次には他専門職専攻最終学年学生との混成少人数グループで多職種連携学習を行う「包括医療ブロック」を配置した。また、医/歯学科固有カリキュラムでは、医歯学融合教育カリキュラムとの整合性を図り、より効果的な教育を行うために改編を行った。

【考察】

医・歯学科の教育目標・理念、カリキュラム運営制度等をもとに、医歯学融合教育支援センター、各教育委員会が中心となり調整を図ることで、従来の医/歯学教育では見られなかった学習環境を構築することができた。今後、学習成果等の考察により、医歯学融合教育カリキュラム運用の評価を行う予定である。

歯科における災害医学教育

○都築民幸、岩原香織

日本歯科大学生命歯学部歯科法医学センター

Education of the Disaster Medicine in Dentistry

○Tsuzuki Tamiyuki, Iwahara Kaori

The Nippon Dental University, School of Life Dentistry, Center of Forensic Dentistry

【はじめに】

過去、災害時の歯科医師の活動は大きな役割を果たしてきた。これらの活動の根本は、様々な学問が基礎となり、臨床での活動が応用できる。しかし、災害時の現場環境や患者(被災者)の特殊性を考慮しなければ、それぞれの活動がうまく機能するわけではない。医科には災害医学があるのに対し、歯科ではこの分野がなく、活用できるリソースがあっても、機能させるシステムの構築ができない場合や、災害医療と病院・診療所での救急医療とを混同している場合が見受けられる。

【方法】

本学生命歯学部では平成15年より歯科法医学の講義で、東京短期大学歯科衛生学科では平成23年よりチーム歯科医療論で災害医学を取り入れてきた。当初は、歯科的個人識別を中心に講義、実習を行ってきたが、平成17年から災害時における歯科医師の活動全般に発展させ、平成18年より災害医学の考えを講義に取り入れた。災害の規模やフェーズによって必要とされる歯科医療救護は変化するため、それらのニーズを把握し、

人的支援ならびに物的支援につなげられるような教育を実践している。

本学生命歯学部では、第2学年と第5学年に歯科法医学の講義を行っている。第2学年では、災害時における歯科医師の活動を通じて、災害医学の理解、医療従事者としての倫理観の育成、社会貢献への寄与等を重視した講義としており、第5学年では、さらに活動内容の理解を加えている。また、東京短期大学歯科衛生学科第3学年では、歯科医療救護所や患者(被災者)の管理、口腔ケアとともに行うべき心のケアに重点を置き、講義を行っている。

【まとめ】

本年度より第2学年で講義を受けた学生が第5学年になり、再度、歯科法医学を受講する。災害時には、歯科の専門性を生かした活動が重要であるが、医療従事者の一員としての活動も重要である。他職種との連携を考慮し、種々の災害に対応できる歯科医師の育成を目指し、教育を進めている。

東京歯科大学における歯科麻酔学臨床実習・臨床研修の一貫教育の取り組み

○松木由起子, 塩崎恵子, 松浦信幸, 一戸達也
東京歯科大学歯科麻酔学講座

Continuing curriculum through undergraduate and postgraduate training of dental anesthesiology in Tokyo Dental College

○Matsuki Yukiko, Shiozaki Keiko, Matsuura Nobuyuki, Ichinohe Tatsuya
Department of Dental Anesthesiology, Tokyo Dental College

【目 的】

本学では、歯科麻酔学の技能・態度教育のために、従前の臨床実習、平成 22 年度から導入されたプログレス期間の臨床実習、および他学卒業生を含めた臨床研修を一貫教育として捉えたカリキュラムの立案を試みている。そこで、現在の歯科麻酔学の臨床実習・臨床研修の内容とその教育効果について考察する。

【方 法】

対象は平成 23 年度に本学千葉病院で臨床実習を行った第 5、6 学年生および研修歯科医とした。第 5 学年の臨床実習では、臨床講義の他に症例見学・症例検討(全身麻酔、精神鎮静法)、下顎孔伝達麻酔、モニター装着、静脈確保、吸入鎮静法、心肺蘇生法を行った。また後期の実習期間には、基礎系学問との連携を図るため解剖学、生理学、薬理学の講義を行った。第 6 学年プログレス期間で歯科麻酔科を希望したものには、歯科麻酔専門医とともに全身麻酔を中心とした患者管理(全身麻酔におけ

る基本技能を含む)に重点を置いた実習を行った。また、この期間中に解剖学、生理学、薬理学、臨床検査学の実習を行った。研修歯科医に対しては、臨床実習よりも合併疾患を有する歯科患者の全身管理(静脈内鎮静法を含む)に重点を置き、薬局や臨床検査部、内科などとも連携を図った研修を行った。

【考 察】

本学における歯科麻酔学の臨床実習は、第 5 学年で前期約 1 週間、後期は口腔外科と同時に約 25 日間行われている。平成 22 年度からはプログレス期間が加わり、基礎系学問との連携を図りながら、診療参加型臨床実習を組み合わせることで、歯科麻酔学のより充実した学習が可能であったと考えている。また臨床研修では合併疾患を有する歯科患者の全身管理に重点を置いた研修ができたと思われるが、今後はカリキュラムの順次性を踏まえながら、より適切な学習目標と学習方略を考えていきたい。

日本歯科大学新潟病院歯科訪問診療研修に関するアンケート調査

○坂井 登, 廣澤利明, 黒川裕臣, 宇野清博, 関本恒夫
日本歯科大学新潟病院総合診療科

The questionnaire about Housecall Dental Treatment training for the Dental Residents on The Nippon Dental University, at Niigata hospital

○Sakai Noboru, Hirotsawa Tosiaki, Kurokawa Hiroomi, Uno Kiyohiro, Sekimoto Tsuneo
Comprehensive Dental Care, The Nippon Dental University Niigata Hospital

【目 的】

本学では臨床実習生と臨床研修歯科医に対し歯科訪問診療の実習および研修を必修化し、包括的な歯科訪問診療教育を行っている。今回我々は、歯科訪問診療研修を修了した臨床研修歯科医を対象に歯科訪問診療への意識を調査したので若干の考察を加え報告する。

【対象および方法】

平成 23 年度臨床研修歯科医 34 名を対象に、研修修了時にアンケート調査を実施した。アンケート回収率は 100%であった。

【結 果】

アンケート調査の結果、「機会があるなら、歯科訪問診療に携わりたいですか?」の質問に「携わりたい」と回答した者は 65%、「わからない」は 32%、「携わりたいくない」は 3%であった。「携わりたい」と答えた者へ「歯科訪問診療を始める際に障害になるものはなにか」と尋ねたところ、「知識」と回答したものが 44%と最も多く、次いで「環境」は 32%、「資金」は 26%だった。

【考 察】

本学では、歯科訪問診療研修を平成 21 年のトライアルを経て、平成 22 年度より必修化している。臨床研修歯科医の多くが積極的に研修に参加しており、一定の成果は得られていると感じているが、歯科医師臨床研修修了後、臨床研修歯科医が歯科訪問診療をひとつの選択肢と考えているのかどうかは不明であった。今回のアンケート調査では 65%の臨床研修歯科医が「機会があれば歯科訪問診療に携わりたい」と回答しており、関心の高さを示す結果となった。しかし、その障害となるもので最も多かった回答が「知識」となっており、現在の教育・研修だけでは歯科訪問診療を行うため知識と経験の修得は不十分であると示唆された。

本学の協力型臨床研修施設の多くでは歯科訪問診療が行われている。そのことを踏まえ、低学年からの高齢者・有病者の歯科医療教育、第 5 学年臨床実習そして歯科医師臨床研修では、より実践的な指導が必要であると感じている。

支台歯形成に関する臨床実習修了時試験の客観評価について

○大河貴久、田中順子、佐藤正樹、藤井孝政、柏木宏介、田中昌博
大阪歯科大学歯補綴咬合学講座

Objective Evaluation of the Test on Tooth Preparation after Clinical Practice

○Okawa Takahisa, Tanaka Junko, Sato Masaki, Fujii Takamasa, Kashiwagi Kousuke, Tanaka Masahiro
Department of Fixed Prosthodontics and Occlusion, Osaka Dental University

本学の平成23年度第5学年に対して、支台歯形成に関する「臨床実習修了時試験」を行った。試験内容を、多肢選択問題10問、40分間の全部金属冠の支台歯形成における形成歯および姿勢の評価とした。本研究では、支台歯形成後の人工歯について、指導教員による主観評価ならびにCADシステムによる客観評価を行い、比較・検討した。

形成後人工歯の主観評価では、指導教員3名が形成後人工歯を目視にて、削除量、軸面テーパなど外形について、良い方からA、B、Cと3段階評価した。客観評価は、CADシステム(CLINSIM)にて人工歯の軸面形成量、中心窩相当部形成量、咬頭相当部形成量および軸面テーパについて定量した。3群(A、BおよびC)間での各計測項目の定量データについてKruskal-Wallis検定を行い、統計学的有意差が認められた場合、多重比較を実施した。

主観評価各群の、定量値(mean ± 1SD)を示す。平均軸面削除量は、A群では1.0 ± 0.5 mm、B群では1.1 ± 0.4 mmおよびC群では1.3 ± 0.8 mmであった。平均咬合面削除量は、それぞれ1.8 ± 0.8 mm、1.9 ± 0.6 mmおよび2.2 ± 1.1 mmであった。軸面テーパについては、近遠心断面において46.2 ± 12.6°, 62.1 ± 6.0°および51.9 ± 17.8°, 頬舌側断面において26.3 ± 11.0°, 37.8 ± 8.5°および41.9 ± 17.8°であった。統計学解析の結果、すべての計測項目において3群間に統計学的有意差が認められた。さらに、すべての項目において、A群とC群の間に統計学的有意差が認められたが、A群とB群の間に統計学的有意差は認められなかった。

主観評価とともに、定量による客観評価も合わせて、支台歯形成後の人工歯の評価として必要であることが明らかとなった。

5 年次臨床能力到達試験 (OSCAT) の実施について

○後藤田宏也¹⁾、河相安彦²⁾、葛西一貴³⁾、内田貴之⁴⁾、神野良一⁵⁾、和田守康⁶⁾、牧村正治⁷⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学講座、²⁾日本大学松戸歯学部床義歯補綴学講座、³⁾日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、⁵⁾日本大学松戸歯学部顎顔面外科学講座、⁶⁾日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、⁷⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座

Examination of Objective Structured Clinicak Achievement Test (OSCAT) in fifth-year student

○Gotouda Hiroya¹⁾, Kawai Yasuhiko²⁾, Kasai Kazutaka³⁾, Uchida Takashi⁴⁾, Kamino Yoshikazu⁵⁾, Wada Moriyasu⁶⁾, Makimura Masaharu⁷⁾

¹⁾Department of Preventive and Public Oral Health, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾Department of Removable Prosthodontics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ³⁾Department of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁴⁾Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁵⁾Department of Maxillofacial Surgery, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁶⁾Department of Renascent Dentistry, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁷⁾Department of Social Dentistry (Dental Education), Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

日本大学松戸歯学部では臨床実習においてメディコデンタルを念頭とした人間性豊かな医療人となるために、歯科医師として求められる基本的な知識・技術・態度を習得することを目標としている。本学ではその習熟度と到達度の評価のために平成22年度から臨床能力到達試験(OSCAT: Objective Structured Clinical Achievement Test)を5年次生に実施している。本発表ではOSCAT実施の概要と評価について報告する。

【方 法】

平成22年度および平成23年度の5年次の臨床実習終了時に、各診療科別に医療面接、所見と診断、基本技能(シュミレーション)、診断と治療に関わる課題について臨床能力到達試験(OSCAT)を実施した。

【結果および考察】

平成22年度および平成23年度の平均は共に約80点で、80～

85点の分布が4割以上で最も多く、続いて75～80点であった。課題別の平均点については兩年ともほぼ同等の結果であった。60点未満については、全平均では数名のみであったが、課題別には3分の1以上の課題も数題認められた。OSCATでは、患者に対する問題対応型思考の育成、コミュニケーション技術、問題解決のための治療計画作成能力、処置経過の観察・評価などの臨床能力到達度を評価できることが示唆された。またOSCATとOSCE(4年終了時)との結果には有意な正の相関関係が認められたが、OSCATはOSCEでは設定できなかった多様な方法と課題内容を提示が可能で診療参加型臨床教育に基づく治療計画立案と診療能力などの臨床能力到達の評価が可能であることが推察できた。今後はOSCEとの連続性を鑑みながら、5年次終了時の臨床到達度の評価のみならず、6年次の臨床教育の習得すべき態度と臨床能力育成のための評価および教育プログラムの立案の有効な指針となることが考えられた。

技工士のための歯科材料短時間体験実習と通常実習との比較

○吉田隆一、伊東修一、吉田康一
東邦歯科医療専門学校

The comparison between the general practical training and the curtailed practical experience training of dental material science for dental technician student

○Yoshida Takaichi, Ito Shuichi, Yoshida Koichi
Toho Dental College

医歯薬出版の技工用実習書が廃刊になり、その対応に苦慮していたが、2010年度に本学では週二回の講義時間があつたため、初回を講義、二回目を90分の短時間実習を講義内容に一致した内容で行い教育効果をみた。2011年度はテーマを増やして

180分にして実習を行い、前年度と同じ形式のアンケートを取り、短時間実習と比較検討した。その結果、講義直後に講義内容に沿った材料や技術（鑄造等）の実習をすることは、学生の理工学への理解を深めるのに大変効果のあることが分かった。

歯科衛生士養成大学・短期大学における教員の専門性並びに研究への認識について

○石川隆義¹⁾、吉田 隆²⁾、日下和代³⁾、田中宣子⁴⁾、鈴木幸江⁵⁾、土田智子⁶⁾、本間和代⁷⁾、田中丸治宣⁸⁾、柴谷貴子⁹⁾、延原靖子¹⁰⁾、野村加代¹¹⁾、升井一朗¹²⁾、市川順子¹³⁾、向井正視¹⁴⁾、足立了平¹⁵⁾、小口春久¹³⁾

¹⁾大垣女子短期大学歯科衛生科、²⁾埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科口腔保健科学専攻、³⁾千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科、⁴⁾鶴見大学短期大学部歯科衛生科、⁵⁾湘南短期大学歯科衛生学科、⁶⁾日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科、⁷⁾明倫短期大学歯科衛生士学科、⁸⁾静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科、⁹⁾関西女子短期大学歯科衛生学科、¹⁰⁾吉備国際大学短期大学部保健科デンタルビューティ専攻、¹¹⁾高知学園短期大学医療衛生学科歯科衛生専攻、¹²⁾福岡医療短期大学歯科衛生学科、¹³⁾日本歯科大学東京短期大学歯科衛生学科、¹⁴⁾愛知学院大学短期大学部歯科衛生学科、¹⁵⁾神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科

The Speciality and Research Perception of the Faculty in the University and College for Dental Hygienist Education

○Ishikawa Takayoshi¹⁾, Yoshida Takashi²⁾, Kusaka Kazuyo³⁾, Tanaka Nobuko⁴⁾, Suzuki Yukie⁵⁾, Tsuchida Satoko⁶⁾, Honma Kazuyo⁷⁾, Tanakamaru Harunobu⁸⁾, Shibatani Takako⁹⁾, Nobuhara Yasuko¹⁰⁾, Nomura Kayo¹¹⁾, Masui Ichiro¹²⁾, Ichikawa Junko¹³⁾, Mukai Masami¹⁴⁾, Adachi Ryohei¹⁵⁾, Oguchi Haruhisa¹³⁾

¹⁾Department of Dental Hygiene, Ogaki Women's College, ²⁾Division of Oral Health Sciences, Department of Health Sciences, Saitama Prefectural University School of Health and Social Services, ³⁾Department of Dental Hygiene, Faculty of Health Sciences, Chiba Prefectural University of Health Sciences, ⁴⁾Department of Dental Hygiene, Tsurumi Junior College, ⁵⁾Department of Dental Hygiene, Shonan College, ⁶⁾Department of Dental Hygiene, The Nippon Dental University College at Niigata, ⁷⁾Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College, ⁸⁾Department of Dental Hygiene, University of Shizuoka, Junior College, ⁹⁾Department of Dental Hygiene, Kansai Women's College, ¹⁰⁾Department of Health and Welfare, Kibi International University Junior College, ¹¹⁾Department of Health Sciences, Kochi Gakuen College, ¹²⁾Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences, ¹³⁾Department of Dental Hygiene, The Nippon Dental University College at Tokyo, ¹⁴⁾Department of Dental Hygiene, Aichi-Gakuin Junior College, ¹⁵⁾Department of Oral Health Science, Kobe Tokiwa University

平成22年3月までに全ての歯科衛生士養成校の修業年限は3年以上となり、カリキュラムは大綱化され、教授要綱が廃止されたため、専門職としてより相応しい教育を示す必要性がでてきた。特に、卒業研究や論文作成カリキュラムの導入が重要な教育内容の一つとされており、教員が学生に対して卒業研究等を指導する能力が求められている。そこで、本調査の目的は全国大学歯科衛生士教育協議会に加盟する歯科衛生士養成大学・短期大学の教員の専門性並びに研究への認識について現状を把握し、今後の教員の研究・教育能力向上のための専門性のあり方や研究に対する取り組みに関して検討することを目的とした。全国大学歯科衛生士教育協議会に加盟する15校（短期大学13校・4年制大学2校）の教員を対象に、質問紙調査を実施し138名の回答を得た。特に研究に関する考え方では、5領域（各領域5問、5段階評定）にわたり質問を行った。その結果、職種は歯科医師36名、歯科衛生士91名、教養系教員11名であつた。

た。博士の学位を保有する者は57名で、その内訳は歯科医師36名（保有率100%）、歯科衛生士12名（13.2%）、教養系教員9名（81.8%）であつた。卒業研究に相当する科目を導入している学校は12校（80%）であり、その内卒業研究の指導をしたことがあると答えた者は119名中79名（66.4%）であつた。その内訳は歯科医師30名（85.7%）、歯科衛生士41名（54.7%）、教養系教員8名（88.9%）であつた。研究に関する考え方において、研究価値と研究意義のスコアは研究技術・研究支援・研究意欲に比して高く、5%の危険率で有意差を認めた。卒業研究の指導をした事があると答えた者は指導経験の無い者に比し、研究価値・研究意義・研究技術・研究意欲のスコアは高く、5%の危険率で有意差を認めた。以上の事より、歯科衛生士養成校の教員の研究・教育における今後のあり方が示唆された。

教員の教育能力向上の取り組み—CBT作問を通じて—

○中山 歩, 岩下洋一朗, 田松裕一, 有川裕之, 梶原武弘, 門川明彦, 藺村貴弘, 塚田澄代, 松本祐子, 丸山浩美, 田口則宏
鹿児島大学歯学部 CBT 作問委員会

Faculty development through the preparation of CBT questions

○Nakayama Ayumi, Iwashita Yoichiro, Tamatsu Yuichi, Arikawa Hiroyuki, Kajihara Takehiro, Kadokawa Akihiko,
Sonomura Takahiro, Tsukada Sumiyo, Matsumoto Yuko, Maruyama Hiromi, Taguchi Norihiro
CBT Question Preparation Committee, Kagoshima University Faculty of Dentistry

【目 的】

全国共用試験 CBT は 2005 年より正式実施となり, 試験問題は公募により作成される。鹿児島大学歯学部では早期から本課題に取り組み, 「CBT 作問のスキルアップ」を兼ね, 教員の教育能力向上の取り組みとして FD 研修会を開催している。今回, CBT 作問作業を通じて教員の教育意識にどのような変化が生じたかアンケート調査を実施したので, 作問作業の概要と併せて報告する。

【方 法】

歯学部 21 分野から作問委員として各 1 名を選出, 平成 23 年 12 月から作問委員が中心となり各分野で作問を行った。21 分野を 3 つのグループに分け, 2 月に各グループ 2 回の FD 研修会を開催した。全教員に対し少なくとも 1 回の研修会参加を推奨し, コアメンバー 4 名と作問委員主導のもと, 作成された問題のブラッシュアップを討論形式で行った。研修会後に作問委員を対象にアンケート調査を行った。

【結 果】

CBT 作問作業を通じて, 歯学教育モデルコアカリキュラムに

対する理解が「少し深まった」以上の肯定的回答が 95.2%, 教育に対する意識向上に「おおむね効果があった」以上の肯定的回答が 81% であった。また, 作問作業によって, 57.1% の教員が日常の教育活動に何らかの変化があったとし, モデルコアカリキュラムを意識して実習内容を変更したなどの回答が得られた。さらに, 専門分野ではない作問内容を知ることができ視野が広がった, 講義・実習を客観的に検証して修正するよい機会になった, 他分野の教員と交流する機会が増えたなどの回答も得られた。

【考 察】

本 FD 研修会は, 教員全体の「CBT 作問能力向上」を目的としたものであったが, 今回の結果から, 講義・実習内容の変更などにみられる教員の教育意識・能力の向上, 他分野との連携強化においても非常に有意義であることが確認された。その一方で, 教員の負担増など否定的回答も認められるため, 今後はさらに効率のよい作問作業を検討しながら, 本研修会を継続的に行う必要があると考えられた。

視覚素材作製のための写真撮影と画像処理技術ワークショップの FD としての取り組み

○鹿野千賀¹⁾, 新井一仁²⁾, 南雲 保²⁾, 宮坂 平²⁾, 秋山仁志¹⁾, 棚木寿男²⁾, 高橋幸裕²⁾, 山瀬 勝¹⁾, 高田清美²⁾, 長谷川 充¹⁾, 伊藤菜穂¹⁾

¹⁾日本歯科大学附属病院, ²⁾日本歯科大学生命歯学部

Efforts toward faculty development of workshop for photography and image-processing-technology as visual material production

○Shikano Chika¹⁾, Arai Kazuhito²⁾, Nagumo Tamotsu²⁾, Miyasaka Taira²⁾, Akiyama Hitoshi¹⁾, Maseki Toshio²⁾, Takahashi Yukihiko²⁾, Yamase Masaru¹⁾, Takada Kiyomi²⁾, Hasegawa Mitsuru¹⁾, Itou Naho¹⁾

¹⁾The Nippon Dental University Hospital at Tokyo, ²⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

近年歯科医学教育において, 医療人としての能力を開発する意識や力, 学生の多様化に応じられる質の高い教育が教員に求められるようになり, 特に歯科医師にとって必要なコンピュータ技術 (internet and computer technology 以下, ICT と略す) を活用した教員の教育力向上の必要性が高まっている。そこで本学では, 平成 20 年度から 23 年度において, 客観試験問題等に用いる視覚素材 (口腔内写真, 歯科器具・器材写真) を作製するために必要な基本的技能, 知識および態度を身につけることを目標としたワークショップ (以下, WS と略す) を 4 回開催した。WS 受講後にアンケート調査を行ったので報告する。

【方 法】

調査期間は平成 20 年度から 23 年度, 調査回数は各年度に 1 回ずつ合計 4 回行った。調査対象は, 日本歯科大学附属病院および生命歯学部における教職員, のべ 77 名である。アンケート調査は, WS 受講後に実施した。質問項目は, ICT 習得度に関

する 2 項目と WS に関する 5 項目, 合計で 7 項目とし, 回答は ICT 習得度については 3 段階, WS については 5 段階とした。

【結果と考察】

アンケート回収率は全ての年度で 100% であった。ICT 習得度は, 2 項目ともに各年度間で有意差は認められず, 「十分に理解できなかった」と答えたものは 5% と 7% と少なく, 「十分な応用力が得られた」または「理解できたが, 応用力は不十分」との答えが残りをつめた。WS の評価に関しては, 「かなり価値あり」および「きわめて価値あり」と答えたものが 91%, WS の学習効果に関しては, 「かなり効果的」および「きわめて効果的」と回答したものは 78% を占めた。受講後の感想では, 「今後の診療や講義に活用したい」, 「症例発表や学会発表に活かしたい」などという意見があり, WS 受講者である教員の教育力の向上に貢献できたと考えられる。これらの結果をフィードバックし, 今後さらに情報活用能力を高められるような FD としての WS にしていく所存である。

「地域社会で患者中心のチーム医療を実践する」学部連携地域医療実習の概要と学生による評価

○向井美恵¹⁾、弘中祥司¹⁾、中川量晴¹⁾、片岡竜太¹⁾、木内裕二²⁾、田中一正³⁾

¹⁾昭和大学歯学部、²⁾昭和大学薬学部、³⁾昭和大学富士吉田教育部

Multidiscipline practicum of community medicine

○Mukai Yoshiharu¹⁾、Hironaka Shouji¹⁾、Nakagawa Kazuharu¹⁾、Kataoka Ryuta¹⁾、Kiuchi Yuji¹⁾、Tanaka Kazumasa²⁾

¹⁾Showa University School of Dentistry、²⁾Showa University Faculty of Arts and Sciences at Fujiyoshida

【目 的】

将来、医療チームで地域医療に参加し、地域住民の健康回復・維持や在宅専門性に基づくチーム医療に必要な知識、技能、態度の基本を修得する実習に参加した学生からの実習に対する評価を分析する。

【対 象】

平成 23 年度の歯・薬学部 6 年生、保健医療学部 4 年生の 2 週間の学部連携地域医療実習を選択した学生 11 名

【概 要】

複数学部のグループ (1 グループ 4 名程度) が、在宅医療をチームで実施している 3 地域 (都区内 2、富士北麓 1) において、診療所、歯科診療所、薬局、訪問看護ステーション、福祉介護施設などの施設で、連携の取れた地域医療を参加型実習で学習した。さらに、患者の病態を各学部の専門の立場から理解した上で、最善の医療・介護を学生が医療チームとして討議し、成果を報告会において提案した。

評価はポートフォリオ (目標書き出し・体験・ふりかえりシー

ト、成長報告書) と学外指導担当者評価に加え、実習最終日の発表報告会を担当した複数の指導教員が評価した。同時に実習に対する 21 項目のアンケートを実施した。

【結果・考察】

実習に対する学生からの評価は、チーム医療やコミュニケーションの重要性や学部間の視点の違いへの気づきなど本実習の目的に添う評価が得られた。今回の実習では、患者様の疾病内容だけでなく生活の場 (福祉の場) における特徴や社会的、経済的な地域特性の理解が増したと考えられる。また、訪問 (歯科) 診療、訪問薬剤指導、訪問看護において学生の専攻する職種と異なる指導者の指導を患者様を介して受けており、指導者からの評価も高かった。このような異職種のチーム医療の現場を学部教育に採り入れる意義は大きいと考えられる。

文部科学省大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「チーム医療を実現する体系的学士課程の構築—医系総合大学の特色を活かした参加型のチーム医療学習による医療人養成カリキュラム—」によって行った。

大阪大学歯学部附属歯科技工士学校におけるスモール・グループ・ディスカッション学習の試み

○瑞森崇弘、矢谷博文

大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座

An Approach of Small Group Discussion at Osaka University Dental Technology Institute

○Mizumori Takahiro, Yatani Hirofumi

Department of Fixed Prosthodontics, Osaka University Graduate School of Dentistry

職業としての歯科技工士の将来は明るいとはいえないように思われ、本学技工士学校卒業後に歯科技工から離れていく者も少なくない。自らの卒業後の見通しについて積極的な展望を持ち、状況に対応する能力を養うため、入学直後の学生に対して 1 グループ 5 名で与えたテーマについて研究、発表させた。この際のアンケートについて報告する。

対象は平成 23 年度 1 年次学生 20 名で、男女比ができるだけ同じになるように 4 グループに分けた。学習目標として、(1) 積極的・自主的に学習を進めることにより、自ら学ぶ習慣を身につける、(2) グループでのディスカッションを通じて、歯科医療チームの一員として活躍するためのコミュニケーション能力を養う、の 2 つを掲げた。

各グループに別々のテーマを与え、ディスカッションと発表準備の時間に 90 分の講義枠を 2 回半設けた。テーマは、(1) 海外歯科技工問題、(2) 院内技工と外注技工、(3) 日本の歯科医療

の将来、(4) 日本の歯科技工士と世界の歯科技工士の 4 つである。PC やインターネットを活用するよう指導した。発表後に、自分のグループのテーマに興味をもてたか、準備時間は充分にあったか、PC やインターネットを活用できたか、インターネットで使ったサービス、情報収集や PC で困ったこと、等についてアンケートを実施した。アンケートの回収率は 80 % であった。

テーマへの興味に対しては肯定的な回答が多かった。準備時間に問題はなかった。PC やインターネットの活用は「非常に役立った」が多く、活用できたようだが、使ったサービスは検索エンジンのみであった。困ったこととしては、パワーポイントを使える人が限られていたということがあげられた。

今回の試みは学生に好評であり、自由回答中に目的として掲げた「自ら学ぶ習慣」と「コミュニケーション能力」に関する記述も多く見られ、学習目標は達成されたと思われた。

EPA 比人看護師合格の軌跡と戦略

○瀧永 哲
足利赤十字病院

Track Record and Strategy of Filipino Candidate-Nurse Who Passed the National Examination

○Takinaga Akira
Ashikaga Red Cross Hospital

【目 的】

国際化の進んだ 21 世紀においても日本の現状は外国人に門戸が開かれているとは言いがたい。国際化と叫ばれ久しい中、留学生 10 万人計画が施行されて約 25 年の月日が流れ、当初に期待された成果が達成できているだろうか。また、五年前からはじまった EPA 協定に基づく外国人看護師は約 90% が三回の試験では合格できず、特別措置で 4 回目に挑戦したインドネシア人の合格者 5 人でしかなかった。

このような教育現状の中、大学歯学部では外国人留学生の占める比率が徐々に増えている。彼らの教育法の道標にするべく、日本来日後に十ヶ月で国家試験合格を唯一人成し遂げた教育メソッドを紹介する。

【方法および教育戦略】

EPA 候補者は国家試験受験の 3 ヶ月前に足利赤十字病院に入社し、一回目の試験を受けるまでの間は、仕事はせずに毎日勉強のみの生活をする。もし一回目で合格できるのであれば、その語二年間は仕事に集中でき採算も良い。

契約書には、日本語研修終了後の日本語習得は候補者本人が基本的に責任を持つ旨が記されている。勉強を教えることは基本的にはやめて、勉強の方法を教えることとした。つまり、指導の基本はセルフスタディーである。

【結 果】

結果として EPA 候補生は、2009 年 5 月に来日し 2010 年 2 月に国家試験に挑戦をして合格を果たしている。この間、10 ヶ月である。

【考 察】

今回の経験から言えることは、第 1 はモチベーションである。どんなに心配してみたところで、他人が関われることはすくない。モチベーションの維持は大切な指導の一つである。第 2 は、日本語能力の確実な修得である。現状で、オンデマンド講義等に代表されるサポートがなされているが、日本語で行われているために少なからぬ候補生が授業についていけず、あきらめムードが漂っている。国家試験のための日本語も最初から教えていくことは一般日本語の教育にも有用である。

韓国の歯学教育白書について

○川口陽子¹⁾、森尾郁子²⁾、鶴田 潤²⁾、竹原祥子¹⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野、²⁾東京医科歯科大学大学院歯学教育開発学分野

White paper on dental education in Korea

○Kawaguchi Yoko¹⁾, Morio Ikuko²⁾, Tsuruta Jun²⁾, Takehara Sachiko¹⁾

¹⁾Dept. of Oral Health Promotion, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Dept. of Dental Education Development, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

歯科医療の国際化を考えると、海外諸国の歯学教育の現状を調査しておくことは重要と思われる。本研究では韓国について調査を行った。

【方 法】

韓国歯科医学教育協議会は 2011 年 12 月に歯学教育白書を発行した。その内容を翻訳し、韓国の歯学教育の現況について調査を行った。

【結 果】

11 大学 (国立 6、私立 5) の定員総数は 1 学年約 750 名で、女子学生は約 1/3 である。教育年限は 6 年制が 3 校、4 年制が 7 校、両者併存が 1 校ある。4 年制の大学は専門大学院として教育を行い、修士の学位を取得できる。2015 年には、現在 4 年制の 5 校は 6 年制に戻る予定である。教員制度は日本とは異なり、同じ講座に教授が複数名いる場合がある。歯学部の教授数 (教授、准教授、助教授) の平均は、基礎分野が 17.7 名、臨床分野が 33.6 名である。

4 年間の専門課程の教育時間の平均は、講義 1680 時間、基礎実

習 (実験室) 560.9 時間、臨床実習 (実習室) 654 時間、臨床実習 (病院) 1491 時間で、総計は 4387.4 時間である。学生診療室はどの大学にも設置されているが、ユニット台数は 6~49 台、ユニット 1 台当たりの学生数は 1.4~12 名と差が認められた。病院実習の期間も 6~16 か月と幅があり、2010 年の学生 1 人当たりの平均診療患者数は、11~167 名と 10 倍以上の差が認められた。

韓国の歯科医師国家試験の合格率 (2010 年) は国立大学 97.2%、私立大学 96.8%、計 97.0% と非常に高い。卒業後の進路としてはインターンや勤務医が多いが、男性では 3 年間の兵役の代わりに、地方の保健所に勤務して公衆衛生歯科医師となる者がいる。その他、歯学部長の任期や裁定権、教員名簿、教員の研究実績や研究費等が大学別に記載されていた。

【考 察】

隣国の韓国と歯学教育に関する情報交換を行うことは、両国の歯学教育の改善や教育の国際連携の推進に有益であり、そのことが歯科医師の質の向上につながり、ひいては両国民の口腔保健の向上に寄与すると考えられた。

歯科大学における東洋医学教育の展開

○方 一如, 鎌田愛子, 上村 守, 戸田伊紀, 竹村明道, 益野一哉, 諏訪文彦, 田中昭男, 小正 裕, 川添堯彬
大阪歯科大学

Educational development of oral oriental medicine in dental university

○Fang Yi-ru, Kamada Aiko, Uemura Mamoru, Toda Isumi, Takemura Akimichi, Masuno Kazuya, Suwa Fumihiko, Tanaka Akio,
Komasa Yutaka, Kawazoe Takayoshi
Osaka Dental University

大阪歯科大学では2004年4月から、選択科目として新しく「歯科と東洋医学」の講義(15コマ, 1単位)が4年生を対象に開講された。2008年4月からは3年生を対象として必修科目となった。「歯科と東洋医学」の講義内容は東洋医学の歴史, 概念, 診断法, 現代生活習慣病の予防と東洋医学の養生法, 健康増進法, 東洋医学の四つの健康法(食事, 漢方薬, 鍼灸, 気功)および歯科領域における鍼灸療法と漢方薬療法である。歯科医師を目指す学生に東洋医学を教育することが, ひいては国民に対する口腔衛生・歯科治療の向上につながることを期待している。「歯科と東洋医学」の学習では, 歯科・口腔領域における, 近代歯科医学(西洋医学)と伝統的口腔観(東洋医学)の違い, さらに口腔と全身の関係にも視点を置くことが非常に重要である。2004年からの8年間に, 本学では, 「歯科と東洋医学」の講義の履修形態は選択から必修に変更になり, 現在までの受講生は

延べ1000名を超えている。学習方法はパワーポイントを用いた講義だけでなく, 学生が授業に積極的に参加できるように, 毎回クイズで学生に質問したり, 前回の内容を復習する小テストを行ったりしている。さらに, 講義時間内に体験実習も導入している。「歯科と東洋医学」の講義の目的は東洋医学の知識を体得し, 歯科医学に応用できる基本能力を身につけることである。このように, 歯科と東洋医学教育の取り組みは, できることから実施していくことが大切であると考えている。東洋医学に興味を持ち, 歯学部入学後の早い時期から学生に「歯科と東洋医学」の学習の目的を認識させ, 学習意欲を高める対策を取り, 学生が積極的に東洋医学に参加できる教育環境を創出することが重要と考えており, 工夫を重ねて, 「歯科と東洋医学」の教育発展に精進したいと思っている。

日本歯科大学生命歯学部第5学年ワークショップにおける過去4年間の学生の意識変化

○小林さくら子¹⁾, 田巻友一²⁾, 奈良陽一郎²⁾, 南雲 保²⁾, 小川智久¹⁾, 宮坂 平²⁾, 呉 健一²⁾, 住友雅人²⁾
¹⁾日本歯科大学附属病院, ²⁾日本歯科大学生命歯学部

Changes in the fifth-year dental student's consciousness in the past four years in workshop at The Nippon Dental University, School of Life Dentistry

○Kobayashi Sakurako¹⁾, Tamaki Yuichi²⁾, Nara Yoichiro²⁾, Nagumo Tamotsu²⁾, Ogawa Tomohisa¹⁾, Miyasaka Taira²⁾,
Kure Kenichi²⁾, Sumitomo Masahito²⁾

¹⁾The Nippon Dental University Hospital at Tokyo, ²⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

日本歯科大学生命歯学部では, 第1・3・5学年学生に対する学習の動機付けを行うために, 各学年の課題となるテーマと1年間の目標を設定して, ワークショップ(以下WSと略す)を開催している。今回, 平成19年から22年までの第5学年学生に対して, 診療参加型臨床実習をテーマとしたWSを行ったところ, 学年ごとの意識変化について興味深い結果が認められたため報告する。

【方 法】

平成19年から22年にかけて, 「貴重な診療参加型臨床実習を基盤とした学習」をテーマとしたWSを開催した。また, 平成21年まではセッションⅠ, Ⅱともに同一のサブテーマで行ったのに対し, 平成22年ではセッションⅡのサブテーマを変更し行った。WS参加学生数は, 平成19年:129名, 平成20年:115名, 平成21年:109名, 平成22年:104名で, 全体をA, Bに分け, 各グループの人数を8~9名とした。WSの手法にはKJ法を用い, 2次元展開によって選択されたユニットに対する目標を設定し到達方法を検討した。

【結 果】

Session I「歯科医師免許取得後の将来像」

4年間通して2次元展開法では, ①「知識・技術」②「大学院進学・研究」③「開業」④「収入面」の4種類のユニットを選択するグループが多かった。

Session II「臨床実習中での国家試験学習の位置付け」

平成19~21年度のいずれのグループも, 臨床実習中の座学との関連性やモチベーションを維持することの重要性を提唱するグループが多かった。

【考 察】

歯科医師になるという目的達成のためには, 将来の自分の歯科医師像を明確にすることで, 日頃のモチベーションの維持・向上を図る必要がある。モチベーションの維持には, 日常の学習環境や生活習慣など環境因子が重要であると考えられる。本学部で開催しているWSは, 自らの歯科医師像や今後の進路について再考するきっかけとなり, 生活習慣や学習習慣の改善を図る有用な方法であることが示唆された。

英国における歯科医師になるためのキャリアガイドブック

○竹原祥子¹⁾, 森尾郁子²⁾, 鶴田 潤²⁾, 川口陽子¹⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野, ²⁾東京医科歯科大学大学院歯学教育開発学分野

A Guide to UK Dental Schools and Dentistry as a Career

○Takehara Sachiko¹⁾, Morio Ikuko²⁾, Tsuruta Jun²⁾, Kawaguchi Yoko¹⁾

¹⁾Tokyo Medical and Dental University, Oral Health Promotion, ²⁾Tokyo Medical and Dental University, Department of Education Development

【目 的】

英国では、「将来歯科医師になりたい」と希望する者を対象としたキャリアガイドブックが発行されている。歯科大学受験生の数が減少している我が国においても、今後、優秀な学生を確保していくために、英国で実施している取り組みは参考になると考えられる。そこで、本研究ではこの本の内容について検討を行った。

【方 法】

2011年に発行された「CU@DENTAL SKL-A Guide to UK Dental Schools and Dentistry as a Career」を翻訳し、その内容について分析した。

【結 果】

本ガイドブックは9章からなり、以下の構成である。1章：歯科医師の職務内容、2章：21世紀の歯科医療、3章：歯科大学の学生生活、4章：歯科専門家としての研修制度、5章：歯科医師として活躍する職場、6章：歯科大学選択の際の考慮すべきポイント、7章：歯科大学への入学手順、8章：英国内の16校ある全歯科大学の紹介、9章：歯科医師となるためのステッ

プが説明されている。

また、大学教授、歯科医師会長、歯科公衆衛生部門の主任、歯科病院長、開業医、専門医、臨床研修医など様々な分野で活躍する先輩歯科医師らの学生生活の思い出、経歴、研修成果、現在の職業への満足度等、個人的なコメントも多数掲載されており、高校生が歯科医師という職業を身近に感じられるように工夫されている。8章の大学紹介の部分は、各大学の学部長や教育担当教員によって同じフォーマットで記載されており、それぞれの特徴がまとめて書かれており、読みやすく工夫されていた。

【考 察】

英国のキャリアガイドブックは、高校生や保護者の進路案内のために、全国の歯科大学の学部長、教育担当教員らが執筆し、また、社会で活躍している歯科医師らの協力を得て発行されたものである。歯科大学が優秀な学生をリクルートしたいと希望するのは、英国も日本も同じである。このキャリアガイドブックを参照することは、日本にとっても有益と考えられた。

臨床実習に対応した電子カルテの構築と医療情報の安全管理措置

○丸山陽子¹⁾²⁾, 久保至誠²⁾, 山邊芳久³⁾, 藤原 卓²⁾⁴⁾

¹⁾長崎大学病院総合歯科矯正歯科室, ²⁾長崎大学病院医療情報部歯科分室, ³⁾長崎大学病院医療教育開発センター, ⁴⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野

Construction of electronic medical record system and security management of medical information for dental students prior to clinical clerkship

○Maruyama Youichi¹⁾²⁾, Kubo Shisei²⁾, Yamabe Yoshihisa³⁾, Fujiwara Taku²⁾⁴⁾

¹⁾Division of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics, Nagasaki University Hospital, ²⁾Medical Information Center, Division of Dental Information, Nagasaki University Hospital, ³⁾Medical Education Development Center, Nagasaki University Hospital, ⁴⁾Division of Pediatric Dentistry, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

【目 的】

紙カルテから電子カルテへ移行した場合、学生はすべてのカルテを閲覧可能になり、個人情報保護や情報セキュリティの面から危険な状態になると危惧されている。2007年度医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議において、学生が閲覧できる電子カルテの範囲を臨床実習上必要な患者に限定し、学生の入力是指導医等が確認・修正・加筆を行うなど、診療情報の電子化を踏まえた取り扱いの必要性が報告されている。長崎大学病院では2008年より電子カルテを稼働させて、臨床実習に対してシステムへの機能追加と医療情報教育を行い、2010年度からe-Learningによる振り返り学習を実施している。そこで本発表では、電子カルテ稼働から約4年経過した現状での臨床実習環境と医療情報教育について報告する。

【方 法】

臨床実習に対する電子カルテへの対応は担当患者に限定するアクセス制御機能、承認機能で行った。医療情報教育は個人情報保護法と情報セキュリティを主として、対面講義とe-Learning

のブレンド型講義を実施し、臨床実習開始直前に操作研修を行った。さらに、振り返り学習のためにオンラインテストを講義終了後と約4か月後に実施し、その有効性について検討した。

【結果と考察】

アクセス制御機能と承認機能、操作研修により、臨床実習で電子カルテを利用できる環境が整った。医療情報教育を行ってから臨床実習開始までに4か月経過するため、臨床実習直前の理解度と意識向上のためにe-Learningによる自律的学習とオンラインテストが必要であった。自律的学習を行ったグループのテスト成績は臨床実習開始前で有意に成績が高くなり、自律的学習と振り返り学習は有効であると思われた。

【まとめ】

臨床実習での電子カルテ導入にはシステム整備だけでなく、安全管理措置として個人情報保護法や情報セキュリティに対する学生の理解や意識向上が重要である。

本学 1 年生に実施した「コミュニケーション概論」について 第 2 報 実施後の学生アンケート結果

○茂原宏美¹⁾、佐藤 勉¹⁾、尾崎順男¹⁾、市川 基¹⁾、小泉順一¹⁾、齋藤勝紀¹⁾、赤間亮一¹⁾、岩田健悟¹⁾、近藤健示¹⁾、内川喜盛²⁾、岡田智雄²⁾、大津光寛²⁾、大澤銀子²⁾、北原和樹³⁾、小口春久¹⁾

¹⁾日本歯科大学東京短期大学、²⁾日本歯科大学附属病院、³⁾日本歯科大学生命歯学部

Report of communication practice for first-year students 2 A questionnaire survey to students after practice

○Shigehara Hiromi¹⁾, Sato Tsutomu¹⁾, Ozaki Yoshio¹⁾, Ichikawa Motoi¹⁾, Koizumi Junichi¹⁾, Saito Katsunori¹⁾, Akama Ryoichi¹⁾, Iwata Kengo¹⁾, Kondo Kenji¹⁾, Uchikawa Yoshimori²⁾, Okada Tomoo²⁾, Otsu Mitsuhiro²⁾, Osawa Ginko²⁾, Kitahara Kazuki³⁾, Oguchi Haruhisa¹⁾

¹⁾The Nippon Dental University College at Tokyo, ²⁾The Nippon Dental University Hospital at Tokyo, ³⁾The Nippon Dental University School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

医療従事者が患者と良好な人間関係を構築し、円滑なチーム医療を行うことは極めて重要である。そのため、医療現場に必要な、様々なマナーやコミュニケーション技法を習得するため、現在「コミュニケーション概論」を実施している。授業終了後、学生にアンケート調査を実施し、若干の知見を得たので、その結果を報告する。

【方 法】

本授業は歯科衛生学科 78 名と歯科技工学科 35 名の 1 年生の合同講義を行い、終了後、自記式・無記名の質問紙を用いてアンケート調査を行った。今回は、学科を特定できる回答から以下の項目を抽出し、本講義に対する意識や感想等を比較した。具体的な質問事項は、講義テーマ(ユニット)の「第一印象」、「接遇・マナー」、「一方通行・双方通行のコミュニケーション」、「価値観の違い」、「コミュニケーションスキル」、「相手の話を聴く

ための留意点」の中で、1)「気づき」が大きかったもの、2)「印象」が深かったもの、3)「医療人になる上で役に立つ」と思われたもの、さらに、4)講義は有意義だったか、5)内容に興味を持てたか、6)積極的に参加できたか、7)今後に活かせる内容か、である。

【結果と考察】

講義テーマで「気づき」が大きかったものは、歯科衛生学科では「価値観の違い」、歯科技工学科では「第一印象」であった。「印象」が深かったものは、両学科ともに「第一印象」であった。「医療人になる上で役に立つ」と考えた学生は、歯科衛生学科では「接遇・マナー」、歯科技工学科では「第一印象」であった。上記 4)～7)の質問項目については、両学科で回答結果に違いがみられ、歯科衛生学科の学生に肯定的な回答が多かった。学科により異なる回答結果が得られたことは、今後の講義・実習等に反映すべきであることが示唆された。

鶴見大学歯学部医療人間科学特別合宿による学生の自己成長効果— 4 報 —

○田中 倫¹⁾、小平裕恵²⁾、中村千賀子³⁾、前田伸子⁴⁾、朝田芳信²⁾、下田信治¹⁾

¹⁾鶴見大学歯学部口腔解剖学講座、²⁾鶴見大学歯学部小児歯科学講座、³⁾東京医科歯科大学教養部、⁴⁾鶴見大学歯学部口腔微生物学講座

The self-awareness during the special camp of human medical science in Tsurumi University School of Dental medicine, Part 4

○Tanaka Rin¹⁾, Kodaira Hiroe²⁾, Nakamura Chikako³⁾, Maeda Nobuko⁴⁾, Asada Yoshinobu²⁾, Shimoda Shinji¹⁾

¹⁾Department of Oral Anatomy, School of Dental Medicine Tsurumi University, ²⁾Department of Pediatric Dentistry, School of Dental Medicine Tsurumi University, ³⁾Behavioral Science, College of Liberal Arts and Sciences, Tokyo Medical and Dental University, ⁴⁾Department of Oral Bacteriology School of Dental Medicine Tsurumi University

【目 的】

鶴見大学歯学部に 19～21 年度に入学した学生は、入学後の 4～6 月の間に 2 泊 3 日の医療人間科学特別合宿(以下合宿と略す)を行った。合宿では、集中して自分に向き合うことにより自分についての理解を深め、これから 6 年間共に学生生活を送る友達との理解を深めることにより、よりよい人間関係を築く土台作りを目的としている。現在までに我々は、合宿による学生の自己成長や合宿を経験したことで日常の会話での姿勢について報告している。そこで、今回は、特に自己成長の大きい学生と小さい学生との間で文章を比較し、その違いを検討した。

【方 法】

合宿に参加した歯学部 1 年生、平成 19 年度 137 名、20 年度 128 名、21 年度 122 名が提出した感想カードは、小林純一らの人格的成長を視点とする分析基準表を用い自己、他者、その他への関与対象へ分類し、さらに心理的自由度 Stage 1～4 の 3 種類 4 段階へ分類した。分類の結果、自己成長が大きい学生と、小さい学生を抽出し、文章数、出現する関与対象の種類、Stage

の値を比較検討した。

【結 果】

自己成長が高い学生は文章数が多く、関与対象が多種類に出現する傾向にあった。また、演習が進むにつれて心理的自由度が高くなった。一方、自己成長が小さい傾向を示す学生では、文章数が少なく、関与対象がその他に限局され、心理的自由度に変化がみられない傾向を示した。

【考 察】

今回の結果から、自己成長の大きい学生は研修開始時から自己や他者の感情に気づくことにより、急速に関心を外的世界に広げていく傾向が示唆された。一方、自己成長が小さい傾向の学生は、自己や他者への感情に気づきにくい傾向が示唆された。歯科医師にとって、社会的によりよい人間関係を築けるようになることは必要不可欠である。そのため自己成長が小さい学生に対し、特別研修が終了した後の学生生活においてきめ細かい対応を行い、自己成長を援助する必要があると考える。

日本大学松戸歯学部における医療行動科学系学問確立の試み

○伊藤孝訓¹⁾²⁾、青木伸一郎¹⁾²⁾、大沢聖子¹⁾²⁾、葛西一貴²⁾³⁾、牧村正治⁴⁾、小川哲次⁵⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、²⁾日本大学松戸歯学部口腔科学研究所、³⁾日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座、⁵⁾広島大学病院口腔総合診療科

Attempt to establish Behavioral Science in Nihon University School of Dentistry at Matsudo

○Ito Takanori¹⁾²⁾、Aoki Shinichiro¹⁾²⁾、Osawa Seiko¹⁾²⁾、Kasai Kazutaka²⁾³⁾、Makimura Masaharu⁴⁾、Ogawa Tetsuji⁵⁾

¹⁾Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾Research Institute of Oral Science, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ³⁾Department of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁴⁾Department of Social Dentistry (Dental Education), Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁵⁾Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

【目 的】

行動科学は、人文科学、社会科学、生物科学など広範な領域に及んでおり、医療の分野では患者を単なる生物医学的な存在としてではなく、心理的・社会的・倫理的側面を含めて全人的に捉えようとするために必要な学問領域である。欧米では医療者教育において、必須の学問分野であり、これなしに臨床活動は成り立たないといわれている¹⁾。

日本大学松戸歯学部では平成22年度より新カリキュラムの改訂施行をしたが、教養・基礎医学・臨床歯科医学の積み上げ学問体系に加えて、前述の考えに基づいて、1年から6年まで繋がる医療行動科学系を立ち上げ、現在進めているので、その内容を紹介する。

【内 容】

医療行動科学系は、1年前期：医療行動科学1(歯科医学概論)、1年後期：医療行動科学2(医学・歯科医学史)、2年前期：医

療行動科学3(医療倫理学)、2年後期：医療行動科学4(医療心理学)、3年前期：医療行動科学5(患者—医療者関係学)、3年後期：医療行動科学6(医療人間学)、4年前期：医療行動科学7(医療面接・臨床判断学)、4年後期：医療行動科学8(医療コミュニケーション学)、5年前・後期(臨床実習)、6年前期：医療行動科学9(研究マインド育成/未定)となっている。これらの行動科学系の学問と基礎医学や臨床歯科医学のカリキュラムと密接な関係をもったカリキュラムデザインが理想と考え組み立てている。

現在、4年次までの科目は、開講されているが、1年次から受講した学生が未だ3年次であり、本学系受講の感想などについてのアンケートは行っていない。

そこで、今回、これらのシラバスを提示することで多くの意見を戴きたいと考えている。

東京歯科大学における市民参加型教育団体Patient Communityとその授業参加について

○山本 仁¹⁾、村上 聡²⁾、平田創一郎³⁾、杉原直樹⁴⁾、高橋俊之⁵⁾、望月隆二⁶⁾、河田英司¹⁾、井出吉信⁷⁾

¹⁾東京歯科大学歯科医学教育開発センター、²⁾東京歯科大学臨床検査病理学講座、³⁾東京歯科大学社会歯科学研究室、⁴⁾東京歯科大学衛生学講座、⁵⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科、⁶⁾東京歯科大学物理学研究室、⁷⁾東京歯科大学学長

Patient Community, as citizen participation type educational group, and the member's attendance to Communication Classes at Tokyo Dental College

○Yamamoto Hitoshi¹⁾、Murakami Satoshi²⁾、Hirata Soichiro³⁾、Sugihara Naoki⁴⁾、Takahashi Toshiyuki⁵⁾、Mochizuki Ryuji⁶⁾、

Kawada Eiji¹⁾、Ide Yoshinobu⁷⁾

¹⁾Dental Education Development Center, Tokyo Dental College, ²⁾Department of Clinical Pathophysiology, Tokyo Dental College,

³⁾Department of Social Dentistry, Tokyo Dental College, ⁴⁾Department of Epidemiology and Public Health, Tokyo Dental College,

⁵⁾Division of General Dentistry, Tokyo Dental College Chiba Hospital, ⁶⁾Laboratory of Physics, Tokyo Dental College, ⁷⁾Dean of Tokyo Dental College

【目 的】

東京歯科大学では平成21年度に文部科学省から「個々のニーズに応えられる歯科医師養成～高い倫理観とコミュニケーション能力に基づく総合診療計画立案能力の向上～」が「大学教育・学生支援推進事業」【テーマA】「大学教育推進プログラム」として採択された。この取組は「総合診療計画立案能力養成プログラムの構築」と「Patient Community(略称P-Com)の設立」を軸としている。P-Comを模擬患者より現実の患者に近い対応をして頂ける市民参加型教育団体と位置づけ、メンバーの方々にはコミュニケーション学教育に携わって頂いている。P-Comの広報・メンバー募集活動は地域の既存のコミュニティーに出張して行う出張市民公開講座と、市民会館や大学で行う市民公開講座の2つの方法で行った。そこでP-Comの広報・メンバー募集活動の違いによる登録者数の比較、メンバー登録者の構成およびメンバーのコミュニケーション学参加状況について報告する。

【方 法】

平成21年4月から平成23年3月までの公開講座でP-Comに登録をした人数、男女比、直近の公開講座から登録までの日数、メンバーのコミュニケーション学参加人数などについて調べた。

【結果と考察】

P-Com登録者は全員市民公開講座受講者であり、合計24名(男性8名、女性16名)が登録した。このうち半分以上が公開講座当日に登録をしていた。また11回行われたコミュニケーション学に参加したのは16名(男性5名、女性11名)で参加のべ人数は53名(男性18名、女性35名)であり、参加者一人当たりの参加回数は3.3回だった。以上の結果からP-Com登録者のおよそ2/3がコミュニケーション学に参加し、また参加者一人がおよそ1/3のコミュニケーション学に参加していることから、P-Com設立の趣旨がP-Comメンバーに理解されていることが示唆された。

鹿児島大学歯学部における臨床能力評価の取り組み —臨床実習終了時 OSCE の導入—

○田口則宏, 中村典史, 杉原一正, 門川明彦, 今村晴幸, 西原一秀, 岩崎智恵, 梶谷 淳
鹿児島大学歯学部

Clinical skill assessment in Kagoshima University Faculty of Dentistry —Introduction of advanced OSCE at the end of undergraduate clinical training—

○Taguchi Norihiro, Nakamura Norifumi, Sugihara Kazumasa, Kadokawa Akihiko, Imamura Haruyuki, Nishihara Kazuhide,
Iwasaki Tomonori, Kojitani Atsushi
Kagoshima University Faculty of Dentistry

【目 的】

本学歯学部では診療参加型臨床実習を推進する一環として、平成 23 年度より臨床実習を終了した学生に対して OSCE をトライアルとして実施した。本発表では、OSCE の実施概要を報告するとともに、参加した学生および教員対象に事後アンケート調査を行い、抽出された問題点を振り返ることにより、次年度以降の臨床実習終了時 OSCE の本格実施および臨床実習での教育にフィードバックすることを目的とする。

【方 法】

臨床実習開始前に、歯学教育モデルコアカリキュラムおよび本学部独自に定めた臨床実習の到達目標を整理し、臨床系各講座の教育担当領域のシラバスを見直すとともに、ブループリントを作製することから開始した。OSCE はこの到達目標に基づき、保存系、補綴系、口腔外科系、予防歯科系、矯正歯科系、歯科放射線科系の各教育担当講座が課題を作製、出題した。試験は平成 24 年 2 月 18 日(土)に平成 23 年度 5 年生 56 名を対象に実施した。

【結 果】

各ステーションにおける試験結果から、評価項目によって成績のばらつきが明確であり、OSCE 課題作成上の問題、また臨床実習での教育内容あるいは指導方法に関する問題などが明らかとなった。学生対象のアンケート結果から、受験には相応のストレスが伴ったものの、今回はトライアルで行ったこともあり、比較的建設的な意見が多かった。教員対象のアンケート結果からは、OSCE 実施を通じて臨床実習のあり方について振り返る意見が多く認められた。

【考察】

今回、診療参加型臨床実習を推進する一環として行った臨床実習終了時 OSCE は、学生の臨床能力評価のみならず、教員に対して臨床実習のあり方を振り返る貴重な機会となった。今後はこれらの経験と得られた意見をベースに、より充実した臨床実習カリキュラムを構築、実施し、臨床能力評価法についても改善を加えていく予定である。

アメリカにおける歯科医師実技試験の視察報告

○大久保力廣¹⁾, 小林 馨²⁾

¹⁾鶴見大学歯学部有床義歯補綴学講座, ²⁾鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座

Inspection of American Dental Licensure Practical Examination

○Ohkubo Chikahiro¹⁾, Kobayashi Kaoru²⁾

¹⁾Department of Removable Prosthodontics, Tsurumi University School of Dental Medicine, ²⁾Department of Oral and Maxillofacial Radiology and Diagnosis, Tsurumi University School of Dental Medicine

去る 5 月 1 日、2 日にミシガン州デトロイトにある University of Detroit Mercy, School of Dentistry で実施されたアメリカにおける歯科医師資格試験のひとつである North East Regional Board (NERB) の実技試験 2012 Spring Dental Exams を視察した。前日の夕刻には NERB コーディネーターによる約 1 時間程度の試験実施要項に関するオリエンテーションが行われた。試験初日は早朝より患者が試験場に集合し、保存修復(前歯レジジン充填, 大白歯アマルガム充填)と歯周治療(歯周検査, スケーリング)が行われた。試験場では Clinical Floor Examiner が試験の進行、運営を担当し、学生からの質問に対する受け答えや患者管理、衛生管理に問題があった場合の注意、指導を行っていた。また公正を期すために試験中は患者が別室に移動し、Examiner による術前のチェック、齶窩や窩洞形態の修正

確認、ポケット測定、最終評価を受けていた。

2 日目はシミュレーション模型上での歯内療法(前歯根管充填, 白歯根管孔明示)と補綴処置(前歯セラミッククラウン形成, 白歯ブリッジ支台歯形成)が行われた。受験生による試験歯の顎模型への装着およびマネキンのセットアップが行われた後、8:30 より試験が開始され、Clinical Floor Examiner の指示により円滑に進行した。試験の終了した者から退出が認められ、試験後はその場での評価はまったく行われず、試験歯を含めた顎模型ごと NERB Central Office に送られた。

以上、アメリカの歯科医師実技試験を視察し、実際の患者を相手にした実技試験や多数歯を対象としたシミュレーション試験のシステムおよび評価法を終日見聞したので、その概要を報告する。

歯列の連続性を評価基準とした実習成果物の評価方法について

○早川 淳¹⁾、木暮ミカ²⁾、河野 正司²⁾、飛田 滋²⁾、尾田雅文¹⁾、東村 明宏³⁾

¹⁾新潟大学、²⁾明倫短期大学、³⁾株式会社ニッシン

An Objective Evaluation Method for Tooth Carving by dentition of continuity

○HAYAKAWA Atsushi¹⁾、KOGURE Mika²⁾、KOHNO Shoji²⁾、TOBITA Shigeru²⁾、ODA Masafumi¹⁾、HIGASHIMURA Akihiro³⁾

¹⁾Niigata University、²⁾Meirin College、³⁾NISSIN DENTAL PRODUCTS INC.

【目 的】

本研究は、これまで我々が行ってきた教育に関する研究成果を踏まえ、従来の教員によるヒューリスティック評価と同程度に保ちつつ、評価の個人差やバラツキを排除した客観性の高い判定・評価が可能な実技実習自動評価システムを開発し、学生が各自のペースで効率的かつ確実に実技を習得できるようにすることを目的とする。本報では、実習成果物撮影装置で得られた義歯の写真をもとに歯の連続性の観点から評価するシステムについて紹介する。

【方 法】

実習成果物撮影装置で得られた義歯の写真から、連続性に関するラインを引くときに重要となる上顎右側第二大臼歯と上顎右側第一大臼歯、上顎右側第二小臼歯の代表座標点3点を専用ソフトの座標検出機能で測り、3点を通る円の半径を計算し、円の半径の逆数である曲率を考え、左右の曲がり方を考慮して符号付き曲率を計算した。今回は上顎右側第一大臼歯を様々なパターンで変えてみた時の場合を評価した。判定したモデルはコン

トロール(上顎右側第一大臼歯の見本模型)、試作1(見本模型より小さい場合)、試作2(見本模型より大きい場合)、試作3(下顎右側第一大臼歯に入れ替えた場合)、試作4(上顎左側第一大臼歯に入れ替えた場合)の5パターンであり、それぞれの符号付き曲率を計算して見本の符号付き曲率との差異から判定した。

【結 果】

試作1の符号付き曲率は見本と異符号になった。試作2は見本と同符号で曲率が大きくなった。試作3は見本と異符号になった。試作4は見本と同符号で曲率が小さくなった。

【考 察】

いずれの場合も見本の符号付き曲率との差異がみられるため、符号付き曲率をもとにした判定は可能である。この方法では手動では評価可能だが、自動化するには閾値の自動調整の問題や画像処理の際の余分な線の除去などの問題がある。

歯型彫刻実習における従来型評価方法の検証

○木暮ミカ¹⁾、飛田 滋¹⁾、河野 正司¹⁾、早川 淳²⁾、尾田雅文²⁾、東村明宏³⁾

¹⁾明倫短期大学、²⁾新潟大学、³⁾株式会社ニッシン

The verification of conventional evaluation method at Tooth carving training

○KOGURE Mika¹⁾、TOBITA Shigeru¹⁾、KOHNO Shoji¹⁾、HAYAKAWA Atsushi²⁾、ODA Masafumi²⁾、HIGASHIMURA Akihiro³⁾

¹⁾Meirin College、²⁾Niigata University、³⁾NISSIN DENTAL PRODUCTS INC.

【目 的】

本研究は、従来の教員によるヒューリスティック評価と同程度に保ちつつ、評価の個人差やバラツキを排除した客観性の高い判定・評価が可能な実技実習自動評価システムを開発し、学生が各自のペースで効率的かつ確実に実技を習得できるようにすることを目的とする。本報では、歯型彫刻の評価方法について、従来行われているヒューリスティック評価の妥当性を検証する。

【方 法】

本研究では実技実習「歯型彫刻」を対象とする。

(1)被験者：歯型彫刻実習を担当する、教員歴15年以上の歯科技工士学科所属教員4名(歯科医師1名、歯科技工士3名)

(2)対象：本科2年生29名のうち、無作為に抽出した10名の作品

(3)評価方法：

1)以下の2種類の評価方法を用いて対象作品を100点法で数値化する。

A. 客観的な基準を持たない教員の主観による目視評価法

B. 評価目的を歯の鑑別基準(ミューライターの三徴候など)に基づく「機能性」8項目と彫刻技法やバランスといった「芸術性」2項目に細分化し、各項目について目視評価する。

2)各評価法に要した総所要時間を測定する。

【結果と考察】

2案の結果をt検定で分析したところ、学生毎の評価には $p<0.01$ の有意差が、総所要時間には $p<0.05$ の有意差が見られた。A案は基準に客観性がないため学生へのフィードバックが難しく、内容的には官能評価に近いため、1点刻みの精度はそもそも不適当と思われる。また、B案は到達基準を明確にすることで公平かつ客観的な評価基準を設定しているが、対象毎の点数に教員間でバラツキが生じている。これは評価項目を細分化した結果、必然的に教員への必要労力が増大してしまったため、疲労によるエラーが原因と思われる。以上の結果より、歯の鑑別などの数値による分析化が可能な「量的・解析的评价」は自動化し、人間の評価内容を官能評価に限定することで、ヒューマンエラーの低減が図れることが示唆された。

有床義歯補綴学実習への新視聴覚システム導入による 実習説明方法についてのアンケート調査

○加地彰人¹⁾, 西 恭宏¹⁾, 丸山浩美¹⁾, 鎌下祐次²⁾, 長岡英一³⁾

¹⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面補綴学分野, ²⁾鹿児島大学医学部・歯学部附属病院義歯補綴科, ³⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面外科学分野

Questionnaire survey on demonstration methods in the removable prosthodontics exercise introduced the new visual and auditory system

○Kaji Akihito¹⁾, Nishi Yasuhiro¹⁾, Maruyama Hiromi¹⁾, Kamashita Yuji²⁾, Nagaoka Eiichi³⁾

¹⁾Department of Oral and Maxillofacial Prosthodontics, Field of Oral and Maxillofacial Rehabilitation, Course for Advanced Therapeutic, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences, ²⁾Denture Prosthodontics Restoration, Advanced Dentistry Center, Kagoshima University Medical and Dental Hospital, ³⁾Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Field of Oral and Maxillofacial Rehabilitation, Course for Advanced Therapeutic, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences

当歯学部の有床義歯補綴学基礎実習(以下、基礎実習)では、従来、実習手技を各実習台上のモニターでビデオ再生する視聴覚システムを用いていたが、平成22年度より、PCのLANを利用した新たな視聴覚システム(FUJI XEROX社製MediaDEPO)を導入した。これにより、これまでの教員からの動画による全体説明に加えて、学生自身で実習説明の動画やテキスト・画像による資料を繰り返し自由に閲覧できるようになった。また、ネットワークカメラを使用したライブデモ映像の配信も可能となった。

今回、新視聴覚システムの有効な利用方法を検討するための調査として、平成23年度本学歯学部4年次生53名(男性36名、女性17名)を対象に、全部床義歯の基礎実習における各ステップにおいて、視聴覚システムによる説明(以下、視聴覚デモ)と班(12-14名)毎に行う教員による説明(以下、ライターデモ)について比較するアンケートを行った。

アンケート結果から、各実習ステップにおいて、「視聴覚デモとライターデモ」の両方が必要であると回答した学生は74.5%と多く、次いで「ライターデモのみ」22.9%、「視聴覚デモのみ」2.5%、「どちらもいえない」0.2%の順となった。また、本基礎実習では、シミュレーションによる診療手技をできるだけ取り入れるよう改善を行ってきているため、実習項目を診療手技と技工手技に分けて比較したが、ともに多くの学生が「視聴覚デモとライターデモ」の両方が必要であるとし、次いで、「ライターデモのみ」と回答する学生が多かった。

今回のアンケートから、実習中に学生自身が繰り返し利用できる視聴覚システムを用いても、教員による直接のデモンストレーションによる説明が学生から必要とされていることが示された。今後、このLAN利用の視聴覚システムの反復利用と予習方法について検討していく予定である。

歯の外傷に対する研修歯科医の認識

○楊 秀慶, 内川喜盛, 秋山仁志
日本歯科大学附属病院

The Perception of residents toward dental trauma

○Yoh Hidenori, Uchikawa Yoshimori, Akiyama Hitoshi
The Nippon Dental University Hospital

【目的】

歯の外傷は小児期に起こることが多く、予後不良になると咬合、審美性、顎顔面の成長発育に大きく影響する。そのため初期の対応が重要とされているが、臨床において均等に体験する事は困難であり、またカリキュラムの構成や適切な模型がない等の理由から、本邦の小児歯科領域においては歯の外傷に関する基礎実習は実施されていない。今回は歯の外傷に対する教育効果を高める事を目的とし、研修歯科医の認識を調査したので報告する。

【方法】

調査は、日本歯科大学附属病院研修歯科医91名を対象とし、本年度臨床研修オリエンテーション期間中に質問用紙を用いて無記名方式で行った。調査項目は、「性別」、「出身校」、歯の「完全脱臼」、「側方脱臼」、「埋入(迷入)」について、「どのような状態で説明できるか」、「具体的な対応法を説明できるか」、また「卒前教育における歯の外傷実習の有無」、「歯の外傷の模型実習の必要性」と「必要と思う場合の実習時期」等とした。

【結果】

歯の「完全脱臼」、「側方脱臼」、「埋入(迷入)」の「状態を説明できる」はそれぞれ76%、14%、66%で、「対応法を説明できる」はそれぞれ59%、7%、49%であった。また「歯の外傷の模型実習が必要」は85%で「必要と思う場合の実習時期」については学生時(56%)、研修医時(43%)、研修医終了後(3%)の順に多かった。

【考察】

本調査の結果より、国家試験直後で知識面の充実が見られる調査実施時期にも関わらず、側方脱臼に対する状態、対応法に関する知識は、完全脱臼、埋入に比べ極端に低い事がわかった。日本小児歯科学会の実態調査によると、側方脱臼の発生率は脱臼の中で動揺の次に多く乳歯、永久歯合わせて12%である。歯の外傷に関する模型実習は、臨床研修時までに必要と答えた研修歯科医が殆どである事を考慮すると、有効な実習用模型を開発する必要があると思われる。

小児歯科臨床教育への3D映像技術の導入について

○成瀬正啓, 福本 敏

東北大学大学院歯学研究科口腔保健発達学講座小児発達歯科学分野

Using 3D images for clinical education of pediatric dentistry

○Naruse Masahiro, Fukumoto Satoshi

Division of Pediatric Dentistry, Department of Oral Health and Development Sciences, Tohoku University Graduate School of Dentistry

映像技術の進歩により、様々な視覚的ツールを用い、直感的感性に訴えた体験を教育に利用する事が可能となっている。また近年の3D技術の開発により、視覚的ツール選択の幅が広がったといえる。そこで、我々は、歯科臨床教育のツールとして3D撮影が可能なビデオカメラを用いた視覚的教材の作製と利用を考えた。今回、歯科臨床で必要と考えられる基本的手技を3D撮影し、歯学部学生、歯科臨床研修医に対し撮影した3D映像を体感してもらい、その学習評価を行ったので報告する。対象は歯学部学生、歯科医師研修医とした。体感した映像は歯科臨床経験が浅い為、ラバーダム装着、セメントの練和、など基本的手技に限定した。手技を3D映像と従来の2D映像で体感してもらい、各々の感想を自由記載方式と、選択式のアンケートを用いて回答を得た。アンケートの結果は以下のものとなった。以前に3D映像を見た経験があるものは85.7%で、その中でも家電量販店66.7%映画館が50%、が上位にあがっ

た(複数回答あり)。自由記載アンケートでは、『奥行きを感じる』、『印象に残りやすい』、『表面性状の差は3Dの方がわかりやすい』という意見があがった。

選択式アンケートの結果では、3D映像の方が『興味を持つ』が100%、『記憶に残るが』85.7%、であるのに対し、目の疲労感、3D映像で強く感じるものが100%であった。また、『術式のわかりやすさ』に関しては、従来の映像のほうが分かりやすい者が42.9%、3D映像の方がわかりやすい者が28.5%、どちらともいえないが28.5%であった。3D映像は、日常的に目にする機会が増えてきたが、歯科教育ツールとしての活用は報告がない。3D映像は学生の興味を引き、映像を記憶に残す事に対し優れていることが明らかとなった。以上の事をふまえて、より教育効果、継続的学習が期待できる視覚ツールの開発を行いたいと考えている。

国際学会研究発表奨励賞 受賞演題

Innovation of educational program for undergraduate dental students at Hiroshima University

○Oka Hiroko¹⁾²⁾, Mine Yuichi³⁾, Udijanto Tedjosasongko¹⁾, Uchida Takashi⁴⁾, Tanne Kazuo⁵⁾, Kurihara Hidemi⁶⁾, Takata Takashi⁷⁾

¹⁾Department of International Collaboration Development for Dentistry, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ²⁾Promoting Office of Graduate Program for BioDental Education, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ³⁾BioDental curriculum center, Faculty of Dentistry, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ⁴⁾Department of Oral Biology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ⁵⁾Department of Orthodontics and Craniofacial Developmental Biology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ⁶⁾Department of Periodontal Medicine, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan, ⁷⁾Department of Oral and Maxillofacial Pathobiology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

Background

It has long been anticipated to foster dental human resources who well understand trend of biology and genome medicine, and practice evidence-based and patient-oriented dentistry. For this mission, we have been required to operate the education based on biology, engineering and general medicine, to harmonize the education crossing-over disciplines among dental jobs, and to develop the ability to respond to globalization.

Summary of Work

We have actively pursued educational reform in dentistry and oral health sciences at undergraduate level over the last decade, and made ceaseless approach to develop Asia-based global collaboration in dental education and researches.

Summary of Results

We established a unique two-course program (course for frontier dental science and course for clinical dental science) and a four-year school of oral health sciences. We started the "BioDental" education at undergraduate school. We will welcome international students into our undergraduate school and start a four-year international dental course collaborating with Asian dental schools.

Conclusion

We have tried to reconstruct and establish educational program of dentistry to develop human resources; "BioDentist", "Oral Health Manager", "Oral Engineer", who can manage the paradigm shift of dental medicine cooperatively and internationally in the 21st century from undergraduate level.

保存修復学基礎実習における問題志向型教材の開発 —朝日大学と大阪歯科大学のコンポジットレジン修復トライアル—

○小竹宏朋¹⁾、堀田正人¹⁾、谷本啓彰²⁾、山本一世²⁾、泉川昌宣³⁾、斎藤隆史³⁾、高瀬保晶⁴⁾、米田雅裕⁵⁾、泉 利雄⁶⁾、廣藤卓雄⁷⁾、谷岡正行⁸⁾、新谷英章⁹⁾

¹⁾朝日大学歯学部歯科保存学分野歯冠修復学、²⁾大阪歯科大学歯科保存学講座、³⁾北海道医療大学歯学部う蝕制御治療学分野、⁴⁾東京歯科大学千葉病院総合診療科、⁵⁾福岡歯科大学口腔医療センター、⁶⁾福岡歯科大学歯科保存学分野、⁷⁾福岡歯科大学総合歯科学分野、⁸⁾株式会社ニッシン、⁹⁾広島歯科技術専門学校

Developing Problem-Oriented Learning Tools for Basic Training in Operative Dentistry —Composite Resin Restoration Trial at Asahi University and Osaka Dental University—

○Kotake Hiroto¹⁾, Hotta Masato¹⁾, Tanimoto Hiroaki²⁾, Yamamoto Kazuyo²⁾, Izumikawa Masanobu³⁾, Saito Takashi³⁾,

Takase Yasuaki⁴⁾, Yoneda Masahiro⁵⁾, Izumi Toshio⁶⁾, Hirofujii Takao⁷⁾, Tanioka Masayuki⁸⁾, Shintani Hideaki⁹⁾

¹⁾Asahi University, ²⁾Osaka Dental University, ³⁾Health Sciences University of Hokkaido, ⁴⁾Tokyo Dental College Chiba Hospital,

⁵⁾Fukuoka Dental College, ⁶⁾Fukuoka Dental College, ⁷⁾Fukuoka Dental College, ⁸⁾Nissin Dental Products Inc., ⁹⁾Hiroshima Dental Technical College

【目 的】

今回我々は、北海道医療大学、東京歯科大学、朝日大学、大阪歯科大学、福岡歯科大学、(株)ニッシンと合同でプロジェクトチームを結成し問題志向型教材の開発を行った。さらに、朝日大学2学年と大阪歯科大学3学年の基礎実習に完成した教材の一部をトライアル導入し、学生へアンケート調査を行ったので報告する。

【方 法】

平成23年度朝日大学2学年学生136名と大阪歯科大学3学年学生122名を対象とした。1級コンポジットレジン修復の基礎実習において、問題志向型教材(PowerPoint (PP)教材と動画教材)を用いて行い、無記名のアンケート調査を行った。なお、実習設備は両大学とも学生2名に1台のモニターを使用し、インストラクターが教材の操作を行った。朝日大学はPP教材、動画教材を使用し、大阪歯科大学は動画教材を使用した。インストラクターの説明とともに一度再生し、実習中は動画教材を

繰り返し再生した。

【結 果】

朝日大学は129名、大阪歯科大は114名の有効な回答を得た。朝日大学の学生はPP教材は91.5%、動画教材は76.9%が役に立ったと回答した。PP教材、動画教材ともに術者視点の画像・動画、ステップごとの構成がよかったと回答した。大阪歯科大学の学生は96.5%が役に立ったとし、術者視点の映像、ステップごとの構成がよかったと回答した。また、両大学ともに共用試験対策や臨床実習にも使用してほしいという意見が多数あった。

【考察およびまとめ】

両大学の学生から総合的には高い評価を得たが、検査・診断・治療計画立案の評価が低く、改善の余地があると思われた。また、PPの数が多く、動画時間が長く、BGMも不要との意見であった。内容をコンパクトにし、実際のタービンの音などをそのまま使用し臨場感を出すことでより良い教材となると思われた。

全部床義歯補綴学基礎実習における試作4倍大歯冠石膏模型を用いた 削合実習の有効性について

○額 諭史、會田英紀、豊下祥史、河野 舞、川西克弥、会田康史、越野 寿

北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系咬合再建補綴学分野

Educational advantage of crown-shaped prototype plaster model in complete denture practical training

○Nuka Satoshi, Aita Hideki, Toyoshita Yoshifumi, Kono Mai, Kawanishi Katuya, Aida Yasushi, Koshino Hisashi

Department of Occlusion and Removable Prosthodontics, Health Sciences University of Hokkaido School of Dentistry

【目 的】

本学における全部床義歯補綴学基礎実習では、フルバランスドオクルージョンに関する理解を深めるため、天然歯形態を模した4倍大歯冠石膏模型(上下顎左側第一大臼歯)を用いた削合実習を行ってきた。しかしながら、3次元下顎運動の方向を理解した上で歯冠石膏模型をフリーハンドで接触滑走させ、前方咬合小面、後方咬合小面、平衡咬合小面を適切な位置と向きに形成するのは難しかった。そこで今回、人工歯形態を模した試作4倍大歯冠石膏模型を用いて咬頭嵌合位ならびに偏心咬合位の再現性について調査し、削合実習における有用性について検討を行った。

【方 法】

平成23年度の本学歯学部第5学年31名を対象として咬合接触状態の再現実験とアンケート調査を実施した。再現実験にはベラシアNC(松風)とそれに明確なファセットを付与したベラシアSA(松風)の人工歯形態を再現した4倍大歯冠石膏模型(以下、それぞれSAならびにNC)を用いた。学生には、咬頭嵌合

位と作業側の偏心咬合位を任意に再現させ、それぞれの位置を決定するまでにかかった時間を計測した。また、4方向から規格撮影を行い、各基準点の位置を測定することによって上下顎歯冠石膏模型の相対的位置関係の差異を算出し、咬合接触状態の再現性について比較検討を行った。さらにVAS法によるアンケートを用いて咬頭嵌合位ならびに偏心咬合位の位置を決定する際の感覚的な難易度を調べた。

【結果及び考察】

咬頭嵌合位の再現性においては、SAとNCとの間に有意な差を認めなかった。一方、偏心咬合位の再現性については、SAはNCと比較して有意に高い値を示し、また、アンケート結果では、NCと比較して、SAで咬頭嵌合位および偏心咬合位を再現することが容易であることが明らかとなった。以上の結果より、SAの4倍大歯冠石膏模型は削合実習に有用であり、フルバランスドオクルージョンを理解させる上で高い学習効果が期待できることが示唆された。

歯冠彫刻実習における効果的な教材開発（その2） —鏡像模倣を応用した歯彫刻教材—

○谷内秀寿¹⁾、倉澤郁文²⁾、三溝恒幸³⁾、横井由紀子⁴⁾、大須賀直人⁴⁾、岡藤範正⁵⁾、金銅英二⁶⁾

¹⁾松本歯科大学歯学部入門歯科医学、²⁾松本歯科大学歯学部歯科補綴学講座、³⁾松本歯科大学病院歯科技工士室、⁴⁾松本歯科大学歯学部小児歯科学講座、⁵⁾松本歯科大学大学院硬組織疾患制御再建学講座、⁶⁾松本歯科大学歯学部口腔解剖学第一講座

Development of Effective Teaching Materials in Crown Sculpture Practice Part 2 : Sculpture Material Used to Mimic a Mirror Image

○Taniuchi Hidetoshi¹⁾, Kurasawa Ikufumi²⁾, Samizo Tsuneyuki³⁾, Yokoi Yukiko⁴⁾, Osuga Naoto⁴⁾, Okafuji Norimasa⁵⁾, Kondo Eiji⁶⁾

¹⁾Dental Science and Practice, School of Dentistry, Matsumoto Dental University, ²⁾Department of Prosthodontics, School of Dentistry, Matsumoto Dental University, ³⁾Division of Dental Laboratory, Matsumoto Dental University Hospital, ⁴⁾Department of Pediatric Dentistry, School of Dentistry, Matsumoto Dental University, ⁵⁾Department of Hard Tissue Research, Graduate School of Oral Medicine, Matsumoto Dental University, ⁶⁾Department of Oral Anatomy & Neuroscience, School of Dentistry, Matsumoto Dental University

【目 的】

歯学初心者には歯の形態を理解させることは難しい。そのために初年次教育の中で三次元的に形態表現する彫刻技術を学生に効率よく体得させることを目的に、鏡像模倣を応用した歯彫刻教材を製作し実習に導入した。

この教材は2005年に製作し、更に2011年に改善を行いその有用性が認められたので、今回ここに報告する。

【方 法】

彫刻作業が初心者に敵することを考慮し、①上顎の双頭歯を対象とする。②片側の歯冠形態を見本に他側を彫刻する。③90分×2コマで彫刻作業が完結する。④石膏彫刻を基本とする。という課題を設けた。歯の形態を詳細に理解する上で拡大した教材の方が効果的と考え、2005年は25×25×110mmの石膏柱を用い教材を製作した。双頭歯を咬合面観で近遠心的に二等分し、舌側からみて左側が完成した歯冠形態、右側に彫刻途中の形態を持たせた。これに対し2011年は15×15×75mmの石膏柱にて教材を製作した。さらに左側または右側を彫刻する

教材を製作し、彫刻がどちら側でもできるようにした。加えて彫刻の説明と手順を理解させるための解説図も作製した。

【結 果】

2005年度は時間内で彫刻を完成することが出来なかった。これに対し2011年度は解説図を用いた説明や石膏刀・彫刻刀の取り扱いの説明などに時間を要したが、殆どの学生が時間内に彫刻を完成した。また、右利きの学生には彫刻部が右側の教材を与え、左利きの学生には彫刻部が左側の教材を与えた。しかし、利き手の影響はほとんど表れずかえって実習の進行に混乱を招く結果となった。

【まとめ】

歯学部初期教育に鏡像模倣を応用した歯冠彫刻法を導入したところ、その有用性が認められた。また、彫刻側の利き手に応じた差を知ろうとしたが差は認められなかった。

今後は、更により良い実習を行うための検討を加えるつもりである。

マインドマップのハンドアウトへの応用

○仲谷 寛、大澤銀子
日本歯科大学附属病院

The utilization of the Mind Map for handout

○Nakaya Hiroshi, Osawa Ginko
The Nippon Dental University Hospital

【目 的】

マインドマップはTony Buzanが開発した思考ツールである。論理とイメージを連携させるため、情報のインプット、アウトプットに優れた方法として、近年、多方面にて利用されている。そこで、我々はマインドマップを講義のハンドアウトとして利用し、その有効性についてアンケートを行った。

【方 法】

対象講義は、平成23年度日本歯科大学生命歯学部第5学年「基礎と臨床」の内、「歯周組織の病理」、「歯周組織の生化学」の2回(1回50分)である。なお、本講義は統合科目であり、基本的事項は既に各科目で履修している内容である。マインドマップのハンドアウトに対するアンケートは、学年末試験が終了した評価とは関りのない時期に行った。

【結 果】

従来型の講義プリントとの比較では、32.0%が「変わらない」、40.2%が「従来型のほうが良い」との回答であり、否定的な回答が多かった。一方、授業の理解の有効であったかについて

は、64.5%が「非常に有効であった」、「まあ有効であった」と回答していた。自由記載については、否定的な意見では、「書き込みのためのスペースが少ない」との記載が最も多く、そのほか、「使い方がわからない、慣れていない」、「知識がないと使いこなすのが難しい」等の記載がみられた。一方、肯定的意見では、「知識が関連付けやすい、全体像が把握しやすい」との記載が多く、「視覚的に覚えられる」、「自発的に学習する」等の記載が認められた。

【考 察】

講義ハンドアウトとしてのマインドマップを学生が有効に利用するためには、予め、学生にマインドマップについて説明する必要がある、書き込みやすいスペースに考慮する必要があると思われる。一方、ハンドアウトを積極的に利用しながらの講義参加が必要となること、全体像、流れを視覚的に把握できることから、有効な講義ツールとなる可能性を有するものと考えられる。

次世代型実習用統合模型「iDSim」の開発

○北村知昭¹⁾、西原達次¹⁾、細川隆司¹⁾、中島啓介¹⁾、富永和宏¹⁾、永松 浩¹⁾、中原孝洋¹⁾、兒玉正明¹⁾、正木千尋¹⁾、鷺尾絢子¹⁾、岩城重次²⁾、谷岡正行²⁾
¹⁾九州歯科大学、²⁾株式会社ニッシン

Development of iDSim, a New Generation of Dental Simulation Model

○Kitamura Chiaki¹⁾、Nishihara Tatsuji¹⁾、Hosokawa Ryuji¹⁾、Nakashima Keisuke¹⁾、Tominaga Kazuhiro¹⁾、Nagamatsu Hiroshi¹⁾、Nakahara Takahiro¹⁾、Kodama Masaaki¹⁾、Masaki Chihiro¹⁾、Washio Ayako¹⁾、Iwaki Shigetsugu²⁾、Tanioka Masayuki²⁾
¹⁾Kyushu Dental College、²⁾Nissin Dental Products Inc.

【目 的】

九州歯科大学は歯科医学・医療の統合的教育を目的としたカリキュラムを効果的に実行するため、新しいコンセプトに基づいた模型の開発を株式会社ニッシンと共に行ってきた。その結果、保存修復・歯内・歯周治療、欠損補綴・インプラント治療、口腔外科治療に関する基礎実習をシームレスに実施できる統合模型「Integrated Dental Treatment Simulation Model (iDSim)」の開発に成功した。今回、iDSimの特徴について報告する。

【特 徴】

iDSimは基盤であるBase上に1/3顎毎を基本としたModuleを組み込むことで構成され、以下の特徴を有している。

- (1) Moduleの組み換えで様々な患者シナリオに対応した症例が再現できる。
- (2) 既製人工歯の使用ができ、蓄積された教育手法を組み込むことが可能である。
- (3) 歯肉粘膜、歯槽骨等の消耗部分が交換可能である。

(4) マネキン内で歯根端切除等まで行えるなど、発展性のある基本構造を有している。

(5) 齲蝕、歯冠破折、根尖病巣、骨隆起、歯肉退縮、歯周ポケット、根分岐部病変、歯石沈着、下歯槽管を想定した海綿骨など様々な設定が可能である。

(6) 実習可能な手技としてプロービング、アタッチメントレベル検査、齲蝕除去、根管治療、SRP、歯周外科治療、骨隆起除去、難拔牙、インプラント治療、歯根端切除などがある。

【考 察】

多様な臨床系基礎実習をシームレスに実施できる統合模型iDSimが完成し、本学では平成24年度カリキュラムより導入している。さらにiDSimは、ハイレベルな治療に対応したModuleを組み込めば様々な生涯研修へも利用できる。歯科医学・医療の統合的な理解・修得、国際基準に対応した能力を持つ歯科医師の育成、およびハイレベルな技術修得を求める歯科医師の研修において、iDSimは大きく役立つことが期待できる。

平成23年度日本大学歯学部第5学年臨床実習における学生自験の調査結果について

○棧 淑行¹⁾²⁾、菅野直之¹⁾²⁾、本吉 満¹⁾²⁾、小池一喜¹⁾²⁾、見崎 徹¹⁾、黒川弘康¹⁾²⁾、中島一郎¹⁾²⁾、大木秀郎¹⁾²⁾、前野正夫¹⁾²⁾
¹⁾日本大学歯学部、²⁾日本大学歯学部臨床実習運営協議会

Questionnaire survey on practice cases of clinical training for the fifth grade dental students of Nihon University School of Dentistry in 2011

○Kakehashi Yoshiyuki¹⁾²⁾、Sugano Naoyuki¹⁾²⁾、Motoyoshi Mitsuru¹⁾²⁾、Koike Kazuki¹⁾²⁾、Misaki Toru¹⁾、Kurokawa Hiroyasu¹⁾²⁾、Nakajima Ichirou¹⁾²⁾、Ohki Hiderou¹⁾²⁾、Maeno Masao¹⁾²⁾

¹⁾Nihon University School of Dentistry、²⁾The management conference of undergraduate dental training, Nihon University School of Dentistry

【目 的】

平成22年度より、第5学年の臨床実習では、見学主体の実習内容から、学習者が実際に歯科医療行為を経験する実習(自験)を根幹とする診療参加型臨床実習へ改編を行った。今回は、23年度の自験の実施結果について調査し、22年度の結果と比較検討する。

【方 法】

22年度と同様に自験について学生調査票を作成し、約8か月の実習期間中に行った医療水準1・2の内容について、自験回数を記名式でアンケート調査した。集計は自験回数を12段階(0～9、10～、20～)に分けて、回数ごとの学生数を求めた。調査項目は22年度に実施したアンケート項目と同じに、初診面接、X線検査、保存科ならびに補綴科の治療内容、口腔外科における基本的診査・外科処置、歯科麻酔科での有病者への対応および小児歯科・歯科矯正科の処置内容とした。

【結果と考察】

回答総数(115名)に占める1回以上の自験実施の割合をみると、

保存治療はレジン充填、歯周組織検査・ブラッシング指導およびプラークコントロール指導で実施割合が高く、とくにレジン充填は22年度よりも増加した。インレー修復は減少し、抜髄法・感染根管治療はほぼ同程度の実施であった。補綴治療では治療ステップによる差が大きく、22年度よりも減少傾向であった。問診・診療録の作成、デンタルX線検査は増加し、永久歯の拔牙・基本検査・外科処置、歯科麻酔科での有病者への対応および小児歯科・歯科矯正科の処置は、22年度とほぼ同じ実施傾向であった。第5学年の自験は、患者治療の部分的な実施であり、クリニカルパスウェイを通した一連の治療や侵襲性の高い処置は、22年度と同様に依然として実施割合が低いことが判った。学生の自験実施には、患者とのつながりの充実、学生自身の技術トレーニングの充実がとくに必要であり、患者・必修症例の確保、実習時間の延長および患者同意の取得などが重要な検討課題と考えられた。

医療面接スキルの使用頻度によるコミュニケーションスタイルの違いについて

○青木伸一郎¹⁾²⁾, 梶本真澄¹⁾, 大沢聖子¹⁾²⁾, 多田充裕¹⁾²⁾, 伊藤孝訓¹⁾²⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座, ²⁾日本大学松戸歯学部口腔科学研究所

The communication style by the frequency in use of medical interview skill

○Aoki Shinichiro¹⁾²⁾, Kajimoto Masumi¹⁾, Osawa Seiko¹⁾²⁾, Ohta Mituhiro¹⁾²⁾, Ito Takanori¹⁾²⁾

¹⁾Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾Research Institute of Oral Science, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

医療面接の教育は、各大学で様々な手法を用いて教育されている。しかし、学生が獲得した医療面接スキルを、実際の患者に対して上手く奏効できているとは限らない。医療面接スキルのひとつである「あいづち」は、患者の話を促す効果があり、患者の訴えを傾聴時に使用する重要なスキルの一つである。より良い患者医師関係を築くためにはスキルの使用が重要であるが、使用頻度がコミュニケーションスタイルにどのように影響があるか検討した報告は見られない。そこで、「あいづち」に注目し、The Roter Method of Interaction Process Analysis System (RIAS)を用いて、使用頻度によるコミュニケーションスタイルの違いについて検討を行ったので報告する。

【方 法】

対象は、実際の患者に対して医療面接を4～5回程度行っている本学5年次である。学生が問診票を確認し、模擬患者に対し

て医療面接を行っている場面をビデオに撮影した。後日、The Roter Method of Interaction Process Analysis System (RIAS)を用いて、コーディングを行い、「あいづち」のカテゴリー頻度の多い学生20名と少ない学生20名について抽出し、コミュニケーションスタイルの違いについて検討を行った。

【結 果】

「あいづち」の多い学生は、少ない学生に比べ、「Empathy (共感)」が多く、患者の発話では「Give-Med (医学的状态に関する情報提供)」が多く、「Give-Other (その他のことに関する情報提供)」が少ない傾向であった。

【考 察】

「あいづち」の多い学生は、患者の訴えに共感し、患者はより多くの情報を供与していることが推察され、医療面接スキルの使用頻度によりコミュニケーションスタイルの違いが認められた。

高齢社会を担う地域育成型歯学教育：専門教育終了時の授業アンケートから考察される教育効果

○藪内さつき, 中江弘美, 日野出大輔, 竹内祐子, 伊賀弘起, 尾崎和美, 羽田 勝, 白山靖彦, 松山美和, 吉岡昌美, 中道敦子, 星野由美, 藤原奈津美, 中野雅徳, 河野文昭, 吉本勝彦
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

Dental education program with community-rearing for aged society: educational effect based on the questionnaire investigation at the end of professional training

○Yabuuchi Satsuki, Nakae Hiromi, Hinode Daisuke, Takeuchi Yuuko, Iga Hiroki, Ozaki Kazumi, Hada Masaru, Shirayama Yasuhiko, Matsuyama Miwa, Yoshioka Masami, Nakamichi Atsuko, Hoshino Yumi, Fujiwara Natsumi, Nakano Masanori, Kawano Fumiaki, Yoshimoto Katsuhiko
Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School

【目 的】

徳島大学歯学部では、平成20年度採択教育GP「高齢社会を担う地域育成型歯学教育」を継続して実施している。この取り組みは「人間力の向上」・「医療人としての自覚を持つ」ことを一般目標とし、学内演習授業における気づきを、学外体験学習での地域高齢者との交流に繋げ、地域に根ざす口腔保健・高齢者福祉の重要性を体得するというものである。今回、この授業を体験した口腔保健学科4年生を対象に調査を行い、専門教育終了時点での教育効果について考察したので報告する。

【方 法】

5つのGPプログラム(食と健康学習・気づきの体験学習・相互歯磨き学習・高齢者交流学習・お口の健康長寿教室)を入学直後から2年次前期にかけて体験し、かつ学士課程の歯科系・福祉系・臨床・臨地実習を終えた平成22年度および23年度の口腔保健学科4年生(計31名)を対象にそれぞれのプログラムに対するアンケート調査および学生への聞き取り調査を行った。

【結果及び考察】

「各プログラムが、その後のどのような授業に活かされたか」という質問に対するアンケート集計結果から、歯科衛生士又は、社会福祉士を目指す本学科の学生は、この授業を通じて対人援助職として必要なコミュニケーションの基本を学び、その後の専門科目の授業に相乗的な教育効果が得られている可能性が示唆された。これは「学んだものは何か」という質問の回答の中で、24名が「体験して学んだコミュニケーション」という言葉で記載していることから伺える。

加えて、聞き取り調査では、「学内授業は当たり前のことを再確認できる機会となった」、「この授業を受けたことが、実習での自信になった」、「実習に役立った」等の意見が多かった。その中でも、「受身の授業は残らない、参加型授業は残る」とのコメントは、現場での経験を生かし学ぶこと、地域の教育力を活かす重要性を改めて認識する機会となった。

朝日大学歯学部臨床実習に関するアンケート調査 — 2009 年度生から 2011 年度生までの比較 —

○飯沼光生¹⁾、石神 元¹⁾、吉田隆一¹⁾、倉知正和²⁾、横山貴紀¹⁾、関根源太¹⁾、後藤昌彦¹⁾、安田順一¹⁾、羽田詩子¹⁾、田中四郎¹⁾、川崎馨嗣¹⁾、松岡正登¹⁾、長谷川信乃¹⁾、石津 恵津子¹⁾、大橋静江¹⁾、岩島広明¹⁾、大森俊和¹⁾、岡 俊男¹⁾、都尾元宣¹⁾
¹⁾朝日大学歯学部臨床実習専門委員会、²⁾朝日大学歯科医学教育推進センター

Questionnaire Survey on Undergraduate Clinical Training at Asahi University School of Dentistry : Comparison Among Students in 2009, 2010 and 2011 Academic Year

○Iinuma Mitsuo¹⁾, Ishigami Hajime¹⁾, Yoshida Takakazu¹⁾, Kurachi Masakazu²⁾, Yokoyama Takanori¹⁾, Sekine Genta¹⁾, Goto Masahiko¹⁾, Yasuda Jun-ichi¹⁾, Hata Utako¹⁾, Tanaka Shiro¹⁾, Kawasaki Keisi¹⁾, Matsuoka Masato¹⁾, Hasegawa Shinobu¹⁾, Ishizu Etsuko¹⁾, Ohashi Shizue¹⁾, Iwashima Hiroaki¹⁾, Ohmori Toshikazu¹⁾, Oka Toshio¹⁾, Miyao Motonobu¹⁾
¹⁾Committee of Undergraduate Clinical Training, Asahi University School of Dentistry, ²⁾Center for Advancement of Dental Education, Asahi University School of Dentistry

【目 的】

我々は、臨床実習の充実を図ることを目的に学生の意識調査に関するアンケートを実施し、2009、2010 年度で比較、検討した結果を昨年度本学会学術大会にて報告した。今回は、同様に 2011 年度実習生に実施したアンケート調査について検討したので報告する。

【方 法】

調査対象は、2011 年度の本学歯学部 5 年次臨床実習生 134 名とした。アンケート内容は前回と同様で、学生診療に対する感想とその診療内容、学生自身の知識や技術の習熟度、患者・指導医・スタッフとの人間関係などの 12 項目とし、臨床実習終了時点に無記名複数選択式にて回答させた。得られた結果を、2009、2010 年度のそれと比較した。

【結果と考察】

2011 年度生は、『診療参加型実習について』は「必要である」「積極的に加わりたい」との回答は 2010 年度に比較してわずかに減少した。また、「卒後研修で実施すればよい」がやや増加した。『診療内容について』も、「たくさん診たい」が減少し、2010 年度生に認められた積極的姿勢が 2011 年度ではやや消極的になる傾向がうかがわれた。また、『知識不足』や『技術不足』は感じているものの、「十分な知識が備わっていた」と回答する学生もやや増加し、認識に差異がみられた。人間関係については、『患者』が「不安気である」との回答が増加し、『スタッフ』との関係でも「良好」「やや良好」が減少したことから、コミュニケーション能力などがやや不足していると考えられる。『指導医と』では 2011 年度も「指導医間の差」は高い値を示し、指導医の育成、教育が今後の課題の一つであることが示唆された。

歯科学生のジェンダーの違いによるコミュニケーションスタイルの違いについて

○梶本真澄、青木伸一郎、大沢聖子、岡本康裕、伊藤孝訓
 日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座

The communication style by the difference in a dental student's gender

○Kajimoto Masumi, Aoki Shinichiro, Osawa Seiko, Okamoto Yasuhiro, Ito Takanori
 Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

医療場面における医師-患者コミュニケーションには医師の性格、経験、民族性等の特性が関与するといわれている。これらの特性の中でもジェンダーによりコミュニケーションスタイルに差異を認めることはこれまで報告されており、医師コミュニケーションスタイルの違いが患者-医師関係の構築に影響を及ぼす可能性は否定できない。患者中心の医療を推進していくためには、患者-医師関係の構築は重要であり、ジェンダーによるコミュニケーションスタイルの特徴を明らかにすることは、今後の歯科医療コミュニケーション教育にも影響を与えるものと考えられる。そこで歯科学生が行う医療面接において、ジェンダーの違いからコミュニケーションスタイルの特徴について検討を行った。

【方 法】

対象は臨床実習で実際の患者に医療面接を 4～5 回程度行っている本学 5 年次学生である。5 年次臨床実習終了時に実技試験

を設定し医療面接課題を課した。学生が模擬患者に医療面接を行っている場面をビデオで撮影記録した。なお設定を統一するため、シナリオ・質疑応答例を作成し模擬患者に暗記させた。医療面接時間は約 7 分間で、学生には臨床診断名の推論、現病歴などの聴取・記録を課題とした。後日、録画したビデオから The Roter Method of Interaction Process Analysis System (RIAS) を用いてコーディングを行い、ジェンダー別にコミュニケーションスタイルについて検討を行った。

【結 果】

女子学生は男子学生に比べ、「Personal (個人的なコメント、社会的会話)」「BC (あいづち)」「Check (理解の確認、正確な伝達、明確化のための言い換え)」のカテゴリーが多かった。

【考察】

女子学生と男子学生とのコミュニケーションスタイルに差が見られたことからジェンダーの特性を考慮したコミュニケーション教育の必要性が示唆された。

クラウンブリッジ補綴学での臨床実習におけるTBLの導入

○澤田智史, 小田切 憲, 星 憲幸, 木本克彦
神奈川歯科大学顎口腔機能修復科学講座クラウンブリッジ補綴学分野

Introduction of Team-Based Learning (TBL) to clinical teaching in Fixed Prosthodontics

○Sawada Tomofumi, Odagiri Ken, Hoshi Noriyuki, Kimoto Katsuhiko
Division of Fixed Prosthodontics, Department of Oral and Maxillofacial Rehabilitation, Kanagawa Dental College

【目 的】

チーム基盤型学習 (team-base learning, TBL) は系統講義による受動的学習ではなく、学生がチームを作り、問題解決を図る能動的学習を行う教育方略である。近年、日本においても医学部や歯学部で導入されており、本学でも平成21年度から病理学実習(3年次)に導入している。平成23年度からは、臨床における学生の問題解決能力の向上を図るため臨床実習(5年次)への導入が試みられた。本研究では、クラウンブリッジ補綴学分野における取り組みと学生アンケートの結果を報告する。

【方 法】

TBLの実施は、臨床実習期間内の平成23年4月から平成24年1月までに、毎週火曜日もしくは木曜日の1日(半日を1コマ)に、臨床系8講座が9課題を実施した。参加学生数112名を2グループに分け、6名程度の班編成を行った。TBLの概要は、(1)課題に対する事前学習の確認として、多肢選択問題を個人で解いた(IRAT)後に、各班で同様の問題を解き(GRAT)、全

体討議・講義(2)課題に関連する臨床症例を提示し、班でレポートを作成、全体討議・講義(3)学習効果を確認するため客観試験の実施と解説を行った。各項目を採点し成績評価とした。また、全日程終了後にアンケート調査を行った。

【結 果】

成績に関しては、全課題でIRATよりもGRATで正答率が有意に向上した。また、学習効果確認試験もIRATよりも正答率が有意に向上した。アンケート結果では、TBLに参加して良かった答えた学生が80%を占め、また、83%の学生がTBLを通じての理解度も上がったという回答が得られた。その一方で、68%の学生が予習をしていないこともわかった。

【考 察】

TBLは学習効果が期待できる手法であることが示唆され、学生からも好意的な感触が得られたが、実施するに当たり様々な問題点が挙げられることから、次年度に向けて今後は改善を図っていく予定である。

日本歯科大学生命歯学部第5年におけるPBLテュートリアルに対する学生の評価

○滑川初枝, 横澤 茂, 仲谷 寛, 石田鉄光, 大津光寛, 鈴木淳子, 足立雅利, 伊藤菜穂, 千葉忠成, 青木春美, 沼部幸博
日本歯科大学生命歯学部教育開発委員会PBLテュートリアル部会

Evaluation to PBL tutorials in the Nippon Dental University life dentistry fifth-year dental student

○Namekawa Hatsue, Yokozawa Shigeru, Nakaya Hiroshi, Ishida Kanemitsu, Otsu Mitsuhiro, Suzuki Atsuko, Adachi Masatoshi, Ito Naho, Chiba Tadashige, Aoki Harumi, Numabe Yukihiro
Division of PBL Tutorials, Education Development Committee, The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

本学では、平成12年度より第5学年において、さらに平成17年度からは第1学年においても、PBLテュートリアル教育(以下PBL)を行っている。第1学年においてPBLを経験した学生が第5学年でのPBLを行うにあたり、さらなる探求能力の育成と向上、PBLの充実を図る目的で、我々は学生のPBLに対する評価について検討した。

【方 法】

平成23年度第5学年臨床実習生125名に対し、現在のPBLの評価を、臨床実習終了時に3択式6問、自由記載2問、計8問をアンケート形式で行い、集計した。

【結果および考察】

3択式各問と結果は下記のとおりである。回収率は100%。問1. 2. 3. 6は①はい②どちらともいえない③いいえで示した。(単位%) 1. PBLとはどのようなものか理解していますか? ①40.3 ②47.6 ③12.1. 2. PBLで学習する効果的な点があります

か? ①59.7 ②35.5 ③4.8. 3. PBLの進め方で改善点はありますか? ①15.2 ②39.2 ③45.6. 4. コアタイムの回数は適切でしたか? ①短すぎる 4.9 ②適切 81.3 ③長すぎる 13.8. 5. 班のメンバーについてどう思いますか? ①同じでよい 65 ②どちらともいえない 15 ③変えた方がよい 20. 6. 自分はPBLで真摯に対応していたと思いますか? ①55.9 ②40.8 ③3.3. 自由記載には、様々な意見が出された。

本学臨床実習生は診療に携わる他、各科の研修も必須となっている。その限られた時間の中で2課題を3回ずつのコアタイムで行っており、第1学年でPBLを経験してはいるが、PBLそのものを理解しないまま第5学年でのPBLに臨んでしまう学生が多い。その反面、効果的な学習方法と認識し、学習項目を自己学習している学生も多い。

今後、システムのさらなる改善、興味ある課題作りが重要であり、また第1学年との意識の差、学習効果の違いも検討の必要があると考えられる。

学部連携PBLチュートリアルによるチーム医療教育の効果 —その1 質問紙の因子分析結果—

○鈴木久義¹⁾、片岡竜太²⁾、馬谷原光織²⁾、今福輪太郎³⁾、向井美恵²⁾、弘中祥司²⁾、井上美津子²⁾、木内祐二⁴⁾

¹⁾昭和大学保健医療学部、²⁾昭和大学歯学部、³⁾香港大学教育学部、⁴⁾昭和大学薬学部

Effectiveness of the interdisciplinary PBL tutorial as education programs for team approach to health care: 1. Results of factor analysis of quantitative questionnaire

○Suzuki Hisayoshi¹⁾, Kataoka Ryuta²⁾, Mayahara Mitsuori²⁾, Imafuku Rintaro³⁾, Mukai Yoshiharu²⁾, Hironaka Shoji²⁾,

Inoue Mitsuko²⁾, Kiuchi Yuji⁴⁾

¹⁾School of Nursing and Rehabilitation Sciences, Showa University, ²⁾School of Dentistry, Showa University, ³⁾Faculty of Education, The University of Hong Kong, ⁴⁾School of Pharmacy, Showa University

【目 的】

本学ではチーム医療教育を6(4)年の一貫教育として実施している。そこで、本研究の目的は、チーム医療教育の中間点に相当する3(2)年生に対して実施した学部連携PBLチュートリアル(以下、PBL)の教育効果を、質問紙の分析を通して検証することである。

【対象及び方法】

対象は本学医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部(看護学科、理学療法学科、作業療法学科)の各学部3年(保健医療学部は2年)に所属する学生600名であった。対象学生にPBL実施後に計22項目の自記式質問紙への回答を求めた。さらに単純集計の後、因子分析を適用した。

【結果及び結論】

全員から回答が得られた。95%の学生がチーム医療とコミュ

ニケーションの重要性に気づき、約9割の学生が他学部の学生を尊重し、4学部学生の協働作業がうまくできたと回答していた。探索的因子分析(最尤法、promax解)及び検証的因子分析では、2因子構造(第1因子「他職種(他学部)の理解と尊重」、第2因子「チーム医療(協働作業)の実践」)の妥当性が確認された。さらに、信頼性分析の結果、Cronbach's alphaが.725-.803であった。第1因子に属する4項目では全学生の93-97%が、第2因子に属する5項目では全学生の54-84%が、それぞれ肯定的な回答をしていることが判明した。第2因子に関しては、学部間で差が認められ、臨床実習の経験度などが影響している可能性が示唆された。これらの結果より、中学年における学部連携PBLの教育効果として、「他学部生との交流を通して他職種を理解・尊重すること」、「他学部生との協働作業を通して学び、動機づけられること」が認められた。

学部連携PBLチュートリアルによるチーム医療教育の効果 —その2 自由記述アンケート結果—

○馬谷原光織¹⁾、片岡竜太¹⁾、鈴木久義²⁾、今福輪太郎³⁾、向井美恵⁴⁾、弘中祥司⁴⁾、井上美津子⁴⁾、木内祐二⁵⁾

¹⁾昭和大学歯学部歯学教育学、²⁾昭和大学保健医療学部、³⁾香港大学教育学部、⁴⁾昭和大学歯学部、⁵⁾昭和大学薬学部

Effectiveness of the interdisciplinary PBL tutorial as education programs for team approach to health care: 2. Analysis of the free description on the questionnaire

○Mayahara Mitsuori¹⁾, Kataoka Ryuta¹⁾, Suzuki Hisayoshi²⁾, Imafuku Rintaro³⁾, Mukai Yoshiharu⁴⁾, Hironaka Shoji⁴⁾,

Inoue Mitsuko⁴⁾, Kiuchi Yuji⁵⁾

¹⁾Department of Dental Education, School of Dentistry, Showa University, ²⁾School of Nursing and Rehabilitation Sciences, Showa University, ³⁾Faculty of Education, The University of Hong Kong, ⁴⁾School of Dentistry, Showa University, ⁵⁾School of Pharmacy, Showa University

【目 的】

学部間連携PBLでは、4学部混成グループで多職種が関連するシナリオから、患者の有する問題を把握し、包括的治療やケアプランをグループで立案させる。本研究は教育改善と教育効果の確認のため、質的研究手法により自由記述アンケート記載内容を分析した。

【対象と研究方法】

医、歯、薬学部3年生と保健医療学部2年生の混成グループから無作為抽出した計200名(28グループ)の学生が記入した学部間連携PBLに関するアンケートは次の4項目である。A:「PBLのどのような経験からチーム医療の重要性を認識できたか」。B:「相手の考えていることを理解する為に心がけた行動」。C:「他学部の学生に説明するときに心がけた行動」。D:「将来医療にかかわる自分にとってどのような意義がある授業だと思うか」。分析は学生が記述した文章を質的研究の手法に従いコー

ディングをおこない、チーム医療に関する概念を表現するカテゴリを作成した。さらにカテゴリに該当する記述の回数を学部ごとに集計した。

【結果・考察】

項目Aでは5割の学生が「多面的に考える経験」を記述し、さらに歯学と保健医療学部では2割が「良い医療をおこなう具体的な手法が経験」を記述していた。項目Bでは「傾聴」の記述が多く(6割)、項目Cでは、「分かり易い言葉を選ぶ」が多く(7割)、学生らが相互理解を重視した様子がうかがえる。項目Dでは、「チーム医療の重要性」に関する記述(4割)が多かった。次に多い「具体的にチーム医療を理解」が医学と歯学部(3割)であったが、薬学と保健医療学部は「専門分野間・連携の体験」を多く記述(3割)していた。本PBLはチーム医療の理解と専門職としての実践を促進していたが、学部ごとに学生の受け取り方や解釈がことになっていた。

テキストマイニングを用いた共起ネットワーク分析による 長崎大学成育歯学PBL授業の評価

○飯島静子¹⁾, 丸山陽市²⁾, 藤原 卓³⁾, 吉田教明¹⁾

¹⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科歯科矯正学分野, ²⁾長崎大学病院総合歯科矯正歯科室・医療情報室歯科分室, ³⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野

Evaluation of problem-based learning curriculum by analysis of collocation network using a text-mining at Pediatric and Orthodontic Dentistry in Nagasaki University

○Iijima Seiko¹⁾, Maruyama Yoichi²⁾, Fujiwara Taku³⁾, Yoshida Noriaki¹⁾

¹⁾Div. of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics, Nagasaki Univ. Graduate School of Biomedical Sciences, ²⁾Division of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics, Nagasaki University Hospital, Division of Dental Information, Center of Medical Information, Nagasaki University Hospital, ³⁾Div. of Pediatric Dentistry, Nagasaki Univ. Graduate School of Biomedical Sciences

【目 的】

長崎大学は、2006年度より5年生の統合科目の一環として講義形式とPBL形式を折衷させたPBLインサート型カリキュラムを実施している。本研究の目的は、予防歯科学、小児歯科学、歯科矯正学を協力講座として実施している6年間の「成育歯学」PBL授業を、学生はどのように評価しているのか分析し、今後の方向性を検討することである。

【方 法】

「成育歯学」のPBLは、5年生を7～8名からなる7グループに分け、10～15コマをファシリテーター7名、年度毎に異なるシナリオを使用して実施している。今回は、2006年度から2011年度までの308名の評価シートを資料とした。「学生の自己評価」および「学生のファシリテーター評価」の自由記述部分をテキストマイニングにおける共起ネットワークを利用して領域依存表現を効率的に収集し、「成育歯学」PBL授業における

学生の評価の特徴を分析した。

【結 果】

テキストマイニングによって「仮説」「自分」「意見」「知識」「討論」「発表」の共起語が出現数が多いものとして抽出され、中心性を示していた。さらに「仮説」「検証」「構成」「難しい」のネットワーク、「自分」「意見」「考え」「理解」のネットワーク、「発言」「積極」「討論」「参加」のネットワーク、「知識」「矯正」「不足」「勉強」のネットワークが共起の程度の強いものとして認められた。

【結 論】

学生は、PBL授業の重要な目標である自分の知識不足の認識、仮説の構成の難しさ、仮説の検証、自分の意見の発言、発表を積極的にすることの重要性について気がついていることが明らかとなった。今後これらの学生の自己認識の上に基づいたさらなる教育支援が必要であることが示唆された。

歯学部初年次教育におけるPBLチュートリアル3年間の実践とその評価

○田地 豪¹⁾, 田口則宏²⁾, 竹本俊伸¹⁾, 玉本光弘¹⁾, 宮内美和¹⁾, 渡邊峰朗¹⁾, 水田邦子¹⁾, 上田 宏¹⁾, 島津 篤¹⁾, 小川哲次¹⁾, 内田 隆¹⁾

¹⁾広島大学歯学部教務・入試ワーキンググループ、教養ゼミサブワーキンググループ, ²⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻社会・行動医学講座歯科医学教育実践学分野

Practice and Evaluation of PBL tutorial for first-year dental students over three years

○Taji Tsuyoshi¹⁾, Taguchi Norihiro²⁾, Takemoto Toshinobu¹⁾, Tamamoto Mitsuhiro¹⁾, Miyauchi Miwa¹⁾, Watanabe Mineo¹⁾, Mizuta Kuniko¹⁾, Ueda Hiroshi¹⁾, Shimazu Atsushi¹⁾, Ogawa Tetsuji¹⁾, Uchida Takashi¹⁾

¹⁾Introductory seminar sub working group, Education and Admission working group, Faculty of Dentistry, Hiroshima University, ²⁾Department of Dental Education Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences

【目 的】

広島大学歯学部では、歯学科において2つのコースを、口腔健康科学科において2つの専攻を設け、歯科医学・歯科医療・口腔保健の多様化に対応できるカリキュラムを展開している。我々は、初年次教育において問題解決型学習や自己主導型学習の習得が重要と考え、前期に開講している「教養ゼミ」の授業を平成21年度からPBLチュートリアル形態に転換し、学科を越えた横断的な教育を行っている。そこで今回、PBLチュートリアル教育の実施が学生の目標達成に貢献しているのか明らかにすべく、3年間の実践結果とその評価について報告する。

【方 法】

「教養ゼミ」の授業では、本学歯学部1年生93名(歯学科53名、口腔健康科学科40名)を2学科混成の13のグループに分け、3つの課題を通して問題解決型学習の基礎から実践を経験させている。本研究では、平成21年から平成23年まで「教養ゼミ」の

授業を受講した1年生292名を対象とした。授業の最終回に、対象者に対し記名式で24項目の質問に対する4段階評価および授業の良かった点と改善すべき点についての自由意見を記入させた。その授業評価を集計し、評価の高さや3年間の変化を検討した。

【結果および考察】

全質問24項目のうち、肯定的評価が80%以上であった項目数は、いずれの年も21項目であった。概ねPBLを理解しており、グループ討論にも参加している様子が認められた。肯定的評価が40%以下のものが2項目あり、リソースの活用に関するものであった。学生は、情報収集にあたり図書館などよりもインターネットを活用することが多いことが浮き彫りになった。本研究の結果、初年次に行ったPBLチュートリアル教育は学生の目標達成に見合う成果があることが明らかとなった。今後、継続的に点検評価しながら授業の改善に努めたい。

歯学部 1 年生における PBL テュートリアル の学習システム変更に対する学生の評価

○千葉忠成, 青木春美, 沼部幸博, 田中とも子, 松野智宜, 富永徳子, 柴田千晶, 横澤 茂, 大津光寛, 仲谷 寛, 石田鉄光
日本歯科大学生命歯学部教育開発委員会 PBL テュートリアル 部会

Evaluation of modification of the learning system from first-year dental student in PBL tutorials

○Chiba Tadashige, Aoki Harumi, Numabe Yukihiro, Tanaka Tomoko, Matsuno Tomonori, Tominaga Noriko, Shibata Chiaki, Yokozawa Shigeru, Ohtsu Mitsuhiro, Nakaya Hiroshi, Ishida Kanemitsu

Division of PBL Tutorials, Education Development Committee, The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Tokyo

【目 的】

本学では、チュートリアル方式で課題を用いた探求能力の育成と向上を目的として平成 17 年度より第 1 学年前期から導入している。平成 22 年度よりさらなる学習能力の向上を図るため、新たな PBL テュートリアルシステムに変更した。今回は、システム変更後の学生による評価について報告する。

【方 法】

変更後のシステムでは、1 つの課題をシナリオ 1・2 に分け、計 3 回の授業を行い、2 回目まで要約を各自 400 字以内にまとめさせた。3 回目は各自の要約を元にグループで 1 枚のプロブレムマップを作成させた。本システムで 3 課題を実施し、うち 1 課題をブラッシュアップ後、学生全体の学習発表会を行い、グループ間での討論を行った。すべての授業終了後に、変更後のシステムに対する学生の評価をアンケート形式により行なった。

【結果および考察】

履修者 115 名全員からアンケートを回収した。

変更後のシステムでは、1 課題につき 3 回の授業回数については 84.3% が適切であり、プロブレムマップを作成するにも十分であるという回答が得られた。また、発表用のプロブレムマップのブラッシュアップの時間設定でも 83.5% で、学生全体の学習発表会も 91.3% で有効であると判断された。しかし、3 課題ともグループのメンバーが同じで良いかという質問に対しては、授業進行の統一性が取れなくなることや授業回数を重ねることに充実していくなど 53.9% が同じメンバーの方が良いと答えた。一方、メンバーの変更が必要かわからないという学生およびメンバーが変わることで新しい意見を取り入れ、マンネリ化を防止できると答えた学生が 46.1% であった。システムの変更は PBL テュートリアル の必要性および重要性の熟知、授業の時間配分に関して高評価であり、効果があったといえる。今後、授業の進め方に統一性と、学生の 7 興味ある課題の作成を考慮し、さらなる授業への期待度を高めていきたい。

日本歯科大学の初年次教育—新潟生命歯学部の取り組み「プロフェッション」が与えた学生の意識変化

○秋山麻美¹⁾, 藤井一維¹⁾, 阿部祐三²⁾, 高田正典³⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院歯科麻酔・全身管理科, ²⁾日本歯科大学新潟病院総合診療科, ³⁾日本歯科大学新潟病院口腔外科

First annual education of the Nippon Dental University —the measure of the Niigata life department of dentistry a student's consciousness change which profetition

○Akiyama Asami¹⁾, Fujii Kazuyuki¹⁾, Abe Yuzo²⁾, Takada Masanori³⁾

¹⁾Dental Anesthesia and General Health Manegement, The Nippon Dental University Niigata Hospital, ²⁾Comprehensive Dental Care, The Nippon Dental University Niigata Hospital, ³⁾Oral and Maxillofacial Surgery, The Nippon Dental University Niigata Hospital

【目 的】

本学新潟生命歯学部では、第 1 学年後期に「プロフェッション」と称する講義を様々な歯科医師が行い、スモールグループディスカッション (以下 SGD) を行っている。今回、授業の最後に行ったアンケートで学生の意識や将来像に変化がみられたので報告する。

【方 法】

平成 23 年度第 1 学年「プロフェッション」に出席した学生 47 名に対し、「入学の動機について」、「現在、将来の目標は定まりましたか」、「将来の目標に変化はありましたか」の 3 項目についてアンケート調査を行った。また、最後に「プロフェッションの授業全般を通して感じたこと」について自由記載で回答を求めた。

【結果と考察】

「入学の動機について」という質問に対しては、歯科医師になりたいと考えていた学生は 24 名、医学部を目指していたが仕方

なく変更したが 12 名、なんとなく入ったが 10 名、その他が 4 名であった (重複回答有り)。「現在は将来の目標が定まりましたか。」には、定まったが 10 名、何となく見えてきたが 34 名、わからないが 3 名であった。また「プロフェッションの授業で、将来の目標に変化はありましたか。」という質問に対して、変わらないが明確になったが 9 名、大きく変わったが 5 名、少し変わったが 26 名、変化なしが 7 名であった。さらに「プロフェッションの授業全般を通して感じたこと」については、歯科医師にも様々な道が (選択肢, 科, 専門) あることを知ったが 26 名、モチベーションがあがったが 8 名、歯科業界は厳しいと言われていたが努力と頑張りで変われると感じたが 6 名、自分の歯科医師像が明確になったが 5 名などであった。本学では、モチベーション向上を目的にアーリーエクスポージャーとして前期から病院体験実習を行っているが、これに加え、本授業で行う講義および SGD による学生間の意見交換が意識や将来目標の設定に寄与していることが明らかとなった。

日本歯科大学の初年次教育—生命歯学部取り組み「情報リテラシー」における学生の意識変化

○高田清美¹⁾, 新井一仁¹⁾, 南雲 保¹⁾, 宮坂 平¹⁾, 秋山仁志²⁾, 高橋幸裕¹⁾, 山瀬 勝²⁾, 河合泰輔¹⁾, 宮下 渉²⁾, 鹿野千賀¹⁾, 長谷川 充²⁾

¹⁾日本歯科大学生命歯学部, ²⁾日本歯科大学附属病院

First Year Education of the Nippon Dental University School of Life Dentistry —Changes in the awareness of the students before and after the presentation sessions in the information literacy course

○Takada Kiyomi¹⁾, Arai Kazuhito¹⁾, Magumo Tamotsu¹⁾, Miyasaka Taira¹⁾, Akiyama Hitoshi²⁾, Takahashi Yukihiro¹⁾, Yamase Masaru²⁾, Kawai Taisuke¹⁾, Miyashita Wataru²⁾, Shikano Chika¹⁾, Hasegawa Mitsuru²⁾

¹⁾The Nippon Dental University School of Life Dentistry at Tokyo, ²⁾The Nippon Dental University Hospital at Tokyo

【目 的】

本学生命歯学部では、第1学年の情報リテラシーにおいて、Microsoft Office Power Point 2003 を用いた実習を行っている。「自分がなりたい歯科医師像(将来展望)」というテーマでプレゼンテーション(以下プレゼン)を作成し、後日、学生12名によるプレゼンを行った。アンケート調査を行ったところ、単に情報リテラシーとしてのプレゼン完成だけでなく、学生の考える意識に変化がみられたので報告する。

【方 法】

実習に出席した学生122名に対し、プレゼン作成前に「入学の動機について」、「現在、将来の目標は定まりましたか」のアンケート調査を行った。各自プレゼンを作成し、後日、プレゼン終了後「将来の目標に変化はありましたか」、「友達の発表を聞いてどう感じましたか」のアンケート調査を行った。

【結果と考察】

プレゼン作成前のアンケート「入学の動機について」では、歯科

医師になりたいと考えている64名、医学部を目指していたが仕方なく変更した43名、なんとなく入った18名、その他4名であった(複数回答有り)。「現在、将来の目標は定まりましたか」には、定まった29名、何となく見えてきた71名、分からない22名であった。プレゼンの実践は希望者5名、教員が選んだ7名の12名で行った。プレゼン終了後のアンケートでは「将来の目標に変化はありましたか」という質問に対して、大きく変わった4名、少し変わった40名、変わらないが明確になった41名、変化なし37名であった。「友達の発表を聞いて、どう感じましたか」という問いに対して自由に記載してもらったところ、刺激や励みになったという前向きなコメントが非常に多くみられたが、一部の学生から将来に不安を感じるというコメントもみられた。プレゼンの内容から初年次カリキュラムに生命歯学概論や病院医療概論実習を導入したことで、多くの学生が将来について意識を高めるような波及効果がみられたようであった。

第1学年ファンダメンタルスキル実習(コーチング)における情動指数(EQ)の推移

○二宮一智¹⁾, 小野幸絵¹⁾, 秋山麻美¹⁾, 水橋 亮¹⁾, 田中聖至²⁾, 両角祐子²⁾, 長谷川 優²⁾, 長田敬吾²⁾, 藤井一維¹⁾, 佐藤 聡²⁾, 関本恒夫¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院, ²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部

Long-term evaluation of the coaching practice training for first-year students using emotional intelligence quotient(EQ)

○Ninomiya Kazunori¹⁾, Ono Sachie¹⁾, Akiyama Asami¹⁾, Mizuhashi Ryo¹⁾, Tanaka Satoshi²⁾, Morozumi Yuko²⁾, Hasegawa Yu²⁾, Osada Keigo²⁾, Fujii Kazuyuki¹⁾, Sato Sou²⁾, Sekimoto Tsuneo¹⁾

¹⁾The Nippon Dental University Niigata Hospital, ²⁾The Nippon Dental University School of Life Dentistry at Niigata

【目 的】

学生のコミュニケーション能力を育成するためにH19年度より第1学年時にコーチングによるコミュニケーション能力の習得を目的とする実習を行っている。実習では実習開始時と実習終了時に実習の教育学的有用性を検討するために簡易版EQテストを行っている。今回、H20～23年度の各第1学年とH20年度の学生に関しては第5学年時の臨床実習開始前にEQテストを実施し、長期的な推移も併せて検討したので報告する。

【方 法】

H20～23年度の第1学年計228名とH24年度の第5学年でH20年度にファンダメンタルスキル実習(コーチング)を受講した46名の学生を対象とした。方法は、「感情の選別」「感情の利用」「感情の理解」「感情の調整および操作」の4領域に関して、各6問の計24問からなる簡易版EQテストを用いた。実施時期は1年ファンダメンタルスキル実習時間内で実習開始時と実習終了時およびH24年度臨床実習開始前に実施した。

【結 果】

実習前後のスコアはH21年度において「感情の利用」が実習前 19.0 ± 2.6 、実習後 18.9 ± 2.9 とほぼ変化がなかったが他の3領域に関しては上昇していた。他の年度に関しては4領域全てで上昇していた。また、H20年度の第1学年実習終了時と臨床実習開始前を比較すると「感情の選別」 24.0 ± 3.7 vs, 22.5 ± 3.0 「感情の利用」 20.2 ± 4.1 vs, 19.5 ± 3.6 「感情の理解」 22.3 ± 4.0 vs, 21.6 ± 2.8 「感情の調整および操作」 21.1 ± 4.2 vs, 19.3 ± 3.4 であり、4年経過後に有意に低下を認めた。

【まとめ】

実習前後の比較で、ほぼ全ての領域でEQの上昇が認められたが、4年経過後では低下傾向を認めた。以上の結果から学生の行動特性の育成にこの実習は有効であることが示唆されたが、長期的に継続させるためには何らかのフォローアップ実習が必要であると考えられた。

歯学部生の情報処理能力に関する調査

○小川和久、湯浅賢治
福岡歯科大学画像診断学分野

Information-processing skills of students of school of dentistry

○Ogawa Kazuhisa, Yuasa Kenji
Fukuoka Dental College, Section of Image Diagnostics

【目 的】

電子カルテ、オンライン請求、画像LANなど、歯科医院での情報のデジタル化が進み、歯学部生にとって情報処理能力を修得しておくことが重要となっている。ところで、大学で情報処理教育を行う場合、2003年の学習指導要綱の改訂にともない高等学校で普通科目「情報」が必修化されたこともあり、大学入学時までどの程度の学習を終えて入学してきているのかを把握しておく必要がある。

そこで、大学での情報処理教育の学習内容を再検討するために、歯学部1年生の、大学入学時点での情報処理能力を調査した。

【方 法】

調査対象は本学歯学部1年生、調査方法は無記名アンケート方式である。調査内容は1)大学入学以前のコンピュータ経験年数2)大学入学以前のコンピュータ教育受講の有無3)大学入学以前のコンピュータ教育受講の内容4)インターネットの利用

頻度5)キーボードのブラインドタッチはできるか6)今後、情報処理実習で学習してみたいもの7)大学入学時点での情報処理能力(a.パソコンの基本操作について b. Wordについて c. Excelについて d. Powerpointについて)である。調査対象96名のうち、81名の回答が得られ、回答率84%であった。

【結 果】

大学入学までに、小学校で36%、中学で60%、高校で77%の教育受講の経験があった。

大学入学時点での情報処理能力を各調査項目で「できる」を5点、「できない」を1点として自己評価してもらった結果、パソコンの基本操作についての各調査項目で「できるひと」と「できないひと」との2極化が顕著にみられた。

【結 論】

以上より、学生の入学時での情報処理能力の多様化が認められた。このため、情報処理教育の教育方法、内容等の再検討が必要である。

長崎大学歯学部生の進路に関する意識調査

○山辺芳久¹⁾²⁾、久保至誠²⁾
¹⁾長崎大学歯学部卒前・卒後歯学臨床教育担当、²⁾長崎大学病院医療教育開発センター

A Questionnaire Survey on the Aim as the Dentist among Nagasaki University Students

○Yamabe Yoshihisa¹⁾²⁾, Kubo Shisei²⁾

¹⁾Comprehensive Clinical Education, Nagasaki University School of Dentistry, ²⁾Medical Education Development Center, Nagasaki University Hospital

【目 的】

歯科医師需給問題がマスコミ等で取りざたされる昨今、入学者を優れた歯科医師あるいは研究者へ養成するためには、学部学生の自己実現へのモチベーションを維持することが重要な課題の一つである。本研究は、本学在学生および歯科医師臨床研修中の本学卒業生が歯科医師としてどのような将来像を描いているのかについて意識調査を行い、今後の学生指導への基礎的資料を得ることを目的とした。

【方 法】

臨床実習開始初期の本学歯学部5年次生48名、臨床実習修了時の6年次生47名、そして臨床研修修了目前の本学卒業生45名を対象として2011年12月から2012年2月にアンケート調査を行った。調査項目は最終的な目標とする歯科医師像、歯科医師臨床研修に求める内容、そして臨床研修修了直後の進路の3項目である。

【結果と考察】

質問票の回収率は、5年次生62.5%(30名)、6年次生66.0%

(31名)、研修歯科医86.7%(39名)だった。最終的な目標とする歯科医師像はいずれの群でも大多数が臨床医で(5年次生86.7%、6年次生87.1%、研修歯科医92.3%)、教育・研究職と回答した者は5年次生1名(3.3%)、6年次生3名(9.7%)、研修歯科医1名(2.6%)にすぎなかった。臨床研修施設の選択では、いずれの群でも歯科系大学病院を選択する者が最も多く、次いで医科系大学病院を選択する者であったが、教育・研究職を最終目標とする5名のうち3名が医科系大学病院での研修を選択していた。研修修了直後の進路を複数選択させたところ、いずれの群でも歯科医院・病院歯科での勤務を挙げる者が最も多かったが、大学院進学を選択肢に含めた者は5年次生63.3%、6年次生67.7%、研修歯科医51.3%だった。

【結 論】

本学学生には臨床医を志向する者が多く、各自の最終目標が臨床研修施設の選択にも反映されていることが示唆された。

歯科医師卒後臨床研修でのAHA公認BLSコース受講に対する意識調査

○鈴木將之, 笹尾真美, 矢作保澄, 湯浅茂平, 高瀬英世, 山口博康, 河原 博, 高水正明
鶴見大学

The attending opinion poll among dental residents on AHA-BLS course

○Suzuki Masayuki, Sasao Mami, Yahagi Hozumi, Yuasa Mohei, Takase Hideyo, Yamaguchi Hiroyasu, Kawahara Hiroshi,
Takamizu Masaaki
Tsurumi University

【緒 言】

鶴見大学歯学部附属病院では、平成22年度より研修歯科医(研修医)のカリキュラムにアメリカ心臓協会(AHA)公認一次救命処置(BLS)コースの受講を義務づけた。受講費は各自負担とし、就業時間内に学内で開催した。今回、研修医の心肺蘇生に対する意識を確認し、今後のコースの位置づけを検討する目的で意識調査を行った。

【対象と方法】

平成23年度本院研修医134名を対象とし、9回に分けてコースを開催した。意識調査はコース修了時と、研修最終日にアンケート用紙を用いて行った。

【結果および考察】

コース修了時の調査(回答率100%)では、「学んだ知識や技術を実際の現場で行えそうか」の質問に対して、「絶対に行える」と「行える」が91.7%,「どちらでもない」が8.2%,「行えない」が0%であった。

研修最終日(回答率97%)では、「心肺蘇生法の手技を覚えていますか」の質問には、「覚えている」が17.1%,「概ね覚えてい

る」が41.7%,「五分五分」が34.3%,「あまり覚えていない」が2.2%,「覚えていない」が2.2%であった。研修期間中に心肺蘇生法の公認コースを受講したことについて、「必要と思う」が83.5%と多かったが、「必要ないと思う」が1名(0.7%)あった。受講料に関しては「高い」が46%,「適当」が47%,「安い」が2%であった。「さらなる偶発症のシミュレーションコースを開催したら受講を希望するか」という問いに対し、67.1%が「希望をする」と回答した。

以上より、心肺蘇生法の公認コースを受講することに、8割以上が必要を感じていた。しかし、受講料に対しては高いと感じる者が半数近くいた。手技の自信は、コース直後の9割から研修最終日には6割に減衰しており、講習を繰り返す必要性が示された。

【結語】

歯科医師卒後臨床研修としてAHA公認コースの受講は、受講料が自己負担であっても満足度は高く有意義であり、今後も継続する必要がある。

ヒト型患者ロボットシミュレーションシステム(SIMROID)を用いた補綴歯科研修, 第4報

○秋山仁志¹⁾, 宇塚 聡²⁾, 宮下 渉²⁾, 原 節宏¹⁾, 羽村 章¹⁾

¹⁾日本歯科大学附属病院総合診療科, ²⁾日本歯科大学附属病院矯正歯科

Development of new patient simulation systems (SIMROID) for prosthodontic clinical training, Part 4

○Akiyama Hitoshi¹⁾, Uzuka Satoshi²⁾, Miyashita Wataru²⁾, Hara Setsuhiro¹⁾, Hamura Akira¹⁾

¹⁾Division of General Dentistry, The Nippon Dental University Hospital at Tokyo, ²⁾Division of Orthodontics, The Nippon Dental University Hospital at Tokyo

【目 的】

日本歯科大学附属病院では患者意識と連動した患者ロボットを開発し、全人的医療を実現できる歯科医師の養成に適用することを目指している。歯科臨床実習用ヒト型患者ロボットシミュレーションシステム(SIMROID)を用い、基本的臨床技能として必要不可欠な形成手技、印象採得の修得を行うために、独自に作成したシナリオを用いて研修を実施したので報告する。

【方 法】

平成24年度日本歯科大学附属病院に在籍し、本開発主旨に同意を得た研修歯科医を対象として(SIMROID)を用いて研修を実施した。さらに研修修了後にアンケート用紙への記載を依頼した。研修内容として、本システムで独自に作成した形成手技のシナリオに基づき、上顎第1大臼歯の2級窩洞形成後、全顎トレーを用いて連合印象採得を実施した。

【結 果】

臨床研修開始初期において補綴歯科研修を実施した。印象採得

時、咽頭方向に印象材が流れ込むと嘔吐反射が生じるため、研修歯科医は実際の生体と同様に緊張感をもって本研修を行っていた。アンケート結果から、生体に近似した顔貌と動作から得られる臨場感、研修歯科医の声かけによるヒト型患者ロボットの返答反応、形成時、印象採得時の不快事項に対する動作反応など、日常臨床で頻繁に行う非可逆性、生体侵襲性の歯科診療行為に対して本システムを用いた臨床技能教育がもたらす有効性が確認でき、すべての研修歯科医から高い評価を得ることができた。

【考 察】

実際の患者に対する診療行為の前に歯科臨床実習用ヒト型患者ロボットシミュレーションシステム(SIMROID)を応用することにより、より歯科臨床の現場に即した研修を実施することができ、臨床研修における臨床技能向上のための反復訓練が行える本システムの有効性、ならびに全人的歯科医学教育の充実が図られることが示唆された。

日本歯科大学新潟病院第5学年臨床実習生における歯科技工科研修に関するアンケート調査

○小野幸絵¹⁾, 海老原 隆¹⁾, 小澤 誠²⁾, 阿部祐三¹⁾, 關 秀明¹⁾, 新井恭子³⁾, 永田和裕¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟病院総合診療科, ²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第2講座, ³⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科保存学第1講座

Questionnaire of dental technique training program for the 5th grade students of The Nippon Dental University Hospital at Niigata

○Ono Sachie¹⁾, Ebihara Takashi¹⁾, Ozawa Makoto²⁾, Abe Yuzo¹⁾, Seki Hideaki¹⁾, Arai Kyoko³⁾, Nagata Kazuhiro¹⁾

¹⁾Comprehensive Dental Care, The Nippon Dental University, ²⁾Department of Crown and Bridge Prosthodontics, The Nippon Dental University School of Life Dentistry at Niigata, ³⁾Department of Endodontics, School of Life Dentistry at Niigata, The Nippon Dental University, Niigata

【目 的】

日本歯科大学新潟病院では平成23年度から第5学年臨床実習生(以下登院生)に対し、歯科技工物の製作および過程の知識を深めるため技工製作の講義・見学・体験を行っている。今回歯科技工科研修の前後で行ったアンケート調査の結果を報告する。

【方 法】

対象は平成23年度登院生92名とした。病院内歯科技工士がレジン前装冠・金属床について、各1時間のデモンストレーション・体験を交えながら講義を少人数(各グループ9名～10名)の10グループに行い、92名全員に研修前、研修後にアンケート調査した。調査用紙は記名式とし、質問項目は3段階によるもの・自由回答方式などで構成した。

【結果および考察】

回収率100%、有効回答率は96.5%であった。研修前ではレジン前装冠、金属床について説明できる(4.3%、1.0%)に対

し研修後理解出来た(96.7%、96.7%)であった。それぞれ知識として定着した時期はレジン前装冠では歯冠補綴架工義歯学実習が56.5%と最も多かった。金属床では総義歯学講義が25.0%、臨床実習23.9%となった。レジン前装冠の適応症について説明できるか(できる0%、なんとなくできる44.5%)金属床の適応症について(できる0%、なんとなくできる32.6%)であった。研修後理解出来た事はレジン前装冠・金属床ともに利点、欠点があげられ、金属床では製作過程の複雑さ、レジン床との違いがあげられた。研修を終えて思った事として、技工士とのコミュニケーションの大切さ、技工操作の大変さ、もっと技工に関して深く学びたい等、医療従事者としての自覚やモチベーションアップが見られる前向きな回答が多くみられた。今回のアンケートの調査結果から研修前と研修後では技工に関する知識、意識ともに向上がみられ、技工に関わる製作側からの指導を受ける研修は非常に有意義であると思われる。

岡山大学におけるチーム基盤型学習(TBL)による歯科補綴学講義の試行

○原 哲也¹⁾, 皆木省吾¹⁾, 兒玉直紀¹⁾, 吉田登志子²⁾, 白嶋 章³⁾

¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野, ²⁾岡山大学医療教育統合開発センター, ³⁾株式会社TERADA LENON

The trial of the prosthodontics lecture by team base learning (TBL) in Okayama University

○Hara Tetsuya¹⁾, Minagi Shogo¹⁾, Kodama Naoki¹⁾, Yoshida Toshiko²⁾, Shirashima Akira³⁾

¹⁾Department of Occlusal and Oral Functional Rehabilitation, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, ²⁾Center for the Development of Medical and Health Care Education, Okayama University, ³⁾TERADA LENON Co. Ltd.

Team-based-learning (TBL) は教育効率の高い技法として医学教育では近年注目を浴びている。今回我々は全部床義歯補綴学教育に本教育システムの応用を試みたので、その結果を報告する。学習者は岡山大学歯学部4年生とし、筆記試験後にその結果によってグループ分けを行い、歯科医師国家試験のうち問題解決型の問題を参考に6問出題した。個人テストの後、5～6人の10グループで同じ問題を討議して回答させた(グループテスト)。その後、問題の解説を行った。なお、テストの集計にはTERADA LENON社製LENONを用いた。学生には講義の方法についてアンケートを行った。

その結果、平均正答数は個人テストでは2.5問であったが、グループテストでは3.2問に増加した。これはグループ討議によって正答が導き出された結果と考えられる。しかし、個人テストが好成績の学生のいないグループでは、グループを牽引す

る学生が居ないためかグループ討議の効果がみられなかった。さらに、筆記試験と個人テストとの間には相関はなかったことから、グループ分けの困難さならびにその重要性が明らかになった。また、今回の試行では臨床実習前の学生であったため臨床実地形式の問題では誤答が多かった。グループ討議で少数派の意見を選択して正答となったのは6回答であったが論理的に考えれば正答が導き出せる問題であった。このように、TBL学習においては基礎的な内容ではあるがグループ討議にふさわしい良問を作成することが非常に重要であることを認識した。アンケート結果からは85%以上の学生が勉強できて良かったと回答した。また、80%以上の学生がPBL学習よりも積極的にグループ討議に参加できたと回答した。さらに、グループで討議することで自分の考え方の違いに気付くことができたと言う感想が多く見られた。

人体解剖学実習におけるグループダイナミクス評価の検討 その1

○野中直子¹⁾, 中島 功¹⁾, 片岡竜太²⁾, 中村雅典¹⁾

¹⁾昭和大学歯学部口腔解剖学講座, ²⁾昭和大学歯学部歯医学教育推進室

The examination of the group dynamics evaluation in the anatomical practice

○Nonaka Naoko¹⁾, Nakajima Koh¹⁾, Kataoka Ryuta²⁾, Nakamura Masanori¹⁾

¹⁾Department of Oral Anatomy & Developmental Biology, Showa University School of Dentistry, ²⁾Department of Dental Education, Showa University School of Dentistry

昭和大学は、優れたチーム医療人としての歯科医師の養成を目指し、医・歯・薬・保健医療の4学部合同のPBL: Problem Based Learningを中心としたグループ学習を1年次より行っている。この学習プロセスを通して、学習におけるグループダイナミクスの経験が通常の学部教育の中でどのくらい反映されているかについてはこれまでに検討をしてきたとは言えない。口腔解剖学講座は歯学部2年生に解剖学の講義と実習を行っており、4月に骨学実習、5月から7月まで人体解剖学実習を講義と平行して行っている。平成23年度の人体解剖学実習では、120名の学生をグループ(5～6名/グループ)にわけ23班の編成で行った。また、解剖学の知識の習得向上を目的に7月の実習終了までの期間に3回の中間試験を行った。本報告では、定期試験を含めた4回の試験結果の推移を各グループ毎にまとめ、グループ内での成績の変遷について検討を行った。グ

ループ内の個人成績の変遷は大きく3つのパターンに分類された。A: グループ全員が同様の軌跡を示すもの、B: グループ内で成績が向上するものと低下するものに2極化するもの、C: グループ内の各個人で全く影響されないものであった。この3つの傾向の中で、Aのグループ全員が同様の奇跡を示すものが最も多かった。この結果は、2年次の早い時期にグループ学習がそれなりに機能しているものと推察される。グループ学習の重要性とその効果をより一層学生に認識してもらうためには、カリキュラムの工夫が必要である。24年度からは、解剖学でのポートフォリオの積極的な活用、ならびに学習内容についてのe-learning systemを充実させ、学生がいつでもそれらを使用し勉強できる体制を整えた。今年度の結果を更に解析することで、骨学実習と人体解剖学実習のグループ学習としての教育向上の方略をはかる予定である。

トレーナーを導入した下顎孔伝達麻酔注射実習に対する学生の評価は学生相互実習の履修時期により変わるのか

○大橋華子, 工藤 勝, 三浦美英

北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野

Does the timing of implementation of mutual training affect the evaluation by dental students for a model training of inferior alveolar nerve block?

○Ohke Hanako, Kudo Masaru, Miura Yoshihide

Division of Dental Anesthesiology, School of Dentistry, Health Sciences University of Hokkaido

【目 的】

本学歯学部での下顎孔伝達麻酔注射の教育は4年時の歯科麻酔学での講義と5年時の臨床実習である。臨床実習では歯科麻酔学におけるトレーナーを用いた手技訓練と実技試験および臨床見学、そして口腔外科学における学生相互実習と参加型臨床実習を実施している。我々が導入しているトレーナーは独自に開発・改良を重ねてきたものであり、本来はトレーナー実習の後に学生相互実習および参加型実習を行う想定であったが、学生の各科配属ローテーションの都合上、逆順になる場合がある。そこで実習後にアンケート調査を実施し、実習の履修順が学生のトレーナー実習に対する評価に影響するのを検証した。

【方 法】

平成23年度に臨床実習を履修する歯学部5年生を対象とした。全科の実習が終了後にアンケート調査を実施した。調査用紙は自記・記名式とし、学生には事前に調査内容が成績と無関係である旨伝達した。トレーナー実習後に相互実習や参加型実習を行った予習群と相互実習や参加型実習を実施後にトレーナー実

習を行った復習群の2群に分けて検討した。

【結 果】

学生87名に配布し、80名から回答を得た(回収率92.0%)。予習群が30名、復習群は50名であった。以下の結果は予習群/復習群の順で表記する。

- 1) トレーナー実習の有用性: とても有用63.3/54%, 有用33.3/38%, どちらともいえない3.3/6%, 有用でない0/2%, 全く有用でない0/0% (χ^2 検定: $p=0.7378$)
- 2) トレーナー実習を行う適正時期: 相互・参加型実習の前70/72%, 相互・参加型実習の後0/4%, 相互・参加型実習の前と後30/20%, どちらともいえない0/4%, 不要0/0% ($p=0.3618$)

【考 察】

トレーナー実習の有用性に対する学生の評価は相互実習の実施時期に関わらず有用と考えていた。一方、多くの学生はトレーナー実習が人体に実施する前の予習として評価しており、次年度の本学におけるカリキュラム改善の契機となった。

学校歯科健康診断の記録および事後処置に関する シミュレーション自己学習支援ソフトの開発

○杉原直樹¹⁾、石塚洋一¹⁾、松久保 隆¹⁾、中野田紳一²⁾、山本 仁³⁾、河田英司³⁾

¹⁾東京歯科大学衛生学講座、²⁾(株)インサイドフィールド、³⁾東京歯科大学歯科医学教育開発センター

E-learning system for the recording and health education of school dental health examination

○Sugihara Naoki¹⁾, Ishizuka Yoichi¹⁾, Matsukubo Takashi¹⁾, Nakanoda Shinichi²⁾, Yamamoto Hitoshi³⁾, Kawada Eiji³⁾

¹⁾Department of Epidemiology and Public Health, Tokyo Dental College, ²⁾insidefield Co. Ltd., ³⁾Dental Education Development Center, Tokyo Dental College

【目 的】

個人の疾患リスクを評価し、適切な事後処置の選択や的確な保健指導を行うことは、地域歯科保健活動に参画する歯科医師としての基本である。従来の本講座の基礎実習においては、口腔疾患やそのリスクのほとんどない学生の相互実習での記録のみで終了しており、地域歯科保健に必須の口腔状態の記載や事後処置について学生が十分に理解するまでには至っていない。そこで、口腔状態のデータベースを用いて個人の口腔状態の記載を模擬的にWeb上で体験ができる自己学習システムを構築し、実際に学生実習で応用したので報告する。

【方 法】

Web上で約70症例の口腔写真を参照しながら、学校における定期歯科健康診断票への歯の状態の記載ならびに保護者へのお知らせへの記入ができるソフトを開発した。画像は、インサイドフィールド社のサーバーで管理され、使用者が実習を行う場合は、あらかじめ使用者のメールアドレスとパスワードを登録

するようになっている。歯式への記載はマウスを使用して簡単にできるように工夫されている。平成23年度に本ソフトを使用した4年生に対して実習直後にアンケート調査を行った。

【結果と考察】

「学校歯科保健を理解する上で効果的であったか」の質問に対しては、非常にそう思うが28%、そう思うが69%であり、症例写真の適切性については、非常に適切であるが28%、適切であるが69%であり、操作性については、非常に良いが28%、良いが57%であった。自由回答では、「実際に健診しているようで、知識のステージが机上から臨床に近づける」との意見があった。このシステムは学内のみならず自宅で行うこともできるのが特徴である。また、臨床研修医、学校歯科医、その他の歯科健診に携わる際の研修に十分活用できると考えられた。

以上の結果より、本システムは、画像情報の理解が極めて重要である歯学部学生の臨床前基礎実習として、有効であることが示唆された。

留学生をチューターとしたグループ学習による英語教育

○森尾郁子¹⁾、鶴田 潤¹⁾、川口陽子²⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発学分野、²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科健康推進歯学分野

Group-based English language education as facilitated by international students

○Morio Ikuko¹⁾, Tsuruta Jun¹⁾, Kawaguchi Yoko²⁾

¹⁾Tokyo Medical and Dental University, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Dental Education Development, ²⁾Tokyo Medical and Dental University, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Oral Health Promotion

【目 的】

本学の教育の基本理念である国際的視野を有する人材の育成には、学生の英語能力の向上を図るための継続的な学習支援体制が必要である。2005年度に導入されたカリキュラムでは、教養教育との連携で行われる「科学英語」と、学年混合選択セミナーという必修選択科目の中で、目的別英語コースを複数提供してきた。2012年度導入カリキュラムでは、医学科生と共に英語による討論を通して医学英語を学ぶ予定である。こうした状況を踏まえ、平成23年度に歯学科3年生を対象とした英語のグループ学習を実施したので、その効果と課題について検討する。

【方 法】

TOEFLスコアを参考に、歯学科3年生51名を7班に班分けし、本学大学院在籍の外国人留学生1名を各班にチューターとして配置した。グループ学習の第1部(50分間)では、予め各班で決定したテーマについて準備してきた3分間の英語口頭発表を行い、チューターの司会で質疑を行った後、自己評価と同僚評価

を行った。第2部(50分間)では、チューターが自国の歯科事情等について英語による発表を行い、質疑を行った。

【結 果】

英語による口頭発表について、明瞭さ(聞きやすさ)、構成(わかりやすさ)、総合評価の3項目について5段階で自己評価、同僚評価を行ったところ、自己評価に大きな変化はみられなかったが、同僚評価の平均スコアは上昇している学生が半数以上を占めた。

【考 察】

入学してくる歯科学学生の半数以上は、海外旅行、英会話学校通学、英語母語話者による英語の授業などの経験があるが、英語能力に関する自己評価は低い状況にある。将来英語を使うための基礎力をつける必要性を感じている学生が多数いる一方で、現時点での英語学習における明確な目標がなく、また将来も必要性を感じない学生も存在する。今回実施した英語発表演習や、留学生との交流を活用することで、学習への動機づけに繋げることが重要であると考えられた。

日本大学歯学部 1・2 年生の少人数教育における成績評価の課題

○酒井秀嗣, 三枝 禎, 佐藤紀子, 田嶋倫雄, 中野善夫, 宮崎洋一, 佐藤 恵, 鈴木直人, 桑田文幸
日本大学歯学部

Evaluation issues in small group education

○Sakai Hidetsugu, Saigusa Tadashi, Sato Noriko, Tajima Michio, Nakano Yoshio, Miyazaki Yoichi, Sato Megumi, Suzuki Naoto, Kuwata Fumiyuki
Nihon University School of Dentistry

【緒 言】

日本大学歯学部では 1 年次後期にテュートリアル方式の入門として「教養演習」を配し、グループ学習による課題探求を行っている。この科目は設置されて既に 12 年が経過し、問題点が指摘されるたびに改良を重ねてきた。ところが、成績評価点がチューターによって異なることが以前から課題となっていたが、未だに改善されないまま現在に至っている。そこで、2010 年の成績評価を元に、実態の解析を行った。

【方法と結果】

2010 年には 18 人のチューターが 20 グループを担当し、学年の平均評価点は 81.2 点であった。一方、グループの平均評価点は 90.7 点から 73.9 点の間にばらつき、Kruskal Wallis test によるとグループ間の差は高度に優位であった ($p < 0.001$)。また、学年全体での評価点の標準偏差は 7.1 点であったが、1 点台のグループが 3 つあった。

この学生が 2 年生に進級すると、前期に同様のテュートリアル方式の「生体基礎演習」を受講する。そこで、両者の成績を解析すると相関係数は 0.09 で、1・2 年のテュートリアル科目の成績に相関は認められなかった。さらに、2011 年度の教養演習でもグループ間の差が高度に有意であった ($p = 0.002$)。

【考 察】

以上の結果から、グループごとの評価点の違いは、学生をランダムに少人数グループに分けたことによるばらつきよりも、チューターに依存することが示唆された。これまでも、成績評価については細かな採点基準を設けて採点表を作成したり、ワークショップによる申し合わせを行ってきた。しかし、それだけでは事態が一向に改善されていないことから、より具体的な評価モデルの策定を行い、それを用いたワークショップが必要と考えられる。

鹿児島大学病院歯科医師臨床研修における e-learning システム導入の試み

○岩下洋一郎¹⁾, 河野博史²⁾, 志野久美子²⁾, 諏訪素子²⁾, 松本祐子²⁾, 吉田礼子²⁾, 田口則宏¹⁾²⁾

¹⁾鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯科医学教育実践学分野, ²⁾鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科総合診療部

Trial introduction of e-learning system to postgraduate dental clinical training in Kagoshima University Hospital

○Iwashita Yoichiro¹⁾, Kono Hiroshi²⁾, Shino Kumiko²⁾, Suwa Motoko²⁾, Matsumoto Yuko²⁾, Yoshida Reiko²⁾, Taguchi Norihiro¹⁾²⁾

¹⁾Department of Dental Education, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences, ²⁾Department of General Dentistry, Kagoshima University Hospital

【目 的】

鹿児島大学に導入されつつある e-learning システム“e-Moodle”は特徴として携帯電話からのアクセスが可能など、学外における情報共有が容易になっている。鹿児島大学病院歯科医師臨床研修において、毎日の研修上の連絡事項が、学外施設や他診療科で臨床研修を行っている研修歯科医に伝わらないことが頻繁に発生し、問題になっていた。そこで、本問題を解決することを当初の目的として、e-Moodle の導入を試みたので報告する。

【方 法】

研修歯科医が学外においても連絡事項の通達・確認が可能になるように連絡事項、お知らせ等の登録を行った。通常は歯科総合診療部(歯科医学教育実践学)の指導歯科医(教員)が連絡事項の登録を行うが、症例検討会等の研修歯科医の係からの連絡事項については、係に連絡事項の登録のみが行える権限を与え研修歯科医自身からも他の研修歯科医へ連絡が出来るように設定

した。

【結 果】

e-Moodle の特長を活かし、学外からも携帯電話等でアクセスできるようになった。また、アクセス状況が指導歯科医から確認できるようになった。しかしながら患者情報を含むデータについては、学外からのアクセスが可能なシステムであることを考慮して一切掲載しなかった。

【考 察】

本システムは平成 23 年度末より導入検討を開始したため、まだ具体的な稼働は行っていないが、管理型研修プログラムにより当大学の歯科総合診療部に不在の研修歯科医でも容易にアクセス可能なシステムにすることが出来た。今後は研修歯科医に連絡すべき情報の整理を行うとともに、e-learning 本来の教育コンテンツの整備・構築も目指す。さらに e-Portfolio への応用を検討していきたい。

当科における下顎孔伝達麻酔の相互実習時に発症した偶発症について

○山田 希¹⁾, 秋山麻美²⁾, 永合徹也¹⁾, 藤井一維²⁾, 佐野公人¹⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部歯科麻酔学講座, ²⁾日本歯科大学新潟病院歯科麻酔・全身管理科

For the onset of disease at the time of accidental cross-training of the lower jaw hole conduction anesthesia in our department

○Yamada Nozomi¹⁾, Akiyama Asami²⁾, Nagoh Tethuya¹⁾, Fujii Kazuyuki²⁾, Sano Kimito¹⁾

¹⁾Department of Dental Anesthesiology, School of Life Dentistry at Niigata, The Nippon Dental University, ²⁾Dental Anesthesia and General Health Management, The Nippon Dental University, School of Dentistry at Niigata

【緒言】

当科では、臨床実習の1つとして下顎孔伝達麻酔の学生相互実習を行っている。今回、我々は客観的に評価するためにチェックリストによる評価表を導入した。その中で、5件の偶発症が発症したため、若干の考察を加え報告する。

【方 法】

対象は、2007～2011年度に本学附属病院において臨床実習を行った5年生439名である。評価方法は、2007～2009年まではVASで行い、2010年より手順を詳細に記入したチェックリスト方式を使用した。下顎孔伝達麻酔時に発症した偶発症については、実習記録から後ろ向きに調査した。

【結 果】

2007～2009年度では偶発症の発症は認められなかった。その一方、2010年度は舌尖部の知覚鈍麻、血管穿刺が各1件、2011年度には血管穿刺が3件認められた。舌尖部の知覚鈍麻

は、約4か月間の理学療法で症状が消失した。動脈穿刺の症例では、いずれも迅速な対応により合併症は認められなかった。

【考 察】

当科では、臨床における下顎孔伝達麻酔の有用性に鑑み、下顎孔伝達麻酔の学生相互実習を実施している。2009年度まではVASを用いた評価とフィードバックを行い、実習中に手技が不安定な学生に対して、偶発症を発症しないように指導医がサポートする体制をとっていた。しかし、評価方法については実習指導内容および評価の統一性を図ることが課題であった。そのため、2010年度以降、チェックリスト方式の評価表を導入した。しかし、指導医の評価は統一されたが、評価に囚われた結果、手技に対する指導医のサポートが必ずしも十分ではなかった可能性が推測された。今後は下顎孔伝達麻酔法を実施できるシミュレーターの使用を含め、学生の実力に合わせた指導医のサポートの充実を図る必要があると考えられた。

歯科医学教育における禁煙指導・禁煙支援：系統的文献レビューとカリキュラム開発

○埴岡 隆¹⁾, 花田信弘²⁾, 稲葉大輔³⁾, 小川祐司⁴⁾, 尾崎哲則⁵⁾, 小島美樹⁶⁾, 川口陽子⁷⁾, 平田幸夫⁸⁾, 柴原孝彦⁹⁾, 森田 学¹⁰⁾, 伊東隆利¹¹⁾

¹⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会福岡歯科大学, ²⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会鶴見大学, ³⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会岩手医科大学, ⁴⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会新潟大学, ⁵⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会日本大学, ⁶⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会大阪大学, ⁷⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会東京医科歯科大学, ⁸⁾一般社団法人日本口腔衛生学会禁煙推進委員会神奈川歯科大学, ⁹⁾社団法人日本口腔外科学会脱タバコ社会実現委員会東京歯科大学, ¹⁰⁾特定非営利活動法人日本歯周病学会健康サポート委員会岡山大学, ¹¹⁾公益社団法人日本口腔インプラント学会医療・社会保険委員会伊東歯科口腔病院

Tobacco Cessation Curriculum for Dental Students: A Systematic Review and the Evolution

○Hanioka Takashi¹⁾, Hanada Nobuhiro¹⁾, Inaba Daisuke¹⁾, Ogawa Hiroshi¹⁾, Ozaki Tetsunori¹⁾, Ojima Miki¹⁾, Kawaguchi Yoko¹⁾, Hirata Yukio¹⁾, Shibahara Takahiko²⁾, Morita Manabu³⁾, Ito Takatoshi⁴⁾

¹⁾Japanese Society for Oral Health, ²⁾Japanese Society of Oral and Maxillofacial Surgeons, ³⁾Japanese Society of Periodontology,

⁴⁾Japanese Society of Oral Implantology

【目 的】

たばこ規制枠組み条約ガイドライン(2010年)では、各国に「教育、情報の伝達、訓練及び啓発(第12条)」, 「たばこへの依存及びたばこの使用の中止についての(中略)措置(第14条)」の履行が求められている。タバコ使用は口腔がんおよび歯周病の十分構成原因である。わが国では2006年版歯科医師国家試験出題基準、2010年度改定版歯学教育モデル・コア・カリキュラムに「禁煙指導・禁煙支援」が採用された。本研究では具体的なカリキュラム指針の開発を目的とした。

【方 法】

キーワードによる文献検索を行い歯科禁煙診療と教育について世界レベルで検討した。

【結 果】

1984年～2012年の英語文献367編のうち抄録検討により269編が選別された。1984年～2000年まで5年毎に21, 23, 39編と増加し、00～05年69編, 06～11年116編と急増した。初期は欧米が中心だったが発展途上国にも報告が拡大した。歯科受診患者、歯科医療従事者、歯学生・歯科衛生士学生に加え

健康保険会社担当者も対象とされた。歯科禁煙診療は効果的で歯科患者・歯科医療従事者の必要意識は高かったが教育訓練不足が指摘され、障壁・促進因子が検討された。口腔がん検診、インプラント・歯周病治療に加え、薬物依存症治療や口腔と全身の健康(NCD予防)の観点からも捉えられていた。これらの調査は各国の禁煙診療ガイドラインの構成モデルにしたがって行われており4A, 5A, 3A+紹介(公衆禁煙組織), 5Rなどが用いられていた。教育資源等についてはSP, ICT, OSCE形式教育の活用報告がみられた。卒前卒後教育の繋がり、歯科医師と歯科衛生士の役割連携、歯科以外の職種・組織間連携など禁煙診療を推進する体制も検討されていた。米国では歯科医学教育学会からのグラントを受けたカリキュラム開発が進行していた。

【結 論】

これら各国の経験に加えて、わが国固有の医師によるニコチン依存症治療の皆健康保険制度を活用した系統的・組織的・体系的な指針開発が必要である。

臨床実習生に対する有床義歯補綴学のウェブ配信型学習の効果

○大久保昌和, 宗 邦雄, 井上正安, 石井智浩, 飯島守雄, 河相安彦
日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学

Impact of Web-based Learning in Removable Prosthodontics on Student Doctors

○Okubo Masakazu, Sou Kunio, Inoue Masayasu, Ishii Tomohiro, Iijima Morio, Kawai Yasuhiko
Nihon University School of Dentistry at Matsudo, Department of Removable Prosthodontics

【目 的】

日本大学松戸歯学部では平成 20 年度から有床義歯補綴学教育に e-learning システムを利用したウェブ配信型の学習支援を行っている。これまでに総義歯補綴学受講生を対象としたアンケートでは 88 % の学生が問題演習の提供が自己学習に有効であり, 70 % 以上が何度も復習したと回答している。本研究の目的は, 臨床実習生に有床義歯補綴学のウェブ配信型教材を提供し, その学習効果を検討することである。

【方 法】

平成 23 年度臨床実習生(5 年次)129 名を対象とした。ウェブ配信型教材は e-learning システムである WebClass (株式会社ウェブクラス社) を用いて, 局部床義歯補綴学に関する過去に出題された国家試験問題を改変した MCQ を 8 領域に分類した学習課題を提供した。学習課題の前にプレテスト 20 問, すべての課題を終了した時点でポストテスト 20 問を行い, プレテストとポストテストの得点を統計学的に比較し, 学習成果および行

動を検討した。

【結 果】

期間内にプレテスト, すべての学習課題, ポストテストを終了したものは 106 名(82%)であった。8 領域の課題に対する総アクセス数は 4690 回(36 回/学生)であった。プレテストおよびポストテストの得点はそれぞれ 11.2 ± 3.3 , 18.1 ± 2.2 で統計学的有意差 ($p < 0.000$) を認めた。

【考 察】

日本大学松戸歯学部ではウェブ配信型の学習支援は学生に受け入れられており, 学習課題を提供することで学習行動を促し, 繰り返し課題を行うことで学習効果が高くなると考えられた。

【参考文献】

1) Jackson TH. Effectiveness of web-based teaching modules: test-enhanced learning in dental education. J Dent Educ. 2011; 75: 775-81.

歯科薬理学に関連した国家試験問題への対策に関する研究

○天野 均, 龍 家主, 山田庄司
昭和大学歯学部

Specialized study in preparing for the national dentist examination

○Amano Hitoshi, Ryu Kakei, Yamada Shoji
Showa University School of Dentistry

近年, 歯科医師国家試験合格率の低下は, 在学生の不安を伴った学習意欲の低下, さらには卒業生の国試浪人の増加による歯学部入学志望者の激減といった負のサイクルに陥る。また統計によると国家試験合格率は, 受験回数が増えるにつれて低下してしまう。したがって, 6 年生の国家試験対策を充実することがとても重要である。

我々は, 卒前専門基礎教育として行われている歯科薬理学に関連した国家試験問題(全問題の約 1 割に相当)に対する講義内容及び練習問題に対する学生の正解率が向上するように工夫した。まず学生には講義内容は三年生時に習得した知識の復習であること及び国家試験出題基準範囲を再認識させた。講義内容は, できるだけ出題基準の順番どおりに行った。出題範囲における各自の不足している知識を見つけ出すように意識改革(問題点の抽出)を行うことも到達目標とした。

また卒業試験を含む練習問題は, 正解と解説を公開するとともにクラス全体の正解率と識別係数を教えることで, 各自の弱点の認識を徹底した。使用した練習問題の難易度は, 過去の国試とほぼ同レベルにするために改変問題を作成した。興味深いことに不正解肢をそのままにして, 正解肢だけを今までに出題されていない新薬に変更すると正解率と識別係数が低迷してしまった。正解肢が 2 つある X2 問題対策として, 既出の容易な A 問題の正解肢を組み合わせても正解率は低下した。

それぞれの学習項目に対する基本的な知識を正確に習得させるためには, 講義の内容に合致した過去に既出しかつ正解率の高い A 問題を照らし合わせることで, 学生自身に講義の内容に沿った練習問題を作成させることによって, 出題範囲の再確認と問題点の抽出ができ, 成績向上に効果的であった。

放射線学における画像診断試験と講義試験の比較検討

○関谷恵子, 森 進太郎, 金田 隆
日本大学松戸歯学部放射線学講座

Comparative study with diagnostic imaging examination and lecture examination on radiology

○Sekiya Keiko, Mori Shintaro, Kaneda Takashi
Department of Radiology, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

昨年, 我々は教室内のスクリーンに投影した画像を読影する試験の結果を比較し, 着座席の違いによる環境条件の差はみられないことを発表した。今回は, 放射線学の試験において同時期に実施した講義の多肢選択方式試験と, 画像を用いた多肢選択方式試験の画像診断試験結果を比較検討したので報告する。

【方 法】

対象は平成 20 年度の 3 年生の 120 名と平成 21 年度の 3 年生の 119 名, 平成 22 年度の 3 年生の 112 名の学生および平成 23 年度の 3 年生の 115 名の学生とした。画像診断試験問題は顎骨および顎顔面の疾患 25 症例を選び, 多肢選択方式の問題を作成し, 教室内のスクリーンに投影された画像をみて解答するものとした。講義試験は講義内容の多肢選択方式の問題を 25 問作成して実施した。画像診断試験の結果と講義試験の結果について相関を求めた。試験結果は偏差値によって比較した。相関の検定には Pearson's correlation coefficient test を用い有意水準を 5%

とした。また, 画像診断試験の結果と講義試験の結果との比較には Student's t-test を用い有意水準を 1% とした。

【結 果】

画像診断試験と講義試験の結果の相関を求めところ, 平成 20 年度は相関係数が 0.49, 21 年度は 0.49, 22 年度は 0.47, 23 年度は 0.51 となり, 各年度とも有意に相関が認められた。また, 画像診断試験の結果と講義試験の結果との偏差値の平均値の比較では, 各年度とも有意な差は認められなかった。

【考 察】

画像診断試験と講義試験との結果に, 各年度とも有意に相関が認められたのは学力の差として成績に反映されているものと考えられた。画像診断試験と講義試験との偏差値の平均値の比較では, 有意な差は認められず, 現在実施しているスクリーン投影画像を用いた放射線学試験と講義試験においては試験条件の差がでないことが示唆された。

歯の 3D 映像とその教育応用について

○山崎洋介¹⁾, 網干博文²⁾, 磯川桂太郎¹⁾
¹⁾日本大学歯学部解剖学教室第 2 講座, ²⁾日本大学歯学部法医学教室

An e-learning program for dental anatomy using stereoscopic 3D tooth images

○Yamazaki Yosuke¹⁾, Aboshi Hirofumi²⁾, Isokawa Keitaro¹⁾
¹⁾Department of Anatomy, Nihon University School of Dentistry, ²⁾Department of Legal Medicine, Nihon University School of Dentistry

【目 的】

立体的で複雑な歯の形態を教育するためには, 黒板や教科書で示す絵や写真など 2 次元的な情報に加えて, 3 次元 (3D) 映像が役立つと考えられる。そこで, 近年普及がめざましい 3D 写真とその表示装置を応用した「歯の解剖学の 3D コンテンツ」を作製した。

【方 法】

抜去歯をデジタルカメラで角度を変えて 2 回撮影し, そのステレオペアから 3D 写真を作成した。これらの写真をデータベース化し, パソコンで閲覧できるように加工・整備した。こうした歯の 3D 写真データベースを, 歯の解剖実習中に受講学生に閲覧させ, アンケートを実施してフィードバック情報を収集した。

【結 果】

3D 写真にするための歯のステレオペアは, 市販デジタルカメラの利用で撮影可能であった。ステレオペアを赤青眼鏡観察用のアナグリフ画像に変換し, 液晶プロジェクタによってスク

リーンに投影することで学生に供覧した。また一部の画像は, 3D 表示方式のテレビモニターで表示・供覧した。3D 写真では, 奥行きのある立体視がなされ, 歯の構造が平面的な写真よりも詳しくリアルに観察出来た。例えば, 臼歯咬合面観では, 通常の写真画像では判別できない小窩・裂溝の深さの差異などが, 3D 写真では立体感をもって認識することが可能であった。アンケート調査の結果によれば, 講堂内の着席位置すなわちスクリーン面からの距離や角度による影響を大きく受けることなく, ほとんどの観察者 (学生) が立体感のある歯の形態像を観察できたことが明らかになった。3D テレビモニターの表示は, アナグリフよりも色再現性がよい立体視ができるが, 専用メガネが必要で, 表示する像の大きさ限界の制約や, 視聴位置の問題などから, 多人数が同時に閲覧するには不適であると考えられた。3D 映像コンテンツを用いた講義は, そのコンテンツへの興味・関心という点において, 閲覧者から高い評価が得られた。

歯科医師国家試験の在り方の研究—海外における歯科医師国家試験の現状—

○海老原 新¹⁾, 石村 瞳¹⁾, 森田一三²⁾, 武部 純³⁾, 金村清孝³⁾, 石橋寛二³⁾, 福田仁一⁴⁾, 中垣晴男²⁾, 末瀬一彦⁵⁾, 須田英明¹⁾
¹⁾東京医科歯科大学, ²⁾愛知学院大学, ³⁾岩手医科大学, ⁴⁾九州歯科大学, ⁵⁾大阪歯科大学

Survey of the foreign national dental board examination

○Ebihara Arata¹⁾, Ishimura Hitomi¹⁾, Morita Ichizo²⁾, Takebe Jun³⁾, Kanemura Kiyotaka³⁾, Ishibashi Kanji³⁾, Fukuta Jinichi⁴⁾, Nakagaki Haruo²⁾, Suese Kazuhiko⁵⁾, Suda Hideaki¹⁾

¹⁾Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Aichi-Gakuin University, ³⁾Iwate Medical University, ⁴⁾Kyushu Dental College, ⁵⁾Osaka Dental University

【研究目的】

わが国の歯科医師国家試験(以下、国家試験)は、多肢選択形式筆記試験であり、実技試験は臨床実地問題として代替で実施されている。医療技術の進歩により歯科医師として習得すべき知識・技能が増加しつつある一方、臨床実習時間数の減少など国家試験合格者の技術能力の低下が懸念される。本研究では、技術能力評価試験を含む海外の国家試験を分析することで、わが国における国家試験の在り方について検討した。

【調査方法】

国家試験を中心として、教育状況に関するアンケート票を作成した。アンケート内容は、国家試験の有無、受験時期、試験日数、合格率、合格基準、出題形式、禁忌肢問題の出題、臨床能力評価の方法等であった。アンケート票を電子メールに添付し、諸外国に回答を依頼した。調査対象期間は平成22年10月～平成23年7月とした。得られた回答を集計し、分析を行った。

【結 果】

アンケートを37ヶ国に依頼し、33ヶ国から回答を得た。その

うち国家試験実施国は13ヶ国であった。国家試験に関しては約半数の国で大学卒業後に実施されており、試験日数はほとんどの国で2日以内であった。半数以上の国で合格率が90%以上であり、予め合格基準が設定されていた。試験形式は多肢選択形式筆記試験が主に行われていた。禁忌肢問題を出題している国はなかった。臨床能力評価は、患者を用いる臨床評価が3ヶ国、模型を用いる臨床評価が4ヶ国、模擬臨床問題が5ヶ国であった。

【考察ならびに結論】

世界各国における歯科医師免許の取得については、国家試験の有無をはじめ、国により様々な方法が採られていた。技能領域について、国家試験として臨床評価を行っている国は、回答が得られた33ヶ国のうち3ヶ国にとどまった。わが国においては、OSCEや臨床実習等の卒前教育、卒後研修、専門医制度等を勘案しつつ、世界基準に合致する歯科医師を社会に供給できる国家試験制度を築き上げる必要がある。

Moodleを用いた口腔外科のブレンデッド・ラーニングに対するアンケート調査

○住友伸一郎, 倉知正和
 朝日大学歯科医学教育推進センター

Student responses to the Oral Surgery blended learning course using Moodle e-learning system

○Sumitomo Shinichiro, Kurachi Masakazu
 Dental Education Development Center, Asahi University School of Dentistry

教室での対面教育とeラーニングを組み合わせた学習方法を一般にブレンデッドラーニングと言う。

2010年度朝日大学歯学部4年生118名を対象とした。2名を1グループとして、朝日大学Moodleによって配信される約30問の口腔外科に関連する演習問題に対して解答させた後に、対面講義による解説を行うという形式の演習講義を、パソコン教室において行い、最後の講義時間に多肢選択形式と自由記載形式からなるアンケートを行った。Moodleで配信される演習問題はすべて、臨床写真や図といった視覚素材を含み、初診患者に対する医療面接、検査方法の選択、臨床所見・検査所見の解釈、診断、治療方針、予後予測といった口腔外科における臨床の過程、つまり臨床的推論を意識して作成したものである。対面で行う講義においては、それぞれの問題の正答率、識別係数などをMoodleで確認し、学生に対してもこれらを示しつつ解説を行った。

ブレンデッドラーニングに対する学生の評価は「やや良い」以上が96.5%を占め、内容についても「十分理解でき、興味がわいた」が68.1%を占めていた。講義期間中の家庭(下宿)でのMoodleの使用に関しては、「かなり使用した」が47.8%、「1～数回使用した」が37.2%であり、試験前の復習に用いるかとの問いに対しても「必ず用いる」が57.5%であり、講義終了から試験までに48.3%の学生が復習のために1回以上アクセスし、7回の平均では20.3%であり、そのほとんどは本試験以前に行われていた。

この学習方法の利点は、学生の理解が不十分な領域を講義中に見極めて、十分な解説が加えられることや、講義後に学生の復習が容易に行え、かつ教員によってその状況が把握できることにある。今後とも、学生の意見を取り入れて、さらに効果の得られる学習方法を提供していきたいと考えている。

事例学習によるプロフェッショナリズム教育について考える

○小川哲次¹⁾、大林泰二²⁾、西 裕美¹⁾、小原 勝¹⁾、田中良治¹⁾、木尾哲朗³⁾、大西弘高⁴⁾

¹⁾広島大学病院口腔総合診療科、²⁾広島大学大学院医歯薬学総合研究科、³⁾九州歯科大学口腔機能科学専攻医療人間形成学講座総合診療学分野、⁴⁾東京大学医学教育国際協力研究センター

A Consideration about Education of Professionalism by Case Study

○Ogawa Tetsuji¹⁾, Obayashi Taiji²⁾, Nishi Hiromi¹⁾, Ohara Masaru¹⁾, Tanaka Yoshiharu¹⁾, Konoo Tetsuro³⁾, Onishi Hirotaka⁴⁾

¹⁾Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital, ²⁾Graduate School Biomedical Science, Hiroshima University, ³⁾Department of Clinical Communication and Practice, Division of Comprehensive Dentistry, Kyushu Dental College, ⁴⁾International Research Center of Medical Education, The University of Tokyo

【目 的】

学士課程におけるプロフェッショナリズム教育は、卒業後の臨床研修並びに生涯研修のような体験による学習が難しいために、患者そして事例シナリオや動画などを活用した協調学習（他から学ぶ）及びシミュレーションなどのactive learningを中心に授業を行うことになる。その際には、学習目標は勿論のこと、学習者のレディネスとともにコンプライアンスや倫理の習熟度、事例の内容と答え（正解）の有無、それらに適した教授法の選択などについて、十分吟味しながら授業計画をたてる必要がある。

本発表では、授業の開始時に得た個人学習における記述式の言語情報をもとに、学習者のレディネス、事例の内容、実際の学習内容との相互関係について報告する。

【方 法】

広島大学歯学部歯学科4年生と5年生及び広島大学病院研修歯科医を対象とした。事例シナリオには、患者の福利優先、患者の自律優先、社会的正義の構成概念を埋め込んだ短文の2例を

用いた。研修歯科医については、臨床研修OSCEの筆記試験課題（試験時間13分）として実施し、4年生並びに5年生には同様の事例シナリオについて個々に記述させた。これらの言語的資料を構成概念によるカテゴリー分類を行い、一部についてはSteps for Coding and Theorization (SCAT)による言語解析を行った。

【結果と考察】

学年が下がるにつれてコンプライアンスや倫理そして臨床倫理についての知識（理解）が乏しくなること、理解可能な表出的言語に拘泥・固執する可能性があること、他の構成概念まで考えが及ばない可能性があることなどの結果が得られた。今回の結果から、学士課程でのプロフェッショナリズム教育では、ある程度答えや正解（収束性）がある事例が妥当であり、正解や答え（収束性）のない事例を活用する場合にはシナリオや課題文の言語表現や現実性などに十分な吟味が必要であることがわかってきた。

大学学習法へのパフォーマンス評価の導入

○小野和宏¹⁾、井上 誠¹⁾、山村健介¹⁾、西山秀昌¹⁾、八木 稔¹⁾、ステガロユ ロクサーナ¹⁾、重谷佳見¹⁾、前田健康¹⁾、高橋雄介²⁾、松下佳代²⁾

¹⁾新潟大学歯学部、²⁾京都大学高等教育研究開発推進センター

Introduction of Performance Assessment into the “Study Skills” Course

○Ono Kazuhiro¹⁾, Inoue Makoto¹⁾, Yamamura Kensuke¹⁾, Nishiyama Hideyoshi¹⁾, Yagi Minoru¹⁾, Stegaroiu Roxana¹⁾, Shigetani Yoshimi¹⁾, Maeda Takeyasu¹⁾, Takahashi Yusuke²⁾, Matsushita Kayo²⁾

¹⁾Niigata University, Faculty of Dentistry, ²⁾Kyoto University, Center for the Promotion of Excellence in Higher Education

【目 的】

新潟大学歯学部では、学生に自立・自律した学習者としての基礎を身につけさせるために、初年次教育として「大学学習法」を開講している。この授業は講義、演習での知識や技能をもとに、レポート作成およびプレゼンテーションを行うもので、その学習活動を通して問題発見・解決能力、論理的思考力、表現力の開発をねらいとしている。今回、大学学習法の学習成果を把握するために、パフォーマンス評価の可能性について検討した。パフォーマンス評価とは、ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、その人自身の作品や実演を直接的に評価する方法のことである。

【方 法】

京都大学高等教育研究開発推進センターとの連携のもと、学生レポートから高次な能力を読み解くルーブリックを作成し、この基準による評価の信頼性を確認するとともに、授業へのパフォーマンス評価導入にあたり、現行の大学学習法の問題点を整理した。

【結果と考察】

関西大学・牧野由香里の「十字モデル」をもとに、問題発見・解決能力、論理的思考力の概念を明確にし、背景と問題、意見と結論、根拠・情報、異なる意見の検討、全体構成、表現ルールなどの6つの観点と3段階のレベルからなるルーブリックを作成した。一般化可能性理論に基づく分析を行ったところ、このルーブリックでの評価は学生間のレポートの個人差をある程度捉えていること、評価者の数は2名程度でも十分な信頼性を確保できることがわかった。また、パフォーマンス評価に関するFDWSを開催し、参加教員から寄せられた意見をまとめた結果、レポート指導と評価との関係、パフォーマンス課題、教員の負担など授業導入における問題点が明らかになった。いくつかの実践的課題はあるものの、パフォーマンス評価により問題発見・解決能力、論理的思考力などの学習成果を一定の妥当性と信頼性をもって学生レポートから把握できる可能性が示された。

「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響

○佐藤紀子
日本大学歯学部

The effect of adapted sports classes on dental students' awareness of sports and people with disabilities

○Sato Noriko
Nihon University School of Dentistry

【目 的】

日本大学歯学部では、第1学年前期に「アダプテッド・スポーツ」の概念を取り入れた体育実技を実施している。「アダプテッド・スポーツ」とは用具やルールを対象者に合わせることで、皆がスポーツを楽しめるようにするという考え方である。スポーツが心身の健康の維持・増進、疾病予防に寄与することは自明で、人々の生活の質の向上や健康管理を担う歯科医師は、理論は当然のこと、自身もスポーツに親しむ態度を養うことが必要であると考え、特にスポーツを苦手とする学生には、「アダプテッド・スポーツ」の考え方を伝えることで、苦手でも、年を重ねても、スポーツを楽しめることを知ってもらいたい。また、アダプテッド・スポーツが対象とするのは、障害者、幼児から高齢者、妊婦など様々である。本授業を通じて、学生が多様なニーズに応える環境づくりの重要性に気づき、医療分野での応用へとつなげてくれることを期待している。本研究は、この授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影

響を明らかにし、授業効果を確認するとともに、今後の授業改善の参考とすることを目的とした。

【方 法】

平成22年度第1学年129名を対象に質問紙による調査をおこなった。スポーツ経験や障害者との関わりなどの基本属性の他、受講前後にスポーツに対する意識、障害者や障害者スポーツに対するイメージ等について調査し、受講前後の平均値に有意な差があるかどうか、対応のあるt検定をおこなった。

【結果と考察】

受講後に学生はスポーツをより好きになり、より得意と感じる傾向であった。また、障害者スポーツに対する理解や障害者に対する認識がより実態に近づく傾向であった。受講後の自由記述の中には、「アダプテッド・スポーツの考え方は障害の有無に関わらず有意義である」、「障害者もスポーツを楽しめる」といった肯定的な感想が多く、授業の目的はおおむね伝わっていた。

日本大学松戸歯学部1年次生に対するプロフェッショナリズム醸成教育の試み

○大沢聖子¹⁾²⁾、青木伸一郎¹⁾²⁾、福本雅彦²⁾³⁾、伊藤孝訓¹⁾²⁾、牧村正治⁴⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、²⁾日本大学松戸歯学部口腔科学研究所、³⁾日本大学松戸歯学部歯科臨床検査医学講座、

⁴⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座

Fostering Professionalism for First-Year students in Nihon University School of Dentistry at Matsudo

○Osawa Seiko¹⁾²⁾、Aoki Shinichiro¹⁾²⁾、Fukumoto Masahiko²⁾³⁾、Ito Takanori¹⁾²⁾、Makimura Masaharu⁴⁾

¹⁾Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾Research Institute of Oral Science, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ³⁾Department of Laboratory Medicine for Dentistry, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁴⁾Department of Social Dentistry (Dental Education), Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

歯科医師は、プロフェッショナルとして生涯にわたり省察(reflection)しながら能動的学習を続けなければならない。そのため日本大学松戸歯学部では入学時からプロフェッショナリズム醸成教育として、平成22年度より1年次前学期「歯科医学概論」の中で、11回の講義と4回のワークショップ形式で「プロフェッショナリズムをもった歯科医師とは」についてSGDを行っている。SGDでは「ポートフォリオ」、「KJ法を用いた問題整理」、「2次元展開法を用いた問題解決手順」、「プレゼンテーション・討議」を行った。アンケートを行った結果、いくつかの問題点が明らかになったので報告する。

【方 法】

対象は、平成23年の1年次「歯科医学概論」受講生98名である。アンケートは21項目からなり、そのうち20項目は5段階評価の選択式で、最後の1項目は講義・実習に関する感想の自由記載とした。WS終了後にWebClassでアンケートに回答するよう

協力を求め、匿名化し、同意を得られた回答のみを使用した。

【結果と考察】

66名からアンケート使用に対する同意と回答を得た(回収率67.3%)。実習内容に関しては、「積極的に参加した」学生が75.8%であったが、27.3%の学生は「負担が大きすぎる」と回答した。能動的学習法と問題点の整理法に関する項目では、「KJ法」、「2次元展開法」は90%以上、「振り返り」は87.9%の学生が理解していたが、実際に「インターネットで検索した」学生は27.3%で、「図書館を利用して調べた」学生は10.3%にすぎなかった。

以上のことからプロフェッショナリズムの教育は、初期の知識のレベルから経時的に態度、姿勢、行動のレベルへと継続的で、かつ実践的でなければならないと考えられた。今後も、本講義内容の振り返りと以降の講義との関連を意識した学習環境の提供を模索するつもりである。

学生の人間関係に関する意識の変化 —行動科学基礎演習における7年間の比較—

○礪波健一¹⁾, 中村千賀子²⁾, 梅森 幸¹⁾, 新田 浩²⁾, 俣本志朗²⁾

¹⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科総合診療部, ²⁾東京医科歯科大学医歯学総合研究科歯科医療行動科学分野

Change in students' perception of inter-personal relations during classes of "Introduction to the Behavioural Science" —Analysis of seven years—

○Tonami Ken-ichi¹⁾, Nakamura Chikako²⁾, Umemori Sachi¹⁾, Nitta Hiroshi²⁾, Mataka Shiro²⁾

¹⁾Oral Diagnosis and General Dentistry, Dental Hospital, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Behavioral Dentistry, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

東京医科歯科大学では、歯学部歯学科2年次学生に対し、人間関係構築能力を修得することを目的として行動科学基礎演習を行っている。本演習は、前期のコミュニケーション・グループ演習、夏休み期間中の福祉施設における体験学習、後期の体験振り返り演習の3部より構成される。本研究の目的は、本演習期間に学生の人間関係に関する意識がどのように変化するかを、7学年にわたる学生の意識調査の分析結果より明らかにすることである。

【方 法】

対象は2005年から2011年に歯学科2年次に在籍し、本調査に協力した合計361名とした。自らの他の人に対する見方、人間関係や人間理解についての考え方を問う20個の質問項目について、5段階評価で回答させる自記入式質問用紙を作成した。同用紙を体験学習直前の7月、最終クラスの11月ないし12月に学生に配布し回答を得た。このとき、調査時と4月開講当時

を振り返ったときの双方について回答を得て、質問ごとにその差の平均を求め意識の変化量とした。意識の変化の方向と変化量について7年間の傾向を調査した。

【成 績】

7年にわたり、ほとんどすべての質問項目において、学生の意識は人間に対する理解が深まる方向に変化していた。特に「良い人間関係をつくるには、自分自身について充分知る必要がある」という質問項目で変化が顕著であった。また、体験学習前の7月と比べ、後の11月において4月の振り返りからの変化量が大きくなる傾向も7年間を通じて認めたことから、体験学習によって学生の人間関係に関する意識が大きく変化することが考えられた。

【結 論】

7学年にわたる学生の意識調査の結果より、行動科学基礎演習によって、学生の他者・自己に関する理解や人間関係構築に関する意識が深まる方向に変化することが示唆された。

地域と商店街に最寄の歯科医院を中心としてデータ収集すると共に 免疫力アップの教育を行っていく仕組み作り

○出井伸也

地域・商店街支援協会

Our new effort about data management and about education to promote immune strength in the dental offices via Shouten-gai-system or Region-system

○Idei Shinya

President Researcher, Shouten-gai-system Association

3.11や高確率首都圏大地震予想など、広域大災害に備え首都機能バックアップが提唱されている。

大災害の際には歯科治療よりも、もちろん緊急医療の方が優先ではあるが、防災のための体制を平時に別の目的にも活用しておくことで、連絡が密になり、いざというときにもより役立つものとなる。

その一環として、ここで全国10300ヶ所の商店街とその周辺の地域、大学と周辺の歯科医院を結ぶ体制を考えてみる。

まず、首都機能バックアップというのは、平時の東京を起点とする地方への流れとある意味逆の流れである。教育においても通常は東京を起点とする地方への流れが主流であるが、上記の通常とは別流の体制を平時に別の目的にも活用しておくことで、連絡が密となり、いざという時より役立つものとなるという視点で考えてみると、歯科教育において全国10300ヶ所の商店街とその周辺の地域、大学と周辺の歯科医院を結ぶ教育体制を常日頃活用しておくことで、いざというとき、すなわち通常

の東京一極からの流れでは対応できない、もしくは、できていない事に対して対応策がなされるということになる。

それは、現在流通の流れから取り残された商店街、通常の歯科教育ではあまり提唱されていない歯科治療時の免疫力アップ教育。こうしたものについて対応策がなされるということでもある。

岡山は全国でも災害が少なく、平野が広く、四国に向けて鉄道も走っており、東京一極の流れに対して、もうひとつの流れ、全国10300ヶ所の商店街とその周辺の地域、大学と周辺の歯科医院を結ぶネットワークを構築する中心として最適の地であり、首都機能移転の候補地としても最適の地でもある。

今後、今回本学会が開催されているこの岡山をモデルに、地域と商店街に最寄の歯科医院を中心としてデータ収集すると共に免疫力アップの教育を行っていく仕組み作りを行っていく予定である。

第1学年に行うファンダメンタルハnadスキル実習に関するアンケート調査

○五十嵐 勝¹⁾、新海航一¹⁾、猪子芳美¹⁾、佐藤利英¹⁾、田中聖至¹⁾、春藤 勲²⁾、圓山浩晃²⁾、藤井一維²⁾、関本恒夫²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学新潟病院

Questionnaire survey on fundamental hand-skill practice for first-grade students

○Igarashi Masaru¹⁾, Shinkai Koichi¹⁾, Inoko Yoshimi¹⁾, Sato Toshihide¹⁾, Tanaka Satoshi¹⁾, Shundo Isao²⁾, Maruyama Hiroaki²⁾, Fujii Kazuyuki²⁾, Sekimoto Tsuneo²⁾

¹⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Niigata, ²⁾The Nippon Dental University, Niigata Hospital

【目的】

本学では平成19年度より、第1学年の後期実習に“ファンダメンタルスキル実習Ⅱハnadスキル”を実施している。本実習は、日常生活で一般に行う技能や将来受講する歯科医学に関連づけて基本的な実技実習を行うもので、第1学年の早期体験学習の一つとして実施されている。今回われわれは、実習に対する学生の意識調査を目的にアンケート調査を実施したので報告する。

【方法】

平成23年度最終日に第1～4学年を対象に、平成19～23年の間にハnadスキル実習を経験した学生から当初を振り返るアンケート調査を行った。実習課題は(1)ハサミでの裁断、(2)立体物の製作、(3)紐の結び方、(4)金属線の伸長と屈曲、(5)箸の使い方、(6)石膏の混和と石膏棒作製、(7)拡大鏡下での精密作業、(8)ワックスの取り扱い、(9)展開図に沿った石膏棒彫刻、(10)筆積み法での粉の取り扱い、(11)金属面の研磨、(12)透

明アクリル棒の切削、(13)プレパレーションプレートの切削、(14)ミラーの使用法で、アンケート内容はハnadスキル実習の意義、他の学習科目との関連性、各実習課題へ取り組む姿勢、次年度以降の教科への発展性等の項目からなっている。

【結果と考察】

1年時に受講して回答に応じた学生数は第1学年44名、第2学年63名、第3学年68名、第4学年71名で、78～90%の学生が実習の有用性を示していた。特に1年生では役立つ実習として評価した率が90%と高く、器具器材に直接触れることで歯学部入学の意識を高めていた。学年が進み基礎系実習や臨床系実習が開始すると、1年時の実習内容を記憶していない学生が増えるが、有意義とする率はやや減少したが実習の有用性は維持されていた。本実習が役立つ教科数は、学年の上昇に従って増え、早期の体験実習ではあるものの次年度以降の教育への効果が確認できた。

医療機関で職場体験学習を行った中学生の意識調査

○長谷川 優¹⁾、秋山麻美¹⁾、織田隆昭¹⁾、菅原佳広²⁾、小野幸絵²⁾、野田つかさ²⁾、圓山浩晃²⁾、寺田員人¹⁾、関本恒夫²⁾

¹⁾日本歯科大学新潟生命歯学部、²⁾日本歯科大学新潟病院

A consciousness survey of junior high school students who carried out work experience program at a medical institution

○Hasegawa Yuh¹⁾, Akiyama Asami¹⁾, Oda Takaaki¹⁾, Sugawara Yoshihiro²⁾, Ono Sachie²⁾, Noda Tsukasa²⁾, Maruyama Hiroaki²⁾, Terada Kazuto¹⁾, Sekimoto Tsuneo²⁾

¹⁾The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Niigata, ²⁾The Nippon Dental University, Niigata Hospital

【緒言】

日本歯科大学新潟生命歯学部(以下、本学)は、新潟市内の中学校2年生を対象とした職場体験学習に参画している。職場体験学習の場として医療機関を選択した生徒の意識を明らかにするため、本学で職場体験学習を行った生徒と一般企業で行った生徒との間で意識調査の結果を比較検討した。

【方法】

平成23年度の職場体験学習で本学を訪れた8校41名(男子15名、女子26名)に対してプレアンケート(以下、プレ)とポストアンケート(以下、ポスト)を実施し、回答を得た5校16名を実験群とした。実験群はすべて女子であった。アンケートは、新潟市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会(以下、委員会)の『「社会で働くこと」に関する意識調査』をもとに作成し、委員会が平成17年度に実施した意識調査に回答した10校1000名の中学生を対照群とした。プレ・ポストの一部には同じ質問を設定し、職場体験学習の前後における意識変化も調査した。

【結果】

仕事に就いて働くことを考え始めた時期は、実験群で小学校6年、対照群で中学校1年の頃が最多であった。きっかけは、実験群、対照群ともに「家族との会話やアドバイス」が最多であったが、第二位は実験群が「新聞やインターネット」、対照群が「学校での進路学習の時間」であった。職場体験学習を通じて気がついたことは、実験群、対照群ともに「責任や真心を持って仕事をする」が最多であった。第二位は、実験群では「相手の立場や気持ちを理解する」であったのに対して、対照群では「さわやかな挨拶や言葉遣い」であった。

【考察および結論】

一般企業で職場体験学習を行った生徒と、医療機関である本学で職場体験学習を行った生徒の間に意識の差が認められた。実験群では、対照群よりも早い時期から自分の職業について考え、積極的に情報を収集し、そして職場体験学習の中で相手の立場や気持ちを理解することの大切さを学んだといえる。

岡山大学病院の歯科医師卒後臨床研修前後における補綴臨床経験に関するアンケート調査

○児玉直紀¹⁾, 洲脇道弘²⁾, 西川悟郎³⁾, 原 哲也¹⁾, 皆本省吾¹⁾

¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野, ²⁾さながわ歯科クリニック, ³⁾岡山大学病院咬合・義歯補綴科

A Questionnaire Investigation of Prosthodontics Clinical Experience before and after Postgraduate Clinical Training at Okayama University Hospital

○Kodama Naoki¹⁾, Suwaki Michihiro²⁾, Nishigawa Goro³⁾, Hara Tetsuya¹⁾, Minagi Shogo¹⁾

¹⁾Department of Occlusal and Oral Functional Rehabilitation, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, ²⁾Sanagawa Dental Clinic, ³⁾Occlusion & Removable Prosthodontics, Okayama University Hospital

【目 的】

岡山大学病院における歯科医師卒後臨床研修は、単独型プログラムと複合型プログラムの2種類で構成されており、単独型プログラムでは各専門診療科で独自の研修プログラムを組んで研修歯科医の指導がなされている。今回、我々は研修プログラムの検証および改善を目的として、本研修プログラム修了者を対象に補綴治療の臨床経験に関するアンケート調査を行った。

【方 法】

平成22年度に岡山大学病院単独型プログラム2, 4を選択した研修歯科医19名を対象に、研修開始時、修了時に各補綴治療の臨床経験の有無に関するアンケート調査を行った。アンケート項目は、「日本補綴歯科学会 補綴技能教育基準(前期)」の項目のうち、技工に関する項目を除外した150項目とした。また、研修終了時のアンケートには自由記載欄を設けて、当科プログラムに関する意見を記載させた。

【結 果】

研修開始前に医療面接、概形印象採得の経験率は100%であっ

たが、その他の医療行為の経験率についてばらつきが見られた。研修終了後に支台歯形成、クラウンブリッジおよび部分床義歯の印象採得・咬合採得・装着、顎機能障害の診査のための筋の触診などについては経験率が全て90%以上に増加した。全部床義歯治療の経験率は約50%にとどまり、さらにラミネートベニアの形成、インプラント上部構造の装着、顎補綴など補綴の専門治療に関しては見学のみで経験率は0%であった。しかし、自由記載欄には補綴分野の高度専門治療を見学できただけでも良い経験になったという感想が数多く寄せられた。

【考 察】

研修歯科医に対して研修開始前、修了後にアンケート調査を行うことは、卒前教育の臨床経験を把握するだけでなく、研修内容を評価する上で有益であると言える。さらに、今後経験率が低かった高度補綴治療に関する項目については見学だけでも行うことができるプログラムを立案したいと考える。

2012年度研修予定者への協力型施設情報の開示—歯科医師臨床研修医の聞き取り調査から—

○瀧田史子¹⁾, 吉田隆一¹⁾, 倉知正和²⁾, 岡 俊男¹⁾, 横山貴紀¹⁾, 大橋静江¹⁾, 田邊俊一郎¹⁾, 山田尚子¹⁾, 長谷川信乃¹⁾, 近藤亜子¹⁾, 瀧谷佳晃¹⁾, 北後光信¹⁾, 松岡正登¹⁾, 安田順一¹⁾, 松原 誠¹⁾

¹⁾朝日大学歯学部附属病院臨床研修委員会, ²⁾朝日大学歯科医学教育推進センター

Release of Information on Collaborating Facilities for New Dental Residents at Asahi University Hospital

○Takita Fumiko¹⁾, Yoshida Takakazu¹⁾, Kurachi Masakazu²⁾, Oka Toshio¹⁾, Yokoyama Takanori¹⁾, Ohashi Shizue¹⁾, Tanabe Toshiichiro¹⁾, Yamada Naoko¹⁾, Hasegawa Shinobu¹⁾, Kondo Tsuguko¹⁾, Takitani Yoshiaki¹⁾, Kitago Mitsunobu¹⁾, Matsuoka Masato¹⁾, Yasuda Jun-ichi¹⁾, Matsubara Makoto¹⁾

¹⁾Committee of Postgraduate Dental Training Program, Asahi University Hospital, ²⁾Center for Advancement of Dental Education, Asahi University School of Dentistry

【目 的】

臨床研修施設群方式に参加する研修歯科医の多くが病院作成の施設概要冊子や、出向を終えた研修歯科医からの情報により出向先を選択している。しかしながら、2006年度以降のアンケート調査では、協力型施設に対する不信感や不満を訴えた研修歯科医が少数ではあるがみられる。そこで、今回、この調査に基づく施設の情報を次年度研修歯科医に開示することにし、その情報の記載方法や開示方法を検討したので報告する。

【方 法】

アンケート調査は臨床研修施設群方式に参加した38名について実施した。アンケートには、『アンケート内容については、本院のみで管理し、協力型施設の指導医に開示することはありませんので、現状をありのままに記載して下さい』と付記し、研修内容、研修環境以外に『現状、悩みなどを自由に記載して下さい』など項目ごとに自由記載させた。

提出されたアンケート内容をさらに詳細に確認する目的で、全

研修歯科医に対して各2名の副プログラム責任者が再度聞き取り調査を行った。情報の取載に当たっては、研修医の一方的な評価にならないよう配慮した表現での記載を心がけた。また、研修歯科医には、次年度研修予定者に聞き取りによる情報を開示すること、さらに次年度研修予定者には情報を求める場合は個人で本院管理者に申し出ることや、得た情報の厳重な管理に努める様に伝えた。

【結果と考察】

聞き取り調査では、アンケートには記載されない詳細を聴取することができた。改善点や要望事項があるにもかかわらず、研修内容、研修環境とも良好であったと記載しているケースもあり、研修歯科医のアンケートに対する取り組みが希薄で、聞き取りによる確認の必要性が示唆された。開示を求めた次年度研修予定者は65名中5名と少数であったが、適正な協力型施設選択のためには情報開示は必要であると考えている。

臨床研修歯科医師に対する多面観察評価（360 度評価）の検討

○後藤田宏也¹⁾、葛西一貴²⁾、五関たけみ²⁾、黒木俊一³⁾、牧村英樹⁴⁾、長濱文雄⁴⁾、伊藤孝訓⁵⁾、和田守康⁴⁾、牧村正治⁶⁾

¹⁾ 日本大学松戸歯学部 公衆予防歯科学講座、²⁾ 日本大学松戸歯学部 歯科矯正学講座、³⁾ 日本大学松戸歯学部 顎口腔機能治療学講座

⁴⁾ 日本大学松戸歯学部 再生歯科治療学講座、⁵⁾ 日本大学松戸歯学部 歯科総合診療学講座、⁶⁾ 日本大学松戸歯学部 社会歯科学（歯科医学教育学）講座

Evaluation of Multi-observer (360-degree) assessment for trainee dentists

○Gotouda Hiroya¹⁾, Kasai Kazutaka²⁾, Goseki Takemi²⁾, Kuroki Toshikazu³⁾, Makimura Hideki⁴⁾, Nagahama Fumio⁴⁾,

Ito Takanori⁵⁾, Wada Moriyasu⁴⁾, Makimura Masaharu⁶⁾

¹⁾ Department of Preventive and Public Oral Health, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾ Department of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ³⁾ Department of Oral Function and Rehabilitation, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁴⁾ Department of Renascent Dentistry, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁵⁾ Department of Oral Diagnosis, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁶⁾ Department of Social Dentistry (Dental Education), Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

多面観察評価（360 度評価）は職場の関係者の複数名が人材育成やの能力向上を目的として日常の職務行動を評価する方法で、欧米を中心に普及し、近年日本でも取り入れられてきている。医療の現場においても、研修医が医師としてのコンピテン（能力と意欲の総体）を高めていくための形成的フィードバックとして、研修医との定期的な教育面談などに利用されているが、歯科領域での利用は少ない。本研究では協力型施設における研修歯科医の多面観察評価による検討を行ったので報告する。

【方 法】

平成 23 年度日本大学松戸歯学部付属病院の研修歯科医を対象として、出向先の協力型施設の指導医、歯科衛生士および受付事務員に対し、患者ケア、プロフェッショナリズム、臨床の実践およびコミュニケーションに関する 4 尺度で計 20 項目で構成されており、評価は北海道プライマリケアネットワーク（ニポポ）の評価表を基に一部改編したものを用い、評定形式は 5 段階（1

～ 5）にて評価した。

【結果および考察】

指導医（歯科医師）と歯科衛生士のそれぞれの全項目（4 尺度で計 20 項目）の平均（Mean ± SD）は 4.21 ± 0.59, 4.22 ± 0.63 であった。受付事務員では 2 尺度（10 項目）、4.30 ± 0.81 であった。指導医（歯科医師）と歯科衛生士用のそれぞれの研修歯科医 20 項目の平均値には正の相関関係が認められ（ $p < 0.001$ ）、指導医（歯科医師）と歯科衛生士ともにプロフェッショナリズムとコミュニケーションの尺度項目の平均値が他の項目より有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。受付事務員にはプロフェッショナリズムとコミュニケーションの計 10 項目のみの評価であったが、それぞれの尺度項目の平均値が他の評価者と同等を示した。また本評価の特徴である評価者の立場による評価や見解の相違が認められる項目の検討が重要であり、その差異の分析に基づくフィードバックなどの指導と改善が必要であることが示唆された。

東北大学大学院歯学研究科における歯学研究者育成プログラムの概要

○佐々木啓一、福本 敏

東北大学大学院歯学研究科

Overview of dental scientist promotion program for postgraduate students in Tohoku University Graduate School of Dentistry

○Sasaki Keiichi, Fukumoto Satoshi

Tohoku University Graduate School of Dentistry

東北大学大学院歯学研究科では、修士課程および博士課程大学院生を対象とした「歯学研究者育成プログラム」を実施している。このプログラムは、大学院生の研究力と国際性を涵養するための研究活動と国際学会発表の支援を目的に開始されたプログラムであり、科学研究費補助金（科研費）の申請書に類似した申請書を作成し、厳格な審査の上、採択者には上記活動の為に年間 30 万（年間 10 名）の給付するものである。平成 22 年度からは成果を明確化するため、国際学会での英語での発表を義務づけた。審査員は本研究科研究企画推進室の 6 名の教授で担当し、1) これまでの研究実績（目的、方法の妥当性）、2) 研究の新規性・独創性、3) 歯学研究への貢献度や医学および工学分野への波及効果、4) 将来の発展性などの項目に対して審査を行っている。

本プログラムは、申請や審査方式を科研費と類似させているため、このようなグラント申請経験を経験させることで、大学院修了後の科研費や学振の申請に対して容易に取り組むことができる。また各分野での大学院生の国際学会発表を促進させることで、大学院生を指導する教員に対しても、英語発表に対する教育能力の向上も期待できた。本プログラムは、採択の有無にかかわらず、申請者のグラント申請書の作成能力を向上させ、自分が現在行っている研究を客観的に評価する点で大きなメリットがあると考えられる。このような機会を増やすため現在では年 2 回の応募を行なっている。

今回、この歯学研究者育成プログラムの詳細と、採択者の大学院修了後の動向調査、科研費等の採択結果をまとめ報告する。

鶴見大学東日本大震災学生ボランティア活動における歯科関連プログラム

○大蔵真太郎¹⁾、太田杏奈²⁾、今泉直也³⁾、丸尾 亮太³⁾、山根 明⁴⁾、前田伸子⁵⁾

¹⁾鶴見大学歯学部総合歯科2、²⁾鶴見大学歯学部短期大学部歯科衛生科第1学年、³⁾鶴見大学歯学部第5学年、⁴⁾鶴見大学歯学部物理学教室、⁵⁾鶴見大学歯学部口腔微生物学講座

Dental program in the volunteer activity of Tsurumi University student for Great East Japan Earthquake

○Okura Shintaro¹⁾, Ota Anna²⁾, Imaizumi Naoya³⁾, Maruo Ryouta³⁾, Yamane Akira⁴⁾, Maeda Nobuko⁵⁾

¹⁾Department of General Dentistry, Tsurumi University Dental Hospital, ²⁾First Year Student, Tsurumi University Junior College, Department of Dental Hygiene, ³⁾Fifth Year Dental Student, Tsurumi University School of Dental Medicine, ⁴⁾Department of Biophysics, Tsurumi University School of Dental Medicine, ⁵⁾Department of Oral Bacteriology, Tsurumi University School of Dental Medicine

2011年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、鶴見大学は学生主体のボランティア団体を立ち上げた。この団体の主な活動は宮城県気仙沼市立大谷小学校の児童に対する学習支援(通称：学びば)であるが、今回はその学習支援と並行して行った歯科関連プログラムについて紹介する。歯科関連プログラムは児童に歯の大切さを認識し、歯科に親しんでもらいたいという目的で、2011年の夏季にブラッシング指導および歯のキーホルダー作り、2011年の冬季にブラッシング指導および歯科用石膏を用いた指の模型作り、2012年春季には口腔のペーパークラフト(e-口模型、ニッシン)作りを行った。実施にあたっては児童が理解し易いように視聴覚的要素を多用し楽しみながら学べるように留意した。ブラッシング指導は紙芝居で導入を行った後、模型や染出し液を活用して行った。歯のキー

ホルダーは歯科用シリコーンをもちいて歯の模型の印象採得後、常温重合レジンにより作製した。指の石膏模型はフィルムケースの中にアルジネート印象材を入れて指の印象採得後、歯科用石膏により作製した。口腔のペーパークラフトは1枚の紙を切り貼りして立体の口模型を作るものである。児童に対して行ったアンケートの結果、冬季に実施したブラッシング指導、歯科用石膏を用いた指の模型作り、春季に実施した口腔のペーパークラフト(e-口模型、ニッシン)作りなどはいずれも決して好評とは言えなかった。今後の東日本大震災学生ボランティア活動における歯科関連プログラムには、より一層の改善が必要であると思われる。ご支援を頂いた多くの方々に深謝いたします。

東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修歯科医の実践ケース数と稼働額について

○新田 浩¹⁾、鈴木允文²⁾、梅森 幸²⁾、礪波健一²⁾、淵田慎也³⁾、大山 篤⁴⁾、俣木志朗¹⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院歯学部臨床行動科学分野、²⁾東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科総合診療部、³⁾神奈川歯科大学社会歯科学講座歯科医療社会学分野、⁴⁾(株)神戸製鋼所東京本社健康管理センター

Number of clinical cases and sum of earnings performed by postgraduate clinical trainee in Tokyo Medical and Dental University Hospital of Dentistry

○Nitta Hiroshi¹⁾, Suzuki Takafumi²⁾, Umemori Sachi²⁾, Tonami Kenichi²⁾, Fuchida Shinya³⁾, Ohyama Astushi⁴⁾, Mataka Shiro¹⁾

¹⁾Behavioral Dentistry, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University, ²⁾Oral Diagnosis and General Dentistry, University Hospital of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University, ³⁾Division of Sociological Approach in Dentistry, Department of Dental Sociology, Kanagawa Dental College, ⁴⁾Healthcare Center, Tokyo Head Office, Kobe Steel, Ltd.

【目 的】

臨床研修制度は研修歯科医が臨床研修施設と雇用契約を結ぶ On the Job Training(OJT)の制度である。東京医科歯科大学歯学部附属病院歯科臨床プログラムの総合診療研修はOJTに基づき、歯科診療に必要な基本的な診療能力を身に付ける診療実践型の研修を基本としている。研修歯科医は雇用されていることから、雇用主から労働力として働くことも期待されているという側面を持つ。そのような観点を含め、今回、平成22年度の本院臨床研修プログラム1および2の診療内容別の実践ケース数および研修歯科医の稼働額について報告する。

【方 法】

平成22年度本院臨床研修プログラム1A(10月～翌3月の6ヶ月本院での総合診療研修)18人、プログラム1B(4月～9月の6ヶ月本院での総合診療研修)27人、プログラム2(12ヶ月本院での総合診療研修)14人の研修歯科医を対象に、診療内容別の実践ケース数、稼働額の調査を行った。

【結 果】

診療内容別実践ケース数についてそれぞれ、プログラム1A・プログラム1B・プログラム2の順に列挙すると、修復処置(レジン充填とインレー)：(27・28・67)、ペリオ(歯周基本治療の終了)：(2・2・4)、歯内治療(抜髄、感染根管治療)：(8・8・16)、新製義歯：(3・3・6)、Cr：(5・4・11)、Br：(1・1・3)、普通拔牙：(8・8・21)、埋伏拔牙：(2・1・3)であった。1ヶ月平均の稼働額はプログラム1Aで199,330円、プログラム1Bで141,249円、プログラム2で206,238円であった。

【考 察】

1ヶ月あたりの実践ケース数はプログラム間での差はないが、稼働額は研修期間の前半に総合診療研修するプログラム1Bがプログラム1A、2と比較して少なく、研修初期では、稼働額があがらないことが考えられた。また、研修が進むにつれて、診療能力が高くなることが推測されるが、ケースとならない診療行為により、稼働額が高くなることも示唆された。

日本大学松戸歯学部付属病院の臨床研修歯科医のメンタルヘルスに関する検討

○黒木俊一¹⁾、後藤田宏也²⁾、葛西一貴³⁾、五関たけみ³⁾、牧村英樹⁴⁾、長濱文雄⁴⁾、伊藤孝訓⁵⁾、和田守康⁴⁾、牧村正治⁶⁾

¹⁾日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学講座、²⁾日本大学松戸歯学部公衆予防歯科学講座、³⁾日本大学松戸歯学部矯正学講座、⁴⁾日本大学松戸歯学部再生歯科治療学講座、⁵⁾日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座、⁶⁾日本大学松戸歯学部社会歯科学(歯科医学教育学)講座

A Study of Mental Health of Trainee Dentists in Nihon University Hospital at Matsudo

○Kuroki Toshikazu¹⁾, Gotouda Hiroya²⁾, Kasai Kazutaka³⁾, Goseki Takemi³⁾, Makimura Hideki⁴⁾, Nagahama Fumio⁴⁾, Ito Takanori⁴⁾, Wada Moriyasu⁴⁾, Makimura Masaharu⁵⁾

¹⁾Dpt. of Oral Function and Rehabilitation, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ²⁾Dpt. of Preventive and Public Oral Health, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ³⁾Dpt. of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁴⁾Dpt. of Renascent Dentistry, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁵⁾Dpt. of Oral Diagnostics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo, ⁶⁾Dept. of Social Dentistry (Dental Educations), Nihon University School of Dentistry at Matsudo

【目 的】

平成18年度の歯科医師臨床研修の必修化以降、研修期間中の研修歯科医のメンタルヘルスに起因する臨床研修の中断や未修了事例が報告されている。研修歯科医が精神的および身体的に安定して、臨床研修に専念し、資質の向上を図れるためのサポートと環境改善は極めて重要なこととなっている。我々は本学部付属病院における研修歯科医のメンタルヘルス環境整備を検討するために精神健康状態の把握することを目的として、調査を行ったので報告する。

【対象および方法】

日本大学松戸歯学部付属病院の研修歯科医を対象に研修期間終了時の平成22年度3月に調査を行った。調査方法と内容については、うつ状態の自己評価尺度であるCenter for Epidemiologic Studies Depression Scale(以下CES-D、20項目、0～60点)を用い、仕事についての満足度を4段階で回答を求めた。

目、0～60点)を用い、仕事についての満足度を4段階で回答を求めた。

【結果および考察】

CES-Dの尺度点数(mean±SD)は14.7±8.4であり、性別の有意な差が認められなかった。半数近くが抑うつ状態であったと報告および調査が多いが、本調査では40%未満であり、CES-Dの平均も低かった。プログラム別では有意な差が認められなかったが、Cプログラム(複合型で協力型施設出向8か月コース)が高い傾向が認められた。また仕事についての満足度について満足群(満足+まあ満足)は80%を超えていた。不満足群(不満足+やや不満足)は満足群に比較してCES-Dの平均値が約2倍高く、抑うつ状態の割合も約3倍の有意に高い割合が認められた。仕事に関する満足度が研修歯科医のメンタルヘルスの状態と関連性が高いことが示唆された。

日本大学歯学部付属歯科病院における女性研修歯科医の意識調査

○齊藤邦子¹⁾、橋口亜希子²⁾、片山一郎¹⁾、紙本 篤¹⁾、関 啓介¹⁾、古地美佳¹⁾、升谷滋行³⁾

¹⁾日本大学歯学部付属歯科病院系卒直後研修分野、²⁾日本大学歯学部歯科補綴学教室Ⅲ講座、³⁾日本大学歯学部保存学教室修復学講座

Consciousness Survey of the Female Dental Intern of Nihon University School of Dentistry Dental Hospital

○Saito Kuniko¹⁾, Hashiguchi Akiko²⁾, Katayama Ichiro¹⁾, Kamimoto Atsushi¹⁾, Seki Keisuke¹⁾, Furuchi Mika¹⁾, Masutani Shigeyuki³⁾

¹⁾General Practice Residency, Nihon University School of Dentistry Dental Hospital, ²⁾Department of Fixed Prosthodontics, Nihon University School of Dentistry, ³⁾Department of Operative Dentistry, Nihon University School of Dentistry

【目 的】

近年、歯科医師のうち女性の占める割合は増加傾向にあり歯学部入学者においてもその割合は2003年に38%に達している。女性は結婚、出産などのライフイベントに応じ働き方を変化させる機会が多く、女性歯科医師の働き方が歯科医療に与える影響は少なくないと考えられる。そこで歯科医師としての第一歩を踏み出した女性研修歯科医が自分の今後の働き方についてどう考えているか、アンケートによる意識調査を行った。

【方 法】

調査は本病院女性研修歯科医で平成23年度35名、平成24年度38名を対象とし、平成23年度研修の修了直前と平成24年度研修の開始直後にアンケート調査を行った。アンケートは記名式で行い、設問によっては個人的な事情も勘案されるため任意での回答とした。

【結果および考察】

アンケート結果から、歯科医師としての展望は、一生歯科医師

を続けたい(一時的な中断を含む)が兩年度とも最多で全体の7～8割であった。いつ結婚したいかでは、数年間歯科医師として働いた後に結婚したいが兩年度とも最多で半数を占めた。次いでなるべく早く結婚したいが約3割であった。歯科医師という職業は女性に向いているかという質問では、とてもそう思う、そう思う、の合計が約7割であり、あまりそう思わない、そう思わないの合計を大きく上回った。以上の結果より本病院の女性研修歯科医は歯科医師という職業を適職と考え、中断を含め一生続けたいと思っている人が全体の8割前後と多いことが分かった。また、数年間働いて歯科医師としての基盤を確立してから結婚したいと思っている人が約半数いる一方、なるべく早く結婚したい人も約3割いることが分かった。以上のことから今後の歯科医療の担い手の一人である女性歯科医のワークライフバランスを考慮する必要があることが示唆された。

女性研修歯科医の考える「理想の歯科医師像」

○大塚恵理, 河野隆幸, 鈴木康司, 白井 肇, 鳥井康弘
岡山大学病院総合歯科

The image of ideal dentist among female trainee dentists

○Ohtsuka Eri, Kono Takayuki, Suzuki Koji, Shirai Hajime, Torii Yasuhiro
Comprehensive Dental Clinic, Okayama University Hospital

【緒 言】

近年、女性医師のキャリア形成の関しては多くの取り組みが行われている。一方、女性歯科医師に関しては、そのような取り組みは少ないのが現状である。しかしながら、本学学部学生をみると女性の割合が多い学年もあり、今後ますます女性歯科医師の割合は増加すると考える。今回、女性研修歯科医がどのような歯科医師になりたいかを考察するため、研修開始時と修了時に入力した理想の歯科医師像の分析を行った。

【対象および方法】

平成 22、23 年度に岡山大学病院で歯科医師臨床研修を行った女性研修歯科医 49 名と男性研修歯科医 49 名が、臨床研修開始時の 4 月と修了時の 3 月に電子ポートフォリオシステムに入力した「理想の歯科医師像」を分析対象とした。分析は、テキスト型データ解析ソフトウェア WordMiner (日本電子計算株式会社) 用い、研修開始時と終了時のキーワードの出現頻度を、性別および研修修了後の進路による分類で比較した。

【結 果】

女性研修歯科医は男性研修歯科医に比較して、研修開始時と研修修了時のどちらにおいても、「知識」や「信頼」といったキーワードが多く、「治療」や「コミュニケーション」といったキーワードは少なかった。研修終了後の進路では、男性の 44.9% に対して、女性では 75.5% が大学に残っていた。研修修了時において、開業医・その他に勤務する女性歯科研修医は男性研修歯科医に比較して「的確」や「技術」が多く、大学に残る女性歯科研修医は「知識」や「信頼」が多く「コミュニケーション」が少なかった。

【考 察】

女性歯科研修医の考える理想の歯科医師像は、男性に比べ日常の臨床に即した言葉が多いように思われた。女性歯科医師は一生継続して働く続けることが少なく、特有のライフイベントを含めたキャリア形成を考慮すると、復帰の必要条件が歯科医師像や進路に影響しているのかもしれない。

POS を基盤とした臨床教育システムの効果に関する研究 —第 5 報：研修歯科医による症例報告—

○池田亜紀子, 勝部直人, 長谷川篤司
昭和大学歯学部

Research of effect of clinical education system based on POS —No 5 The effect of case report by training dentist—

○Ikeda Akiko, Katsube Naoto, Hasegawa Tokuji
Showa University School of Dentistry

【緒 言】

第 1～4 報で報告しているように、当院総合診療歯科では研修歯科医に担当させるほぼ全ての患者に対して、問題志向型診療システム (以下 POS とする) を基盤とする診療を行わせ、研修の集大成としてその成果を症例報告にて発表させている。

今日の超高齢化社会において、全身疾患も含めた包括的診療が必要とされる場合が多く見られ、POS の活用は多様な問題点が整理でき有効と考えられる。そこで今回、研修歯科医にとって自身の症例報告の製作過程や発表が、POS への理解を深めるきっかけとなり、今後の臨床に役立つかをアンケートにて調査し、当科の研修システムを検証したので報告する。

【材料および方法】

2011 年度に当科にて 1 年間または 6 ヶ月間の研修を行った研修歯科医 22 名に対し、症例報告の製作・発表後、アンケート調査を行った。アンケートは、①医療面接が十分にできていたか

②診察・診断・問題点の把握が確実にできていたか③カンファレンスの有効性④POS への理解が深まったか⑤今後の臨床や治療計画の立案に役立つと思うか、などについて調査し、症例報告の製作過程や発表が臨床研修に及ぼす効果について検証した。

【結果および考察】

研修歯科医の約 40% が、症例報告の作成・発表により初診時の医療面接について、特に Psychological problem と Social problem の把握が不十分であったことに気づけたと回答した。しかしその「気づき」を通して、全ての研修歯科医が患者の QOL に配慮した治療計画立案やメンテナンスなど自身の今後の臨床に役立つと思う、と回答している。これは当科の研修システムの一環である症例報告の作成を通して、より POS への理解が深まり全人的な包括的診療に対応できる歯科医師の育成に役立つものと考察した。

研修歯科医自身が掲げた目標に対する自己評価

○鬼塚千絵, 木尾哲朗, 喜多直子, 永松 浩, 喜多慎太郎, 寺下正道
九州歯科大学総合診療学分野

The self-evaluation for the self-aims of the vocational trainee dentists

○Onizuka Chie, Konoo Tetsuro, Kita Naoko, Nagamatsu Hiroshi, Kita Shintaro, Terashita Masamichi
Department of Clinical Communication and Practice, Division of Comprehensive Dentistry, Kyushu Dental College

【目 的】

研修歯科医が思い描く将来像は様々であり、それぞれ目標は異なっている。我々は、第30回日本歯科医学教育学会学術大会（東京）において研修歯科医の自己目標に関する報告を行った。今回、その目標に対する到達度の自己評価について興味ある知見が得られたので報告する。

【方 法】

平成23年度の本学附属病院総合診療科所属の研修歯科医を対象に、研修初期の4月に、「一年後、私に期待する全てのこと」をテーマとして、8つの自己目標とそれぞれの自己目標を達成するために必要な8つの方略についての記述式アンケート調査を行った。自己目標の範囲については歯科医師臨床研修に限定せず、自己実現の全てとした。研修終了時の3月に、到達度について100点満点で評価させた。得られたアンケート用紙より、各研修医の8つの目標に対する自己評価点を分析した。さらに、カテゴリー分類を行い、評価点数について分析を行っ

た。

【結 果】

研修歯科医の8つの目標に対する自己評価の平均点は、55.4点であった。歯科に関するカテゴリーは4つ「治療手技の上達」「診療室での対人関係の構築」「歯科医師としての自己実現」「知識の向上」、歯科以外のカテゴリーは5つ「健康の維持」「人間性の向上」「人間関係の構築」「家庭経済の安定」「進路の決定」であるが、その中で、最も自己評価点の高いカテゴリーは「進路の決定」(76.7点)で、最も低いカテゴリーは「家庭経済の安定」(33.0点)であった。

【考 察】

今回の結果から、自己目標の達成度を低く評価している研修歯科医が存在していることがわかった。研修の途中で方略についてアドバイスする必要があることが示唆された。また、到達するのに難しいカテゴリーがあることが明らかになった。

歯科医師臨床研修終了時における歯のシェードテイキングに関するアンケート

○伊吹禎一, 寶田 貫, 角 義久, 王丸寛美, 増田啓太郎, 津田緩子, 浅田徹之介, 樋口勝規
九州大学病院口腔総合診療科

A questionnaire survey for trainee dentists concerning the shade-taking at the end of the postgraduate clinical training

○Ibuki Teiichi, Takarada Tohru, Sumi Yoshihisa, Ohmaru Tomomi, Masuda Keitaro, Tsuda Hiroko, Asada Tetsunosuke,
Higuchi Yoshinori
Division of General Oral Care, Kyushu University Hospital

【目 的】

歯のシェードテイキングは歯科診療において、日常的に行われる非常に重要な行為であり、歯科医師臨床研修で習熟すべき知識・技術の一つである。しかし、研修歯科医がシェードテイキングに苦慮する機会が多いため、当科では臨床研修中にシェードテイキングの教育・訓練を検討中である。そこで、当院研修歯科医の研修終期におけるシェードテイキングの実情の把握を目的に、アンケート調査を実施した。

【方 法】

平成23年度当院卒直後研修歯科医師61名(男性34名, 女性27名)を対象に、臨床研修の終了時である平成24年3月に当科作成のアンケートを実施した。

【結 果】

研修歯科医のうち、シェードテイキングの講義や実習に関する記憶がある者は半数以下であった(講義44%, 実習23%)。一方、臨床研修中にシェードテイキングを行った者は87%だっ

た。内容はレジン充填、前装冠/ジャケット冠、有床義歯が86%を占めた。研修中にシェードテイキングを行った者のうち、70%が様々な理由でシェードテイキングを難しいと考えていた。色彩やシェードガイドに関する基本的知識を問う設問の正解率は、ほとんどが50%を下回った。

【考 察】

歯のシェードテイキングは、アンケートの結果からも日常歯科診療において頻度の高い治療行為の一つであることが明らかであるにも関わらず、研修歯科医の学生時代の学習・訓練を行った記憶が乏しいことが分かった。研修終了の時期においても、色彩やシェードガイドに関する基本的な知識は低く、理論的な裏付けがなく自己流でシェードテイキングを行っている傾向がうかがえた。シェードテイキングの訓練を企画するにあたり、基本的な知識を充実させるように、講義や小テストが必要であると考えられる。

学生セッション

7 月 21 日 (土) 9:30～15:50 ポスター会場 (コンベンションホール東)

S-1 ～ S-8

学生セッション討論 13:00～14:00

東京医科歯科大学歯学部歯学科生の質変化に対する検討

○永野大樹
東京医科歯科大学歯学部歯学科

Examination of the quality of the dental student at Tokyo Medical and Dental University

○Nagano Daiki
Tokyo Medical and Dental University

【目 的】

歯科医師過剰問題に関係して、関連省庁は入学定員削減および国家試験の難化による歯科医師数削減により、歯科医師の質管理を行っている。その結果、歯学部の人気低下が生じ、優秀な入学者の選別が難しくなったことで、入学学生の質低下が一般に指摘されている。本報告では、東京医科歯科大学で本当に学生の質低下が生じているかを確かめ、質担保された歯科医師を生み出す方法を検討する。

【対象と方法】

東京医科歯科大学歯学部教員を対象に質問票調査を行い、主観的な視点での学生の質変化、「学生のやる気」、「コミュニケーション能力」等の変化を分析した。客観的指標として、大学が毎年発表している入学試験前期試験得点の経時的変化(2006年~2011年)を分析、同時に、最低修業年限での卒業学生の国家試験合格者を比較し、学生の学力変化の分析を行った。

【結 果】

教員対象の質問票調査(32人対象)の結果から、「学力が低下し

た」という意見が約半数(16人)あり、その他の項目(やる気、礼儀等)も、「どちらかといえば低下している」という回答が、多く認められた。一方、前期入学試験得点の経年的変化からは、過去6年間の得点変化は小さくあり、過去7年間の最低修業年限での国試合格率からは、この6~7年で学力が顕著に低下したとは言えるものではなかった。

【まとめ】

入学試験得点等から歯学科生の学力が顕著に変化したとは言えないが、質問票調査結果からは、やる気、礼儀等の学力以外の面での変化を教員が感じていると言える。問題とされる学生の質低下については、学力の変化と気質的な変化を区別して分析する必要性が感じられた。国民から信頼される歯科医師を生み出すには、知識等の学力のみならず、患者治療を行う歯科医師としての資質を、いかに育むかを重要視したカリキュラムを組む必要があると思われる。

CT画像を利用した歯の解剖学実習を受講して

○西原宏軌¹⁾、網干博文²⁾、山崎洋介³⁾、磯川桂太郎³⁾、新井嘉則⁴⁾、前野正夫⁵⁾、越川憲明⁶⁾

¹⁾日本大学歯学部第3学年、²⁾日本大学歯学部法医学教室、³⁾日本大学歯学部解剖学教室第2講座、⁴⁾日本大学歯学部、⁵⁾日本大学歯学部衛生学教室、⁶⁾日本大学歯学部薬理学教室

Application of CT images for learning tooth morphology

○Nishihara Kouki¹⁾, Aboshi Hirofumi²⁾, Yamazaki Yousuke³⁾, Isokawa Keitarou³⁾, Arai Yoshinori⁴⁾, Maeno Masao⁵⁾, Koshikawa Noriaki⁶⁾

¹⁾Nihon University School of Dentistry, ²⁾Department of Legal Medicine, Nihon University School of Dentistry, ³⁾Department of Anatomy, Nihon University School of Dentistry, ⁴⁾Nihon University School of Dentistry, ⁵⁾Department of Oral Health Sciences, Nihon University School of Dentistry, ⁶⁾Department of Pharmacology, Nihon University School of Dentistry

【背景と目的】

日本大学歯学部では第2学年前期に歯の解剖学実習「歯のかたち」を受講する。この実習では、展開図を描きながら歯の形態および特徴を学習する。その一環として、コンピュータ画面上でCT画像を操作しながら歯の立体構造を理解する実習がである。目的は日頃、教科書で学ぶ歯の外形、内部構造および断面形態などの2次元情報を、3次元的に把握してより理解を深めることにあるという。以下、本実習を受講した成果や感想について報告する。

【結果と考察】

CT画像の閲覧には、本実習用に開発されたCT画像解析ソフトウェアHexaViewerを使用した。このソフトは歯のXYZ軸の3断面図と各方向からみたボリュームレンダリング像の計6面を同時に閲覧出来る特徴がある。実習では、歯髄腔、根管形態および象牙質・エナメル質の厚み等の内部構造も含めて、簡

単な操作で任意の方向から観察することが可能であった。歯の構造を非破壊的かつ3次元的に可視化できる技術を体験できた。同時に、歯の外形をひととおり学んだ後、内部の立体構造を含めたCT断面図を実習で利用したことで、歯に対する理解が一層深まったと感じた。さらに、歯の形態的な特徴を画面に表示する操作法を学んだことにより、将来、歯科臨床で必要となるであろうCT画像診断の知識を経験・体得出来たことも有意義だった。一方で、断面図から内・外部構造をイメージするのに少々時間を要し、また膨大なデータ量によりスムーズに画面が変化し難いなどの状況が発生するということが存在した。歯科医療・画像技術の高度化に伴い、歯や歯周組織の解剖学的知識が更に重要になっている昨今、このようなCT画像を活用した体験型実習は有益ではないだろうか。今後の臨床実習においても、このソフトを利用してさらに知識を深めたいと考えている。

学習支援ボランティアにおけるリスクマネジメントの応用について

○丸尾亮太¹⁾、今泉直也¹⁾、西宮桃子¹⁾、石川達哉²⁾、伊藤崇弘¹⁾、太田杏奈³⁾、大蔵真太郎⁴⁾、山根 明⁵⁾

¹⁾鶴見大学歯学部5年生、²⁾鶴見大学歯学部2年生、³⁾鶴見大学短期大学部歯科衛生科2年生、⁴⁾鶴見大学歯学部附属病院研修医、⁵⁾鶴見大学歯学部物理学教室

Application of risk management in a volunteer activity for learning support in an elementary school

○Maruo Ryota¹⁾, Imaizumi Naoya¹⁾, Nishimiya Momoko¹⁾, Ishikawa Tatsuya²⁾, Ito Takahiro¹⁾, Ota Anna³⁾, Okura Shintarou⁴⁾, Yamane Akira⁵⁾

¹⁾5th year student, Tsurumi University School of Dental Medicine, ²⁾2nd year student, Tsurumi University School of Dental Medicine, ³⁾2nd year student, Department of Dental Hygiene, Tsurumi Junior College, ⁴⁾Resident, Tsurumi University Dental Hospital, ⁵⁾Department of Biophysics, Tsurumi University School of Dental Medicine

2011年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、鶴見大学は学生主体のボランティア団体を立ち上げ、夏季(7~8月)、冬季(12~1月)、春季(3月)に宮城県気仙沼市本吉町の大谷小学校とその周辺において小学生への学習支援(通称、学びーば)を中心とする活動を行った。現地での活動には学生86名(うち他大学5名)、教職員41名(うち附属中・高2名)、延べ639名が参加した。その冬季活動において、女子児童が負傷する事故が起こった。この事故を受け、再発防止のためにリスクマネジメントを導入した。

まずは問題を理解するため、要因ごとに「なぜなぜ分析」を行い、根本原因を抽出した。その後、それぞれの項目に対する対策内容を明確にし、チェックリストを作成した。このチェックリストを活用するため、小学校での活動時に各教室に安全管理者(通称、安全パトロールリーダー)を配置した。安全管理者は緑の腕章を付け、赤い安全管理ファイルを持っているためとても目立ち、子どもたちからも安全パトロールのお兄さん、お姉さんとして好評であった。子どもたちにも安全について注意してもらえよう、「学びーばのお約束」を作成し、毎朝安全管理者を筆頭に全員で声出しを行った。子どもたちの中にはお約

束を暗記している子もあり、注意喚起にとっても役立った。安全管理者はチェック項目を確認し、守られていない項目についてはボランティアメンバーへの声掛けを行った。これにより全員が安全管理の観点で行動することを忘れずに活動することができた。また、気が付いた点やヒヤリハットなどを記入できる用紙も作成し、安全管理者が現場で記録した。例えば長机を移動する際、2台以上になると倒れやすいので1台ずつ運ぶことなどが指摘され、事故を未然に防ぐことができた。このような記録をもとに活動終了直後のミーティングで、安全管理者が注意点を全員に周知した。宿舎に戻った後、ボランティアメンバーもその日の反省点、改善点などを活動日報に記録し、毎晩行われる全体ミーティングの際に、安全について各自が気づいた点、改善すべき点、改善してよかった点などを話し合い、翌日の活動に反映させた。リスクマネジメントを導入することにより、子どもたちやメンバーなど活動に携わる全員が安全について考え、責任を持って行動するのに役立った。このような①問題解析→②対策立案→③チェックリスト作成→④現場での確認・適用という手順や方法は歯科医療の現場でも応用が可能である。

施設に入所している要介護高齢者の問題点を抽出するテュートリアル演習

○内田瑠子¹⁾、縄雅久美子²⁾、松香芳三²⁾、中島 隆²⁾、三木春奈²⁾、木村 彩²⁾、水口 一²⁾、新川重彦²⁾、瀧内博也²⁾、前川賢治²⁾、園山 亘²⁾、菊谷 武³⁾、窪木拓男²⁾

¹⁾岡山大学歯学部歯学科、²⁾岡山大学大学院医師薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野、³⁾日本歯科附属病院口腔リハビリテーション科

A problem-based learning tutorial for undergraduate students on elder inpatients in a nursing home in Japan

○Uchida Yoko¹⁾, Nawachi Kumiko²⁾, Matsuka Yoshizo¹⁾, Nakajima Ryu¹⁾, Miki Haruna¹⁾, Kimura Aya¹⁾, Minakuchi Hajime¹⁾, Shinkawa Shigehiko¹⁾, Takiuchi Hiroya¹⁾, Maekawa Kenji¹⁾, Sonoyama Wataru¹⁾, Kikutani Takeshi²⁾, Kuboki Takuo²⁾

¹⁾Okayama University Dental School, ²⁾Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, ³⁾Rehabilitation Clinic for Speech and Swallowing Disorders, The Nippon Dental University

高齢化が進んだ日本において高齢者の生活の質を向上させることは国家レベルの重大目標である。要介護高齢者の機能回復に際し、患者の有している障害を歯科医師が理解し、患者の全身状態、高齢者特有の社会的背景、精神的・心理的特徴を考慮して臨床を行うことは重要である。しかしながら、核家族化が進展している現代社会において、歯学部生が高齢者の口腔内や介護の現場をイメージすることは非常に困難となっている。今回は要介護高齢者施設において歯学部4年生が要介護高齢者と会話し、高齢者の問題点を抽出、吟味する能力を身につけることを目標としてテュートリアル演習を行ったので、その概要を報告する。演習を行ったのは2011年度岡山大学歯学部4年生56名であ

る。学生は少人数グループ(7名)に分かれ、施設見学前に担当患者の情報シート(年齢、病歴、職歴、介護度、口腔内所見、食形態など)を用いて予習を行った。その後、学生は施設に赴き、グループ単位で要介護高齢患者や介護者に対してインタビューを行い、その患者に生じている医学的、精神的・社会的な問題を抽出した。この症例検討を起点とし、患者の問題点を解決するための方策について、問題発見解決型テュートリアル演習(少人数グループの学生により、患者の問題点・解決策を各グループでディスカッションする演習)を行った。ディスカッション後には学生はグループ単位の発表ならびに症例報告作成を行った。

診療室で行う総合模型実習の試み

○河上真緒¹⁾、杉本明日奈¹⁾、中川沙紀¹⁾、堀川絵理子¹⁾、河野文昭¹⁾²⁾、吉本勝彦¹⁾³⁾

¹⁾徳島大学歯学部歯学科、²⁾徳島大学歯学部歯学科／徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部総合診療歯科学分野、³⁾徳島大学歯学部歯学科／徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子薬理学分野

Simulation training for clinical skill and attitude at clinic

○Kawakami Mao¹⁾、Sugimoto Asuna¹⁾、Nakagawa Saki¹⁾、Horikawa Eriko¹⁾、Kawano Fumiaki¹⁾²⁾、Yoshimoto Katsuhiko¹⁾³⁾

¹⁾University of Tokushima Faculty of Dentistry、²⁾University of Tokushima, Graduate School, Institute of Health Biosciences, Department of Comprehensive Dentistry、³⁾University of Tokushima, Graduate School, Institute of Health Biosciences, Department of Medical Pharmacology

【目 的】

本学では4年次のファントム実習において各科ごとに診療・技工内容を学習する。しかし、目の前の課題をこなすことに精一杯で、診療全体の流れや診療行為が患者さんに向けて行なわれること、また清潔不潔を意識しにくい。臨床実習を開始するにあたり、これらのことを学び、身につける機会がないのは不安であった。

そこで臨床実習に先立ち、マネキンを用いて学生自らが、一口腔単位で診断、治療計画を立案し、実際の診療室で治療を行うことで診療の基礎を学ぶシミュレーション実習を行った。

【方 法】

教員一人が四人の学生を担当するsmall group制による診療室でのシミュレーション実習を行った。また学生一人一人が異なる症例の模型を用い、一口腔単位での実習とした。

受け持った模型を口腔内診査し、それをもとに自身で立案・検討した。診療室での実習の前には、教員とその日に行う診療についてディスカッションを行い、その後、模擬診療室では基本

的には学生一人で診療した。診療介助も学生同士で行い、互いにアドバイスしながら行った。診療の最後には、診療録にも記載した。

【考 察】

ファントム実習では目の前の課題に無我夢中であったために、ないがしろになっていた清潔不潔の観念や、对患者への注意点に気づき、授業やファントム実習で学んだことを臨床と結びつけて考えることができた。

各自が立案した治療計画に基づいて、基本的に自分一人で診療を行うことで、診療に対する責任を自覚し、積極的に治療に取り組む姿が身につき、歯科医師としての自覚をもてた。また、たびたび失敗しそれについて学生や教員とディスカッションすることで、自分の足りないところに気づき、能動的に実習に取り組むことができた。

また現在、臨床実習において患者さんに接するにあたり自信をもって取り組むことができている。本実習が臨床実習への足がかりとなり、活かされている。

歯科医療界の国際化を目指して—教育の場に求められること—

○小澤英里佳¹⁾、森尾郁子¹⁾、鶴田 潤²⁾

¹⁾東京医科歯科大学歯学部歯学科、²⁾東京医科歯科大学教育開発学分野

Aim of internationalization of dental community

○Ozawa Erika, Morio Ikuko, Tsuruta Jun
Tokyo Dental and Medical University

【目 的】

昨今、社会では国際化の扉が開き様々な分野で海外進出が行われている。一方、歯科医療界では、海外診療所開設を目指す歯科医師の姿は見受けられず、従来からの制度的な障壁があるとしても、あまり国際化を感じることはできない。本報告では、世界的に開かれた国であり、歯科医療について日本と連携関係のあるシンガポールの歯科医療における国際事情を調べ、国際化の今後の課題を検討することとした。

【方 法】

日本及びシンガポールの歯科医療の基本的情報、諸外国との関係について、出版物やインターネット上より情報を収集した。また、シンガポールで実際に診療従事している日本歯科医籍登録歯科医師に、eメールにてインタビュー調査を行い、情報収集を行った。

【結果】

日本とシンガポール間では、EPAに関する口上書(2002年)により、在留邦人のみを治療対象とすること等を条件に、15名

まで日本歯科医籍登録歯科医師が治療を許されている状況である。外国歯科医籍歯科医師が治療する制度については2国間で大きな違いがあり、外国歯科医籍歯科医師が日本で診療をするには、歯科医師国家試験の合格、または修練制度への登録が必要である。シンガポールでは、Singapore Dental Councilが認証している諸外国大学の卒業歯科医師はシンガポールで診療を行える制度がある。

【考 察】

人的移動を伴う国際化への対応には、互いの国の歯科医師の質が同じであることが基本であると考えため、まず歯科医学教育の場での対応が必要と考える。具体的には、歯科医療界全体での国際交流・国際化の推進、世界で共有できる歯学カリキュラムの設定等が必要と考える。世界標準化した教育の中、学生時代から世界を意識した情報・人的交流が日常化することで、将来の国境を越えた歯科医療の展開、治療技術の向上、新規設備投資・開発等につながり、この循環が歯科界を発展させるものと考えた。

私達が留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）プログラムに参加して得たもの

○坂本志保¹⁾、魚島勝美²⁾、宮崎秀夫²⁾、小野和宏²⁾、興地隆史²⁾、大内章嗣²⁾、前田健康²⁾

¹⁾新潟大学歯学部、²⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科

What we have got from short stay / short visit student exchange program

○Sakamoto Shiho¹⁾, Uoshima Katsumi²⁾, Miyazaki Hideo²⁾, Ono Kazuhiro²⁾, Takashi Okiji²⁾, Ohuchi Akitsugu²⁾, Maeda Takeyasu²⁾

¹⁾Niigata University Faculty of Dentistry, ²⁾Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

私達は平成23年7月、8月、平成24年3月に、それぞれ3~4名のグループで主に東南アジアを中心とした海外の大学歯学部を訪問し、10日間滞在して参りました。第2学年から第6学年の歯学科と口腔生命福祉学科学生、総勢24名がこのプログラムに参加しました。今回は、この24名を代表して本プログラムに参加して得られたもの、考え方の変化、今後の改善点などについて発表させていただきます。

学生の訪問先は、インドネシアのインドネシア大学とガジャマダ大学の歯学部、タイのタマサート大学、チェンマイ大学、コンケン大学の歯学部、スリランカのペラデニア大学歯学部、メキシコのコアウイラ大学歯学部、台湾の陽明大学歯学部でした。本プログラムでは私達と同じ歯科医師や歯科衛生士を目指す学生達と直接会い、長い時間を過ごすことで、日本人の学生とは比較にならないくらい明確な目的を持って努力していることに大変驚きました。また、訪問先の歯学部の先生方には、そ

れぞれの地域に根ざした歯科医療のあり方や歯科保健事情について多くを教えていただき、また実際に見せていただきました。どの国を訪れてもほとんどの学生や先生方が英語によるコミュニケーションという点で何も不自由を感じていないことにも驚きました。それに比較して私達の英語能力が十分でなく、今後歯科医療関係者として活動するためにその必要性を強く認識しました。また、今回知り合うことができた外国の友人達とのネットワークも貴重な財産になると考えています。

今回の経験は、単なる旅行では決して経験できない、海外の歯学部の現状を見聞し、各国の歯科事情を知ることができたという点で大変貴重なものとなりました。本プログラムをご提供下さった関係各位、新潟大学歯学部の多くの先生方には心から感謝申し上げます。この貴重な経験を、今後の私達の歯科医療従事者としてのあり方に生かして参りたいと思っております。

岡山大学歯学部における歯学国際交流演習（ODAPUSプログラム）参加報告

○杉浦嘉雄、松本 卓、西浦有沙、堀井宣秀、土佐郁恵、徳本佳奈、松岡絵理、高馬裕賀子

岡山大学歯学部歯学科

Reports on the Okayama Dental Study-Abroad Program for Undergraduate Students (ODAPUS)

○Sugiura Yoshio, Matsumoto Taku, Nishiura Arisa, Horii Nobuhide, Tosa Ikue, Tokumoto Kana, Matsuoka Ellie, Koma Yukako
Okayama University Dental School

岡山大学歯学部では独自の国際交流プログラムとして短期留学制度(ODAPUS:Okayama Dental Stay-Abroad Program for Undergraduate Students)がある。これは3年次学生が3ヶ月程度の短期間、提携した海外の大学で聴講生等として学ぶもので、授業科目としては歯学国際交流演習という。なお、本プログラムは希望者が選択し、希望しない者は同期間、歯学部の各研究室で研究を行う自由研究演習(研究室配属)という科目を履修する。ODAPUSは平成13年度から開始され、平成23年度までに欧米、アジアの12大学に61名の学生が派遣された。平成23年度は我々8名が4か国4大学に派遣され学ぶ機会を得たので、その詳細を報告したい。

中国大連医科大学では、他国からの留学生も多く、留学生対象の病理学や生理学などの講義に参加するとともに現地学生対象の病理学の授業見学も行なった。インドネシアハサヌディン大学では3学年の授業に参加し講義を受けた。チュートリアル

時間が多く組まれ、学生の思考力、発言力を高めるようなカリキュラムとなっていた。また、歯科医の少ない村へソーシャルワーキングに行きボランティアによる治療を見学した。米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)では神経薬理学講座で研究を行なった。カナビノイド受容体に作用する物質を鎮痛薬に応用する研究で、動物実験での結果測定やデータの処理を行なった。カナダサスカチュワン大学では、歯学部1年生の授業に参加し、基礎系および臨床系の講義・実習を受けた。以上のように派遣された国・大学により具体的なプログラムは異なっていたものの、外国の大学で授業を受け、その土地の人々と触れ合い刺激を受けることで、通常の授業だけでは得ることのできない経験ができた。その結果、知識や技術を学ぶだけでなく、見識をひろめるとともに勉学に対するモチベーションを高めることができた。